

—— 千葉県市原市 ——

やま だ ばし おもて みち
山 田 橋 表 通 遺 跡

1 9 9 9

市 原 市 土 木 部 街 路 課
財団法人 市原市文化財センター

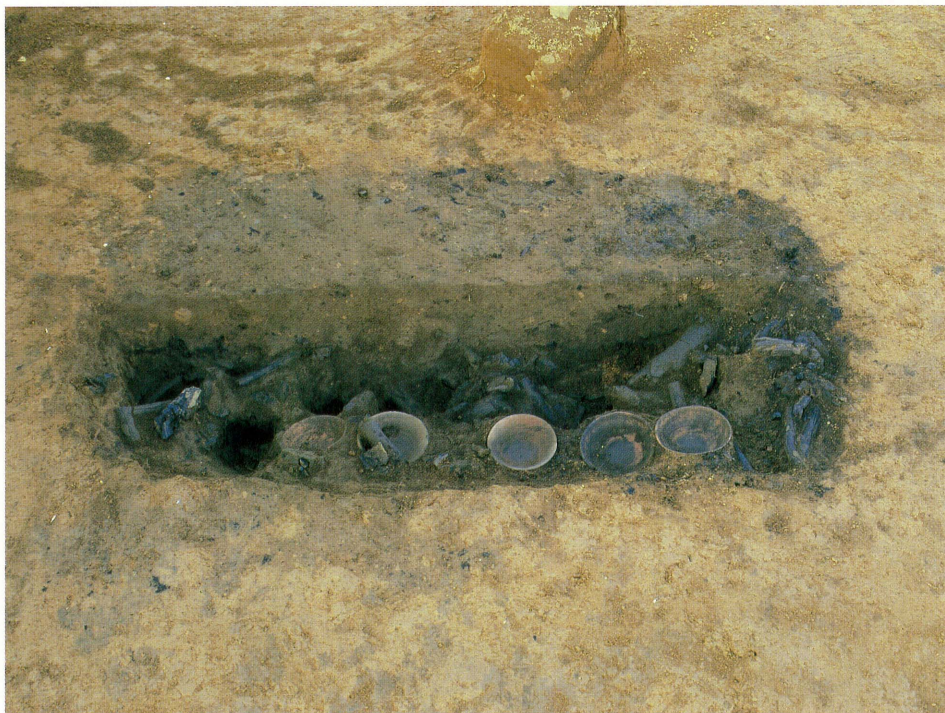


遺跡周辺の航空写真



060号跡検出状況

巻頭カラー 2



070号跡検出状況



046号跡出土土器

序 文

東京湾岸の中央部に位置する市原市は、自然環境に恵まれ県下でも有数の遺跡が残されております。特に古代においては上総国の中心地として国府、国分僧寺・尼寺がこの地に置かれました。このことは、この地域が古くから生活環境に恵まれ、地域の拠点として発展してきたことを物語っております。こうした歴史のあかしとしての文化財を保護し、次世代に残しまた活用していくことは、私たち市民に課せられた課題であると思います。

今回ここに報告する山田橋表通遺跡は、都市計画道路の建設に伴い関係諸機関の御協力をいただいて発掘調査を実施したものです。

調査の結果、弥生時代後期から古墳時代前期の集落や古代以降の道路跡などを検出したほか、それらに伴う良好な遺物も出土し、この地域の歴史を知る上で貴重な資料を得ることができました。

本報告書が学術資料として、また埋蔵文化財の保護と理解のための資料として広く市民の皆様にご利用されることを願ってやみません。

最後に、発掘調査並びに本書の刊行に際し御指導、御協力をいただきました千葉県教育庁文化課や市原市教育委員会ふるさと文化課をはじめとする関係の皆様や関係諸機関に対し、心から感謝の意を表します。

平成11年 3 月25日

財団法人市原市文化財センター
理事長 小 茶 文 夫

例 言

1. 本書は、市原市土木部による都市計画道路君塚小田部線建設に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書である。

2. 本書は、下記の遺跡を収録したものである。

山田橋表通遺跡 千葉県市原市山田橋大田328他 センターコード (12219-セ36)

3. 発掘調査から報告書作成に至る業務は、市原市都市部街路課の委託を受け、財団法人市原市文化財センターが実施した。

4. 発掘調査の実施期間、調査面積及び担当者は、下記のとおりである。

発掘作業（確認調査）昭和60年7月1日～昭和60年7月31日

対象面積6,000㎡のうちの600㎡(対象面積の10%)

担当者 近藤 敏

(本調査) 昭和60年8月1日～昭和60年12月26日

対象面積5,000㎡

担当者 近藤 敏

5. 本書の執筆は、蜂屋孝之・小橋健司が行い、第2章第2節～第5節の出土遺物と第6節3については小橋が、それ以外を蜂屋が担当した。

6. 遺物の実測は、半田堅三・小橋健司・蜂屋孝之が協力して行った。

7. 発掘調査から報告書の刊行に至るまで、千葉県教育庁文化課、市原市教育委員会生涯学習部ふるさと文化課、市原市土木部街路課の方々から御指導、御協力を得た。

8. 本書で使用した地形図は下記のとおりである。

国土地理院発行 1/25,000地形図「蘇我」(NI-54-19-15-2)

国土地理院発行 1/25,000地形図「五井」(NI-54-19-15-4)

国土地理院発行 1/25,000地形図「姉崎」(NI-54-19-16-3)

国土地理院発行 1/25,000地形図「海士有木」(NI-54-19-16-3)

9. 本書で使用した図面の方位は、すべて座標北である。

10. 遺構の縮尺は、竪穴住居跡・掘立柱建物跡1/80、土坑1/60を基本としたが、土坑及び溝状遺構については、その規模によって縮尺が異なるので注意されたい。

11. 遺物の縮尺は、弥生土器・土師器・須恵器の実測図1/4、拓影1/3、石器2/3・1/2・1/3、土製品1/1である。

12. 遺構実測図中の炉跡・カマド部材・焼土範囲は、種類の異なるスクリーントーンでそれぞれ示した。また、遺物についても土器・石器の研磨面や石器の敲打痕は、種類の異なるスクリーントーンを使用している。

本文目次

序 文

例 言

第1章 はじめに	1
第1節 調査にいたる経緯	1
第2節 遺跡の位置と環境	1
第3節 調査の方法	6
第2章 遺構と遺物	8
第1節 遺構の概要	8
第2節 竪穴住居跡	12
第3節 掘立柱建物跡	92
第4節 土坑	94
第5節 溝状遺構	101
第6節 遺構外出土遺物	116
1. 旧石器時代の遺物	116
2. 縄文時代の遺物	116
3. その他の遺物	120

挿 図 目 次

第1図 山田橋表通遺跡と周辺の遺跡	2
第2図 調査範囲及び周辺地形図	4
第3図 確認調査グリッド配置図	5
第4図 グリッド分割図	6
第5図 遺構配置図(1)	10
第6図 遺構配置図(2)	11
第7図 003号跡及び出土遺物	13
第8図 004号跡及び出土遺物	14
第9図 006号跡	15
第10図 007号跡及び出土遺物	17

第11図	008号跡及び出土遺物	19
第12図	009号跡及び出土遺物	20
第13図	014号跡及び出土遺物	22
第14図	015号跡及び出土遺物	23
第15図	016号跡	24
第16図	017号跡及び出土遺物	25
第17図	020号跡	26
第18図	022号跡	26
第19図	023号跡及び出土遺物	28
第20図	024号跡及び出土遺物	29
第21図	025号跡及び出土遺物	31
第22図	026号跡及び出土遺物	32
第23図	027号跡及び出土遺物	34
第24図	028号・029号跡及び出土遺物	36
第25図	030号跡及び出土遺物	38
第26図	030号跡床面下検出状況	39
第27図	031号跡及び出土遺物	41
第28図	032号跡	42
第29図	033号跡及び出土遺物	43
第30図	034号跡及び出土遺物	45
第31図	035号跡及び出土遺物	47
第32図	036号跡及び出土遺物	49
第33図	037号跡及び出土遺物	51
第34図	038号跡及び出土遺物	53
第35図	039号跡	55
第36図	039号跡出土遺物	57
第37図	039号跡出土遺物	59
第38図	039号跡出土遺物	61
第39図	040号跡	65
第40図	041号跡及び出土遺物	67
第41図	041号跡出土遺物	68
第42図	042号跡及び出土遺物	69

第43図	044号跡及び出土遺物	71
第44図	045号跡及び出土遺物	73
第45図	046号跡及び出土遺物	75
第46図	046号跡出土遺物	77
第47図	046号跡出土遺物	79
第48図	047号跡	81
第49図	048号跡及び出土遺物	83
第50図	049号跡及び出土遺物	84
第51図	050号跡及び出土遺物	85
第52図	057号跡及び出土遺物	86
第53図	063号跡及び出土遺物	88
第54図	064号跡及び出土遺物	89
第55図	073号跡	91
第56図	011号跡	92
第57図	013号跡	93
第58図	018・019・051・052・054・055・062・065号跡	95
第59図	059・066・067・075号跡	97
第60図	069号・072号跡	98
第61図	070号跡及び出土遺物	99
第62図	001号跡	102
第63図	002号跡(1)	104
第64図	002号跡(2)	105
第65図	005号・043号跡	107
第66図	021号・074号跡及び出土遺物	108
第67図	053号・077号跡	109
第68図	056号跡	110
第69図	058号跡	111
第70図	060号・061号・076号跡	112
第71図	060号跡土層断面図	113
第72図	060号跡出土銭貨	113
第73図	060号跡出土遺物	114
第74図	旧石器時代石器	116

第75図	縄文土器	117
第76図	縄文時代遺物	119
第77図	その他出土遺物	120

表 目 次

第1表	竪穴住居跡一覧表	9
第2表	銭貨計測値表	114

図 版 目 次

巻頭カラー 1	遺跡周辺の航空写真・060号跡検出状況
巻頭カラー 2	070号跡遺物出土状況・046号跡出土土器
図版 1	遺跡周辺の航空写真
図版 2	調査区全景
図版 3	調査風景
図版 4	調査区近景
図版 5	調査風景
図版 6	調査区近景
図版 7	003号跡・004号跡・006号跡
図版 8	007号跡・008号跡・009号跡
図版 9	014号跡・014号跡遺物出土状況・015号跡
図版10	016号跡・017号跡・020号跡
図版11	022号跡・023号跡・024号跡
図版12	025号跡・025号跡遺物出土状況・026号跡
図版13	027号跡・028号跡・029号跡・030号跡
図版14	030号跡床面下調査状況・031号跡・032号跡
図版15	033号跡・034号跡・034号跡遺物出土状況
図版16	035号跡・036号跡・037号跡
図版17	038号跡・039号跡・040号跡
図版18	041号跡・041号跡遺物出土状況・042号跡
図版19	044号跡・045号跡・046号跡

- 図版20 046号跡遺物出土状況
- 図版21 047号跡・048号跡・049号跡
- 図版22 050号跡・057号跡・063号跡
- 図版23 064号跡・073号跡・011号跡
- 図版24 001号跡・002号跡・002号跡土層断面
- 図版25 005号跡・021号跡・074号跡・053号跡
- 図版26 058号跡・060・061号跡・060号跡北側土層断面
- 図版27 060号跡南側土層断面・060号跡中央土層断面・060・061号跡
- 図版28 051～054号跡・051号跡・052号跡
- 図版29 054号跡・059号跡・062号跡
- 図版30 070号跡遺物出土状況・070号跡・072号跡
- 図版31 003・004・007・008・014・017・021号跡出土遺物
- 図版32 025・027・028・030・035・036・037号跡出土遺物
- 図版33 039・041・044・046号跡出土遺物
- 図版34 046号跡出土遺物出土状況
- 図版35 004・007・009・038・039・041・046・057・060・070号跡出土遺物
- 図版36 027・030・033・035・039・057・060号跡及び遺構外出土遺物
- 図版37 遺構外出土縄文土器

第1章 はじめに

第1節 調査にいたる経緯

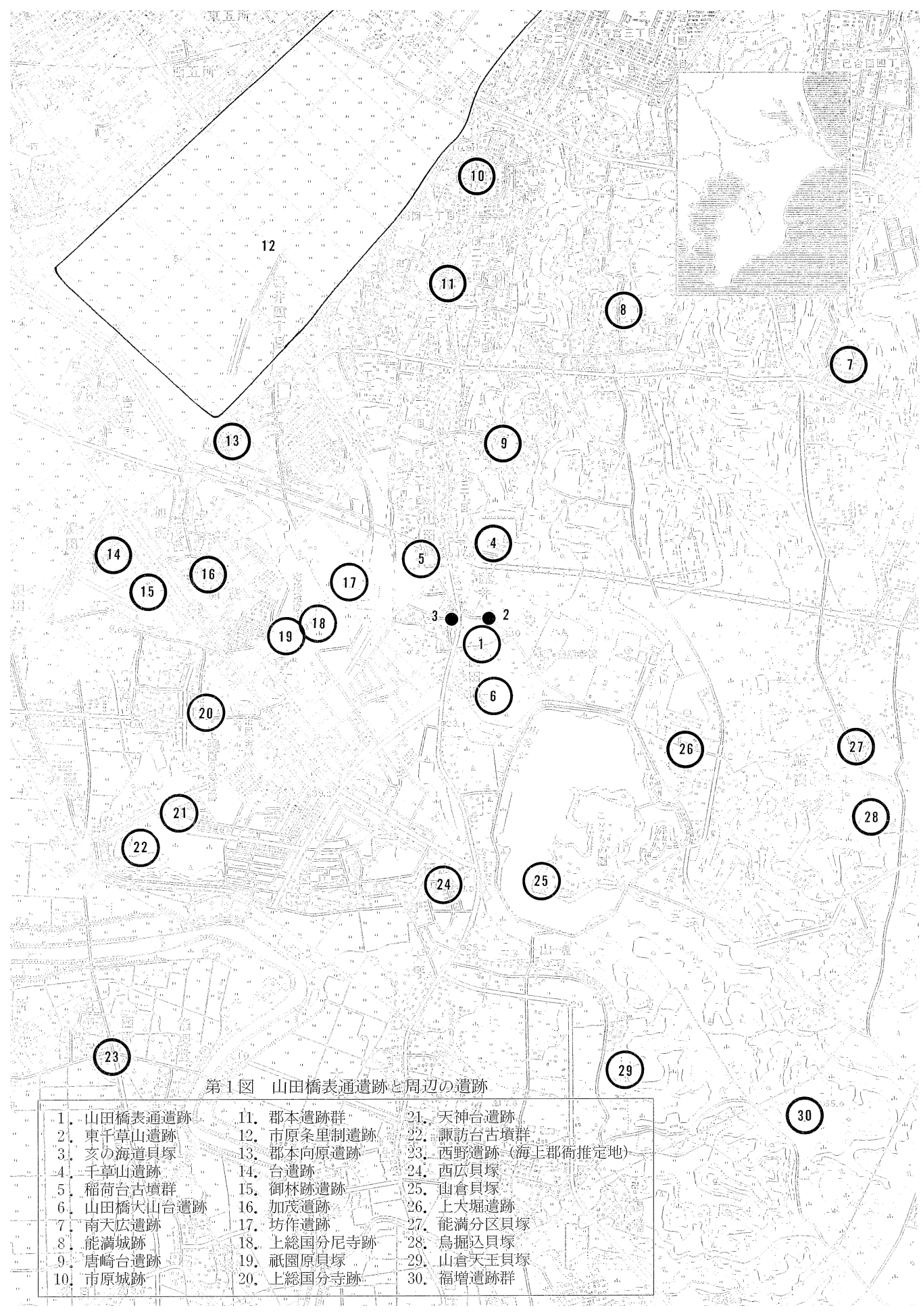
今回の発掘調査は、都市計画道路君塚小田部線建設に先行して実施されたものである。建設工事の着工に先がけ、市原市から同地区内における埋蔵文化財の所在の有無及びその取扱いについての照会が、千葉県教育委員会教育長および市原市教育委員会教育長宛提出された。これを受けて、千葉県教育庁文化課、市原市教育委員会文化課、市原市都市部街路課の三者により慎重に協議を重ねた結果、事業計画の変更は困難でありやむを得ず記録保存の措置を講ずることとなった。

発掘調査は、財団法人市原市文化財センターが実施することとなり、昭和60年7月1日に市原市との間に委託契約が締結され、昭和60年7月1日～昭和60年7月31日まで確認調査が実施された。確認調査の結果、本調査の必要が生じたため、昭和60年8月1日に市原市との間に委託契約が締結され、昭和60年8月1日～昭和61年3月31日まで本調査が実施された。

第2節 遺跡の位置と環境

市原市は、房総半島のほぼ中央に位置し、北は東京湾に注ぐ村田川を境として千葉市と接し、東は茂原市、長生郡長柄町、長南町、夷隅郡大多喜町、西は、袖ヶ浦市、君津市、木更津市、君津市などに接している。地形的には、北部の大半は洪積台地で占められ、村田川による沖積低地がみられる。南部は上総丘陵が連なり、市の中心部を流れる養老川による沖積低地が広く展開している。

山田橋表通遺跡は、千葉県市原市山田橋大田328ほかに所在する。東京湾の旧海岸線から約5km東に進んだ台地上にあり、東京湾を望む洪積台地の西端部からは約3km内陸に入った位置である。遺跡が立地する台地は、東京湾に注ぐ河川のうち、養老川と村田川にはさまれた洪積台地であり、樹枝状に開析された末端に近い位置である。遺跡が所在する台地を開析する支谷は、養老川と村田川の両河川に属さず、その中間帯にある新田川や金杉川の支谷に挟まれている。遺跡の標高は約32～34mで、周囲は支谷によって鋸歯状に開析されている。台地上は、ほぼ平坦であるが、今回の調査範囲には中央に小支谷の末端が入り込んでいる。付近の谷底との比高は約12m前後である。台地上の基本土層は、表土(I層)、縄文土器など若干の遺物を包含する漸移層(II層)、それ以下は立川ローム層となり、当地域の一般的な層序を示している。



第1図 山田橋表通遺跡と周辺の遺跡

- | | | |
|-------------|-------------|-------------------|
| 1. 山田橋表通遺跡 | 11. 郡本遺跡群 | 21. 天神台遺跡 |
| 2. 東千草山遺跡 | 12. 市原条里制遺跡 | 22. 諏訪台古墳群 |
| 3. 亥の海道貝塚 | 13. 郡本向原遺跡 | 23. 西野遺跡（海上郡衙推定地） |
| 4. 千草山遺跡 | 14. 台遺跡 | 24. 西広貝塚 |
| 5. 稲荷台古墳群 | 15. 御林跡遺跡 | 25. 山倉貝塚 |
| 6. 山田橋大山台遺跡 | 16. 加茂遺跡 | 26. 上大堀遺跡 |
| 7. 南天広遺跡 | 17. 坊作遺跡 | 27. 能満分区貝塚 |
| 8. 能満城跡 | 18. 上総国分尼寺跡 | 28. 鳥掘込貝塚 |
| 9. 唐崎台遺跡 | 19. 祇園原貝塚 | 29. 山倉天王貝塚 |
| 10. 市原城跡 | 20. 上総国分寺跡 | 30. 福増遺跡群 |

ただ今回の調査範囲においては、遺物を包含する漸移層（Ⅱ層）の残りが悪く、縄文土器などの出土量は限られたものとなっている。

周辺の主な遺跡は、旧石器時代では、大規模な発掘調査が実施された国分寺台遺跡群で、ナイフ形石器や有舌尖頭器などが出土している。稻荷台遺跡（註1）では第Ⅱ黒色帯から石器のブロックが検出されている。また、表通遺跡の北側1km離れた唐崎台遺跡（註2）からは有舌尖頭器が採集されている。

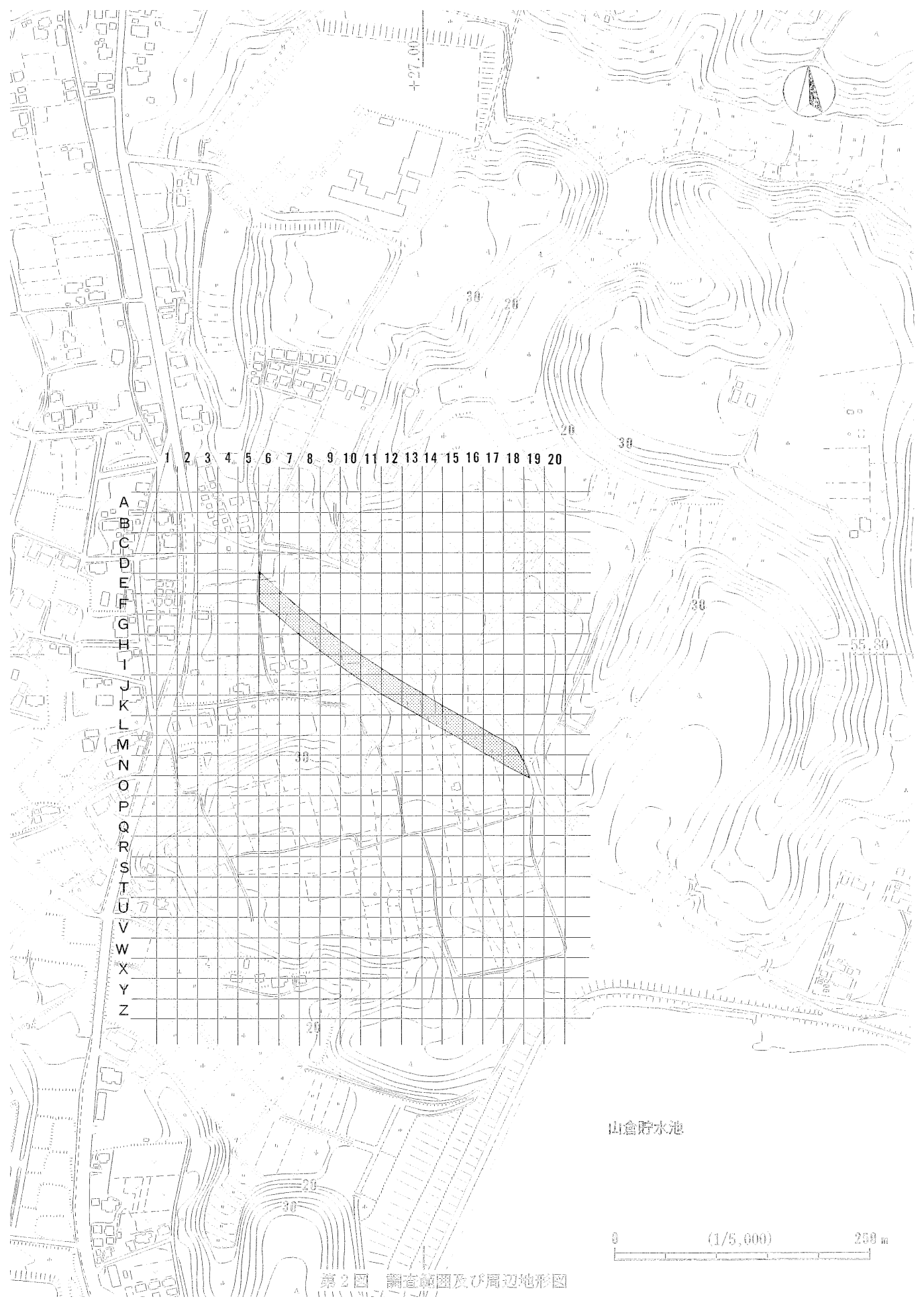
縄文時代では東間部多遺跡（註3）からは早期の炉穴が数多く検出されている。また、周囲には貝塚が多く、西広貝塚（註4）、祇園原貝塚（註5）、山倉貝塚（註6）、烏堀込貝塚（註7）、未調査の能満分区貝塚、山倉天王貝塚、破壊が著しい亥の海道貝塚など大小の貝塚が点在している。また、中期を主体とする上大堀遺跡（註8）や小田部小谷吹上遺跡（註9）などの調査例もまた貴重な資料を提供している。さらに破壊が著しく一部しか遺存しない門前貝塚や亥の海道貝塚なども貴重な貝塚となっている。

弥生時代では中期の方形周溝墓が検出された諏訪台遺跡（註10）や台遺跡（註11）、集落跡では唐崎台遺跡（註12）、天神台遺跡（註13）、鉄斧が出土した御林跡遺跡（註14）などがある。

古墳時代では、古墳が国分寺台地区の区画整理事業に伴って数百基調査されている。東日本で最古といわれる神門古墳群（註15）、盤龍鏡が出土した諏訪台古墳群（註16）、王賜銘鉄剣が出土した稻荷台1号墳（註17）、さらに人物埴輪などの形象埴輪が出土した山倉古墳群（註18）、また古墳の埋葬施設から銅釧が出土した根田遺跡（註19）など全国的に注目される古墳が数多く存在する。このほかにも東間部多（註20）、南向原（註21）、根田（註22）などの各古墳群がある。集落跡では小銅鐸が出土した天神台遺跡（註23）や加茂A・B（註24）、御林跡遺跡（註25）、台（註26）の各遺跡で大集落が検出されている。

奈良・平安時代では上総国分僧・尼寺跡の調査及び関連遺跡の調査が広範囲で実施されている。上総国分寺跡は、南北457m、東西250～300mの寺域が確認され、大官大寺に似た伽藍様式と考えられる（註27）。寺域北部の調査で、僧坊に相当する施設が検出されている。上総国分尼寺跡は、南北372m、東西285mの全国最大規模の寺域が確認され、中心伽藍とともに北側を中心として付属雑舎などの諸施設の内容が明らかにされつつある（註28）。周辺の荒久遺跡（註29）や坊作遺跡（註30）は集落として、神門（註31）と南田（註32）及び祇園原（註33）の各瓦窯跡も国分寺の造営に関連した遺跡として重要である。

当遺跡の北側に東千草山遺跡、そのさらに北側には千草山廃寺跡や千草山遺跡などが位置している。東千草山遺跡（註34）からは当遺跡で検出された溝状遺構に類似した遺構が検出されている。千草山遺跡の調査は、昭和38年に平野元三郎氏によって千草山廃寺跡推定地の確認調査が実施され（註35）、礎石を伴う基壇を検出し、多量の布目瓦や鉄釘などが出土している。ま

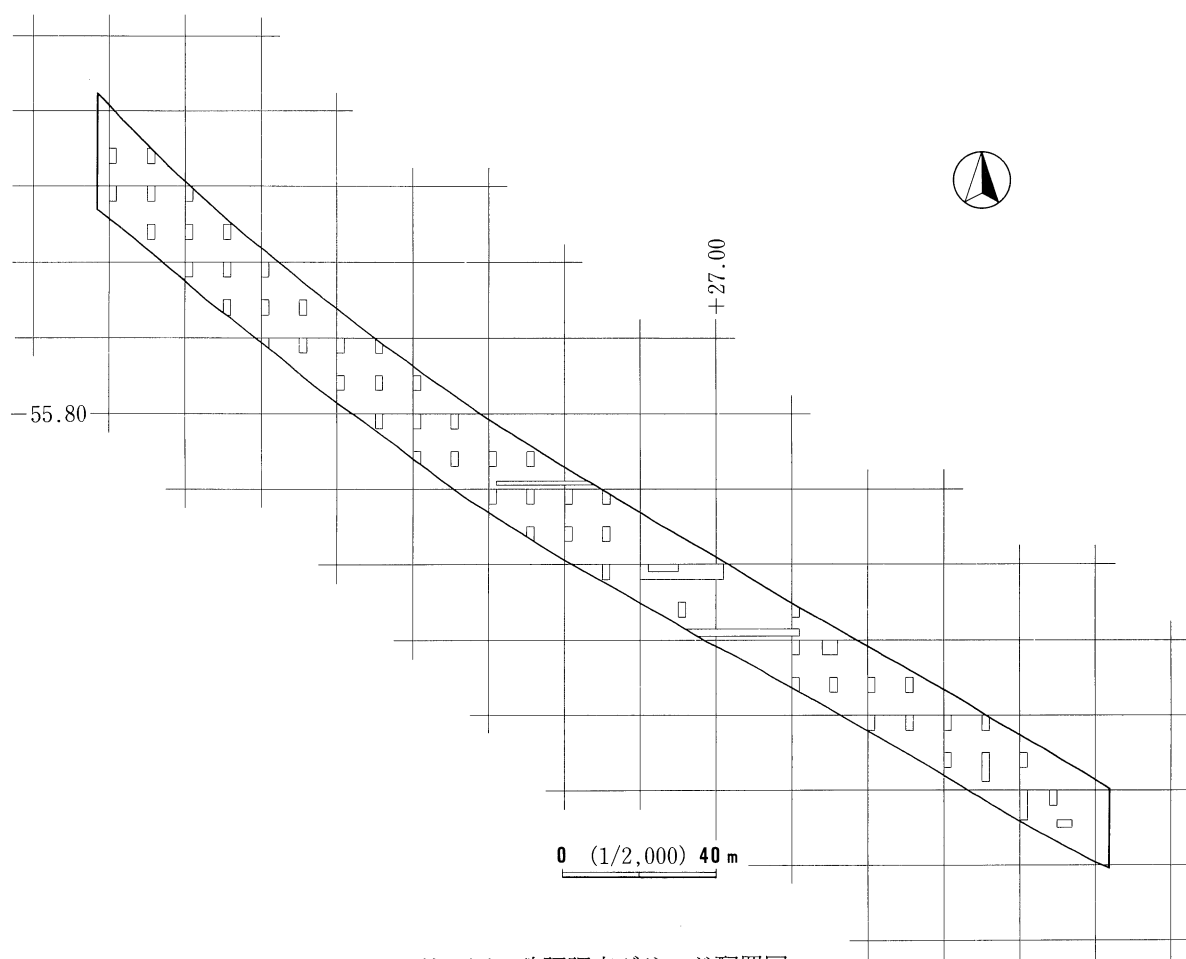


山倉貯水池

0 (1/5,000) 250 m

第2図 調査範囲及び周辺地形図

た、出土瓦の中には上総国分寺跡の創建期と同範の二十四葉蓮華文鏡瓦が含まれていた。昭和50年から51年にかけて市原中学校の新設に伴って調査が実施され、縄文時代早期条痕文系土器を伴う炉穴群5基、中期の竪穴住居跡1棟、古墳時代後期から奈良・平安時代の竪穴住居跡72棟、円墳1基、掘立柱建物跡10棟などが検出されている。この調査範囲は、千草山廃寺跡の北側にあたるため寺に関連した集落跡と考えられ、「寺」の墨書や上総国分寺と同範の均整唐草文軒平瓦が検出されている。このほか「貞観十七年」の紀年銘を伴う墨書土器が出土した稻荷台遺跡（註36）では、多数の掘立柱建物跡や緑釉陶器片が出土し、官衙の様相を呈している。さらに当遺跡の近隣は、上総国府（註37）や、市原郡衙（註38）の推定地となっていることもあり、奈良・平安時代の遺構・遺物には特に注意を払っていきたい地域となっている。



第3図 確認調査グリッド配置図

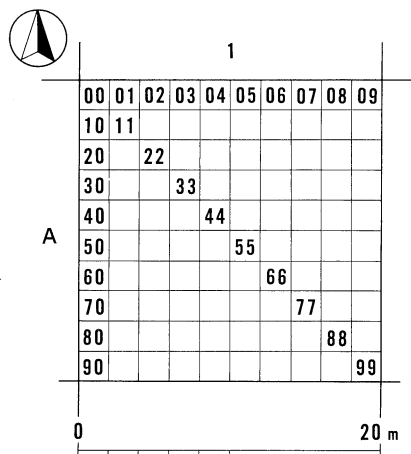
第3節 調査の方法

調査区の設定 調査対象範囲全域を公共座標に合わせて覆う20m×20mの方眼網を設定し(第4図)、大グリッドとした。大グリッドは、北西を起点に、北から南へA, B, C…、西から東へ1, 2, 3…という具合に名前をつけた。それをさらに2m×2mの小グリッド100個に分割した。小グリッドは北西隅を起点に00～99の番号をふり、大小グリッドを組み合わせ、たとえば1A-00のような呼称とした。

確認調査 調査区全域に2m×4mのグリッドを全対象面積の10%分設定し、遺構・遺物の分布を確認した。場所によっては確認グリッドの設定方法が若干異なる。

本調査 表土を重機によって除去したのち、遺構の精査を行った。検出された竪穴住居跡については4分割ないしは2分割し土層観察用のベルトを設定して調査を行った。遺物の取り上げは、必要に応じて個別に番号を付し、地点とレベルを記録した。土坑等についても基本的には同様の調査方法である。遺構外出土の遺物については、基本的に小グリッド一括で採取している。

遺構番号 遺構の内容にかかわらず通し番号を使用し、3桁の番号を付した。番号は001号から始まる。整理段階で欠番が生じた場合でも、調査時につけられた番号をそのまま使用している。



第4図 グリッド分割図

註

- (1)「稻荷台遺跡の調査」浅利幸一、谷島一馬『上総国分寺台調査概報』昭和55年
- (2)『唐崎台(略報)』鈴木英啓他 唐崎台遺跡発掘調査団 昭和54年
- (3)『東間部多古墳群』須田勉他、上総国分寺台遺跡調査団 昭和49年
- (4)『西広貝塚』米田耕之助他、上総国分寺台遺跡調査団 昭和52年
- (5)『上総国分寺台発掘調査概要Ⅴ－祇園原貝塚－』米田耕之助他、上総国分寺台遺跡調査団 昭和53年
『上総国分寺台発掘調査概要ⅩⅠ 祇園原貝塚Ⅲ』小川和博他、上総国分寺台遺跡調査団 昭和58年
- (6)『市原市山倉貝塚調査報告(住居跡・遺構編)－付・山倉貝塚人骨所見概報』山倉貝塚調査団 昭和43年
- (7)「烏掘込貝塚」高橋康男『市原市文化財センター年報 昭和60年度』昭和61年
- (8)『上大堀遺跡』米田耕之助(財)市原市文化財センター 昭和62年
- (9)『小谷吹上遺跡(概報)』市原市小田部小谷吹上遺跡調査団 昭和52年
- (10)『諏訪台古墳群調査概報』須田勉他 上総国分寺台遺跡調査団 昭和50年

- 『上総国分寺台発掘調査概要XII 諏訪台古墳群』須田勉他、上総国分寺台遺跡調査団 昭和59年
- 「諏訪台古墳群」田所真『市原市文化財センター年報 昭和60年度』昭和61年
- (11)『上総国分寺台調査概報－台遺跡A地点の調査・台遺跡B地点の調査』半田堅三他
上総国分寺台遺跡調査団 昭和52年
- (12) 註(2)に同じ
- (13)『天神台遺跡発掘調査概報』平野元三郎他 上総国分寺台遺跡調査団 昭和50年
「天神台遺跡」浅利幸一『市原市文化財センター年報 昭和57・58年度』昭和60年
- (14)「御林跡遺跡の調査」『上総国分寺台調査概報』上総国分寺台遺跡調査団 昭和54年
- (15)「神門4号墳の調査」『上総国分寺台調査概報』上総国分寺台遺跡調査団 昭和51年
「市原市神門四号墳の出現とその系譜」田中新史『古代第63号』早稲田大学考古学会 昭和52年
- (16)「古墳時代の鏡」田所真『私たちの文化財5』(財)市原市文化財センター 昭和61年
- (17)『王賜銘鉄剣概報』滝口宏監修 市原市教育委員会 昭和63年
- (18)「上総山倉1号墳の人物埴輪」米田耕之助『古代第59・60合併号』早稲田大学考古学会 昭和51年
- (19)「根田遺跡」米田耕之助『市原市文化財センター年報 昭和60年度』昭和61年
- (20) 註(3)に同じ
- (21)『南向原』須田勉他 上総国分寺台遺跡調査団 昭和51年
- (22)「古墳の調査」『上総国分寺台調査概報』上総国分寺台遺跡調査団 昭和55年
- (23)「千葉県市原市天神台遺跡出土の小銅鐸」浅利幸一『考古学雑誌』68巻3号 昭和58年 (24)「加茂遺跡A地点の調査」『上総国分寺台調査概報』上総国分寺台遺跡調査団 昭和51年など
- (25) 註(14)に同じ
- (26) 註(11)に同じ
- (27)「上総国分寺址調査報告」滝口宏 上総国分寺台址調査団 昭和43年
『上総国分寺』滝口宏他 千葉県教育委員会 昭和48年
『上総国分寺台発掘調査概要VIII 上総国分僧寺跡－寺域東南部における調査－』須田 勉
上総国分寺台発掘調査団 昭和56年
『上総国分寺台発掘調査概要IX 上総国分僧寺跡－寺域北辺部における調査－』須田 勉他 上総国分寺台発掘調査団 昭和57年
『上総国分寺台発掘調査概要X 上総国分僧寺跡－寺域東南部における調査－』須田勉 他 上総国分寺台発掘調査団 昭和57年
- (28)「上総国分尼寺の調査」宮本敬一『上総国分寺台調査概報』上総国分寺台遺跡調査団 昭和55年
「上総国分尼寺の伽藍と付属諸院」宮本敬一『月刊歴史教育』昭和56年
「上総国分尼寺」宮本敬一他『仏教芸術－特集諸国国分寺の発掘調査－』103号 昭和56年
- (29)「II調査遺跡の概要」『南向原』上総国分寺台遺跡調査団編 昭和51年
- (30)「坊作遺跡の調査」『上総国分寺台発掘調査概要IV』上総国分寺台発掘調査団 昭和52年
- (31) 註(29)に同じ
- (32) 註(29)に同じ
- (33)「祇園原瓦窯跡」高橋康男『市原市文化財センター年報 昭和62年度』昭和63年
- (34)『千草山遺跡・東千草山遺跡』田中清美他(財)市原市文化財センター 平成元年
- (35)「市原市上総国府関係遺跡」平野元三郎 千葉県遺跡調査報告書 千葉県教育委員会昭和39年
- (36) 註(1)に同じ
- (37)「上総国府の諸問題」須田勉『古代』第61号 早稲田大学考古学会 昭和51年
「上総国府推定地」田所真『市原市文化財センター年報 昭和57・58年度』昭和60年
「村上城跡(上総国府推定地)」山口直樹『市原市文化財センター年報 昭和59年度』昭和60年
- (38)「郡本遺跡」石田広美『市原市文化財センター年報 昭和60年度』昭和61年

第2章 遺構と遺物

第1節 遺構の概要

検出された遺構は、竪穴住居跡43棟、土坑14基、溝状遺構18条で、このほかに単独のピットなどが検出されている。時期別の竪穴住居跡棟数は、弥生時代後期35棟、古墳時代前期5棟、古墳時代後期1棟、平安時代と思われる竪穴1棟、時期不明1棟である。弥生時代後期の竪穴住居跡の時期については、後期中葉以降のものが主体で、集落としては弥生時代末から古墳時代初頭まで継続するものと考えられる。今回の調査は路線のため極めて限られていることから集落の外観にまで言及することは難しいが、今回の調査範囲が台地の平坦面に谷が入り込む部分であることから、未調査の台地平坦面においては弥生後期の集落跡が広く展開するものと思われる。古墳時代中葉の遺構が全く検出されていないことから、古墳時代前期で一旦集落が営まれなくなり、古墳時代後期末葉に再び集落が営まれはじめるようである。弥生時代の一般的な集落では、居住域と墓域が別れており、隣接する台地に墓域が存在するものと考えられる。

今回の調査によって検出された弥生時代後期の竪穴群は、切り合いもなく比較的散漫に展開している。竪穴の構造では、003号跡のような楕円形を呈し、規模の大きな竪穴は少なく、円形ないしは隅丸方形の小規模な竪穴が主体を占めている。土器の様相から前者は弥生時代後期中葉あたりと考えられ、後者は後期後葉から末葉にかけてのものと考えられる。後者の竪穴構造は規模が小さいことはもちろん、柱穴の痕跡もないものがあり、柱穴があったとしてもいたって不安定な構造である。弥生時代の竪穴から出土した遺物は、総じて少なく、竪穴の廃棄とともに土器などが一緒に廃棄されることは少ないようである。

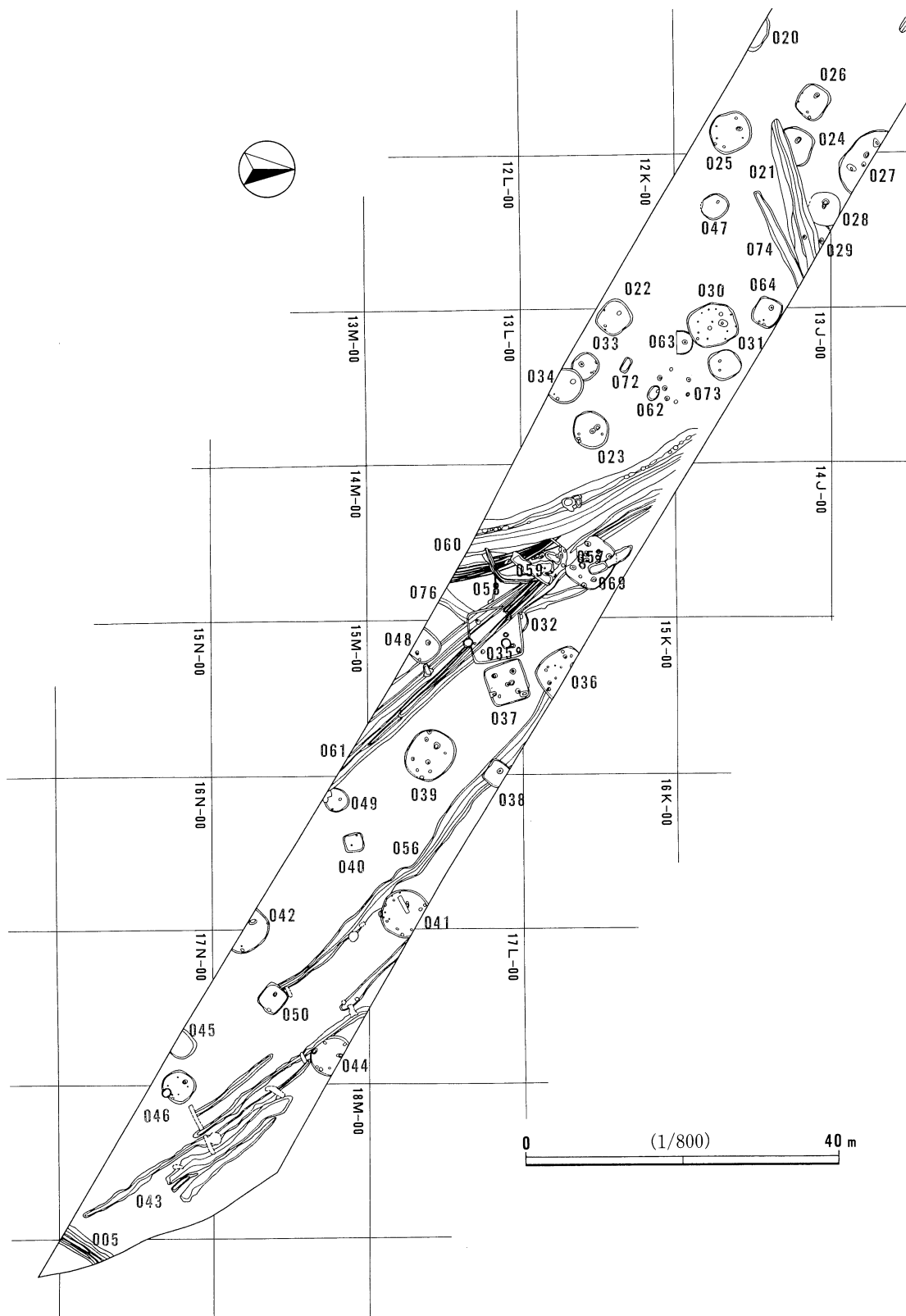
土坑は、14基検出されたが遺物を伴うものは少なく、時期を明らかにできるものは限られている。070号跡は多量の炭化材とともに土師器坏を5点出土しており、特殊な遺構である。

調査区内を横切る溝状遺構が18条検出されたが、実際にはこの数以上の溝状遺構があったものと推測される。多くは、底面に硬化面を伴い、道路として一定期間使用されていたものと考えられ、最も幅のある060号の溝状遺構では3回以上の掘り返しと、溝の埋没途中で何度も硬化面が形成されるような道路としての使用が行われたようである。検出された溝状遺構の走る方向は北西方向とそれに直行する北東方向のものがあり、それぞれ時期差があるとは考えられるものの何らかの関連性を持つのではないかと考えられる。隣接する東千草山遺跡の調査でも060号跡に類似した溝状遺構が検出されており、深い関係があるものと思われる。溝状遺構の時期は、伴出遺物がいたって少ないことから、特定することはできなかったが、8世紀後半の土器

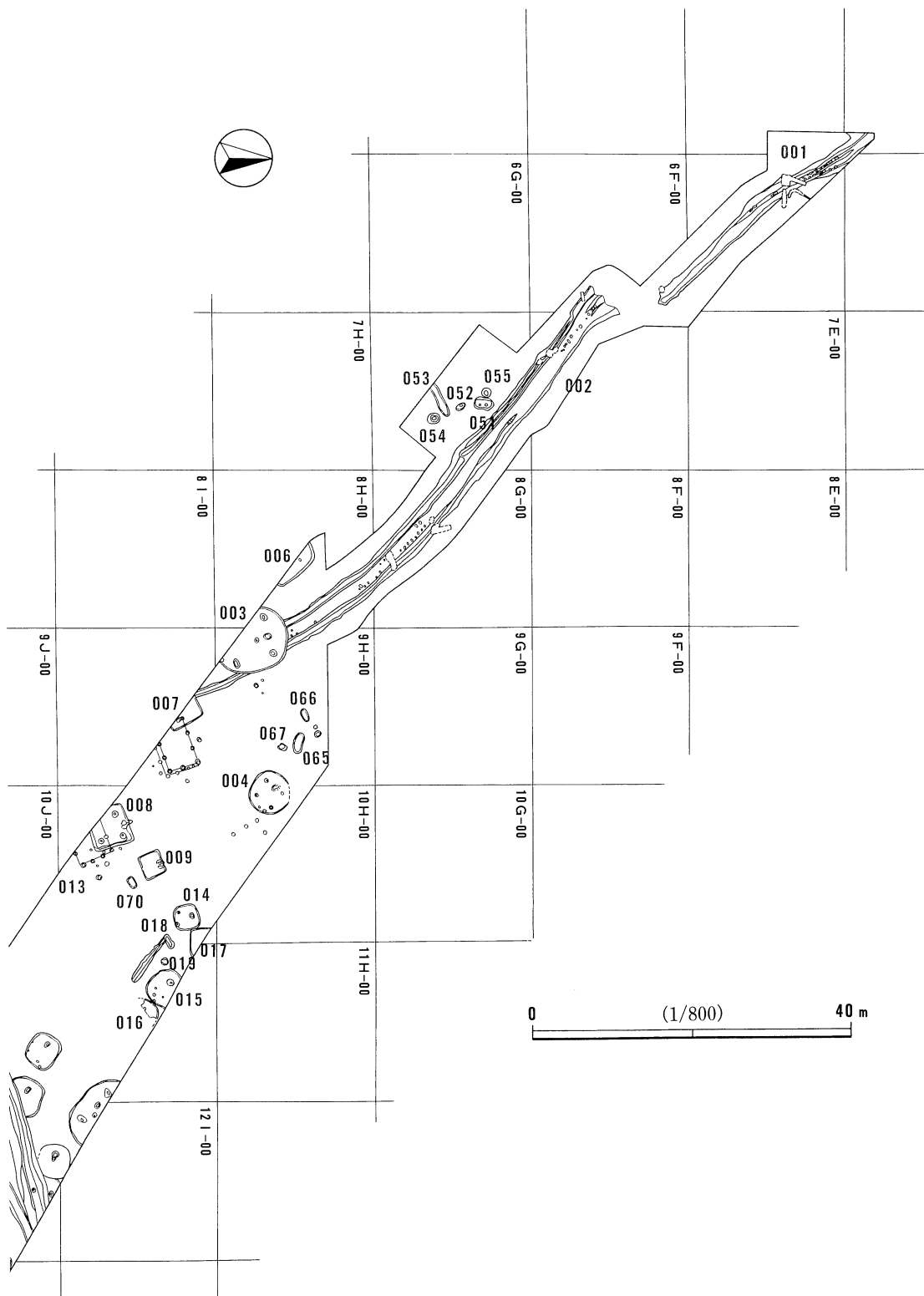
を出土したものや中世後半の土器片を伴っているものなどがあり、時期幅がかなりあるものと思われる。

第1表 竪穴住居跡一覧表

遺構番号	調査区	平面形	規模(m)	時 期	主軸方位	備 考
003号	9H-70	橢円形	9.8×8.2	弥生後期後半	N-15°-W	
004号	10H-60	橢円形	5.4×5.1	弥生後期後半	N-50°-W	砥石出土
006号	8H-56	隅丸方形	6.9×?	弥生後期後半	不明	
007号	9I-15	方形	4.6×4.6	古墳前期	N-33°-W	砥石・敲石出土
008号	10I-62	方形	5.0×5.0	古墳終末	N-18°-W	
009号	10I-45	方形	3.1×3.1	平安	N-22°-W	砥石?
014号	10I-18	隅丸方形	3.2×3.2	弥生後期後半	N-14°-W	
015号	11I-32	円形	径4.9	弥生後期後半	不明	
016号	11I-44	円形	径4.0	弥生後期後半	不明	
017号	10I-19	方形	3.6×3.6	古墳前期	不明	
020号	11J-42	隅丸方形	4.8×?	弥生後期?	不明	
022号	13K-40	隅丸方形	4.5×4.2	弥生後期?	N-45°-W	
023号	13K-57	円形	径4.7	弥生後期後半	N-33°-W	
024号	11J-29	隅丸方形	4.8×4.2	弥生後期後半	N-69°-W	
025号	11J-68	橢円形	5.4×5.1	弥生後期後半	N-21°-W	
026号	11J-16	隅丸方形	4.4×3.9	弥生後期後半	N-56°-W	
027号	12I-70	橢円形	9.5×7.5	弥生後期後半	不明	土製紡錘車出土
028号	12J-03	隅丸方形	4.2×4.0	弥生後期後半	N-79°-W	029号に切られる
029号	12J-05	円形?	?	古墳前期?	不明	
030号	13J-71	隅丸方形	6.3×5.6	弥生後期後半	N-20°-W	土製勾玉出土 建て替えあり
031号	13I-73	円形	径4.2	弥生後期後半	不明	
032号	15L-00	円形	径4.0	弥生後期?	N-30°-W	
033号	13K-53	円形	径3.3	弥生後期後半	N-45°-W	土製勾玉出土
034号	13K-74	橢円形	4.6×4.4	弥生後期後半	N-24°-W	
035号	15L-10	方形	6.9×6.9	古墳前期	N-10°-W	メノウ製勾玉・土器片転用砥石出土
036号	15K-72	隅丸方形	6.6×5.8	弥生後期後半	N-36°-W	砥石出土
037号	15L-13	方形	5.2×5.2	古墳前期	N-17°-W	
038号	15L-19	方形	3.2×3.2	弥生後期後半	N-51°-W	砥石出土
039号	15L-59	橢円形	6.7×5.8	弥生後期後半	N-51°-W	土器片転用砥石・砥石出土
040号	16M-04	方形	2.5×2.5	弥生後期?	不明	
041号	16L-78	橢円形	6.1×5.7	弥生後期後半	N-65°-W	砥石出土
042号	17M-70	橢円形	6.1×5.6	弥生後期後半	N-45°-W	
044号	17M-27	橢円形	5.4×5.0	弥生後期後半	N-12°-W	
045号	17N-07	円形	径3.6	弥生後期後半	不明	
046号	18N-20	隅丸方形	4.0×4.0	弥生後期中葉	N-45°-W	完形土器多数
047号	12J-73	隅丸方形	3.6×3.2	弥生後期?	N-52°-W	
048号	15L-51	隅丸方形	4.0×4.0	弥生後期後半	N-41°-W	
049号	16M-11	円形	径3.1	弥生後期後半	不明	
050号	17M-64	方形	3.5×3.2	弥生後期後半	N-52°-W	
057号	14K-46	隅丸方形	6.7×5.8	弥生後期後半	N-57°-W	土製小玉・敲石出土
063号	13J-92	橢円形	?×3.2	弥生後期後半	N?	
064号	13J-40	隅丸方形	3.9×3.5	弥生後期後半	N-60°-W	
073号	13K-05	円形?	径5.0?	縄文?	不明	



第5図 遺構配置図(1)



第 6 図 遺構配置図(2)

第2節 竪穴住居跡

第003号跡（第7図・図版7）

位置・形態 9H-70グリッドを主体に検出された。南西側約3分の1が調査区外となり、未調査である。また、溝状遺構の001号跡及び002号跡によって竪穴の覆土が攪乱されていたが床面までは達していなかった。平面の形態は小判形を呈し、規模は長軸長約9.8m、短軸長約8.2mと推定される規模の大きな竪穴である。主軸方位はN-15°-Wである。竪穴の深さは北壁18cm、西壁23cm、東壁36cmである。

覆土 5層に分層された。褐色土を主体とし、壁面近くではロームの混入量が増える。北西から北東にかけて走る溝状遺構によって覆土が床面直上まで攪乱されている。

施設等 ピットは全部で4つ検出された。P1が60cm、P2が85cm、P3が61cm、P4が18cm、P5が35cmである。配置からP1～P3が主柱穴と考えられ、竪穴の規模に比例して深く、径も大きなものである。P4は当該時期の竪穴に一般的にみられる小規模な貯蔵穴かもしれない。炉跡は不整楕円形を呈し、長径120cm、短径80cmを測る。炉内の焼土の堆積量はあまり多くはなかった。

遺物出土状況 遺物の出土量は竪穴の規模に反していたって微量であった。北西壁近くからと南東壁近くから若干の土器片が出土しているにすぎない。

出土遺物 1は鉢形土器の口縁である。口径は推定で16.6cm。口縁は外側に肥厚する。口縁部には網目状捺糸文が、下端には単節縄文の原体の押圧によるキザミが巡る。口縁部以外は、工具によるナデ・ナデ→ヘラミガキ・赤彩の順で調整が施される。口縁部は淡い褐色、ほかは暗赤色を呈する。胎土は密である。

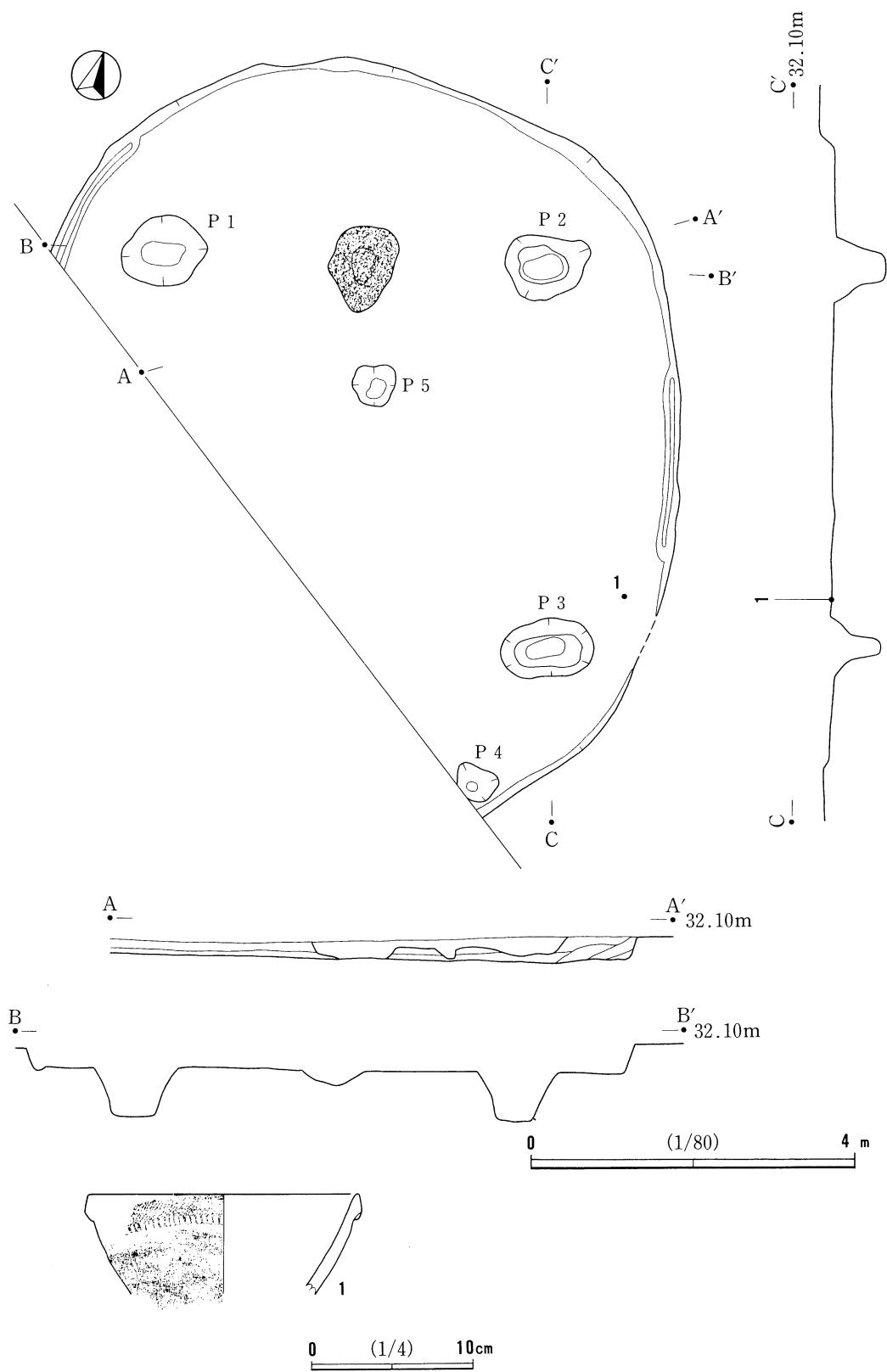
第004号跡（第8図・図版7）

位置・形態 10H-60グリッドを主体に検出された。平面の形態は楕円形を呈し、規模は長軸長5.4m、短軸長5.1mである。主軸方位はN-50°-Wである。竪穴の深さは北壁8cm、西壁16cm、南壁8cm、東壁13cmである。

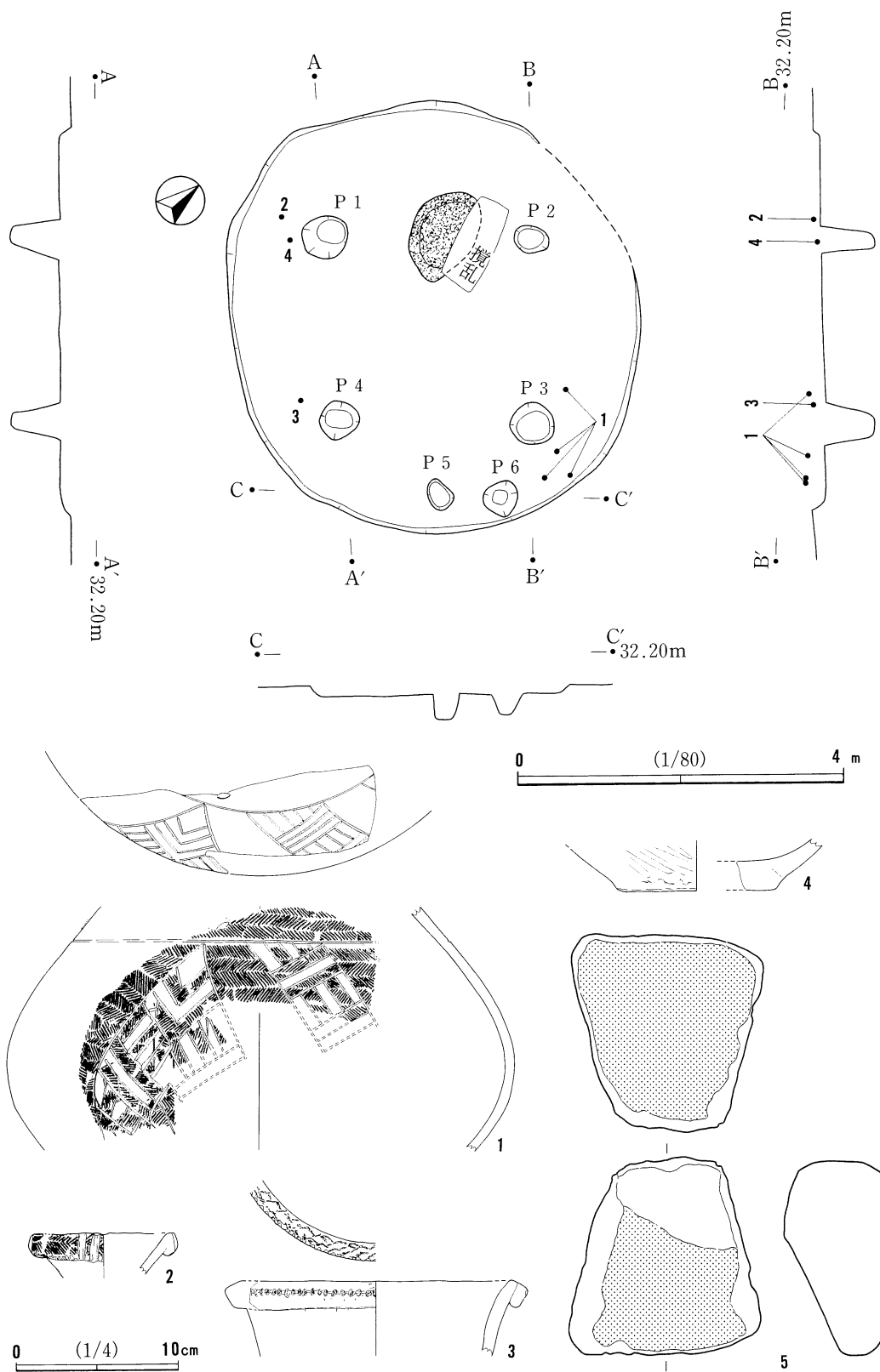
覆土 3層に分層された。暗褐色土を主体とし炭化物及び焼土を部分的に微量混入する。

施設等 ピットは全部で6つ検出された。P1が62cm、P2が66cm、P3が60cm、P4が62cm、P5が38cm、P6が25cmである。配置及び深さからP1～P4が主柱穴と考えられる。P5は入口の梯子用のピット、P6は貯蔵穴と考えられる。炉跡は楕円形を呈し、東側が壊されている。検出面からの深さは8cmと浅い。焼土の堆積は少ない。

遺物出土状況 竪穴が浅いこともあり、遺物の出土量は少なかった。東西壁近くから多少土器が出土している。



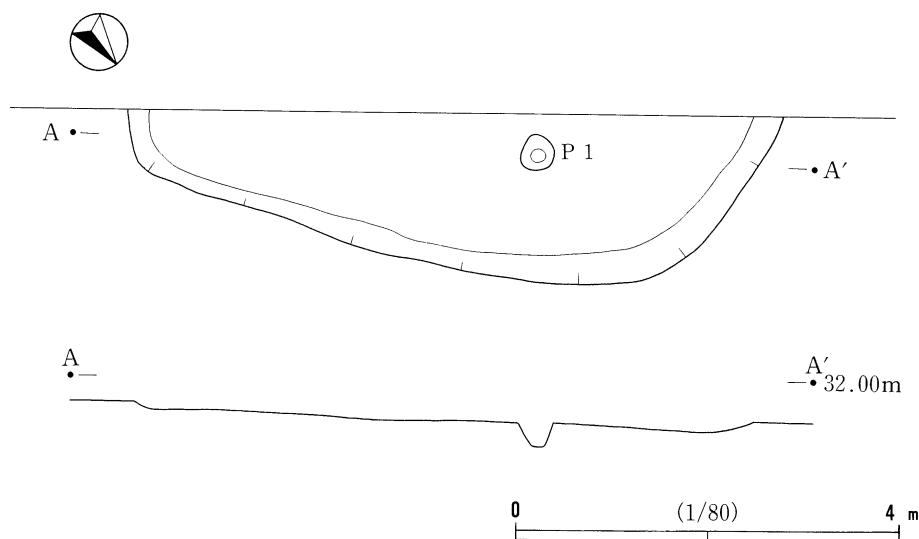
第7図 003号跡及び出土遺物



第 8 図 004号跡及び出土遺物 (5 1/2)

出土遺物 1は壺形土器の体部である。推定の最大径は31cm。沈線・円形付文・単節の縄文による、山形文を基本にした文様構成を持つ。内外面ともナデ調整である。まず、RL・LRの縄文帯が頸部から最大径すぐ下まで施され、次に沈線が描かれて、その区画に基づいて縄文がヘラミガキによって消され、最後にすり消された部分が赤彩される、という施文順序である。外面は暗赤色・淡い黄褐色、内面は淡い褐色を呈する。焼成時の黒斑もみられる。胎土は密である。

2は小型の壺形土器の口縁である。口径は推定で10.5cm。内外面ともナデ・ヘラミガキで仕上げられる。口縁の外面を除き赤彩されている。口縁端外面には、単節LR・RL横回転の縄文が1列ずつ施され、2個1組の棒状付文が約5cmごとに配されている。口縁部の下端には幅2mmほどのキザミがめぐる。赤彩部分は暗赤色、他は淡い黄褐色を呈する。胎土は密であるが、軽石状の細粒が目立つ。3は壺形土器の口縁部である。口径は推定で16.5cm。内外面ともナデの後に横方向の密なヘラミガキが施されている。口縁外面を除いた内外面が赤彩されている。口縁端面に網目状燃糸文、外側に単節の縄文原体の押圧によるキザミが施されている。赤彩されている部分は暗赤色、ほかは淡い黄褐色である。胎土は緻密である。4は壺形土器の底部であろう。底径は推定で10cm。内面はナデで、外面は左上がりのヘラミガキで仕上げられている。内面は淡い黄褐色、外面は暗い黄土色をする。胎土は密だが、軽石状の細粒を多く含む。5は砥石と思われる。重量は106.6gである。研磨された面が2面あり、表面は緩い曲面となっている。白に近い灰色を呈する。石材は砂岩である。



第9図 006号跡

第006号跡（第9図・図版7）

位置・形態 8H-56グリッドを主体に検出された。約4分の3は調査区外である。壁の遺存状態は極めて悪い。平面形態は隅丸方形を呈すると思われ、規模は一辺約6.9mと推定される。炉跡等は検出されなかった。竪穴の深さは2～3cmである。

施設等 ピットは1つ検出されたにすぎない。深さは13cmである。浅めであるが柱穴と考えられる。

出土遺物 遺物は皆無である。竪穴の時期は平面形態から弥生時代後期と推測される。

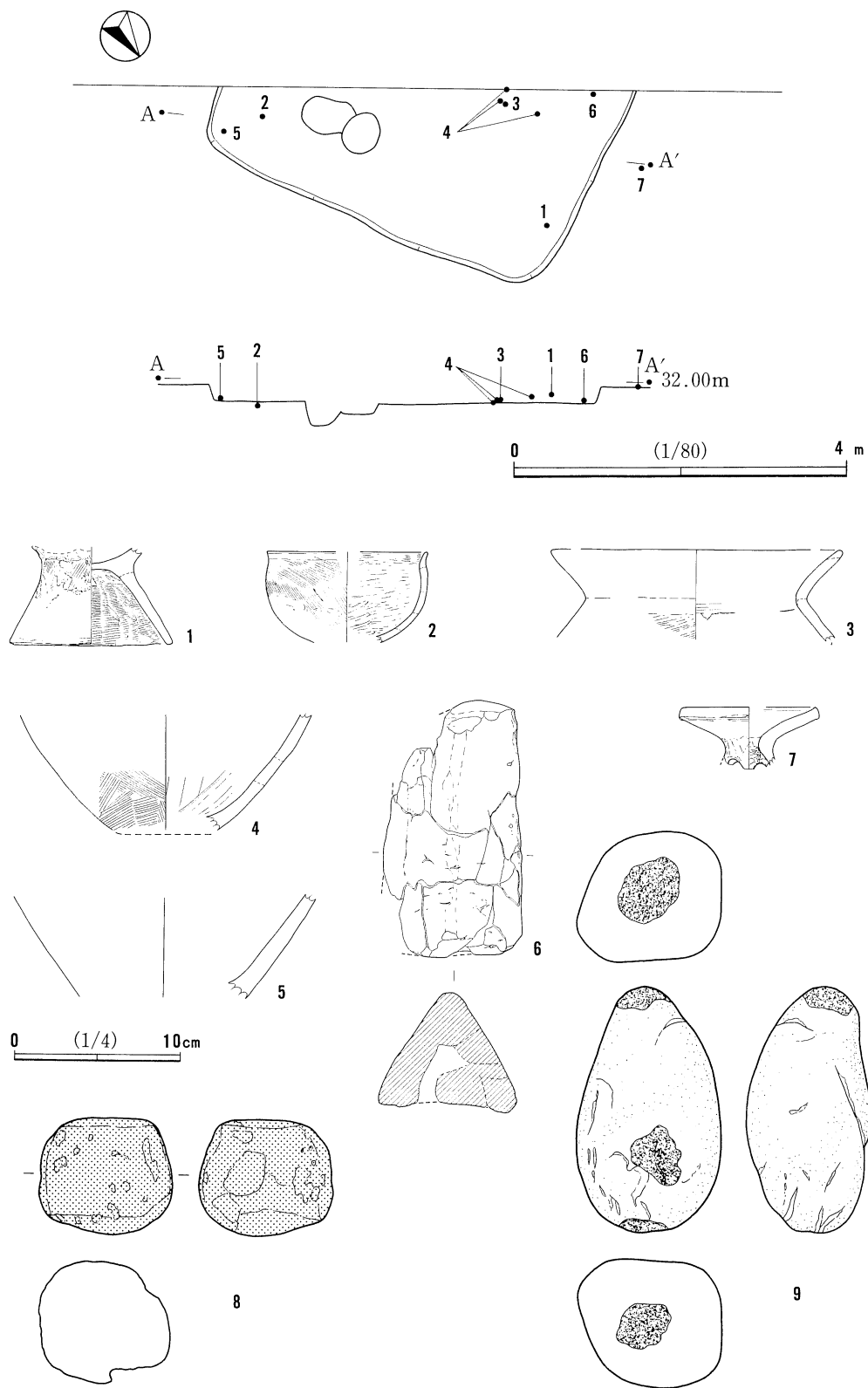
第007号跡（第10図・図版8）

位置・形態 9I-15グリッドを主体に検出された。竪穴の約3分の2が調査区外となっており未調査である。掘立柱建物跡の011号跡の柱穴が床面で検出されているが、床面の状態から011号跡の方が新しいと判断される。平面形態は方形を呈し、規模は一辺4.6mである。主軸方位はN-33°-Wと推定され、古墳時代前期の竪穴であることから炉跡は未調査部分の北西にやや寄った位置にあると推測される。竪穴の深さは北西壁10cm、北東壁14cmである。

施設等 ピット等の施設は検出されなかった。

遺物出土状況 床面から散漫に微量の土器片が検出されたにとどまる。

出土遺物 1は台付甕形土器の脚台部である。脚台の径は9.4cmを測る。内外面ともにハケメが施され、端部だけヨコナデで仕上げられる。胎土は密だが、まれに1mm大の砂粒が認められる。外面は淡い黄褐色、内面は黒灰色から淡い褐色を呈する。2は小型の鉢形土器である。口径9.6cm、最大径9.8cmと推定される。外面は主にハケメ、口縁部付近はその後にヨコナデ、内面は密なヘラミガキ、口縁部付近はハケメがそれぞれ施される。胎土は密である。内外面ともに淡い黄褐色を呈する。3は甕形土器の口縁部である。口径は推定で17.2cmを測る。口縁部外面はヨコナデで、口縁部内面は横のハケメのあとにヨコナデで仕上げられる。口縁端には煤が付着する。くびれ以下は内面がナデ、外面が右上がりのハケメである。胎土は密である。外面は暗い黄褐色から暗灰色、内面は暗灰褐色を呈する。4は甕形土器の底部付近である。底径は6cmと推定される。外面はハケメ、内面は工具によるナデで仕上げられる。胎土は密である。外面は淡い暗灰色から暗い黄褐色、内面は暗灰色から淡い黄褐色を呈する。5は甕形土器の胴部下半である。底径は推定で8cm。外面はハケメののちナデ、内面は工具によるナデが施される。胎土は密である。外面は淡い暗褐色、内面は淡い暗灰色を呈す。6は三角柱形土製品と呼んでおきたい。原形は不明だが支脚の可能性も考えられる。長軸15.5cm、幅8.3cm、高さ7.1cmを測る。2cm前後の厚みを持つ粘土板をV字に折り曲げ、そこに粘土を充填したような作りで、外面はゆるいナデで整えられている。表面は淡い暗褐色、内部は淡い明褐色を呈する。胎土は土器に用



第10図 007号跡及び出土遺物 (8・9 1/2)

いられるものと同様に密である。7は小型の器台形土器の上半である。推定口径8cm。内外面とも緻密なヘラミガキとナデで仕上げられている。脚部には透孔が三方に見られる。受部の器壁には、上に載せた土器との接触によるものか、ドーナツ状に磨滅が認められる。胎土は密である。内外面とも淡い赤褐色から淡い黄灰褐色を呈する。8は軽石製の砥石と思われる。重量は8.0g。9は敲石である。重量は171.1g。長軸の両端と側面の1ヶ所に敲打痕がある。黒色を呈する。石材はチャートである。

第008号跡（第11図・図版8）

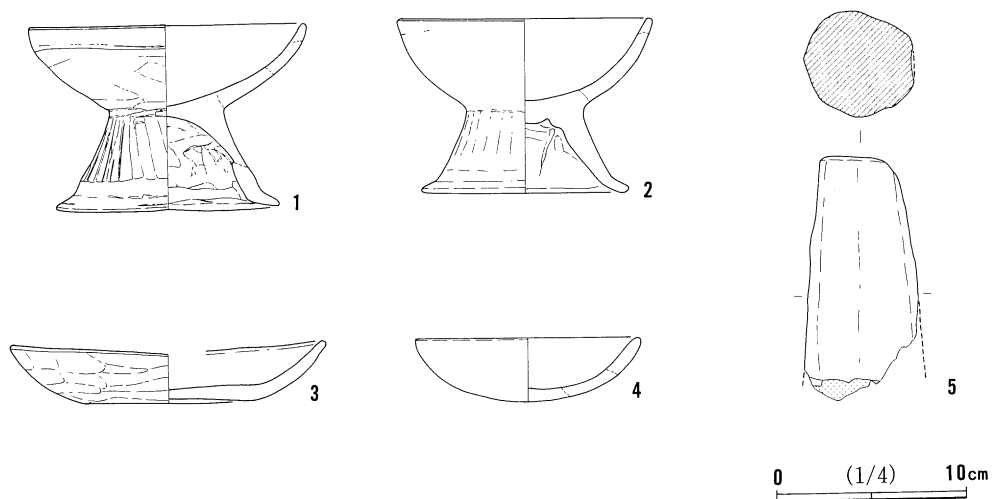
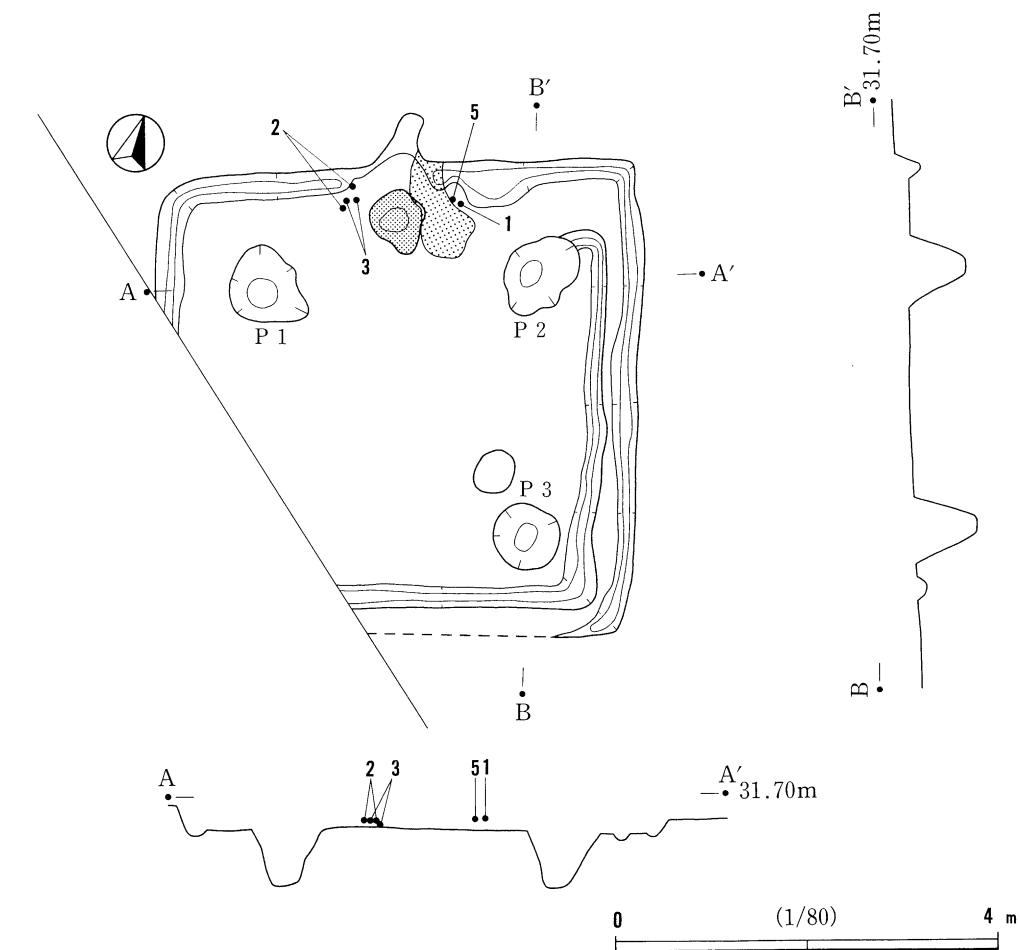
位置・形態 10I-62グリッドを主体に検出された。検出面からの掘り込みは浅く、南側の壁は検出できなかった。平面形態は方形を呈し、規模は一辺5.0mである。主軸方位はN-18°-Wでカマドは北壁中央に位置している。深さは北壁16cm、西壁10cm、東壁11cmである。

覆土 暗褐色土を主体する。

施設等 ピットは3つ検出された。床面からの深さはP1が62cm、P2が54cm、P3が65cmである。検出位置及び規模から支柱穴と考えられる。周溝は全周すると考えられる。東及び南側の壁寄りの床面に溝が走っている。壁に並行して走ることから周溝と判断され、一辺4.0mほどの竪穴が規模の一回り大きな竪穴に建て替えられたものと見られる。カマドは北壁中央に位置し、煙道部の突出は大きい。カマドの構築材である砂質粘土の遺存は悪く、右側の袖部分のみが残存している。

遺物出土状況 遺物はカマド周辺に検出されたにとどまっている。

出土遺物 1は高杯形の土師器である。口径14.2cm、脚部径10cm、器高9.4cmを測る。杯部内面はナデの後にやや疎なヘラミガキで仕上げられる。杯部外面は口縁部付近がヨコナデ、他の部分が工具によるナデで、脚部は、外面が縦方向のヘラケズリ、内面が粗雑なヘラケズリで、裾がヨコナデで仕上げられる。脚柱部に粘土を足して裾部を作った際にヘラ状工具でそれを押さえた跡が見られる。胎土は密で、まれにシャモットを含む。全体的に淡い褐色を呈し、部分的に焼成時の黒斑が見られる。2は高杯形の土師器である。口径は推定で13cm、脚部径10cm、器高9.4cmを測る。製作技法は1と同じであるが、外面が荒れており、色調は更に淡い。胎土は1より粗く見える。3は皿形の土師器である。口径16.3cm、器高3.2cmを測る。外面は底部から口縁直下までの横方向のヘラケズリと疎なヘラミガキが、内面はナデの後に疎なヘラミガキが施されている。内面は焼成時の黒斑と煤の付着により黒に近い黒灰色を、外面は主に淡い灰褐色を呈する。4は浅い碗形の土師器である。推定で、口径11.6cm、器高3.3cmを測る。磨滅により調整痕が判然としないが、内外面ともヘラミガキが全面に及んでいたようである。胎土は密である。内外面とも淡褐色である。5は土製支脚である。現存長13.8cm、幅3.9～5.8cmを測る。

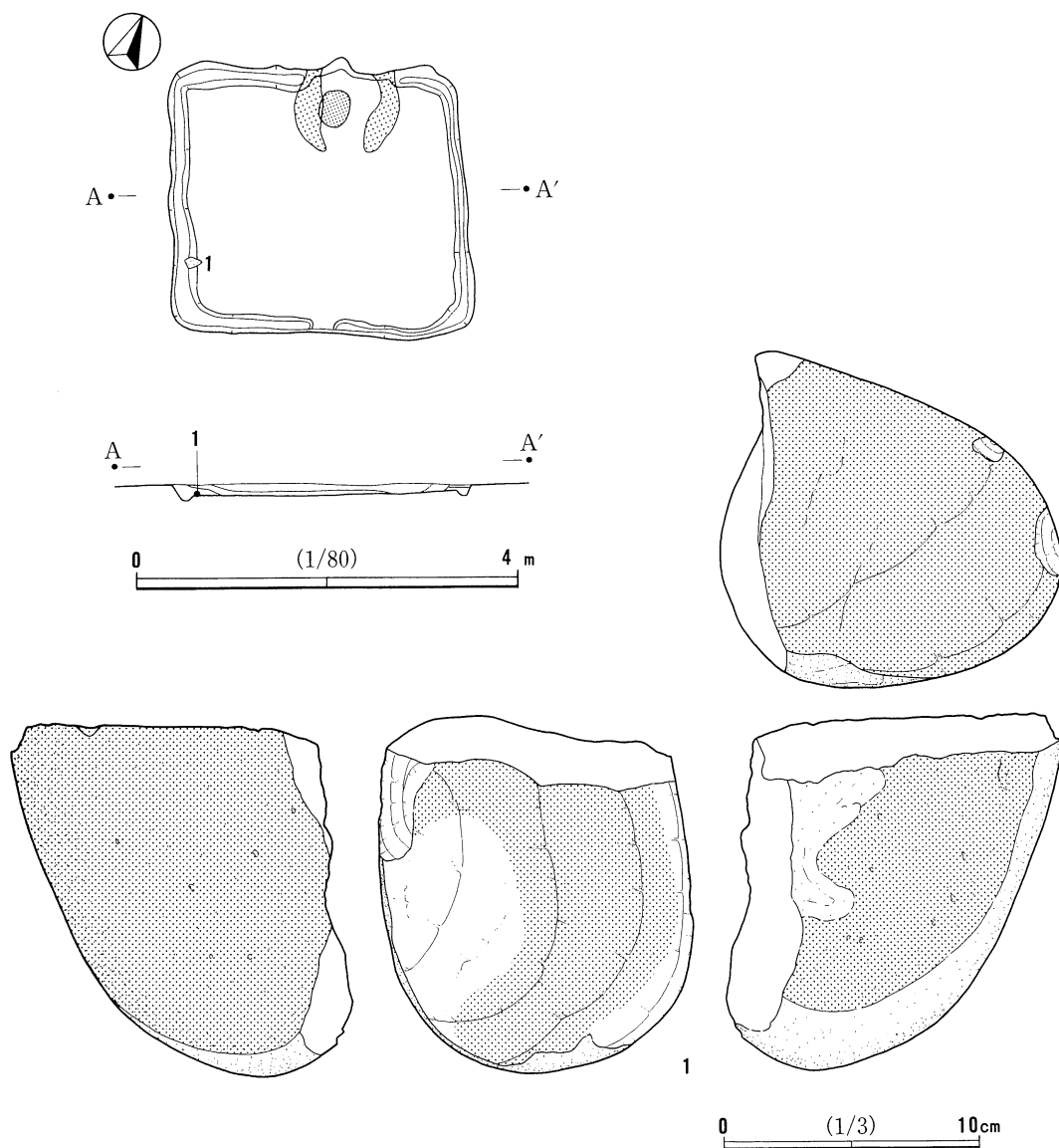


第11図 008号跡及び出土遺物

断面形は円に近い隅丸正方形を呈す。胎土は密であるが、内部に細かい空隙が見られる。そのため非常に脆く、表面はザラザラとしている。外面は暗い灰褐色、内部は淡い褐色である。

第009号跡（第12図・図版8）

位置・形態 10I-45グリッドを主体に検出された。平面形態は方形を呈し、一辺は3.1mで小規模な竪穴である。主軸方位はN-22°-Wで、カマドは北西壁中央やや東寄りに位置する。竪穴の深さは北西壁11cm、南西壁9cm、南東壁10cm、北東壁12cmである。



第12図 009号跡及び出土遺物

覆土 暗褐色土を主体とする。

施設等 ピットは検出されなかった。カマドはあまり遺存状態はよくない。煙道部の突出は小さく、火床面の焼土量はあまり多くなかった。周溝はほぼ全周している。

遺物出土状況 遺物は極めて少なく、実測可能な土器はない。南西壁ぎわで各面が研磨された大きな円礫が検出されている。砥石として使用されたものか。土器は古墳時代後期と考えられる赤彩の坏片が出土しているが、平面形態から平安時代の竪穴と推測される。

出土遺物 1は砥石か。2,980gを量る。光沢を伴う擦られた痕がある。破断面は黒色、ほかは淡い褐灰色を呈する。安山岩である。

第014号跡（第13図・図版9）

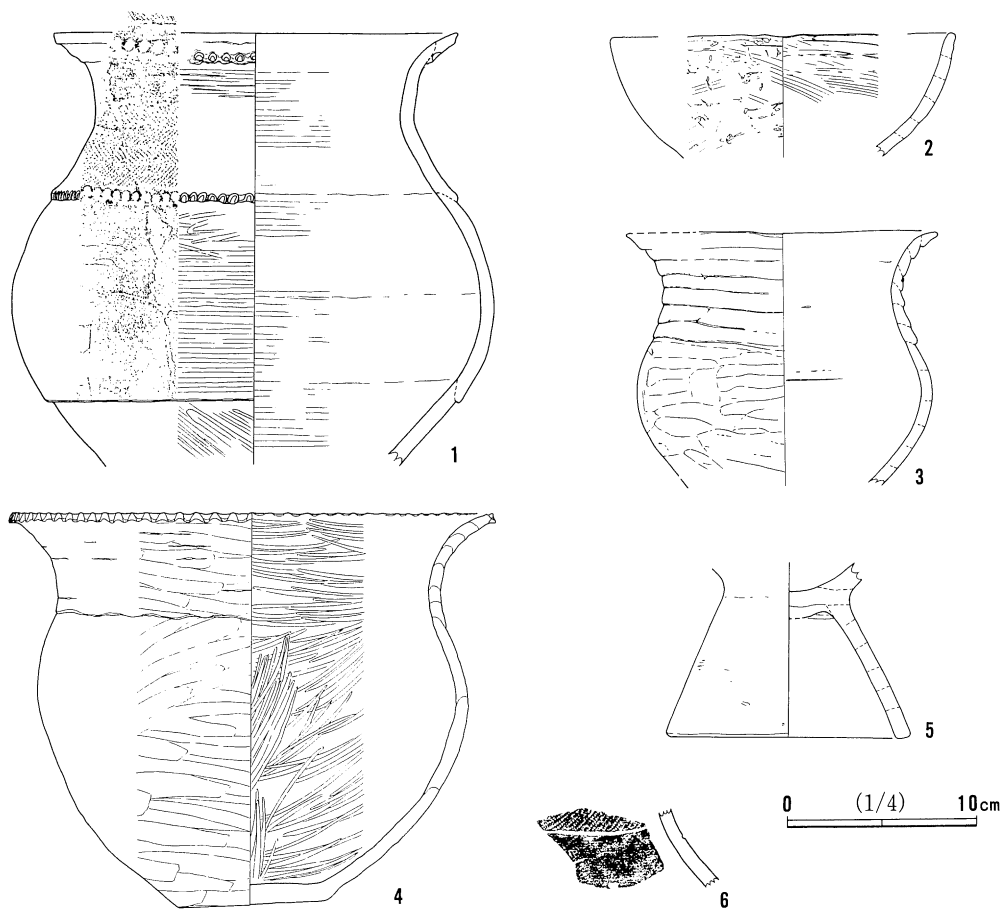
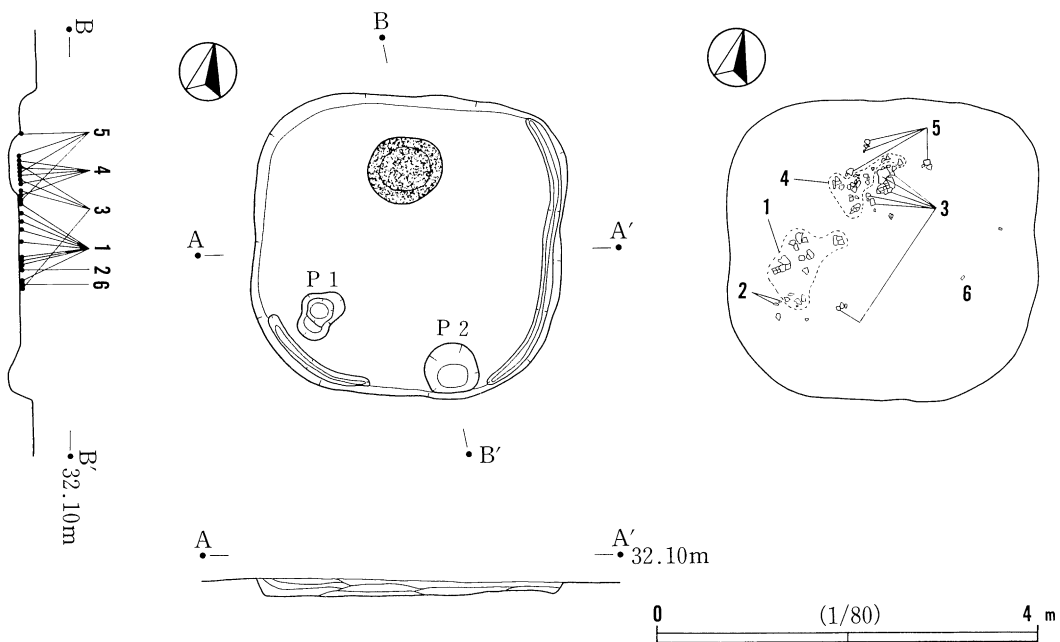
位置・形態 10I-18グリッドを主体に検出された。北東側に017号跡が隣接する。平面形態は隅丸方形を呈し、一辺約3.2mである。主軸方位はN-14°-Wで、炉跡が主軸やや北に寄った位置から検出されている。竪穴の深さは北壁14cm、西壁18cm、南壁18cm、東壁12cmである。

覆土 7層に分層された。暗褐色土を主体とし、下層になるにしたがいローム混入量が増える。

施設等 ピットは2つ検出された。P1が33cm、P2が12cmの深さである。P1柱穴と考えられ、P2は貯蔵穴か。炉跡は円形を呈し、直径は70cmで比較的大きいと言える。焼土の堆積はあまり多くない。炉底面はよく焼けていた。周溝が東壁及び南東コーナーで検出された。

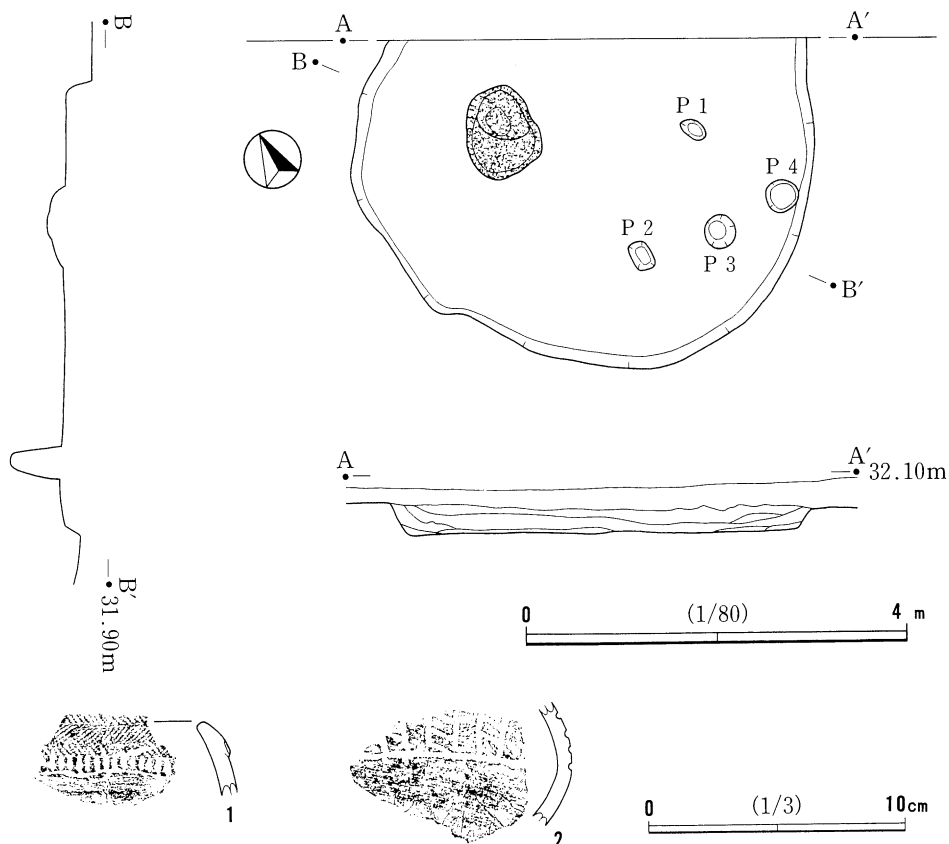
遺物出土状況 遺物の出土量はあまり多くないが、床面東側及び炉跡の部分から集中して検出されている。

出土遺物 1は装飾を持つ甕形土器である。推定復元で、口径21.2cm、胴部最大径25.3cm、器高約25cmを測る。外面は工具によるナデの後にヘラミガキ、内面はナデの後に疎らなヘラミガキにより仕上げられる。口縁端外面には単節RL横回転の縄文、肥厚部分下端には、単節の縄文原体を折ったものか閉端なのかは不明だが、原体の押圧による刺突が巡る。その下には、上を同じ縄に結び目が3つある無節Lの原体の回転によるZ字状の結節文によって、下を頸部下端の稜に巡る上述のものと同様の刺突によって挟まれた縄文が4帯施される。1段目と3段目の単節RL横回転の方が先に、2・4段目の単節LR横回転の方が後に施されている。胎土は、密だが、微細なスコリア状粒を多く含む。外面は淡い灰褐色・褐色・黒褐色、内面は淡い暗褐色・黒褐色を呈する。最大径から胴部下半にかけてと、口縁部の一部に煤の付着が認められる。2は鉢形土器の口縁部であろうか。口径は19.6cmと推定される。内外面ともハケメとその後のナデにより仕上げられる。胎土は、軽石状の粒が多く混ざっており特徴的である。外面は淡い褐色・暗灰色、内面は淡い暗褐色・暗灰色を呈する。3は甕形土器である。口径16.2cm、胴部最大径15.6cmを測る。輪積み部分はナデで、他の部分は工具によるナデで仕上げられる。胎土は密で



第13図 014号跡及び出土遺物

ある。外面は淡い橙褐色、内面は淡い暗褐色を呈する。4はほぼ完形の甕形土器である。口径25.2cm、胴部最大径22.9cm、底径8.3cmを測る。頸部外面は工具による横方向のナデにより、輪積み痕が消されている。体部外面も底部直上まで、同じく工具によるナデによって仕上げられている。頸部内面は横方向の密なヘラミガキが、最大径以下の内面は工具によるナデの後に、底部に近づくほど密になるヘラミガキが施される。口縁端には、爪の痕跡が見られることから指先によるものと思われるキザミが交互に巡る。5は台付甕形土器の脚台部である。径12.7cm高さ7.5cmを測る。外面はハケメの後、それをナデで丁寧に消し、内面はナデで仕上げられる。鼓形に成形した後に、くびれ部分に栓をするようなかたちで作られている。胎土には、0.5～1mm大の砂粒を多く含み粗い。外面は淡い黄褐色・暗灰色、内面は淡い褐色を呈する。6は壺形土器の頸部である。外面はナデの後にヘラミガキ、内面はナデで仕上げられる。単節LR横回転の縄文を沈線が画するように切り、沈線以下には赤彩が施される。外面は淡い褐色・淡い赤褐色、内面は淡い褐色を呈する。胎土は密である。



第14図 015号跡及び出土遺物

第015号跡（第14図・図版9）

位置・形態 11I-32グリッドを主体に検出された。竪穴の約3分の1が調査区外となっており未調査である。南東側に016号跡が隣接する。平面形態は円形を呈すると思われる。規模は直径約4.9mである。炉跡が北西側にやや寄った床面に検出された。竪穴の深さは西壁25cm、南壁17cm、東壁20cmである。

覆土 7層に分層された。暗褐色土を主体とし、壁面近くでローム混入量が増える。部分的に焼土粒を混入する。

施設等 ピットは全部で4つ検出された。P1が37cm、P2が23cm、P3が42cm、P4が15cmである。柱穴とするには配置の規格性に乏しい。炉跡は不整楕円形を呈し、長径98cm、短径79cm、深さ20cmで比較的大きいと言える。焼土の堆積はあまり多くない。他に貯蔵穴等は検出されていない。

遺物出土状況 遺物の出土量は微量であり、床面から散発的に出土したにすぎない。

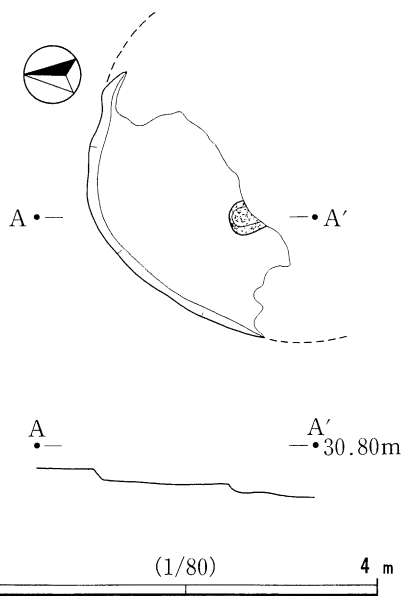
出土遺物 1は鉢形土器の口縁部である。外面に肥厚する。口縁端面に単節RL、口縁部外面に同LR・RL横回転の縄文が、口縁部下端に単節縄文の原体の押圧によるキザミが施される。口縁部以下の外面と内面は、横方向の工具によるナデ→横方向のヘラミガキ・赤彩の順で調整される。外面は淡い褐色・赤褐色、内面は赤褐色を呈する。胎土は密である。2は壺形土器の体部である。外面にヘラ状工具による沈線で構成された文様が施される。梯子状の部分のたて棒→よこ棒→下端のよこ棒の順で施文される。文様以下の外面は横方向のヘラミガキ、内面は横方向の工具によるナデで仕上げられる。内外面とも暗褐色を呈し、胎土は密である。

第016号跡（第15図・図版10）

位置・形態 11I-44グリッドを主体に検出された。北西側に015号跡が隣接する。竪穴の遺存は悪く、4分の1程度が検出されたにすぎない。平面形態は円形を呈すると推測され、規模は直径約4.0m程度と推定される。竪穴の深さは北壁10cmである。

覆土 暗褐色土を主体とし、ロームが若干混入する。

施設等 ピットは検出されなかった。炉跡は楕円形を呈するが検出状況が悪く、本来の形態ではない可能性が高い。



第15図 016号跡

出土遺物 遺物の出土量は微量で、しかも図化できるものはないが、弥生時代後期後半の土器で占められていることから、竪穴は弥生時代後期と考えられる。

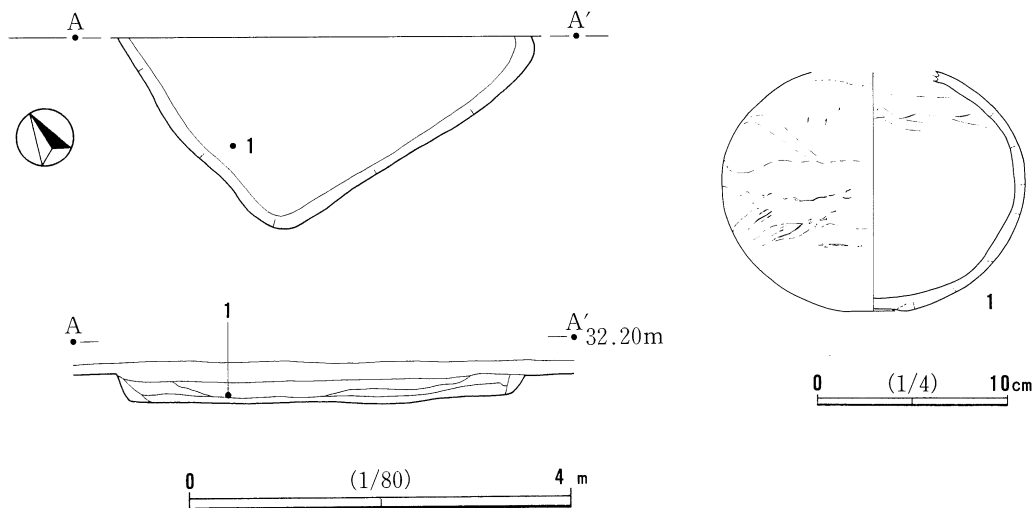
第017号跡（第16図・図版10）

位置・形態 10I-19グリッドを主体に検出された。竪穴の約2分の1が調査区外となっており未調査である。平面形態は方形を呈すると推測される。規模は一辺約3.6mである。竪穴の深さは東壁24cm、南壁23cmである。

覆土 4層に分層された。暗褐色土を主体とし、壁際でロームの混入が顕著となる。

遺物出土状況 遺物の出土量は微量である。竪穴内から散発的に出土したにすぎない。

出土遺物 1は直口の壺形土器の体部である。胴部最大径16cm、底径3cmを測る。内外面ともにナデで仕上げられる。底部は少しくぼむ程度で、丸底に近い。胎土は密である。外面は、淡い暗褐色・黒灰色、内面は淡い橙褐色・淡い赤褐色・黒褐色を呈する。



第16図 017号跡及び出土遺物

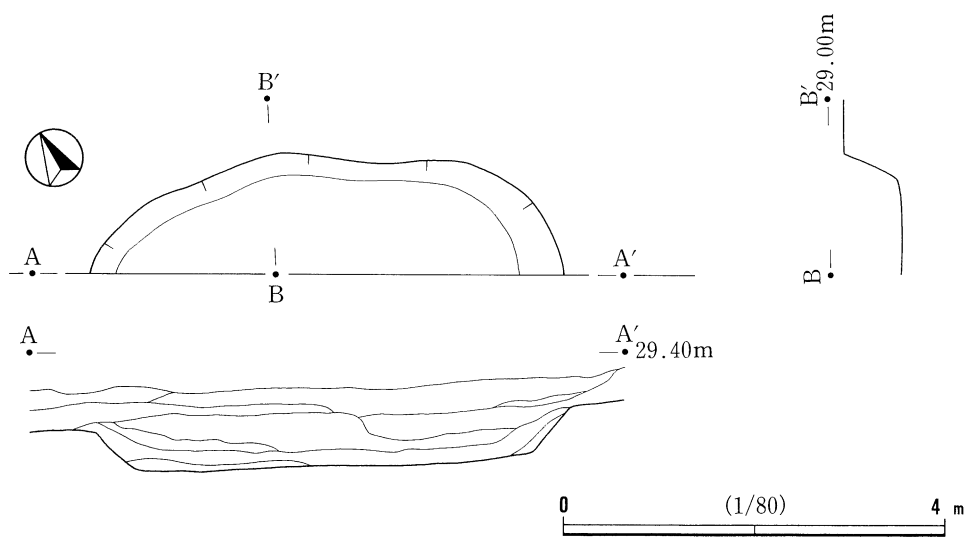
第020号跡（第17図・図版10）

位置・形態 11J-42グリッドを主体に検出された。竪穴の約3分の2が調査区外となっており未調査である。平面形態は隅丸方形を呈するようである。竪穴の深さは北壁56cmである。

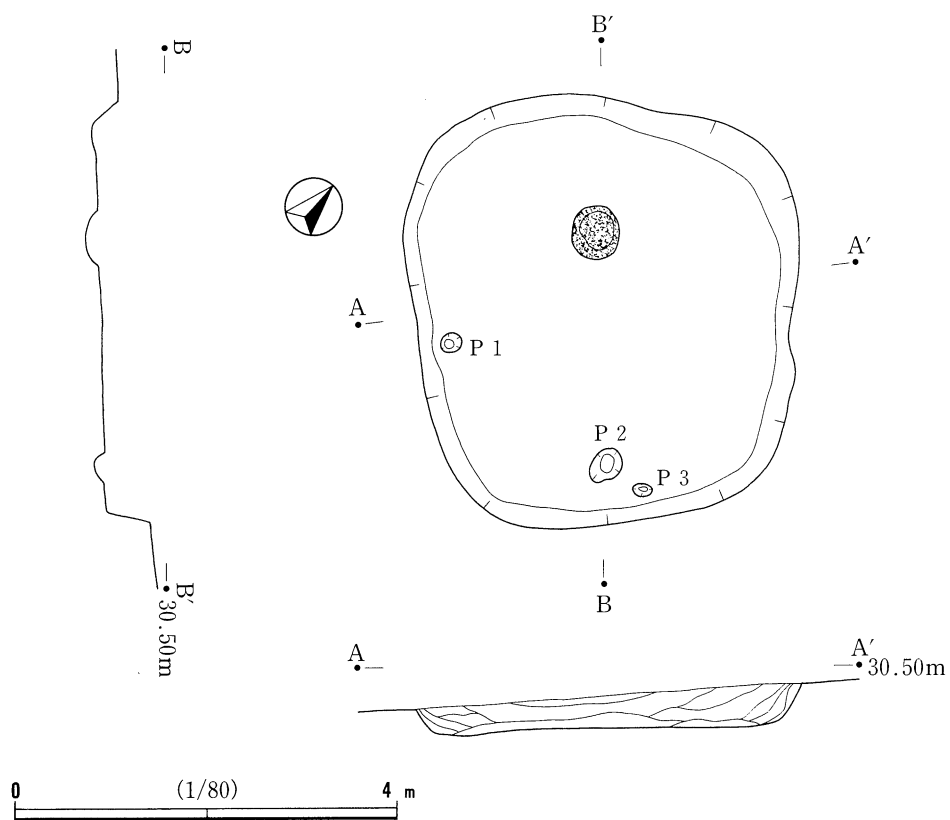
覆土 検出面以下の覆土に限れば5層に分層された。暗褐色土が主体で焼土粒が若干混入する。

施設等 ピットや炉跡等は検出されなかった。

出土遺物 遺物は皆無である。竪穴の形態から弥生時代後期の竪穴と推測される。



第17図 020号跡



第18図 022号跡

第022号跡（第18図・図版11）

位置・形態 13K-40グリッドを主体に検出された。平面形態は隅丸長方形を呈し、規模は長軸長4.5m、短軸長4.2mである。主軸方位はN-45°-Wで、炉跡が北西側に寄った位置で検出された。竪穴の深さは北西壁25cm、南西壁44cm、南東壁48cm、北東壁45cmである。

覆土 8層に分層された。暗褐色土を主体とし、壁際でロームの混入が顕著となる。

施設等 ピットは全部で3つ検出された。P1が14cm、P2が10cm、P3が37cmである。いずれも柱穴としては貧弱であり、P2は入口ピットと考えられる。炉跡は円形を呈し、直径53cm、底面までの深さは11cmである。炉底面は良く焼けている。

出土遺物 遺物の出土量は微量である。図化できる遺物はないがすべて弥生時代後期の土器で占められており、竪穴は弥生時代後期と推測される。

第023号跡（第19図・図版11）

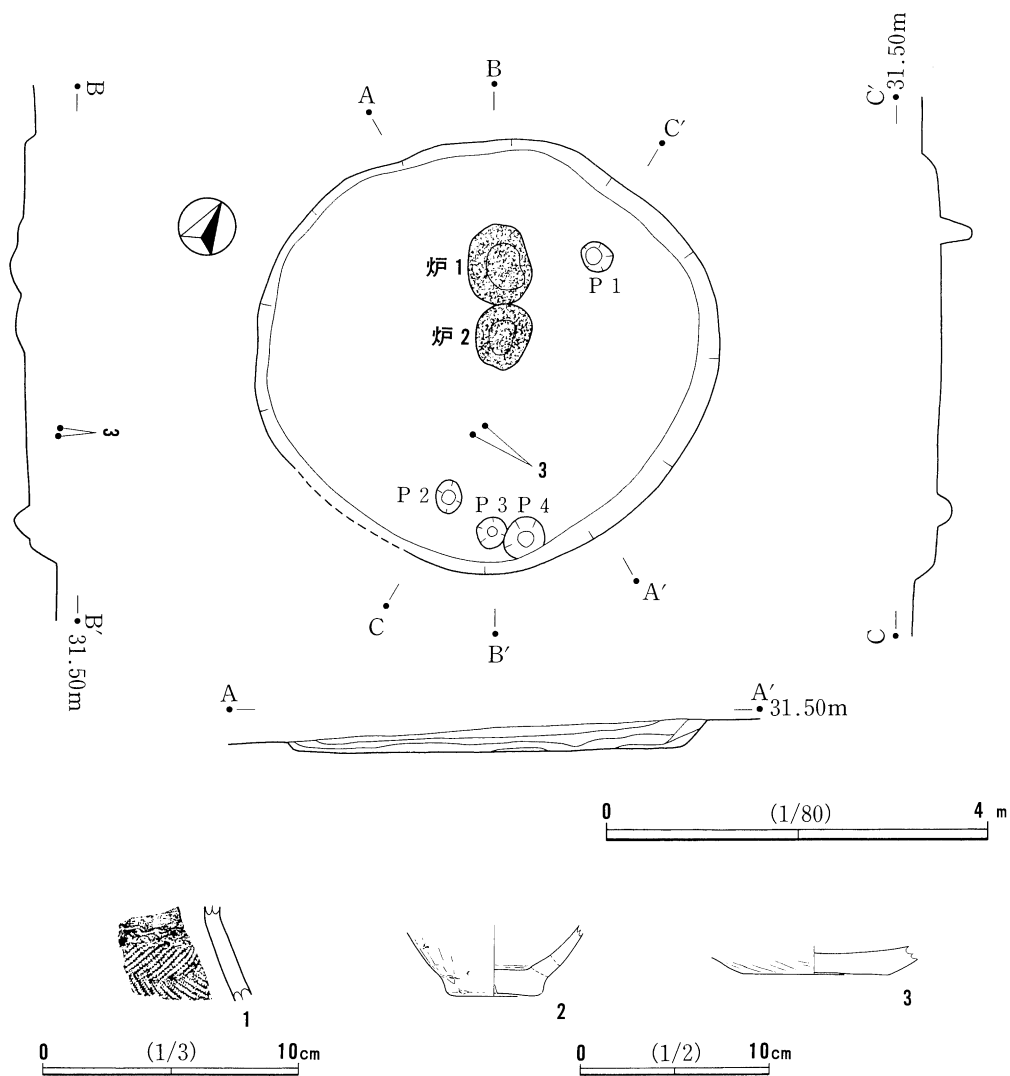
位置・形態 13K-57グリッドを主体に検出された。平面形態は円形を呈し、規模は直径4.7mである。主軸方位はN-33°-Wで、炉跡が北東に寄った位置で2基検出された。竪穴の深さは北西壁12cm、南西壁14cm、南東壁32cm、北東壁27cmである。

覆土 5層に分層された。暗褐色土を主体とする。

施設等 ピットは全部で4つ検出された。P1が32cm、P2が28cm、P3が17cm、P4が18cmである。柱穴としては規格性に乏しく、P3ないしはP4は入口ピットと考えられる。炉跡は楕円形を呈するものが2基連続して検出された。炉1は長径84cm、短径68cm、深さ11cmである。炉2は長径70cm、短径58cm、深さ9cmである。炉1と炉2の新旧関係は不明だが同時に使用されていた可能性も考えられよう。炉底面は2基ともよく焼けていた。

遺物出土状況 遺物の出土量は微量である。床面から散発的に検出されたにすぎない。

出土遺物 1は壺形土器の肩部である。外面に上から、無節Rの縄に結び目が2つある原体によるS字状結節文(1)、単節LR横回転の縄文(2)、同RL(3)が施される。施文順序は(2)→(3)→(1)である。結節文より上方は赤彩される。内面はナデで仕上げられる。外面は淡い赤褐色・淡い暗黄褐色、内面は淡い褐色を呈する。胎土は密である。2は小型の土器の底部である。粗雑な作りなのでミニチュアかもしれない。底径は4.8cmを測る。外面は工具によるナデとナデで、内面はナデの後に丁寧なヘラミガキで仕上げられる。内外面ともに淡褐色を呈し、一部に黒い炭化物が付着する。胎土は密である。3は甕形土器の底部である。底径は7.8cmを測る。内外面ともに工具によるナデとナデで仕上げられる。外面は淡い暗褐色・淡い褐色、内面は淡い灰褐色・暗灰色を呈する。胎土は密である。



第19図 023号跡及び出土遺物

第024号跡（第20図・図版11）

位置・形態 11J-29グリッドを主体に検出された。竪穴の南側3分の1が溝状遺構の021号跡によって壊されている。平面形態は隅丸長方形を呈し、規模は長軸長約4.8m、短軸長約4.2mである。主軸方位はN-69°-Wで、炉跡が北東寄りの床面に検出された。竪穴の深さは北西壁39cm、北東壁71cmである。

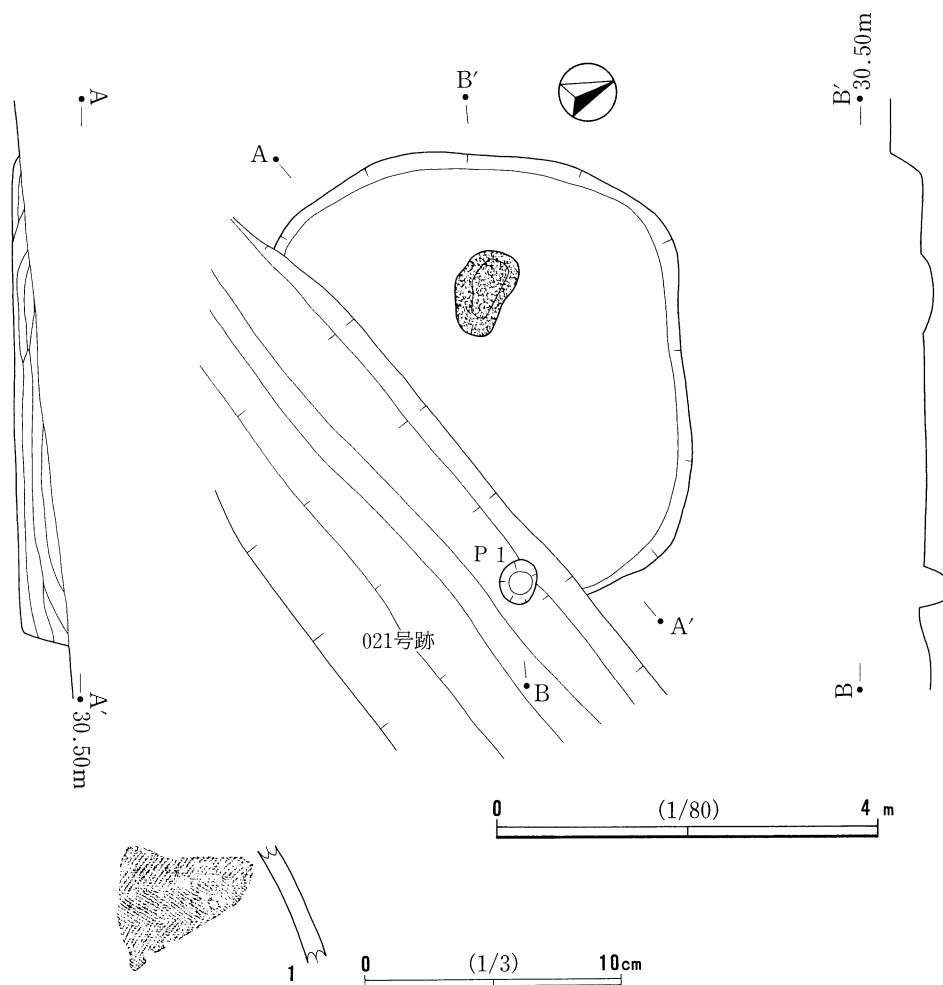
覆土 9層に分層された。暗褐色土を主体とし、ロームの混入が全体に多い。

施設等 ピットが1つ検出されているが溝状遺構に床面が壊されている部分からである。P1の深さは24cmである。炉跡は不整楕円形を呈し、長径92cm、短径54cmである。炉底面はよく焼け

ていた。

遺物出土状況 遺物の出土量は微量である。竪穴床面から散発的に出土したにすぎない。

出土遺物 1は壺形土器の体部である。外面は、無節Rの縄に結び目が2つある原体によるS字状結節文、単節LR横回転の緻密な縄文、同RL、同LR、同RLが施される。内面は工具によるナデで仕上げられる。外面は暗褐色、内面は褐色を呈する。胎土は密である。



第20図 024号跡及び出土遺物

第025号跡 (第21図・図版12)

位置・形態 11J-68グリッドを主体に検出された。平面形態は楕円形を呈し、規模は長軸長5.4 m、短軸長5.1 mである。主軸方位はN-21°-Wで、炉跡が北寄りの床面から検出された。竪穴は深く北壁77cm、西壁19cm、南壁14cm、東壁75cmである。

覆土 9層に分層された。褐色土を主体とし、全体にロームの混入が多い。

施設等 ピットは全部で6つ検出された。P1が56cm、P2が54cm、P3が63cm、P4が61cm、P5が19cm、P6が22cmである。配置から見るとP1～P4が支柱穴と考えられる。P5は出入口の梯子用ピットであろう。P6は貯蔵穴であろう。炉跡は楕円形を呈し、長径79cm、短径46cm、深さ11cmである。炉底面はよく焼けていた。

遺物出土状況 遺物の出土量は微量で、竪穴内から散発的に出土したにすぎない。北西隅で若干まとまって出土している。

出土遺物 1は壺形土器の頸部である。口径17.2cmを測る。外面はナデの後、縦方向の密なヘラミガキ、内面は、同じくナデの後、下に行くほど疎らになる横方向のヘラミガキで仕上げられる。肥厚した口縁端の上面には、単節RL横回転の縄文が巡る。くびれ下方には、無節Rの同じ縄上に結び目が2つある原体を用いたS字状結節文が施され、その下に単節RL横回転と単節LR横回転の縄文が1列ずつ2列巡る。胎土は密である。外面は口縁折り返し部分の下から縄文の上まで、内面は口縁端からくびれの上まで赤彩されており、暗赤色・暗褐色をしている。他の部分は、内外面とも淡い褐色・淡い黄褐色を呈する。2は甕形土器の体部である。最大径は21.8cmを測る。外面は工具による横方向のナデで、内面は工具によるナデの後やや疎らなヘラミガキで仕上げられる。胎土は密である。外面は淡い褐色・黒褐色、内面は暗褐色・暗灰色を呈する。下半外面には煤が付着している。3は壺形土器の体部である。最大径は40cmを測る。器壁は内外面、特に内面の荒れがひどく、調整が判別しにくい。外面はナデの後にヘラミガキで仕上げられたものと思われる。無節Rの縄文に結び目を2つつけた原体を横回転させた結節文が上に2列、下に2列あり、それに切られるかたちで、単節RL横回転の縄文がはさまれて巡る。胎土はやや粗である。外面は淡い褐色・淡い暗褐色・淡い黄灰褐色、内面は淡い褐色を呈する。

第026号跡（第22図・図版12）

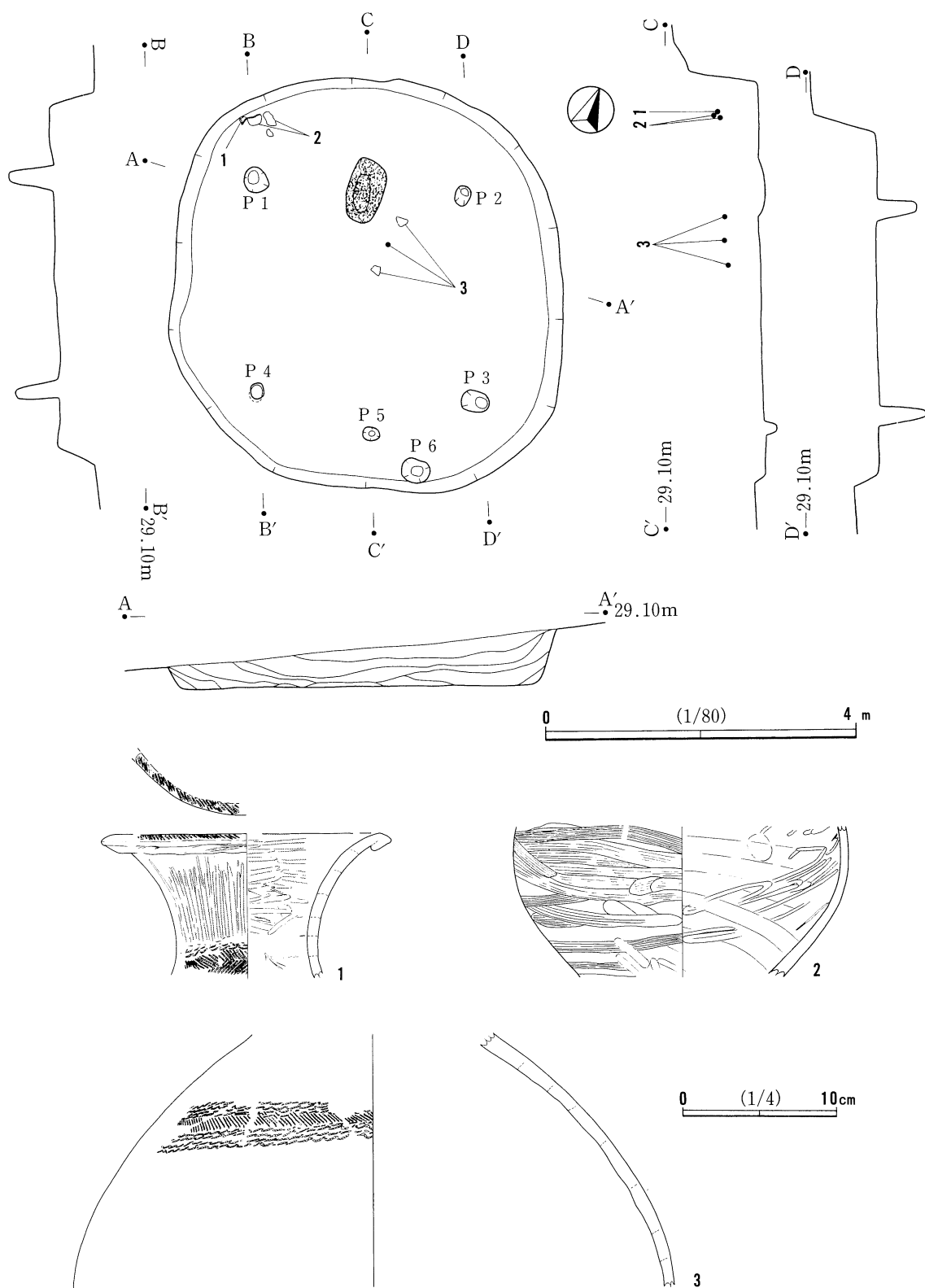
位置・形態 11J-16グリッドを主体に検出された。平面形態は隅丸長方形を呈し、規模は長軸長4.4m、短軸長3.9mである。主軸方位はN-56°-Wで、炉跡は北西寄りの床面に検出された。竪穴の深さは北西壁47cm、南西壁16cm、南東壁32cm、北東壁79cmである。

覆土 6層に分層された。褐色土を主体とし、壁際ではロームが多く混入する。

施設等 ピットは全部で4つ検出された。P1が10cm、P2が9cm、P3が25cm、P4が13cmである。支柱穴と考えられるピットはない。P3が出入口の梯子用ピット、P4は貯蔵穴であろう。炉跡は楕円形を呈し、長径82cm、短径54cmである。焼土の堆積は多く、炉底面はよく焼けていた。

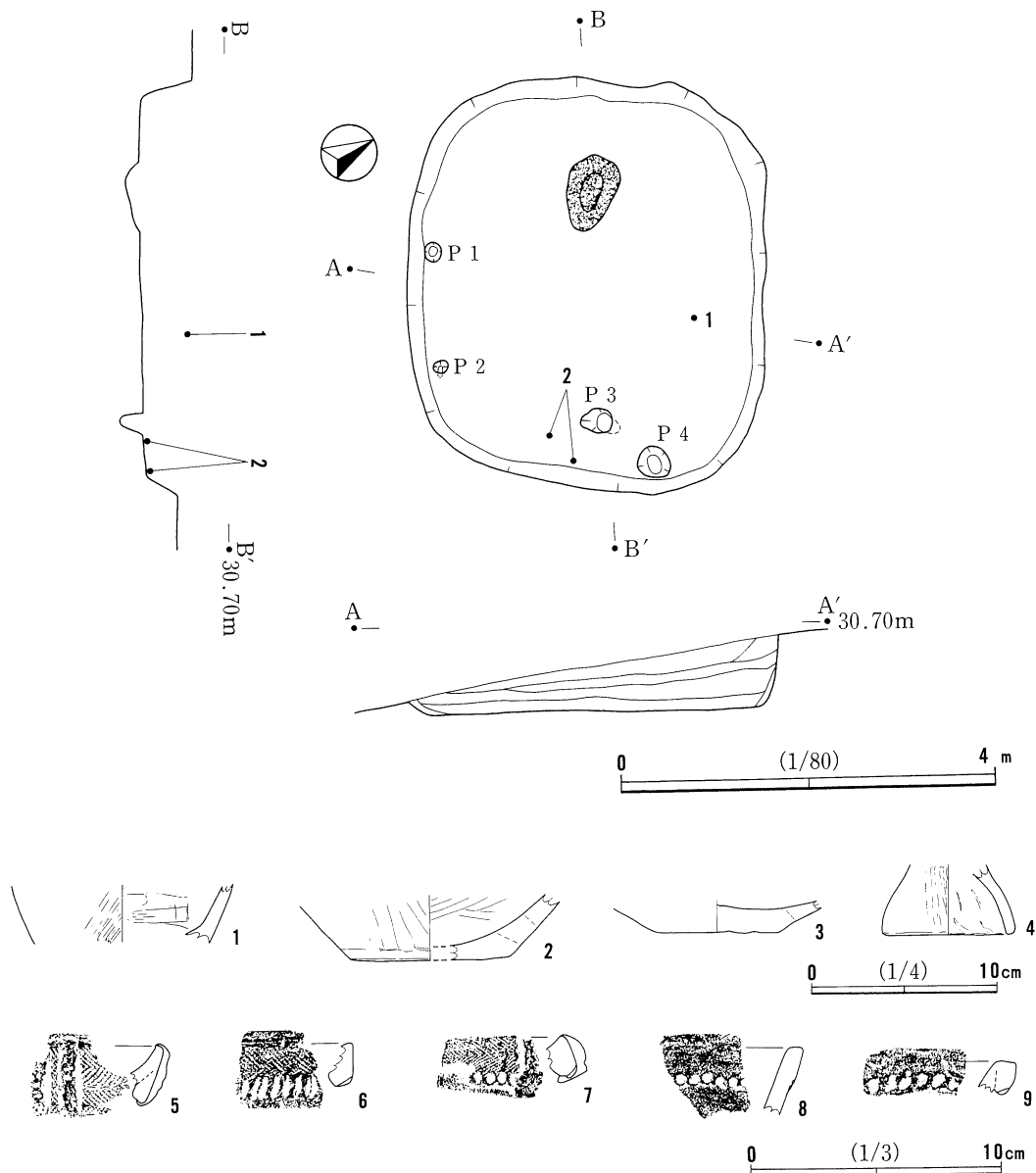
遺物出土状況 遺物の出土量は微量である。竪穴内から散発的に出土したにすぎない。

出土遺物 1は壺形土器の底部付近である。外面はナデの後にヘラミガキで、内面はナデで仕上げられる。外面は淡い赤褐色・淡い褐色、内面は淡い黄灰褐色を呈する。胎土は緻密である



第21図 025号跡及び出土遺物

2は底部である。外面に煤が付着しており、器壁外面側が赤変したような様子が見られるので甕形土器のものであろうか。ただし、煤は内面にも見られる。径は8.5cmを測る。外面は工具によるナデとヘラミガキで、内面はナデとヘラミガキで仕上げられる。胎土は緻密である。外面は淡い暗褐色・淡い黒褐色、内面は黒灰色・黒褐色を呈する。3は底部である。甕形土器のものであろうか。平面形は長軸6.7cm、短軸5.6cmの楕円である。内面には同心円状にハケメが施される。外面は摩耗のために調整が不明瞭であるが、ヘラケズリもしくは工具によるナデらし



第22図 026号跡及び出土遺物

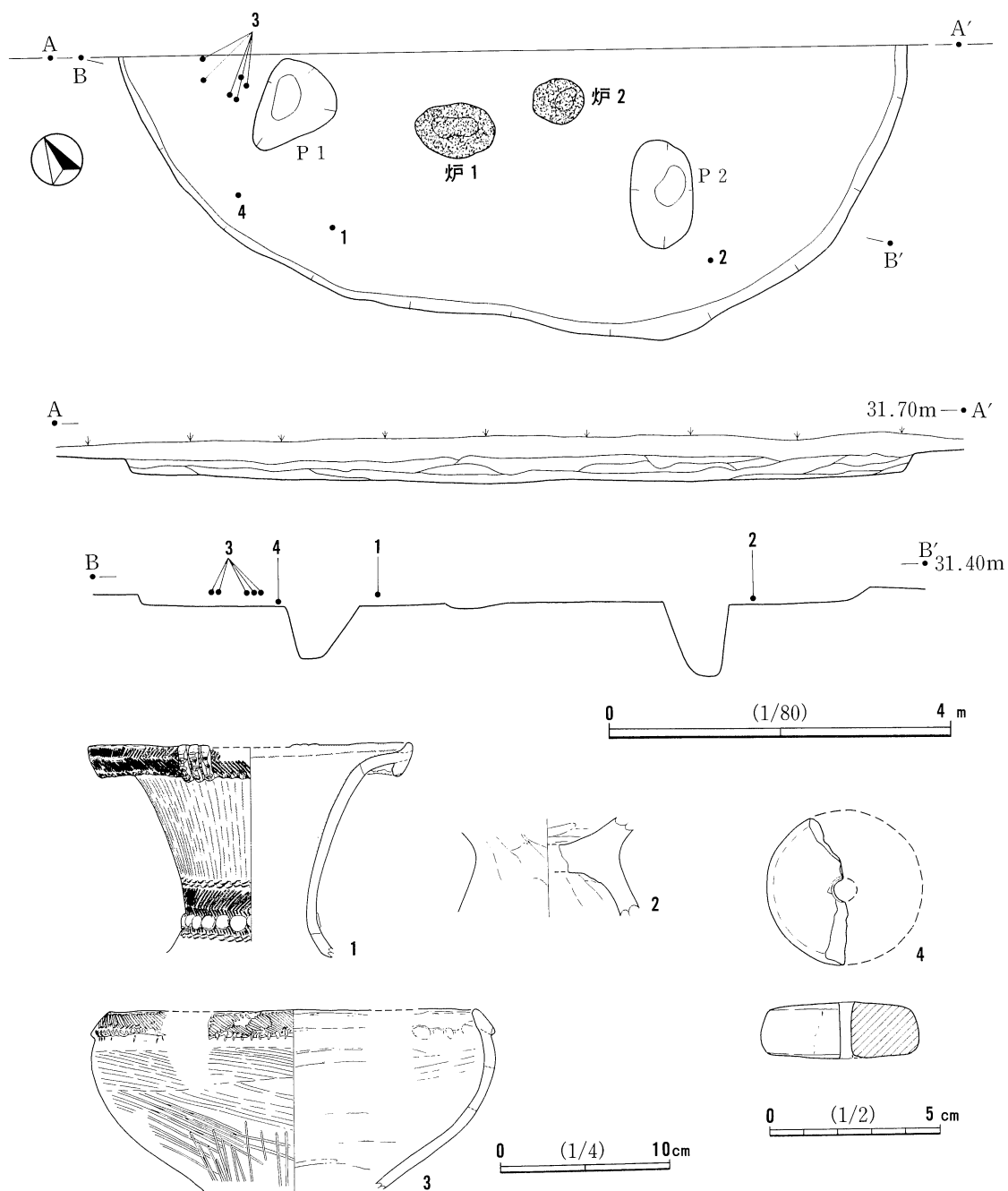
い痕跡が見受けられる。胎土は密である。二次的に被熱したのか、全体的に赤っぽく、外面は淡い赤褐色・淡い暗褐色、内面は淡い暗赤色・淡い褐色を呈する。4は脚台部裾である。台付鉢の脚部であろうか。径6.3cmを測る。内外面ともにヘラミガキで仕上げられる。胎土は緻密である。内外面ともに淡い黄灰褐色を呈する。5は壺形土器の口縁部である。14～15cmの口径が推定される。内面に赤彩が見られることから他の部分も赤彩されていた可能性が高い。端部外面には、上から、単節RLの横回転、同LR、同RLが施されている。これらの後に縄文原体によるキザミを持つ棒状付文が2個付けられている。最後に口縁端に単節LR横回転の縄文が施されている。外面は淡い褐色、内面は淡い暗赤褐色を呈する。胎土は緻密である。6は壺形土器の口縁部である。口縁部外面に単節RL横回転・同LRの縄文が巡る。その下端には同じものと思われる縄文原体の押圧によるキザミが施される。外面は黄灰色・淡い灰褐色を呈する。胎土は密である。7は壺形土器の口縁部である。14～15cmの口径が推定される内面に赤彩が見られる。口縁端外面に、上から無節Rの横回転、同Lの2列の縄文が施されている。外面下端には同R原体の押圧によるキザミが巡る。外面は淡い黄褐色、内面は淡い赤色・淡い黄褐色を呈する。胎土は密で、0.5～1mm大のスコリア状粒が多く含まれるのが特徴的である。8は装飾を持つ甕形土器の口縁部である。肥厚された部分の下端に、縄文原体の折り曲げ部分か閉端によるものと思われる刺突が巡る。内外面ともナデで仕上げられている。内外面とも淡い黄灰褐色を呈する。胎土は緻密である。9は壺形土器の口縁部である。口径は推定で10～11cm。口縁部下端に単節の縄文原体の押圧によるキザミが施されている。外面はナデ、内面はヘラミガキで仕上げられる。内外面とも灰褐色を呈し、胎土は緻密である。

第027号跡（第23図・図版13）

位置・形態 12I-70グリッドを主体に検出された。北東側約2分の1が調査区外となっており未調査である。平面形態が楕円形と推定される大型の住居跡である。主軸方位は、他の同時期の竪穴例から北西方向と考えられ、規模は長軸長約9.5m、短軸長約7.5mと推定される。床面に焼土化した部分が2ヶ所検出されているが、一般的な主軸上の炉跡ではないようであるが大型住居には数ヶ所の炉跡が検出されることが多々あることから、この2ヶ所は副次的な炉跡と考えられる。竪穴の深さは北西壁8cm、南西壁15cm、南東壁22cmである。

覆土 9層に分層された。褐色土を主体とする。

施設等 ピットは全部で2つ検出された。P1が61cm、P2が79cmである。深さ及び配置から2つとも支柱穴と考えられる。2ヶ所の炉跡の内、炉1は楕円形を呈し長径98cm、短径64cm、深さ7cmと大きなものである。炉2は円形を呈し直径60cm、深さ4cmである。焼土の堆積は少ないが、炉底面はよく焼けていた。



第23図 027号跡及び出土遺物

遺物出土状況 大型住居跡であるにもかかわらず遺物は微量であった。

出土遺物 1は壺形土器の口縁部である。口径は推定で18.6cm。口縁端上面に単節RLの横回転口縁部外面に単節LR横回転、同RLの縄文が上下2列で巡る。縄文施文後に単節RLの縄の押圧によるキザミをもつ3個1組の棒状付文が施される。口縁部下端にも同原体押圧によるキザミが巡る。頸部には、上下端を無節Rの同じ縄に結び目が2つつけられた原体によるS字状結節文によって画された、単節LR横回転、同RLの縄文が上下2列で巡る。下列の中程の高さには直径7～9mmの円形付文が列をなす。外面はナデの後に縦方向の密なヘラミガキ、内面はナデの後に横方向の密なヘラミガキで仕上げられる。外面は暗赤色・淡い褐色・淡い黄褐色、内面は暗赤色・淡い暗褐色を呈する。外面は口縁部下の方から縄文帯の上まで、内面は口縁端から頸部内面半ばまで赤彩される。胎土は密である。2は台付甕形土器の脚台部である。径は10cm前後と推定される。内外面ともに工具によるナデで仕上げられる。破断面を見ると外表に近い数mmが赤変していることがわかる。外面は淡い黄灰褐色・淡い暗灰褐色・淡い橙褐色、内面は淡い暗灰色・淡い暗褐色を呈する。筒形に成形した後に、くびれに粘土を充填するという手順で作られたようであるが、甕部分側の粘土の方が、脚部分側の粘土より多くスコリア状の粒を含みやや粗であるように見受けられる。胎土は前者の土を除いて密である。3は台付鉢もしくは鉢形土器である。口径は推定で21.4cm。口縁部外面には、幅1.1～1.5cmの幅で無節R横回転が、下端付近を部分的に巡る同Lを切るかたちで施されている。下端には、同じ原体によるものか、工具によるキザミが巡る。外面は丁寧なナデの後にやや疎らなヘラミガキで、内面は主に横方向のナデで仕上げられる。外面は淡い褐色・淡い暗灰褐色、内面は淡い褐色・淡い暗褐色を呈する。胎土は密である。4は土製紡錘車であろう。推定で外周の径4.6cm、内径0.7cm、厚さ1.7cmを測る。外面はヘラミガキ・赤彩が施される。暗赤褐色・褐色を呈する。

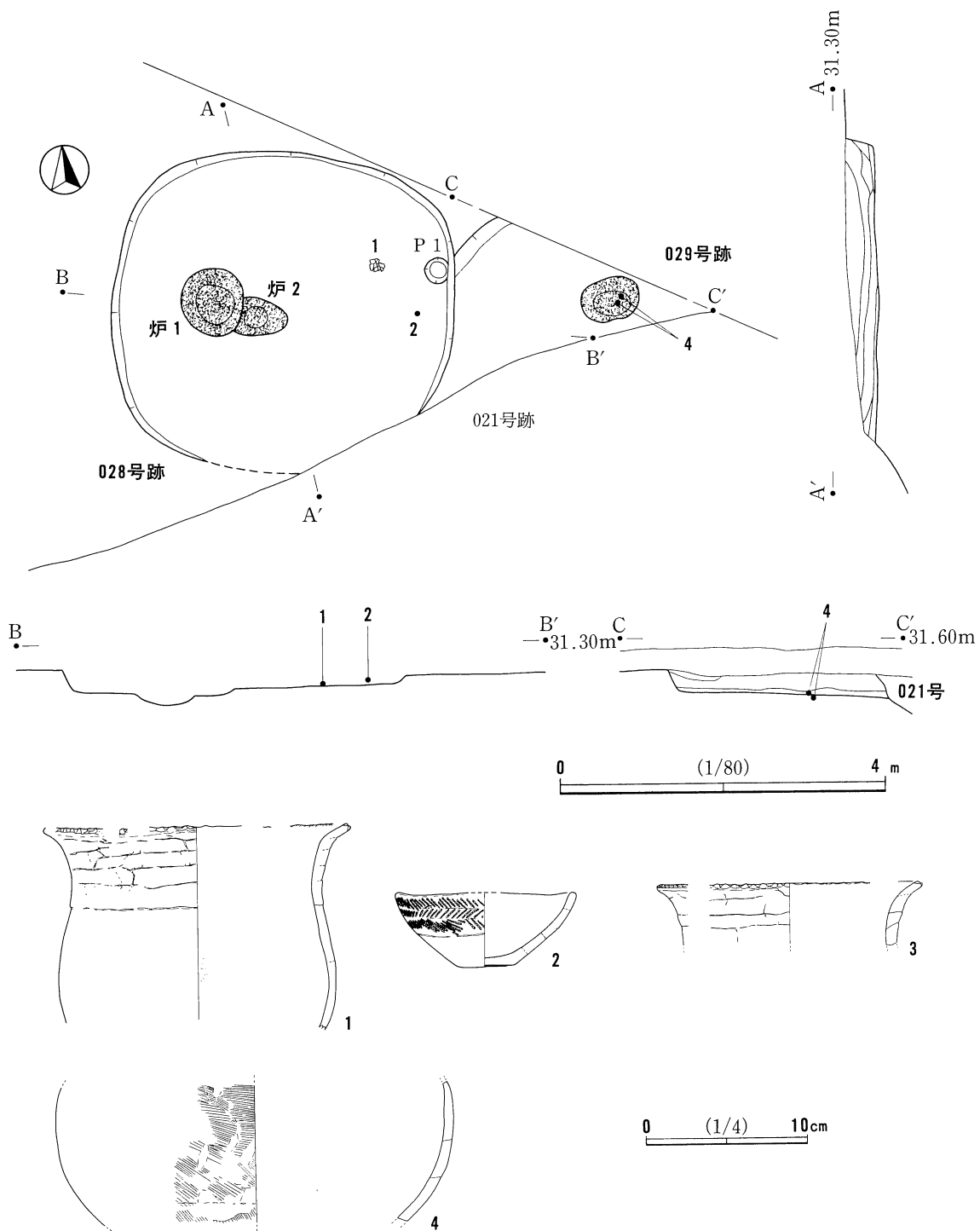
第028号跡（第24図・図版13）

位置・形態 12J-03グリッドを主体に検出された。南側約4分の1を溝状遺構の021号跡によって壊されている。また、本竪穴は029号跡にも切られる。平面形態は隅丸方形を呈し、長軸長4.2m、短軸長約4.0mである。主軸方位はN-79°-Wで、炉跡が床面の西寄りで検出された。2つの炉跡が連なっている。竪穴の深さは北壁38cm、西壁30cm、東壁7cmである。

覆土 6層に分層された。暗褐色土を主体とする。

施設等 ピットが1つ検出されたが、深さは10cmと浅い。炉跡は大小2つからなり、炉1が炉2を切っているように見えるが、土層断面では新旧関係を明らかにできなかった。炉1の直径は82cm、炉2の直径は48cmである。

遺物出土状況 遺物の出土量は微量である。



第24図 028号・029号跡及び出土遺物

出土遺物 1は甕形土器である。推定で口径18.6cm、胴部最大径17cmを測る。輪積み部分外面はナデ、他の部分は内外面とも工具によるナデで仕上げられる。外面は煤が全面に付着している。外面は褐色・黒褐色、内面は淡い褐色・淡い暗褐色を呈する。胎土は密である。2は完形の小型の鉢形土器である。口径は10.9cm、底径は3.5cmを測る。口縁端とヘラ描きの沈線の間に、上から順に単節RL横回転、同LR、同RLの縄文が巡る。内外面ともナデで仕上げられる。内面と外面の沈線より下には部分的に赤彩の跡が残る。外面は淡い黄褐色・淡い褐色・淡い暗灰色、内面は淡い明褐色・淡い暗灰色・淡い暗赤色を呈する。胎土は密である。

第029号跡（第24図・図版13）

位置・形態 12J-05グリッドを主体に検出された。西側を028号跡によって切られており、南側も溝状遺構の021号跡によって壊され、北東側は調査区外となっており未調査である。調査できたのは全体の4分の1以下である。平面形態は円形ないしは楕円形を呈すると思われる。炉跡は辛うじて検出できた。竪穴の深さはわずかに検出できた北西壁で24cmである。

覆土 3層に分層された。褐色土を主体とする。

施設等 炉跡は楕円形を呈し長径73cm、短径53cmである。炉底までの深さは6cmである。

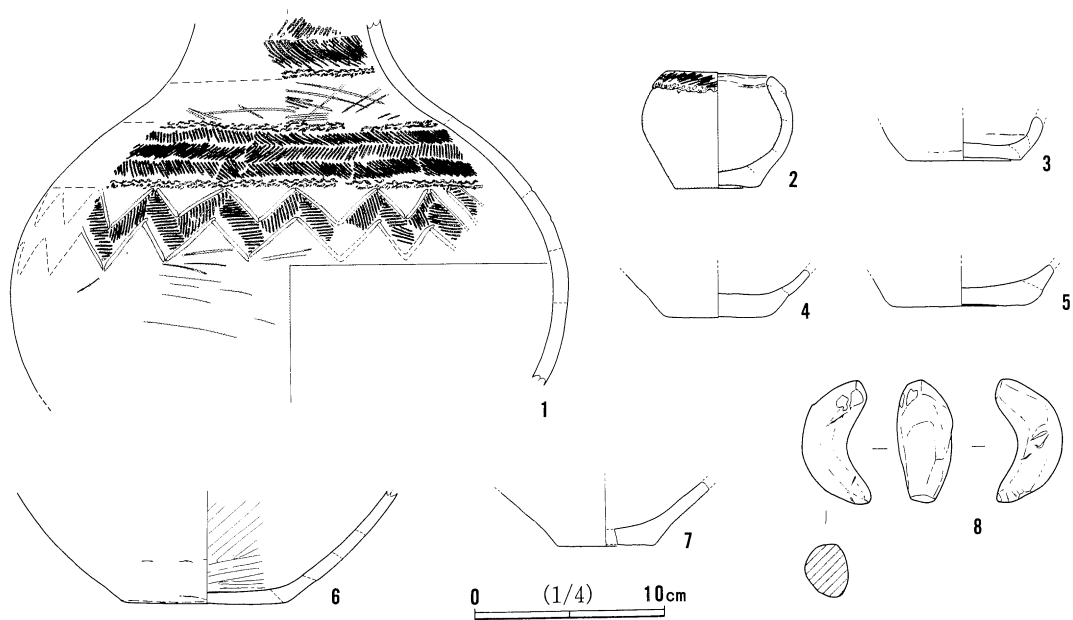
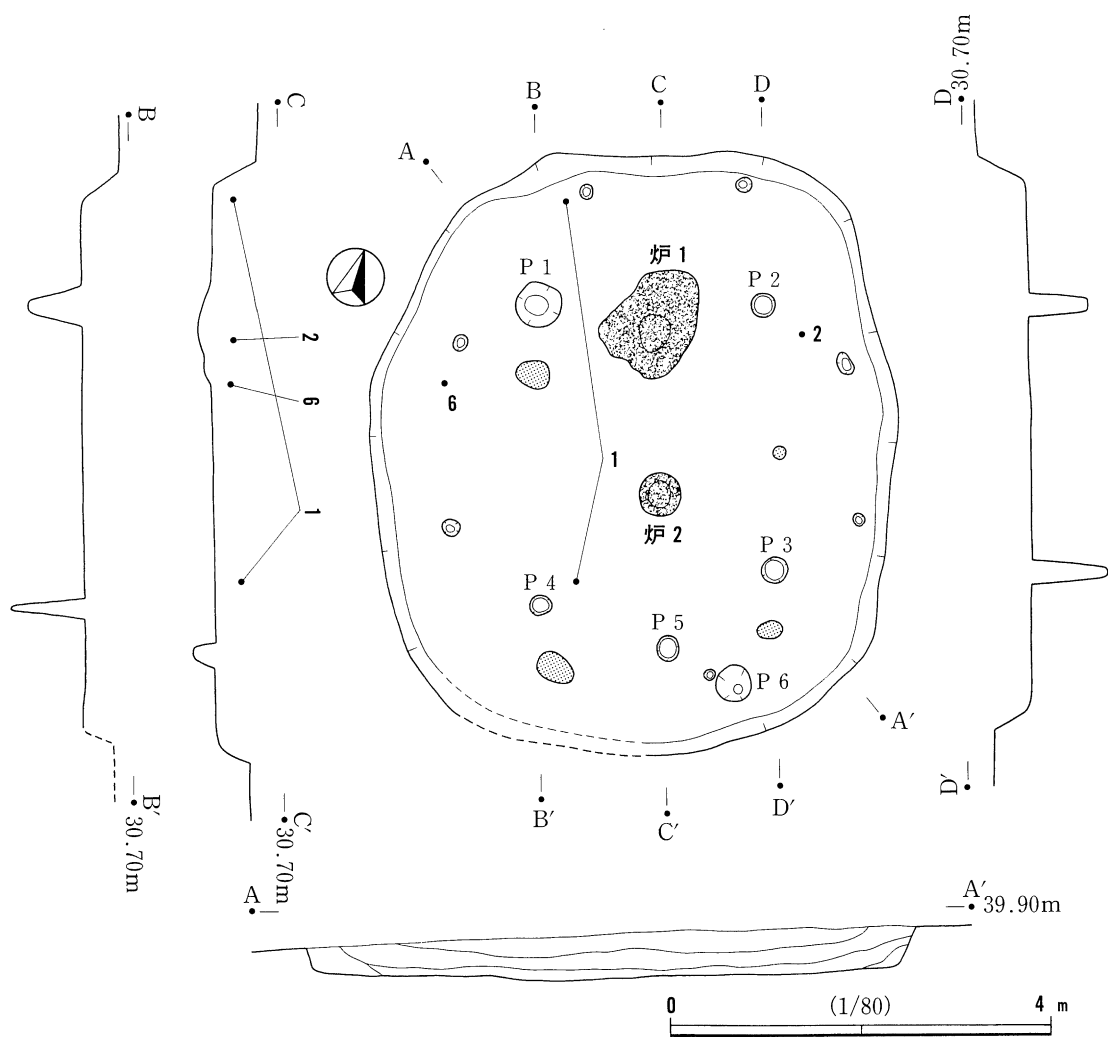
遺物出土状況 炉跡からわずかに土器片が検出された。

出土遺物 3は甕形土器の口縁部である。推定で口径は15.8cmを測る。口縁端は両方向からのキザミが巡る。輪積み痕が残される。外面はナデ、内面は工具によるナデで仕上げられる。外面は淡い黒褐色・淡い暗褐色、内面は淡い褐色を呈する。4は甕形土器の体部である。推定で24.6cmを測る。外面はナデの後にハケメで、内面はナデの後に丁寧なヘラミガキで仕上げられている。内外面ともに暗い褐色・淡い暗褐色を呈する。胎土は密である。

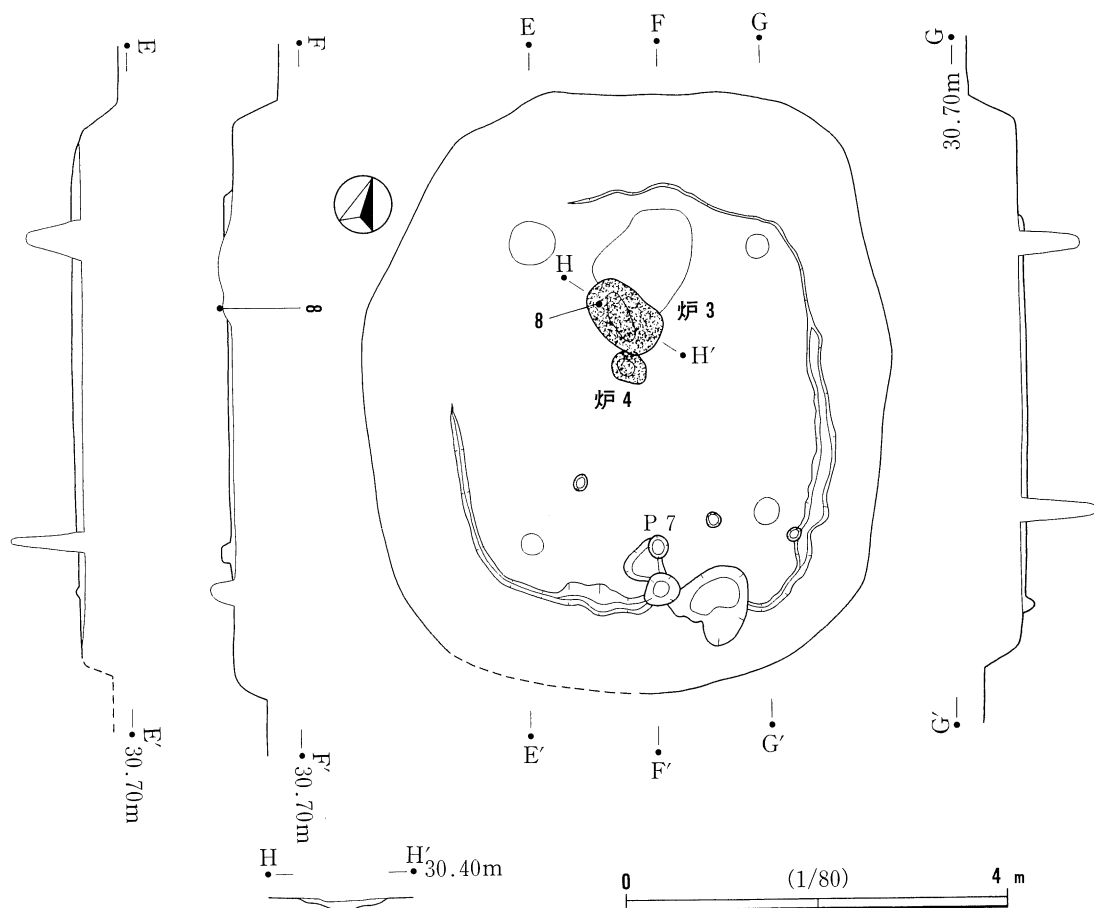
第030号跡（第25・26図・図版13・14）

位置・形態 13J-71グリッドを主体に検出された。平面形態は隅丸長方形を呈し、規模は長軸長6.3m、短軸長5.6mである。主軸方位はN-20°-Wで、炉跡が北寄りの床面で検出された。竪穴の深さは北壁46cm、西壁20cm、南壁34cm、東壁47cmである。仮にこの竪穴を030A号としておく。床面を精査したところ、第26図に示したひとまわり小さな竪穴が検出された。この竪穴を030B号とする。規模は長軸長4.5m、短軸長4.0mで、主軸方位は030A号の方位とほぼ一致している。炉跡と出入口の梯子用と思われるピットが検出され、周溝が一部分残存している。以上のことから本竪穴は当初小規模な竪穴であったものが全体に拡張され建て直されたものと考えられる。

覆土 4層に分層された。暗褐色土を主体とする。



第25図 030号跡及び出土遺物 (8 1/2)



第26図 030号跡床面下検出状況

施設等 030A号のピットは全部で6つ検出された。030B号ではピットが一つ検出された。この他に径の小さなピットが壁際や床面に検出されている。深さは8 cm～23cmである。P1が43cm、P2が61cm、P3が76cm、P4が80cm、P5が24cm、P6が19cmである。配置から見るとP1～P4が支柱穴と考えられる。P5は出入口の梯子用のピットであろう。P6は貯蔵穴と考えられる。炉跡は2ヶ所検出された。炉1は不定形を呈し、長軸長114cm、短軸長110cm、深さ23cmで比較的大きい。焼土の堆積はあまり多くはなかった。炉2は炉跡としてよいか判断に苦しむが、焼土が堆積しており直径は44cm、深さが3 cmある。炉跡と判断してもよかろう。030B号にも炉跡が2基検出された。炉3は長軸長90cm、短軸長57cm、深さ11cmである。炉4は炉2と似たような形態で、深さは14cmである。炉跡と判断しておきたい。

遺物出土状況 遺物の出土量は微量である。竪穴内から散発的に出土したにすぎない。

出土遺物 1は壺形土器である。胴部最大径は推定で30cmを測る。頸部には、上部が欠損して

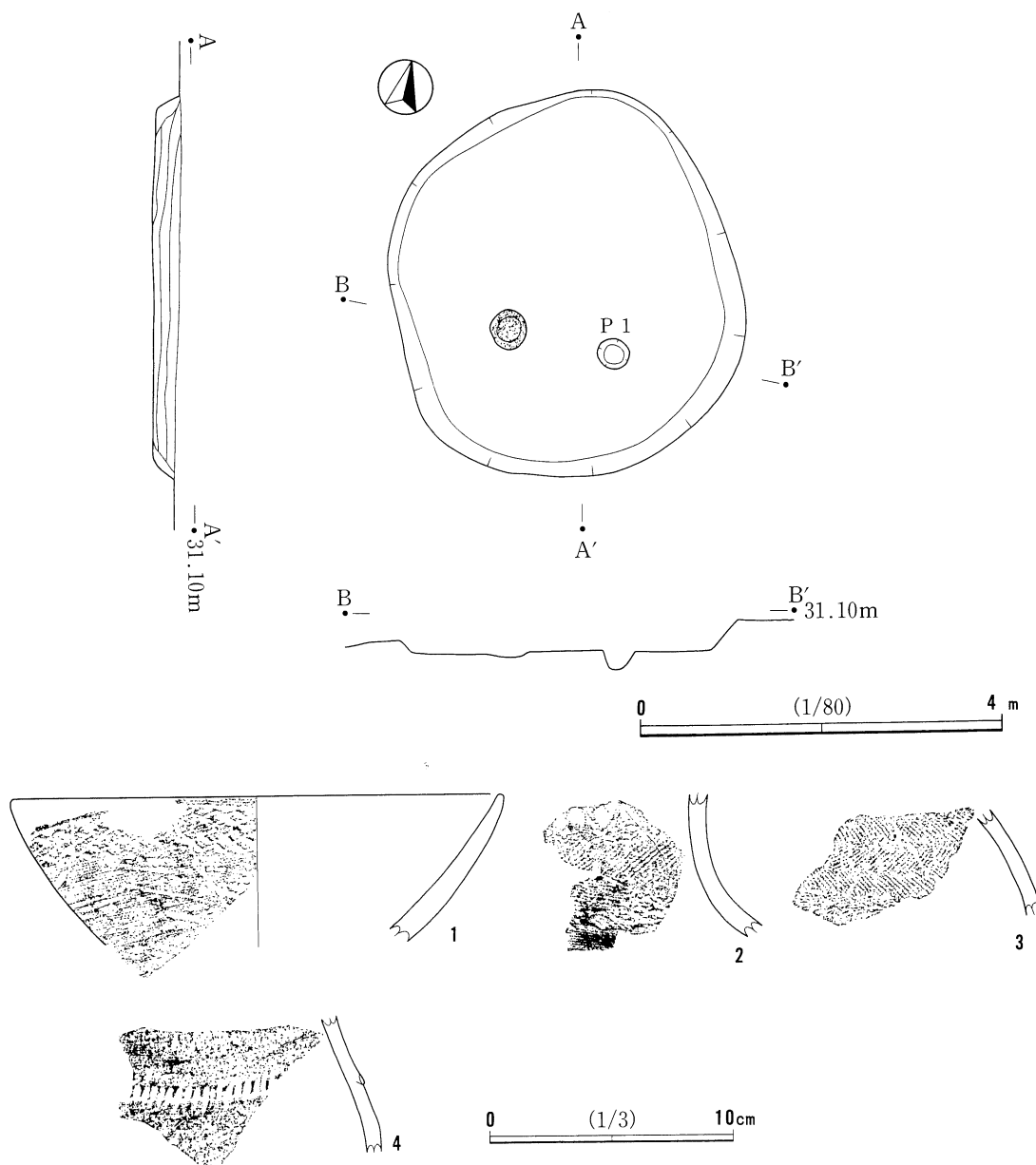
いるため全体の構成は不明であるが、無節Rの同じ縄上に結び目を2つつけた原体によるZ字状結節文によって画される、単節LR横回転と最大幅1.7cmの同RLの縄文が見られる。肩部には頸部のものと同じ結節文によって挟まれる、同LR、同RL、同LRが施されている。胴部には肩部の下結節文に頂点を接するかたちで山形文が巡る。遺存する区画内の縄文はすべて単節LRの斜め方向回転であり、区画の沈線よりも先に施されている。外面は丁寧なナデの後に文様が施文され、続いてヘラミガキ・赤彩が為されている。内面は工具によるナデとナデによって仕上げられている。外面は淡い黄褐色・暗赤色・黒灰色、内面は淡い褐色を呈する。胎土は非常に密で砂粒が目立たない。2は小型の鉢形土器である。ミニチュアと呼ぶべきか。口径5.4cm、器高6.2cm、胴部最大径8cm、底径4.2cmを測る。口縁肥厚部外面には単節RL横回転の縄文が、下端には同原体の押圧によるキザミが巡る。口縁部外面を除いて赤彩される。内外面ともナデの後にやや密なヘラミガキによって仕上げられる。内外面ともに暗赤色・淡い黄灰褐色を呈する。胎土は密で、微細な雲母と思われる砂粒が特徴的である。3は小型の鉢形土器の底部であろう。径は約5cm。内外面ともナデ・ヘラミガキで仕上げられる。外面は淡い褐色・淡い暗褐色、内面は淡い赤灰色・淡い灰褐色を呈する。胎土はやや粗である。4は壺形土器の底部である。径は5.8cmを測る。内外面ともナデの後に密なヘラミガキで仕上げられる。外面は淡い暗褐色、内面は淡い黄褐色を呈し、疎らに黒斑が見られる。胎土は密である。5は底部である。壺形土器であろうか。径は7.6cmを測る。器面が荒れており確認はできないが、両面ともナデで仕上げられたものと思われる。外面は淡い褐色、内面は淡い暗褐色を呈する。胎土は密である。6は甕形土器の底部である。径は8.7cmを測る。外面は工具によるナデ、内面はナデもしくは工具によるナデの後にやや密なヘラミガキによって仕上げられる。破断面には赤変が認められ、外面の一部と内面全体には煤が付着している。外面は褐色・暗褐色、内面は褐色・黒褐色を呈する。胎土は密である。7は鉢もしくは壺形土器の底部である。径は5.2cmを測る。内外面とも丁寧なヘラミガキで仕上げられる。内外面とも赤彩が認められ、暗赤褐色・黒色を呈する。胎土は密である。8は、穿孔はないが土製勾玉であろう。長さ3.3cm、厚さ1.2cmを測る。ナデでつくられる。淡い褐色を呈する。胎土は密である。

第031号跡 (第27図・図版14)

位置・形態 13I-73グリッドを主体に検出された。平面形態はほぼ円形を呈し、規模は直径約4.2mである。炉跡が南西寄りの床面に検出された。竪穴の深さは北壁24cm、西壁17cm、南壁27cm、東壁27cmである。

覆土 4層に分層された。暗褐色土を主体とする。

施設等 ピットは1つ検出されている。P1は21cmである。炉跡は円形を呈し直径44cm、深さは

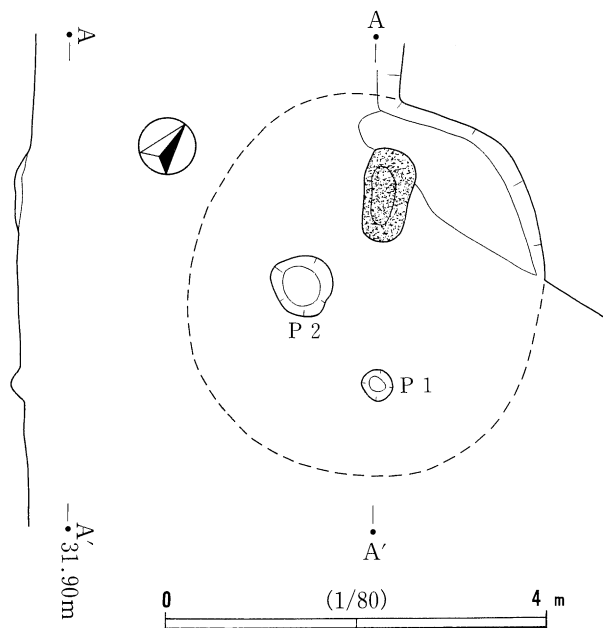


第27図 031号跡及び出土遺物

5 cmである。

遺物出土状況 遺物の出土量は微量である。床面から散発的に出土している。

出土遺物 1は鉢形土器の口縁である。口径は推定で18.3cm。口縁付近外面に、無節Rの縄に3つ結び目のある原体の横回転による、S字状結節文が2列施される。口縁部はヨコナデと疎らなヘラミガキで、縄文以下の外面と内面はナデの後、やや疎らなヘラミガキで仕上げられる外面は褐色・淡い黒褐色、内面は淡い褐灰色を呈する。胎土は密である。2は壺形土器のくびれ部である。下端の破断面は平らに摩滅している。外面には、単節RL縦回転の縄文を横に並べるもの、同LR縦回転を並べるものが上下に列をなし、その上と下に中の縄文を切るかたちで、無節Rの縄に結び目が2つある原体の横回転によるS字状結節文が施される。縄文以外の部分は縄文を切るかたちで赤彩とその際のヘラミガキが見られる。内面は上端に赤彩・ヘラミガキ、以下は工具によるナデ・ナデで仕上げられる。外面は暗赤褐色・褐色、内面は暗黄褐色を呈する。胎土は密である。3は壺形土器の体部である。外面には、上から、単節RL横回転の縄文、同LR、同RL、無節Rの縄に結び目を3つつけた原体の横回転によるS字状結節文が施される。内面は工具によるナデで仕上げられる。外面は黒褐色・褐色、内面は暗灰褐色を呈する。胎土は密であるが、まれに小円礫が見られる。4は甕形土器の体部である。くびれ外面下端の段に単節縄文の原体の押圧によるキザミが施される。外面は段以上の部分が横方向の工具によるナデ、以下が密なヘラミガキで、内面は工具によるナデの後主に横方向の密なヘラミガキで仕上げられる。内外面とも褐色を呈する。胎土は密である。



第28図 032号跡

第032号跡（第28図・図版14）

位置・形態 15L-00グリッドを主体に検出された。溝状遺構の014号跡及び035号跡によって竪穴の大部分を壊され、竪穴の北側の一部のみが残存している。平面形態は円形ないしは楕円形を呈すると考えられる。規模は直径4.0m程度であろう。主軸方位は炉の位置からN-30°-W前後と考えられる。炉跡はやや削られた状態で検出された。北壁の深さは23cmである。

施設等 竪穴に関連するピットが1つ検出されている。P1の深さは13cmである。P2は035号跡の支柱穴である。炉跡は楕円形を呈し、長径98cm、短径54cmで比較的大きいと言える。

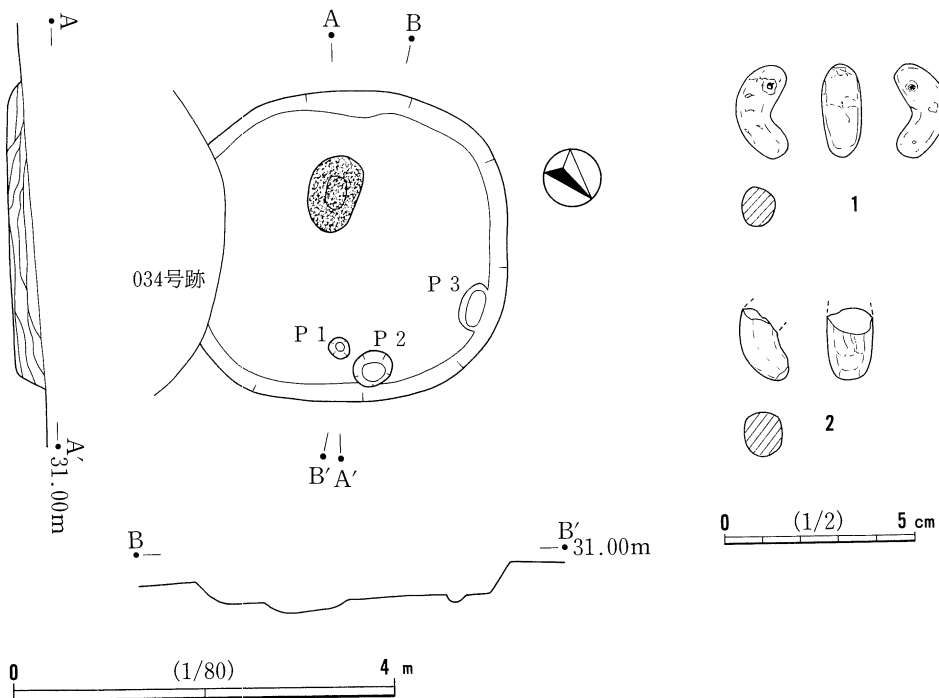
遺物出土状況 竪穴に伴う遺物は皆無である。

第033号跡（第29図・図版15）

位置・形態 13K-53グリッドを主体に検出された。竪穴の南東側が034号跡によって切られており、本竪穴の方が古いと判断される。平面形態はほぼ円形を呈し、規模は直径約3.3mである。主軸方位はN-45°-Eである。炉跡が南西寄りの床面から検出されている。竪穴の深さは北壁25cm、西壁13cm、南壁26cm、東壁37cmである。

覆土 7層に分層された。暗褐色土を主体とし、壁際ではローム混入量が増える。

施設等 ピットは3つ検出された。P1が9cm、P2が14cm、P3が9cmである。柱穴と考えられる



第29図 033号跡及び出土遺物

ピットは検出されなかった。P1は出入口の梯子ピット、P2は貯蔵穴と思われる。炉跡は楕円形を呈し、長径84cm、短径55cm、深さ15cmである。多量の焼土が堆積していた。

遺物出土状況 遺物の出土量は微量である。図化できるものはないが、土器片から弥生時代後期の竪穴と推測される。

出土遺物 1は土製勾玉である。長さ2.5cm、厚さ9mm。径1mmの穿孔を持つ。ナデ・ヘラミガキでつくられる。外面は淡い褐色・黒灰色を呈する。胎土は密である。2は土製勾玉である。現存部で長さ2cm、厚さ1.2cmを測る。ナデ・ヘラミガキでつくられる。暗褐色・黒褐色を呈する。胎土は密である。

第034号跡（第30図・図版15）

位置・形態 13K-74グリッドを主体に検出された。竪穴の約3分の1が調査区外となっており未調査である。本竪穴が033号跡を切っていることから、033号跡よりも新しいと判断される。平面形態は円に近い楕円形を呈し、規模は長軸4.6m、短軸4.4mである。主軸方位はN-24°-Wである。炉跡が北西寄りの床面から検出された。竪穴の深さは北壁46cm、西壁34cm、東壁60cmである。

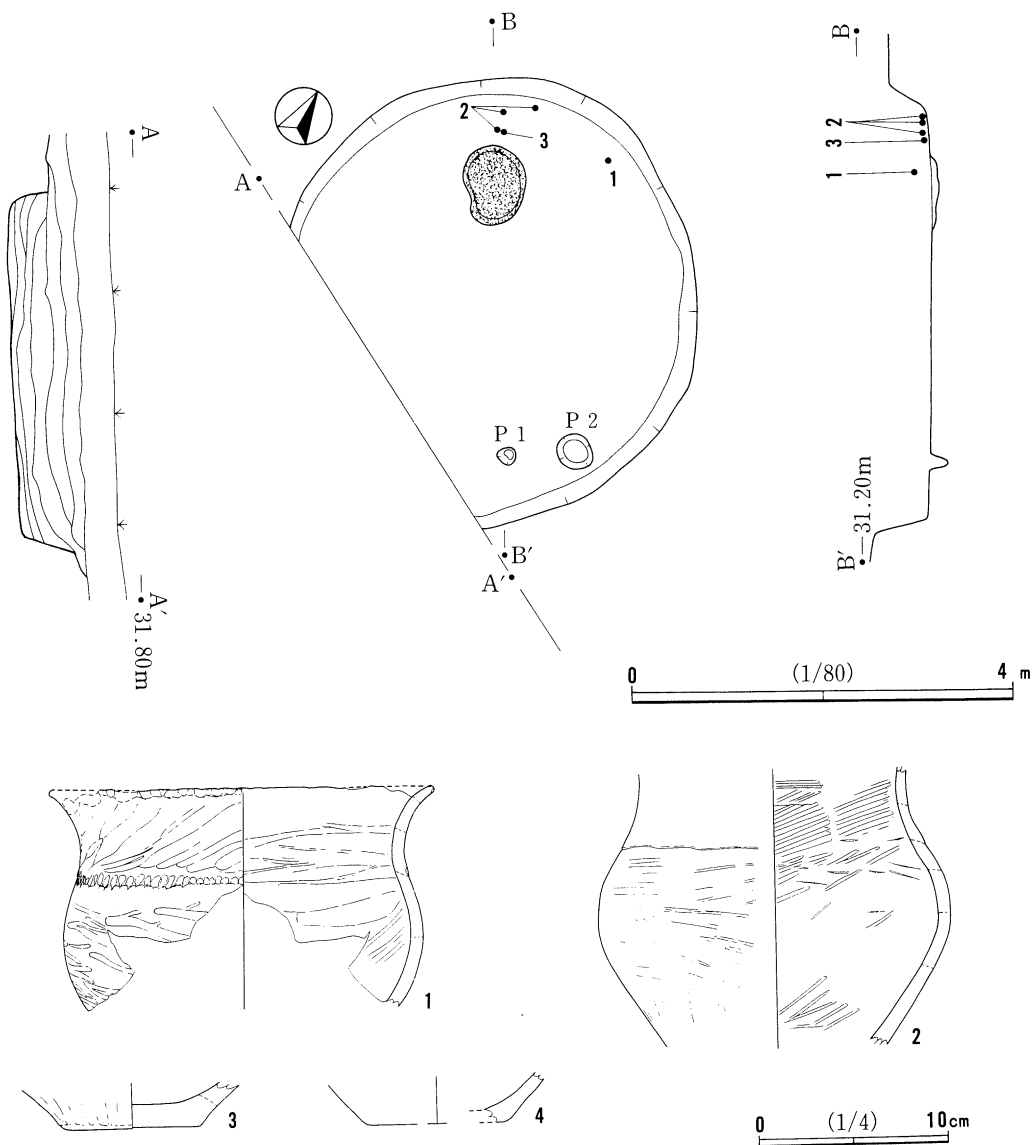
覆土 竪穴の覆土自体は6層に分層された。暗褐色土を主体とし、壁際でロームの混入量が多くなる。

施設等 ピットは2つ検出された。P1が21cm、P2が15cmである。柱穴と考えられるピットは検出されなかった。P1が出入口の梯子ピット、P2は貯蔵穴と思われる。炉跡は不整楕円形を呈し長径83cm、短径66cm、炉底までの深さは5cmである。焼土の堆積は中央が最も多かった。

遺物出土状況 遺物の出土量は少なく、炉跡の北側と東壁に近い床面からまとまって出土しているにすぎない。

出土遺物 1は甕形土器の体部である。推定で、口径20cm、胴部最大径19cmを測る。口縁端は一方向からのキザミ、頸部下端は単節RLの縄文原体による刺突が巡る。頸部外面は、きつく当たり単位が面を為す右上がりの工具によるナデ（ヘラミガキ？）で、胴部外面はナデの後に疎らな横方向のヘラミガキで仕上げられる。内面はナデの後に、口頸部に向かって密になる横方向のヘラミガキが施される。外面は全面に煤の付着が見られる。内外面とも黒褐色・淡い褐色を呈する。胎土は密で、スコリア状の粒が多く含まれるのが特徴的である。2は甕形土器の体部である。胴部最大径は18.4cmを測る。底部から最大径あたりまでの内面は、煮沸によるものか器壁が荒れている。くびれ外面はナデで、以下は上から横・左上がり・縦方向の工具によるナデと、ごく一部のヘラミガキで仕上げられる。内面はナデの後に密なヘラミガキが施される内外面とも、淡い褐色・淡い黄褐色を呈する。胎土は密である。3は底部である。破断面を見

ると外表近くが赤変しているので、甕形土器のものであろうか。底径は7.4cmを測る。外面は垂直方向の工具によるナデ、内面は器壁が荒れていて判然としないが、工具によるナデの後にヘラミガキで仕上げられたものと思われる。底面は黄灰色、他外面は淡い暗褐色、内面は淡い褐色・淡い暗褐色を呈する。胎土は密である。4は底部の破片である。破断面に赤変が見られるので甕形土器であろうか。径は7.2cmを測る。内外面とも、工具によるナデの後にやや疎なヘラミガキで仕上げられている。内外面とも淡い褐色を呈する。胎土は密である。



第30図 034号跡及び出土遺物

第035号跡（第31図・図版16）

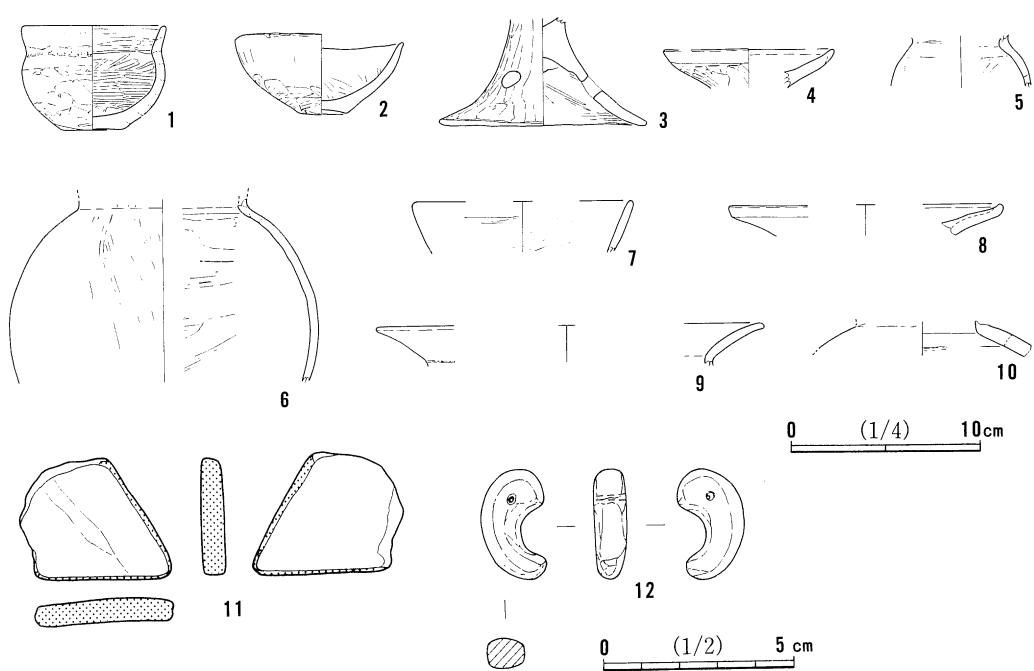
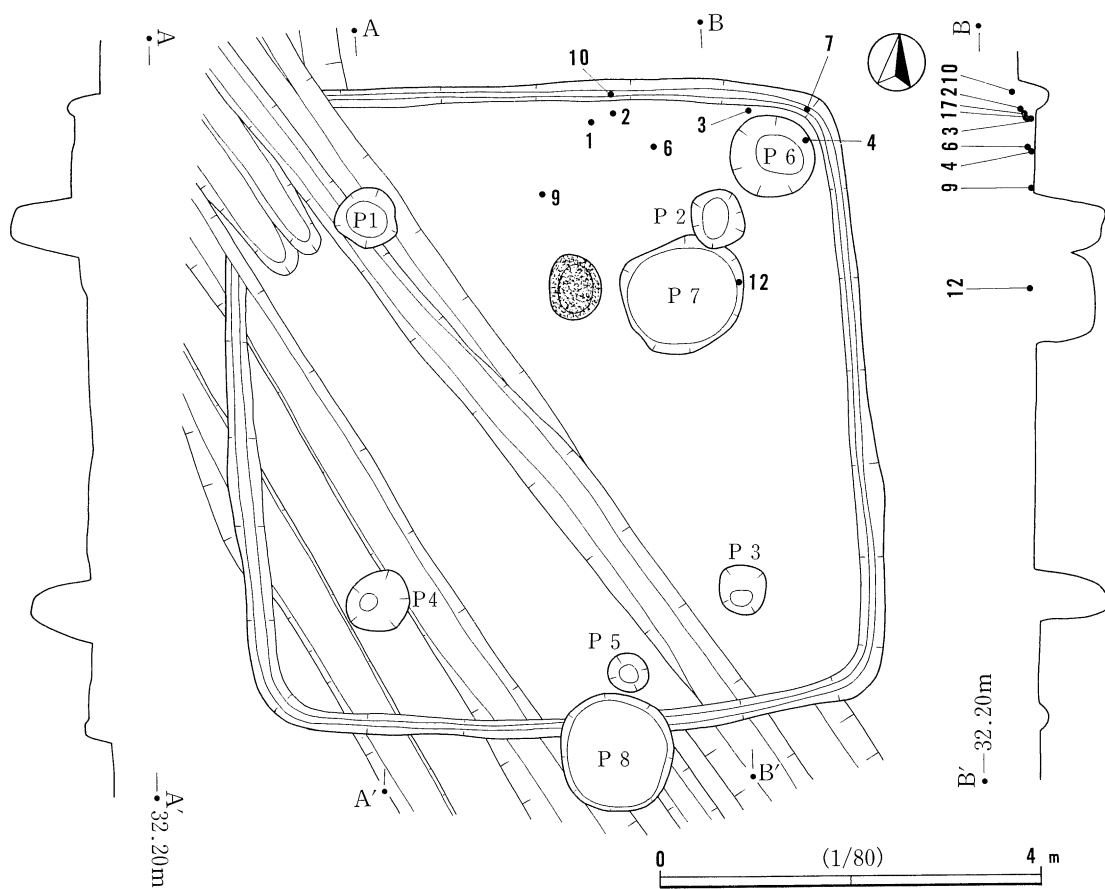
位置・形態 15L-10グリッドを主体に検出された。竪穴の約3分の2が061号の溝状遺構によって攪乱を受けている。また、時期不明の円形の土坑2基によっても床面及び壁が壊されている。平面形態は隅丸方形を呈し、規模は一辺6.9mである。主軸方位はN-10°-Wで、炉跡が北寄りの床面で検出された。竪穴の深さは攪乱を受けていない北壁で17cm、東壁で12cmである。

覆土 暗褐色土を主体とし、ロームの混入は少ない。

施設等 竪穴に直接関連すると思われるピットは全部で6つ検出された。P1が70cm、P2が64cm、P3が80cm、P4が75cm、P5が15cm、P6が49cmである。配置から見るとP1・P2・P3・P4は支柱穴と考えられる。P5が出入口の梯子ピットと考えられる。また、P6は北東コーナーに位置し、貯蔵穴と判断される。炉跡は楕円形を呈する。長径68cm、短径55cmである。炉底までの深さは5cmと浅く、焼土の堆積はあまり多くない。P7・P8は明らかに本竪穴よりも新しいものである。P7の直径は128cm、深さ60cm、P8の直径は120cm、深さ63cmである。メノウの勾玉がP7の覆土上位から出土しているが、本竪穴に伴う可能性が高い。P8に伴う遺物はなかった。

遺物出土状況 大きく攪乱を受けていることから竪穴に属すると判断できる遺物は少ない。攪乱中から出土しているものの、本竪穴に関連すると思われる遺物は図示した。

出土遺物 1は小型の鉢形もしくは甕形土器である。ミニチュアか。口径7.5cm、底径3.1cm、器高5.5cmを測る。外面は底部付近にヘラケズリ、上方は縦のハケメの後に、ナデと横方向の疎らなヘラミガキが施される。内面はナデの後に、口縁方向に密である横のヘラミガキで仕上げられる。内外面ともに淡い黄褐色・淡い褐色を呈する。胎土は密であるが、まれに2mm大の礫・シャモットが見られる。2は小型の鉢形土器である。ミニチュアか。口径9.2cm、底径2.7cm、器高4.2cmを測る。外面は上方がハケメの後にナデ、下方がヘラケズリで、内面はハケメの後に上方が横方向のナデ、下方がヘラケズリで仕上げられる。底部は明瞭にくぼみ、外周は稜を成す。外面は上方が淡い黄褐色、下方が焼成時の黒斑により黒色、内面は淡い褐色を呈する。胎土は密であるが、まれに1mmを越えるシャモットが見られる。3は小型器台の脚部である。底径10.7cm、現存高5.7cmを測る。強い二次焼成を受けたようで硬質である。器壁は荒れており調整が判別しにくい。外面は端部がナデで、それ以外は縦方向のきついヘラミガキで、内面は円周方向のきついハケメで仕上げられている。各調整の後、脚部中ほどが3方向に穿孔される。内外面とも灰色・暗い灰褐色・淡い黒褐色を呈する。胎土は密である。4は小型器台の受部である。口径8.6cmを測る。外面は放射状のハケメの後、工具によるナデとヘラミガキで、内面はヨコナデの後、密なヘラミガキで仕上げられる。受部端は、きついヨコナデによってつまみ出され、外面に面取りされたような稜を持つ。外面は淡い赤褐色・淡い褐色、内面は淡い暗褐色を呈する。胎土は密である。5は小型土器の肩部である。最大径は推定で7.4cmを測る。外面は



第31図 035号跡及び出土遺物

ハケメの後にナデ、内面はナデで仕上げられる。外面は淡い褐色、内面は淡い褐色・暗灰色を呈する。胎土は密である。6は壺形土器の体部である。最大径は推定で16.3cmを測る。外面は縦方向のハケメの後に同じく縦方向の丁寧なヘラミガキで、内面はナデの後、工具によるナデ・疎なヘラミガキで仕上げられる。外面は淡い黄灰褐色、内側は淡い黄褐色を呈する。くびれの内側にはかなり薄くなっているが赤彩の跡と思われる部分が見られる。胎土は密である。7の体部である可能性も考えられる。7は直口壺形土器の口縁部である。口径は推定で11.8cmを測る。外面は縦方向のハケメの後ナデと横方向の密なヘラミガキで、内面はナデと横方向のヘラミガキで仕上げられる。口縁端付近はヨコナデである。外面は赤彩により濃い赤褐色、内面は淡い暗褐色を呈する。胎土は密である。8は小型器台の受部であろうか。口径は推定で14cmを測る。外面はナデの後、やや疎なヘラミガキで、内面は端部のヨコナデとヘラミガキで仕上げられる。外面は暗褐色、内面は褐色を呈する。胎土は密である。9は甕形土器の口縁部である。口径は推定で17cm。内外面ともヨコナデで仕上げられる。内外面とも黒色・淡い黄褐色を呈する。胎土は密である。10は壺形土器の肩部である。外面は横方向の丁寧なヘラミガキ、内面はナデで仕上げられる。外面は淡い褐色、内面は淡い暗灰色・淡い褐色を呈する。胎土は密である。11は土器片を砥石代わりにしたものか。2面の破断面が直線的に擦られている。元は甕形土器の一部であろう。12はメノウ製の勾玉である。長さ2.9cm、厚さ8mm。磨いてつくられている。穿孔の径は1mm。

第036号跡（第32図・図版16）

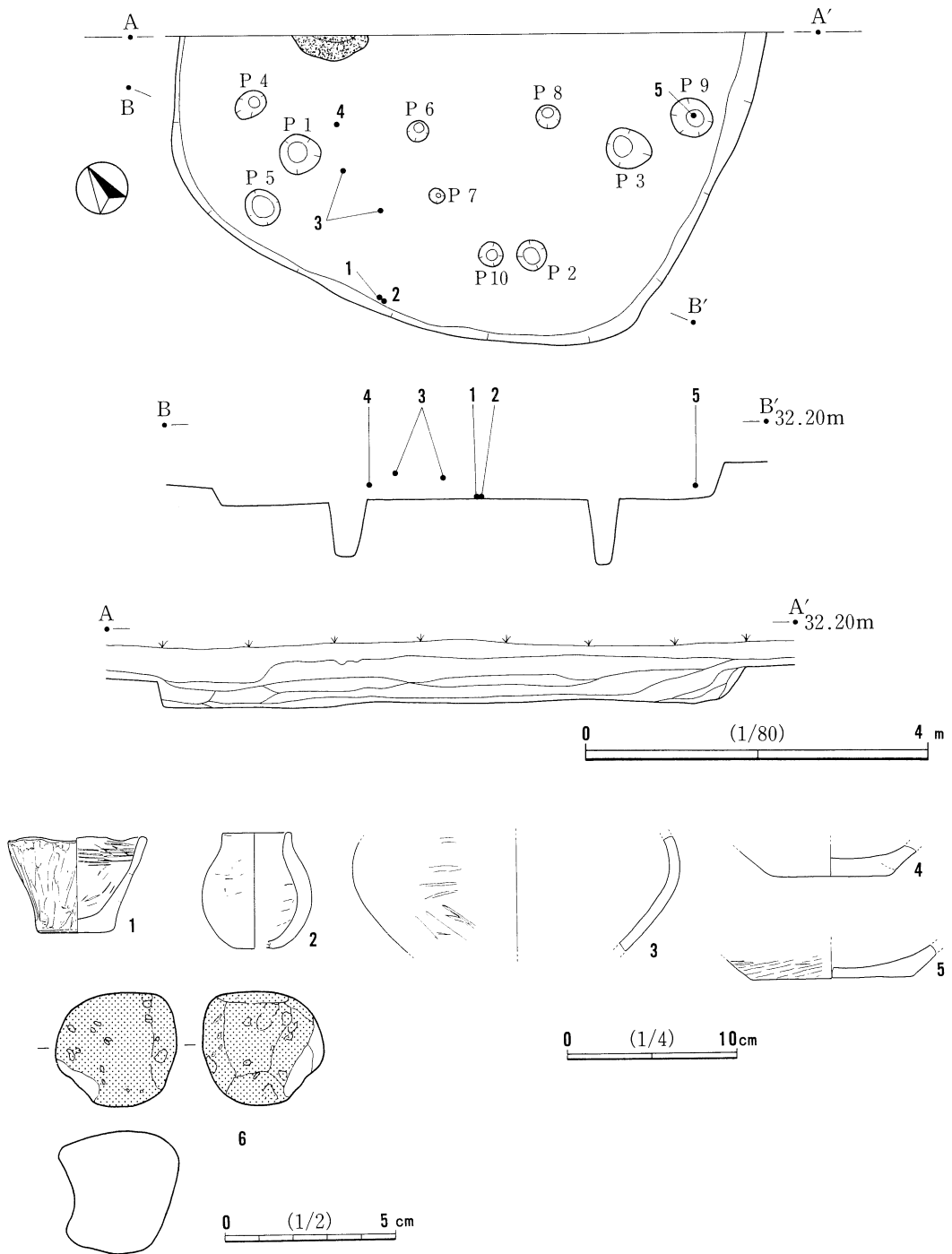
位置・形態 15K-72グリッドを主体に検出された。竪穴の北東側約半分が調査区外となっており、未調査である。平面形態は隅丸長方形を呈し、規模は長軸長約6.6m、短軸長約5.8mと推定される。主軸方位はN-36°-Wで、炉跡が北西寄りの床面に検出された。竪穴の深さは北西壁20cm、南西壁42cm、南東壁47cmである。

覆土 竪穴の覆土自体は8層に分層された。暗褐色土を主体とし、壁際でロームの混入が顕著となる。

施設等 ピットは全部で9つ検出された。P1が61cm、P2が70cm、P3が16cm、P4が13cm、P5が9cm、P6が32cm、P7が13cm、P8が18cm、P9が15cm、P10が11cmである。配置から見るとP1・P2は支柱穴と考えられる。P3が中軸線上に位置する出入口の梯子ピットと考えられる。P9が貯蔵穴か。炉跡は楕円形を呈すると推定される。長径約90cmであろう。炉底までの深さは6cmと浅く焼土の堆積はあまり多くない。

遺物出土状況 遺物の出土量は微量である。竪穴内から散発的に出土したにすぎない。

出土遺物 1は小型の鉢形土器である。ミニチュアであろうか。口縁が波打ち、全体的にゆが



第32図 036号跡及び出土遺物

むなど作りが粗い。口径7.8cm、器高5.6cm、底径4.4cmを測る。外面は底部から口縁に向けてきつくて密だが粗いヘラケズリが施される。内面はナデで仕上げられる。内外面とも淡い赤褐色・淡い暗褐色を呈する。胎土は密である。2をその中に入れた状態で出土した。2は小型土器である。甕形土器を模したものであろうか。手捏ねで成形される。推定で口径4cm、器高6.8cm、底径3cmを測る。内外面とも淡い黒褐色・淡い褐色を呈する。胎土は密である。焼成があまいのか、もろい。1の中から入れ子状になって出土した。3は壺形土器の体部下半である。最大径は推定で19.2cmを測る。外面はナデ・工具によるナデ・疎らなヘラミガキで、内面はナデの後、横方向のやや密なヘラミガキで仕上げられる。外面は淡い褐色・淡い黒褐色、内面は淡い暗灰色を呈する。胎土は密である。4は甕形土器の底部である。底径は7cmを測る。外面は工具によるナデ、内面はナデで仕上げられる。外面は淡い暗褐色、内面は暗灰色を呈する。胎土は密で、多く含まれる0.5mm大の褐色の粒が特徴的である。5は甕形土器の底部である。底径は9.6cmを測る。外面は工具によるナデもしくはきついヘラミガキで、内面は密なヘラミガキで仕上げられる。外面は褐色、内面は黒褐色を呈する。胎土は密である。6は全体に擦った面を持つ軽石である。8g。

第037号跡（第33図・図版16）

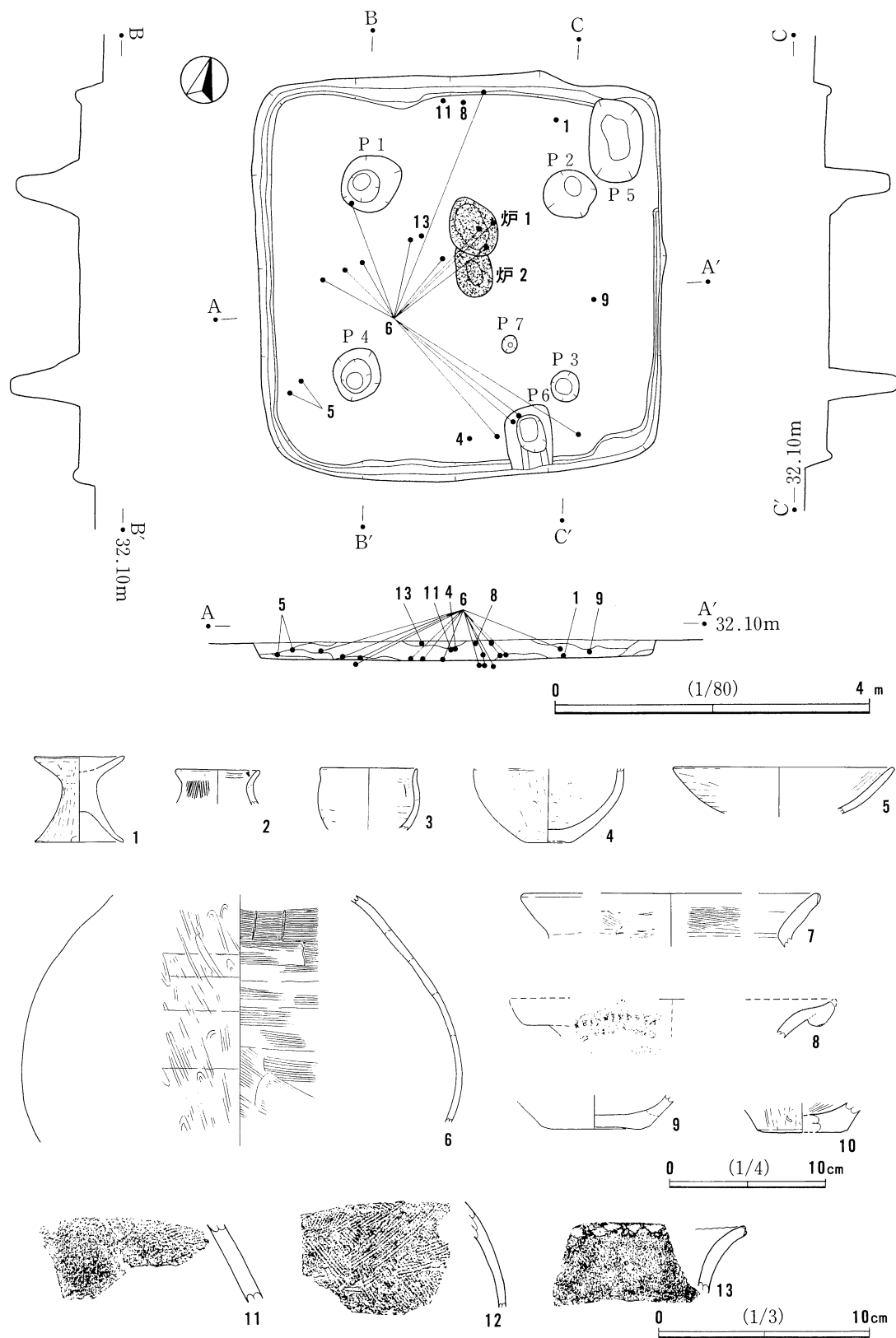
位置・形態 15L-13グリッドを主体に検出された。平面形態は方形を呈し、一辺5.2mである。主軸方位はN-17°-Wである。炉跡は2つ検出された。竪穴の深さは北壁27cm、西壁17cm、南壁27cm、東壁21cmである。

覆土 5層に分層された。上層は黒褐色土、中層以下は暗褐色土である。

施設等 ピット全部で6つ検出された。P1が89cm、P2が82cm、P3が94cm、P4が79cm、P5が47cm、P6が59cm、P7が10cmである。P1～P4が主柱穴と考えられる。P5は貯蔵穴、P6は出入口の梯子ピットと考えられる。P5は長方形を呈し、長軸長106cm、短軸長70cmである。炉跡は2つ検出されたが、炉2は床面を掘り下げた後に検出されたことから、当初炉2が使用され、後に炉1に変更されたものと考えられる。炉1の炉底までの深さは5cm、炉2は17cmである。

遺物出土状況 遺物の出土量は少ない。炉跡の西側及びP6の周囲に比較的まとまって出土している。

出土遺物 1は小型の器台もしくは高杯形土器。上の径5.7cm、脚の径5.5cm、器高5.5cmを測る。焼きが良かったのか、二次焼成を受けたのか硬質である。外面は脚から脚柱部にかけて縦方向のヘラミガキ、内面はナデで仕上げられる。内外面とも淡い黒褐色を呈する。胎土は密である。2は甕形土器を模したミニチュアであろうか。推定で口径5cmを測る。外面は縦方向のハケメの後ナデで、内面は口縁部にある横方向のハケメの後にナデで仕上げられる。内外面とも暗褐



第33図 037号跡及び出土遺物

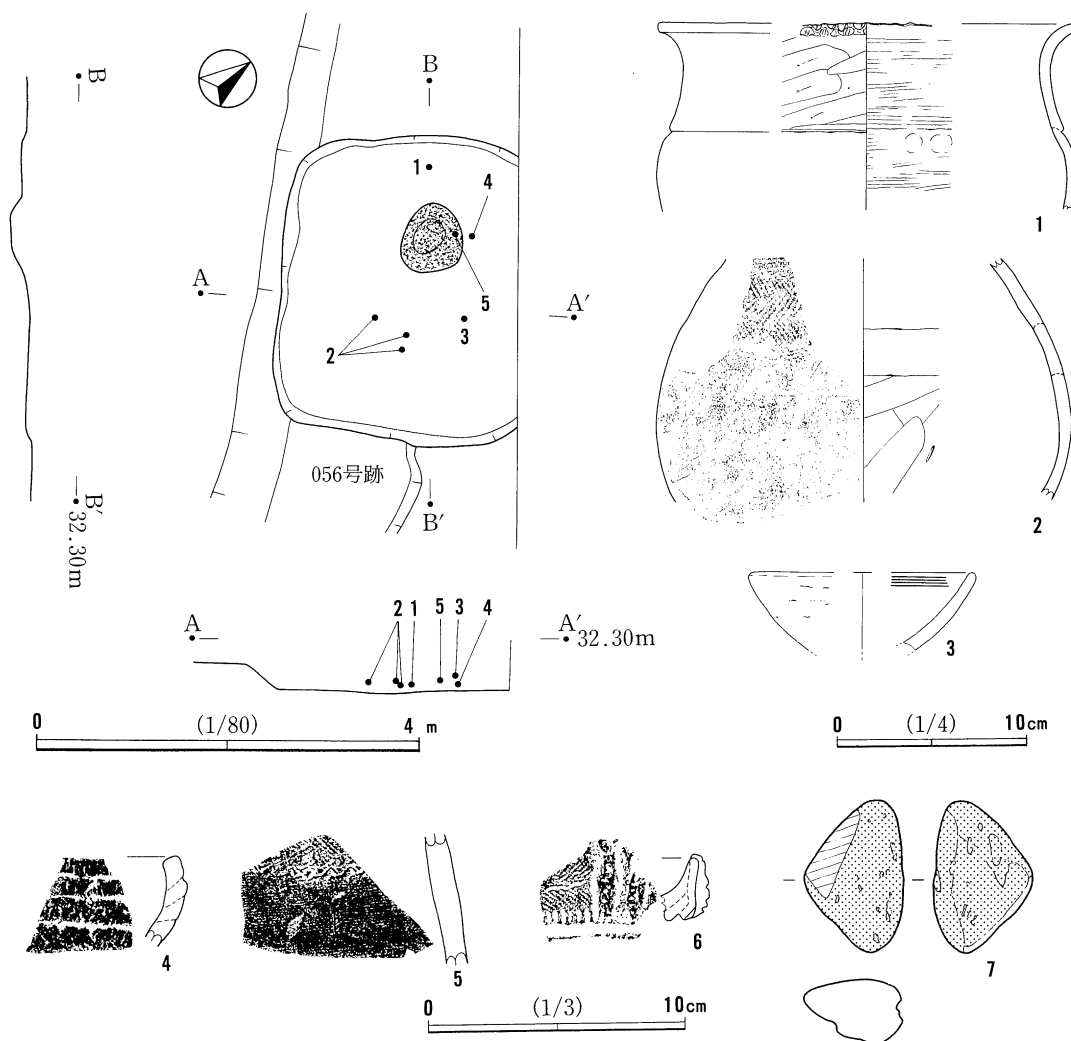
色を呈する。胎土は密である。3は小型土器である。口径は推定で6cmを測る。器壁も薄いまま一定し、丁寧な作りである。内外面ともナデで仕上げられる。外面は淡い灰褐色、内面は淡い褐色を呈する。胎土は密である。4は壺形土器の下半である。底径は2.9cmを測る。外面は工具によるナデの後に疎らなヘラミガキで、内面は工具によるナデで仕上げられる。内外面とも暗い赤褐色・淡い黒褐色を呈する。胎土は密だが、まれに1～2mm大の砂粒が見られる。5は高杯形土器の杯部であろうか。口径は推定で14cmである。外面はナデの後、横方向のヘラミガキで、内面は径方向の密なヘラミガキで仕上げられる。外面は淡い暗褐色、内面は褐色・黒褐色を呈する。胎土は密である。6は壺形土器の体部である。最大径は推定で28.1cmを測る。外面は主に横方向の工具ナデもしくはナデの後に縦方向の密なヘラミガキで、内面は、上方が、目は細かいが当たりのきつい横方向のハケメで、下方がその後のナデで仕上げられる内外面とも主に淡褐色を呈するが、外面には部分的に赤褐色が見られるので赤彩されていた可能性も考えられる。胎土は密だが、疎らに1～3mm大のシャモット状暗赤褐色粒が含まれる。7は甕形土器の口縁部である。口径は19cmを測る。内外面とも、主に横方向のハケメの後、ヨコナデで仕上げられる。外面は淡い黒褐色、内面は淡い灰褐色を呈する。胎土は密である。8は壺形土器の口縁部である。口径は推定で15cmを測る。口縁部外面には単節RL横回転の縄文が外面下端には同じ原体の刺突によるキザミが巡る。外面は縦方向の、内面は横方向の密なヘラミガキで仕上げられる。口縁部の下方と内面には赤彩が施される。外面は淡い黄土色・暗赤色内面は暗赤色を呈する。胎土は密で、まれに大きいシャモットを含む。9は甕形土器の底部である。底径は6.5cmを測る。内外面とも器壁が摩耗しているため、調整は判然としない。外面は淡い黄灰褐色・暗褐色、内面は淡褐色を呈する。胎土は密である。10は壺形土器の底部である。底径は推定で5cm。外面は縦方向の密なヘラミガキ、内面は不定方向の密なヘラミガキで仕上げられる。外面は淡い褐色、内面は淡い灰色を呈する。胎土は密である。11は壺形土器の体部である。無節Rに3つ結び目のある原体によるS字状結節文に上を画された、単節LR横回転の縄文が巡る。内外面ともナデで仕上げられる。外面は文様帯を除き赤彩が見られ、淡い褐色・暗赤色、内面は淡い褐色・黒灰色を呈する。胎土は密であるが、0.5mm大の軽石状の粒が多く含まれるのが特徴的である。12は甕形土器の体部か。外面はハケメが、内面は横方向の工具によるナデが施される。外面は淡い褐色、内面は褐色を呈する。胎土は密だが、4mm大までのシャモットを疎らに含む。13は甕形土器の口縁部である。口径は推定で20cm。口縁端は両方向からのキザミが巡る。内外面ともナデで仕上げられる。外面は煤により黒褐色、内面は淡い黄褐色を呈する。胎土は密である。

第038号跡 (第34図・図版17)

位置・形態 15L-19グリッドを主体に検出された。竪穴の北東側約3分の1は調査区外となっており、未調査である。検出された竪穴の大部分は溝状遺構の056号跡によって床面近くまで攪乱を受けており、遺存状態はよくない。形態は方形を呈し、規模は一辺3.2mである。主軸方位はN-51°-Wである。炉跡が北西寄りの床面に検出されている。竪穴の深さは北西壁5cm、南西壁29cm、南東壁24cmである。

覆土 3層に分層された。暗褐色土を主体とし、壁際ではロームの混入が顕著である。

施設等 ピットは検出されなかった。炉跡はほぼ円形を呈し直径約70cmである。焼土の堆積量はあまり多くなかった。



第34図 038号跡及び出土遺物 (7 1/2)

遺物出土状況 底面近くから遺物が少量検出されている。炉跡付近と南東側半分からの出土が主体である。

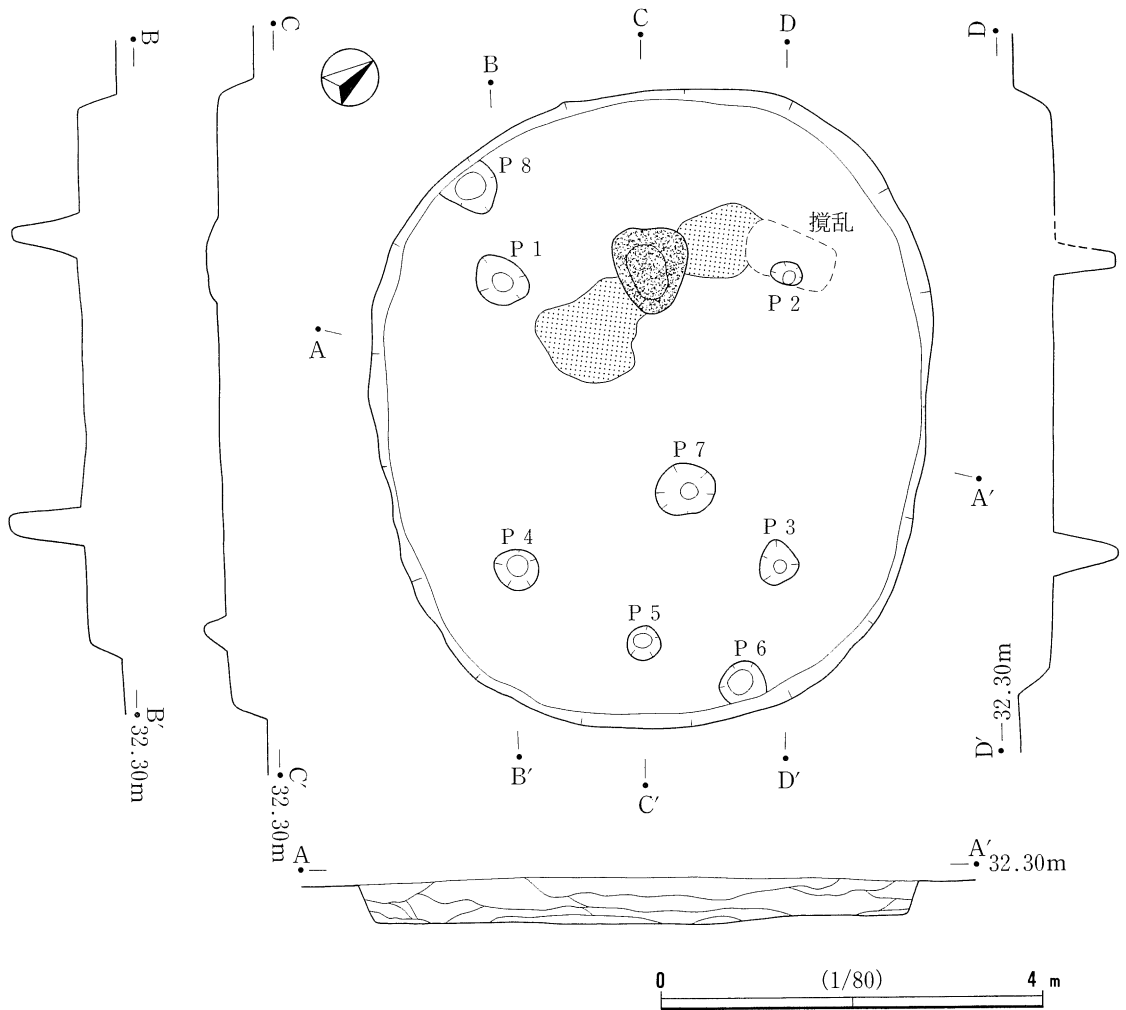
出土遺物 1 は甕形土器の上半である。口径は推定で22cmを測る。外面は、くびれが工具によるナデ、段以下がナデで、内面は密な主に横方向のヘラミガキで仕上げられる。口縁端は上下からの工具の押圧によるキザミが巡る。外面は淡い明褐色、内面は淡い褐色を呈する。胎土は密である。2 は壺形土器の体部である。胴部最大径は推定で22cmを測る。外面上方には、無節Rに結び目を3つ付けた原体によるS字状結節文に上下を画されるかたちで、単節RL横回転、同LR、同RLの縄文が施される。縄文以下の外面は工具によるナデの後ヘラミガキ、内面は工具によるナデで仕上げられる。外面は淡い褐色、内面は赤褐色を呈する。胎土は密である。3 は高杯形または鉢形土器。口径は推定で12cmを測る。内外面ともナデとヘラミガキで仕上げられる部分的に色が落ちているが全面に赤彩が施されている。内外面とも淡い明褐色・暗赤色を呈する。胎土は密である。4 は鉢形土器の口縁部であろうか。外面に輪積み痕を残す。内外面とも工具によるナデ・ナデで仕上げられる。外面は暗灰色・暗淡褐色、内面は暗灰色を呈する。胎土は密である。5 は壺形土器の体部である。無節Rの縄に2つ結び目のある原体によるS字状結節文に下を画された、単節LRの横回転の縄文が巡る。部分的に同原体による縦回転の縄文がそれを切る。外面は主に横方向のヘラミガキで仕上げられる。内面は器壁の剝落のため調整は不明である。外面は暗褐色・暗赤色を呈する。胎土は密で、0.5mm以下の褐色・灰褐色の粒が目立つ。6 は壺形土器の口縁である。口端には、単節RL横回転の縄文と同LRの間に挟まるかたちで、無節Rによる1列のS字状結節文が巡り、稜にキザミを持つ棒状付文が2個付けられる。外面の口端以外と内面には赤彩が施される。内面はヘラミガキで仕上げられる。外面は淡い褐色、内面は暗赤色を呈する。胎土は密である。7 は軽石製の砥石である。全面が研磨面となっている。重量は3.5g。

第039号跡（第35図・図版17）

位置・形態 15L-59グリッドを主体に検出された。平面形態が楕円形を呈する長軸長6.7m、短軸長5.8mの大型の竪穴である。主軸方位はN-51°-Wである。炉跡は北西寄りの床面から検出されている。竪穴の深さは北西壁39cm、南西壁14cm、南東壁36cm、北東壁37cmである。

覆土 11層に分層された。上層は黒褐色土、中層以下は暗褐色土を主体とする。

施設等 ピットは全部で8つ検出された。P1が68cm、P2が66cm、P3が67cm、P4が78cm、P5が17cm、P6が15cm、P7が83cm、P8が12cmである。配置から見るとP1～P4が支柱穴と考えられるが、P7も深さがあり竪穴の規模からすれば柱穴の一つと判断できよう。P5は出入口の梯子ピットと考えられる。P6、P8はいわゆる貯蔵穴と考えられる。炉跡は楕円形を呈するが整った形態では

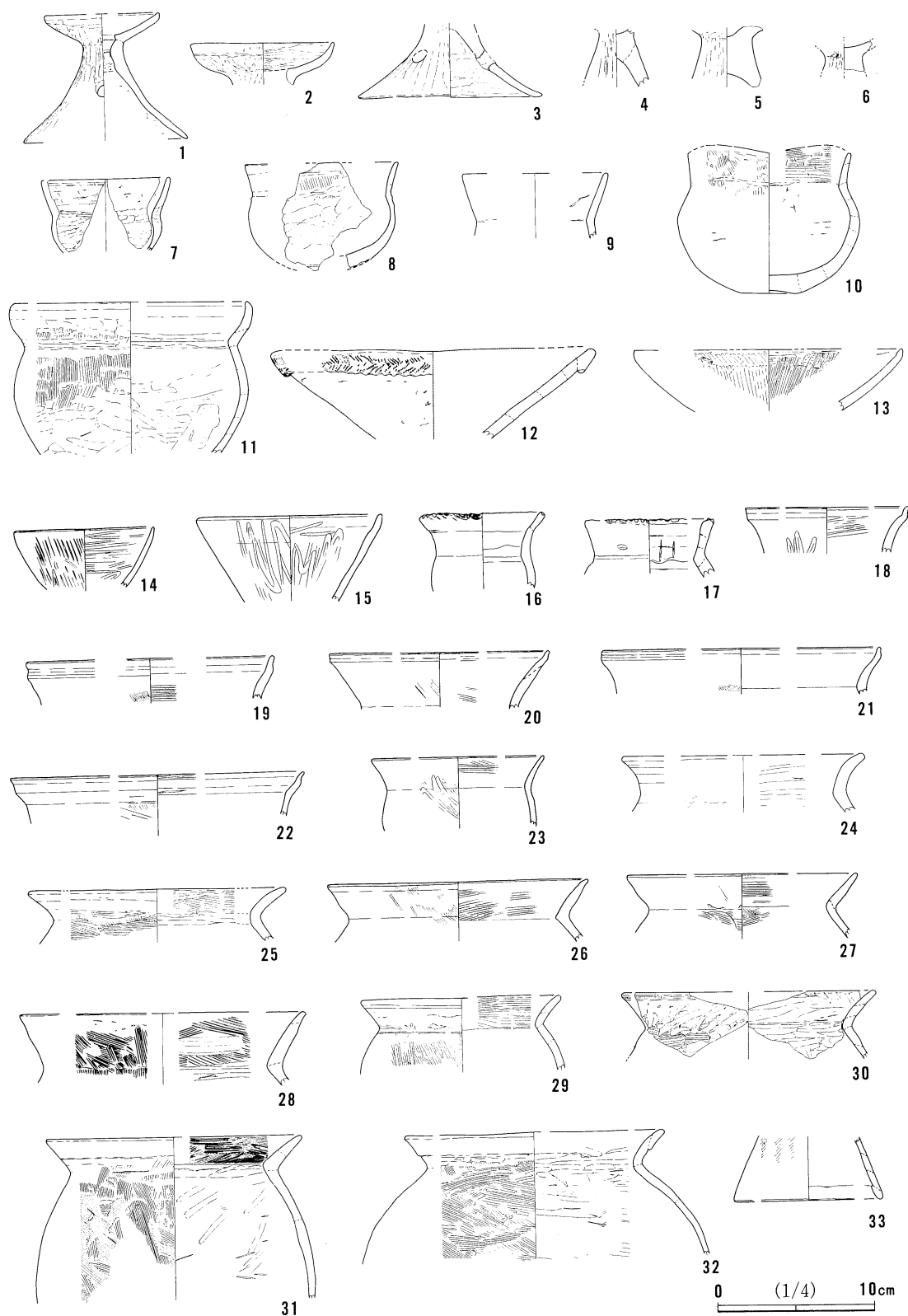


第35図 039号跡

ない。長軸長90cm、短軸長78cmである。焼土の堆積は、規模の割には少なかった。炉跡の南北方向の床面が熱を受け変質しており、炉跡の周辺の床面でも一時的に火が焚かれたのであろう。

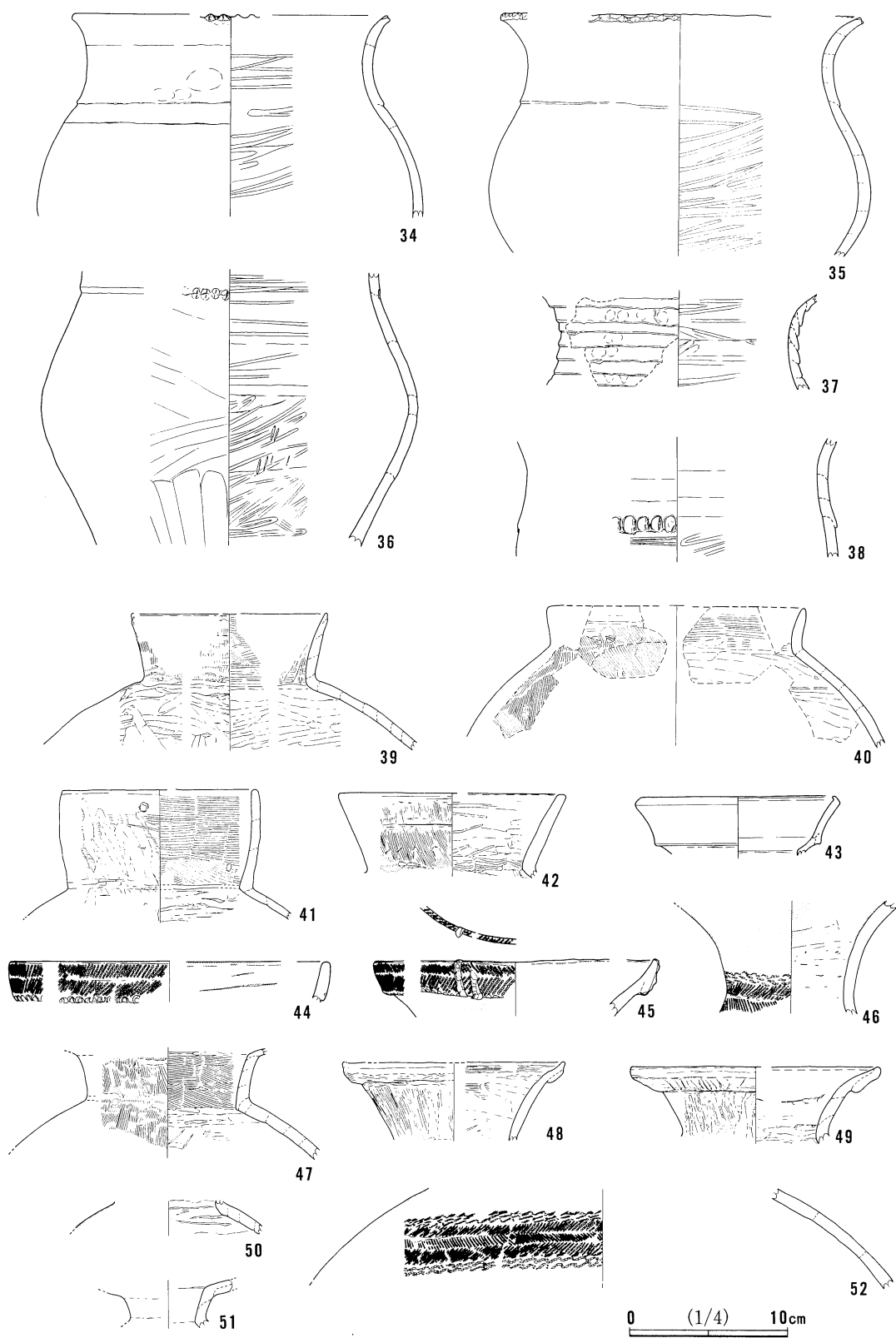
遺物出土状況 土器が多く出土している。壁際での出土がほとんどなく、炉跡の周辺を主体に中央部分に集中して検出されている。床面近くから出土した土器は34・35・36・37・45・46であり、上層の土器とは様相の違いが認められるので、上層から出土した土器は、竪穴が機能しなくなりある程度埋没してから廃棄されたものである可能性が高い。また、隣接する同時期と考えられる037号竪穴から出土した土器片と本遺構上層出土の土器3とが接合していることから床面近くから出土した土器と上層出土の土器とは時期差を示しているものと考えられる。

出土遺物 1は小型器台形土器である。受部の径は7.1cm、器高は推定で8cmを測る。透孔は現存する部分で3つ認められる。外面は、きつく緻密なヘラミガキで仕上げられる。脚部内面は周方向のヘラケズリが施される。受部内面は器壁が剝落しており調整は不明である。内外面とも暗褐色を呈する。胎土は密である。2は小型器台形土器の受部である。径は9cmを測る。口縁端はヨコナデでつまみ出されている。以下の外面は径方向のヘラケズリもしくは工具によるナデの後のヘラミガキで仕上げられる。内面は密な周方向のヘラミガキが施されている。外面は淡い黄灰褐色、内面は暗い淡褐色を呈する。胎土は密で、1～2mm大のシャモットが疎らに含まれる。3は高杯の脚部である。径は11.5cmを測る。外面は径方向の密なヘラミガキ、内面は周方向のヘラケズリもしくは工具によるナデで仕上げられる。半ばには三方向に透孔がある。外面は暗赤褐色、内面は暗褐色を呈する。胎土は密である。4は小型高杯形土器の脚柱部である。二次焼成を受けている。外面は縦方向のハケメの後、縦方向のヘラミガキで、内面はナデで仕上げられる。作りはやや雑に見える。内外面とも暗褐色・黒褐色を呈する。胎土は密だが、最大2mmのスコリア状粒が普通に含まれる。5は小型の高杯形土器の脚部である。二次焼成を受けたようである。外面はきつく密なヘラミガキで仕上げられる。内外面とも淡い黒褐色・暗褐色を呈する。胎土は、2～3mm大のシャモット・スコリア状粒を多く含み、やや粗である。6は小型の高杯形土器の脚柱部である。外面は縦方向のヘラミガキ、内面はナデで仕上げられる。内外面とも淡い褐色・淡い暗褐色を呈する。胎土は密で、まれに3mm大のシャモットを含む。7は小型の鉢形土器である。口径は推定で8cm。内外面とも横方向のハケメの後、ヨコナデ・ヘラミガキで仕上げられる。外面は淡い明褐色、内面は淡い暗褐色を呈する。胎土は密である。8は小型の鉢形土器である。推定で口径11cm、器高7cm、底径3cmを測る。外面は口縁部が縦方向のハケメの後、ヨコナデで、以下が丁寧な工具によるナデで、内面は工具によるナデ・ヨコナデで仕上げられる。くびれ外面には工具が当たった跡がある。外面は黒褐色・淡い褐色、内面は暗褐色を呈する。胎土は密である。9は小型の鉢形土器の上半である。口径は推定で9cmを測る。煤が破断面に付着することから破片化した後に二次焼成を受けたと考えられる。内外面とも摩滅している可能性もあるが、ナデで仕上げられたように見える。外面は淡い暗褐色、内面は暗褐色を呈する。胎土は密だが、まれに3mm大の礫を含む。10は小型の鉢形土器である。推定で、口径10cm、底径3cm、器高9.4cmを測る。破片化した後に二次焼成を受けたようである。底に対して口縁が水平でなくゆがんでおり、作りが粗い。外面は左上がりのハケメの後、ヘラミガキで、内面は口縁部が横方向のハケメで、以下の部分がナデで仕上げられる。内外面とも赤褐色を呈する。胎土は砂粒を多く含みやや粗い。11は小型の甕形もしくは鉢形土器である。口径15.5cm、胴部最大径15cmを測る。二次焼成を受けたようで、黒ずんでおり硬質である。口縁部は強く内湾し、口縁端はつままれたように立ち上がる。12は鉢形土器の口縁部



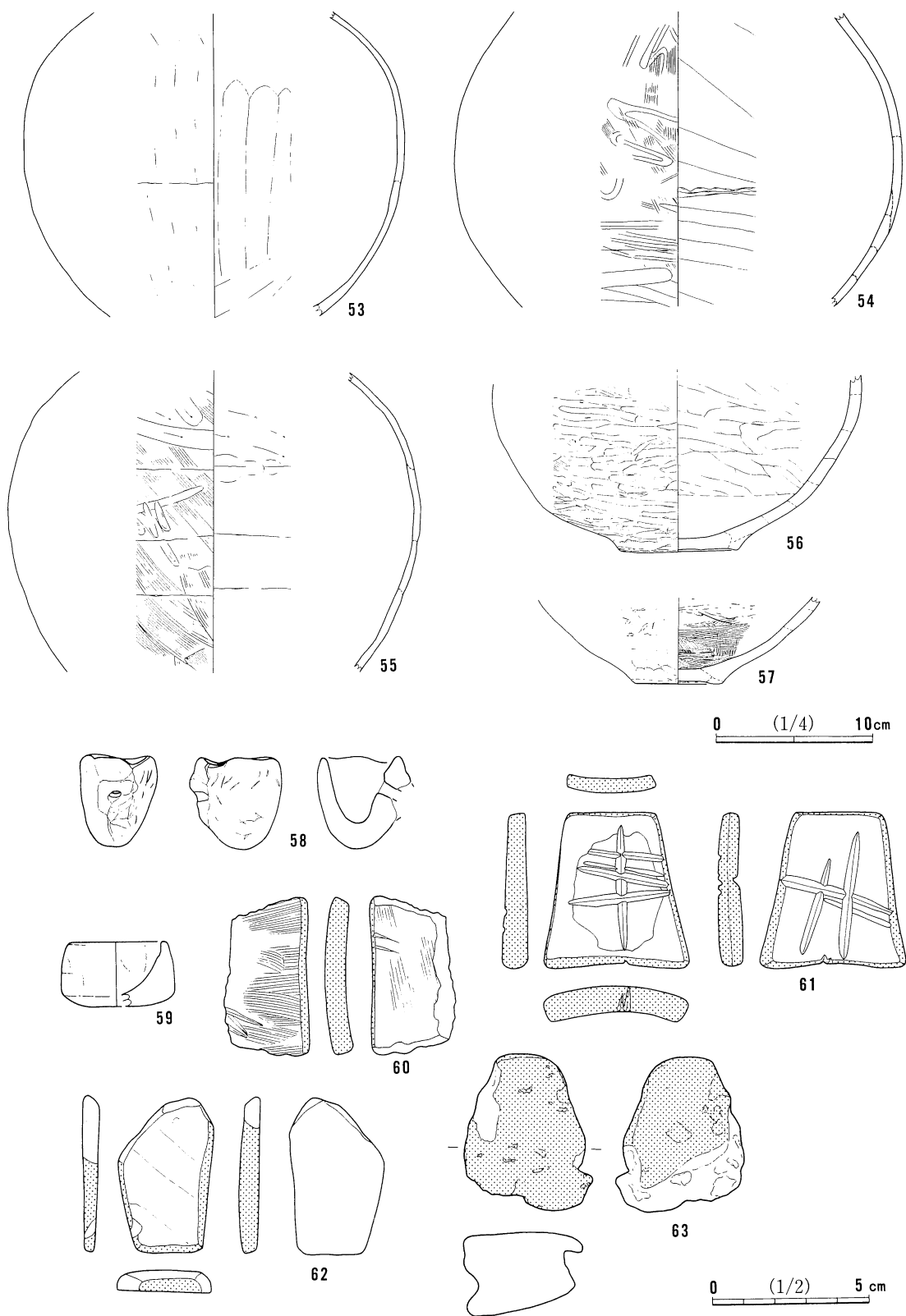
第36図 039号跡出土遺物

である。口径は推定で20.5cm。口縁部外面には単節RL横回転、同LRの縄文、下端には縄文原体押圧によるキザミが巡るが、どちらの縄文も雑である。口端以下の外面と内面は主に横方向のヘラミガキで仕上げられ、赤彩される。内外面とも淡い黄褐色・暗赤色を呈する。13は高杯形土器の杯部である。口径は推定で17.5cm。内外面とも周方向のハケメ→ナデ→径方向の密なヘラミガキの順で仕上げられる。外面は褐色、内面は淡い褐色を呈する。胎土は密だが、まれに2mm大のシャモットを含む。14は小型丸底壺形土器の口縁部である。口径は推定で8.9cm。隣り合う破片で色調の大きく異なることがあるので、破片化した後に火を受けたものと考えられる。外面は縦方向のきついハケメの後、やや密なヘラミガキで、内面はハケメ、ナデの後に密な横方向のヘラミガキで仕上げられる。内外面とも二次焼成により暗褐色・黒褐色を呈する。胎土は密である。15は直口壺形土器の口縁部である。口径は推定で11.6cm。内外面ともナデの後、縦方向のヘラミガキで仕上げられる。口縁端は強いヨコナデにより若干内湾する。外面は暗い赤褐色、内面は暗褐色を呈する。胎土は密だが、まばらに3mm大のシャモット・礫が含まれる。16は小型丸底壺形土器を模したもの、または、甕形土器のミニチュアであろう。口径は推定で7.4cm、くびれは6cm、胴部は6.6cmを測る。口縁端には、小さいヘラ状工具の刺突・押圧により甕形土器の調整が写されている。他の部分はナデで整えられている。内外面とも淡褐色・暗い淡褐色を呈し、胎土は密である。17は甕形土器のミニチュアであろうか。口径は推定で8cm。内外面ともナデ・工具によるナデで仕上げられる。口縁内面には1cm弱おきに接合痕が見られる。内外面とも淡い黒褐色・黄灰褐色を呈し、胎土は密である。18は壺形土器の口縁であろうか。口径は推定で10cm。口縁端部は上方に少しつまみ出され、ヨコナデが施される。外面はくびれ半ばの縦方向のヘラミガキで、内面は横方向のハケメの後にヘラミガキで仕上げられる。外面は淡い暗褐色、内面は黒褐色を呈する。胎土は密だが、まれに3mm大のシャモット状赤褐色粒が見られる。19は甕形土器の口縁であろうか。口縁端が強いヨコナデで引き出され、ゆるい「S」字状になっている。外面は、頸部のみ左上がりのハケメ、他はヨコナデで、内面は横方向のハケメの後ヨコナデで仕上げられる。外面には煤が付着している。外面は黒褐色・褐色、内面は淡い褐色を呈する。胎土は密である。20は甕または広口壺形土器の口縁である。口径は推定で14cm。内外面ともハケメの後にナデで仕上げられる。口縁端はヨコナデで引き出され、立ち上がっている。外面は淡い褐色、内面は暗褐色を呈する。胎土は密である。21は甕形土器の口縁であろうか。口縁端がヨコナデによって立ち上げられている。内外面ともハケメの後ヨコナデで仕上げられる。外面は暗赤褐色、内面は褐色を呈する。胎土はまれに3mm大の礫を含むが密である。22は甕形土器の口縁であろうか。口縁端がヨコナデにより「S」字状に屈曲している。頸部の外面はヘラケズリののちに、他の部分はナデもしくはヨコナデの後に、部分的にヘラミガキが施される。内外面とも暗褐色を呈する。胎土は密である。23は小型土器の上半で



第37図 039号跡出土遺物

ある。外面はハケメ・ナデ・ヨコナデの後、頸部以下がヘラミガキで、内面はナデ・工具によるナデで仕上げられる。内外面は赤褐色・黒褐色を呈する。胎土はまばらに3mm大の礫を含むものの密である。24は甕形土器の口縁部である。口径は推定で13cmを測る。くびれ外面はなだらかで、内面には緩いながらも稜が認められる。内外面とも左上がり・横方向のハケメの後ヨコナデで仕上げられる。外面には煤が付着している。内外面とも黒褐色・淡い褐色を呈する。胎土は密である。25は甕形土器の口縁部である。口径は推定で16cmを測る。外面は縦方向のハケメの後に横方向のハケメが施され、口縁部はさらにヨコナデされる。内面はくびれより上がハケメの後にナデ、下がナデで仕上げられる。外面には煤が付着している。内外面とも黒褐色・淡い褐色を呈する。胎土は密で、まばらに2mm大のシャモットを含む。26は甕形土器の口縁である。口径は推定で16.5cmを測る。隣り合う破片の間にも明瞭に色調等の違いが認められることから、破片化した後に二次焼成を受けたものと考えられる。外面は口縁がハケメの後にヨコナデ、以下はハケメで、内面は口縁が横方向のハケメの後ヨコナデ、以下がナデで仕上げられる。口縁にはヨコナデの際のものか、きつい指頭圧痕が巡る。外面は黒褐色・明るい赤褐色、内面は淡い黒褐色・淡い褐色を呈する。胎土は密だが、まばらに2～3mm大のシャモット状暗赤褐色粒が含まれる。27は甕形土器の口縁である。口径は推定で14.6cm。口縁が「く」の字状に強く屈曲する。内外面ともにハケメの後ナデで仕上げられる。内外面とも淡褐色・黒灰色を呈する。胎土は密である。28は甕形土器の口縁部である。口径は推定で16.5cmを測る。全体的に作りが粗い。接合する破片でも二次焼成を受けて黒ずんだものとそうでないものが見られることから、破片になってから被熱したと考えられる。外面は主に左上がりのハケメ、内面は屈曲より上が主に横方向のハケメ、下がナデで仕上げられる。内外面とも淡い褐色・黒褐色を呈する。29は小型の甕形土器の口縁部である。口径は12.4cmを測る。ゆがみの無い丁寧な作りである。焼きが良かったのか、二次焼成を受けたのか硬質である。外面はくびれより上は横方向のハケメの後にヨコナデ、下は主に左上がりのハケメ、内面はくびれより上は外面と同じ調整、下は工具によるナデで仕上げられる。外面は淡褐色・淡い暗褐色内面は淡い暗褐色を呈する。胎土は密である。30は甕形土器の口縁部である。口径は推定で15.5cm。端部はヨコナデで丸く作られ、くびれは内外面とも明確に稜をなす。外面は、口縁部にヨコナデ、くびれ以下に横方向のハケメが施され、くびれから口縁部にかけては、右上がりにヘラ状工具で擦った跡が巡る。内面はヨコナデと横方向のヘラミガキで仕上げられる。内外面とも淡い褐色・暗灰色を呈する。胎土は密であるが、まばらに2mm大のシャモットを含む。31は甕形土器の上半である。口径は15.9cmを測る。二次焼成を受けている。外面は、くびれより上がヨコナデで、以下が主に左上がりの細かいハケメで、内面は、口縁部が横方向の細かいハケメ、以下がナデと疎らな工具によるナデで仕上げられる。くびれ外面は緩く屈曲するが、内面は稜をなし、厚みがある。口縁



第38図 039号跡出土遺物

部半ばにヨコナデに伴うと思われる沈線が見られる。外面は口縁部が黒褐色、以下が淡い褐色、内面は口縁部付近が褐色・黒褐色、以下が淡い褐色を呈する。胎土は密だが、まれに最大5mmのシャモットを含む。32は甕形土器の上半である。口径は推定で17cm。破片により色調が大きく異なり、破片化してから二次焼成を受けたものと考えられる。外面は、口縁部が横方向のハケメの後にヨコナデで、以下が主に左上がりのハケメで、内面は、口縁部が横方向のハケメの後に密なヘラミガキで、以下が工具によるナデで仕上げられる。口縁部半ばには接合痕が残る部分がある。くびれの両面は明瞭に稜を成す。外面はほとんど全面に煤が付着する。内外面とも淡い褐色・黒褐色を呈する。胎土は密である。33はおそらくS字状口縁台付甕形土器の脚台部である。径は9cmを測る。端部は内側に折り返されたようになっている。内外面ともナデで仕上げられるが、外面の一部にはハケメが残る。外面は淡い暗褐色、内面は暗褐色を呈する。胎土は密で、在地のものようである。34は甕形土器の上半である。推定で口径19.6cm、くびれ径18cm、胴部最大径24.4cmを測る。外面は、くびれが横方向の工具によるナデで、くびれ以下がナデで、内面は工具によるナデの後、横方向の疎らなヘラミガキで仕上げられる。内外面とも黄灰褐色・暗灰褐色を呈する。胎土は密で、普通に含まれる淡褐色の粒が特徴的である。35は甕形土器である。推定で口径22.6cm、胴部最大径24cmを測る。口縁端には両方向からの刺突によるキザミが巡る。頸部外面は横方向の工具によるナデ、それ以下はナデで、内面はナデの後に口縁に近づくほど密な横方向のヘラミガキで仕上げられる。段直下はシボリのために若干波打っている。内外面とも淡い褐色・淡い暗褐色を呈する。胎土は密である。36は甕形土器の体部である。最大径は推定で24cmを測る。外面は、最大径直下までが斜め方向の工具によるナデで、以下が縦方向の工具によるナデで、内面は、ナデ・工具によるナデの後に、ヘラミガキで仕上げられる。外面は淡い暗褐色・淡い褐色、内面は褐色を呈する。胎土はやや粗で、黄灰色の粒が多く含まれる。37は甕形土器のくびれ部であるくびれ径は推定で15cmである。外面は指先の押圧で、内面はナデの後に横方向のヘラミガキで仕上げられる。内外面ともに淡い橙褐色を呈し、胎土は密である。38は甕形土器のくびれ付近である。くびれ径は推定で19cmを測る。外面はヨコナデまたは工具によるナデで、内面は主に横方向のナデの後、ヘラミガキで上げられる。くびれ下端の段には、爪の跡から指頭の押圧によると考えられる、キザミが施される。外面は淡い赤褐色、内面は淡い褐色を呈する。胎土は密である。39は壺形土器の上半である。口径は12.2cmを測る。外面はハケメの後、口縁部は疎らなヘラミガキとヨコナデで、体部は疎らなヘラミガキで上げられる。内面は、口縁部は横方向のハケメの後に疎らな縦方向のヘラミガキ、体部はハケメの後に密なヘラミガキが施される。外面は淡い褐色・黒褐色、内面は暗灰色を呈する。胎土は密である。40は甕形土器の上半である。口径は推定で16cmを測る。外面は左上がりのハケメ、口縁部はヨコナデ、内面は口縁部が横方向のハケメの後にヨコナデ、く

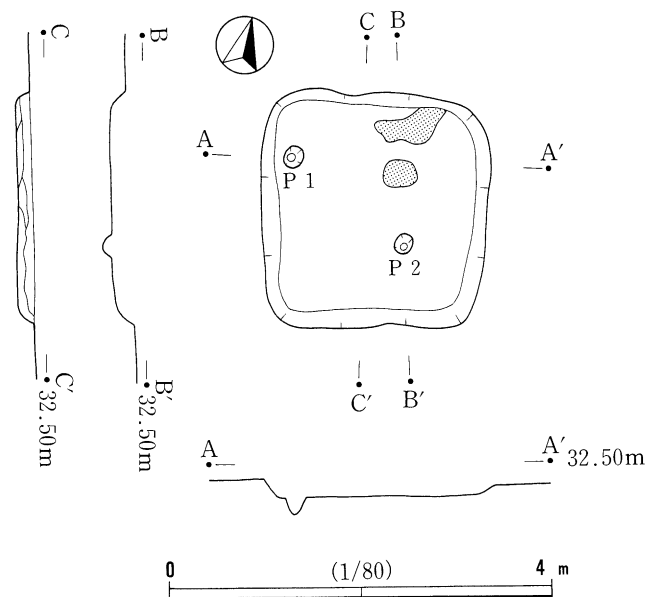
びれ以下が工具によるナデもしくはヘラケズリで仕上げられる。外面は淡い褐色、内面は淡い灰褐色を呈する。胎土は密である。41は直口壺形土器の口縁部である。口径は12.5cmを測る。接合するにも関わらず、隣り合う破片に二次焼成を受けたものとそうでないものが認められる。口縁部外面はハケメの後にやや疎な縦方向のヘラミガキ、口縁部内面は横方向のハケメ、体部外面は丁寧なヘラミガキ、体部内面はハケメの後にナデで仕上げられる。内外面とも淡い褐色・黒褐色を呈する。胎土は密だが、まれに5mm大のシャモットを含む。42は直口壺形土器の口縁部である。口径は推定で13.6cm。外面は縦方向のハケメの後、端部のみゆるいヨコナデ、内面は横方向のハケメの後、やや密な横方向のヘラミガキで仕上げられる。内外面とも淡い暗褐色・淡い褐色を呈する。胎土は密である。43は小型の二重口縁壺形土器の口縁部である。口径は推定で12.2cmを測る。内外面ともヨコナデで整えられる。口縁端は内側につまみ出されている。内外面とも、二次焼成によるものか、チョコレート色を呈する。胎土は密であるが、疎らに2mm大の黄灰褐色の粒が見られる。44は鉢形土器の口縁部である。口径は推定で20.5cmを測る。外面に単節LR横回転の縄文が2列と竹管状の工具による径6mmの円形刺突が巡る。内面は横方向のヘラミガキと赤彩が施される。外面は淡い黄褐色・暗褐色、内面は暗赤色を呈する。胎土は密で、まれに3mm大のシャモットを含む。45は壺形土器の口縁部である。口径は推定で18cm。拡張部外面には上下に単節RL横回転・同LRの縄文が、下端には縄文原体の押圧によるキザミが巡る。その上に縄文原体によるキザミを持つ棒状付文が2個1対で配され、口縁端面には単節LRの縄文が巡る。拡張部以下の外面は縦方向のヘラミガキと赤彩が、内面は主に横方向のヘラミガキと赤彩が施される。内外面とも淡い黄褐色・暗赤色を呈する。胎土は密である。46は壺形土器の頸部である。くびれの径は8cmである。外面下方には、無節Rに結び目が3つある原体によるS字状結節文に上を画された、上から単節LR横回転、同RL、同LRと、現状では3列の縄文が巡る。それ以外の場所は、主に横方向のヘラミガキが丁寧に施される。内面は上方が主に横方向の密なヘラミガキ、下方が工具によるナデで仕上げられる。くびれ内面はシボリのために波打っている。内外面とも上方が赤彩されており、外面は淡い暗赤色・淡い褐色、内面は暗赤色・暗褐色を呈する。47は複合口縁の壺形土器の頸部である。くびれの径は10.2cmを測る。破片化した後に二次焼成を受けたようである。外面は縦方向の細かいハケメ、内面はくびれ以上が横方向のハケメ、以下が単位の幅が最大4cmに及ぶ工具によるナデで仕上げられる。外面は淡い褐色・淡い暗褐色、内面は暗褐色を呈する。胎土は密である。48は壺形土器の口縁部である。口径は14cmを測る。破片により色調が大きく異なるため破片化してから二次焼成を受けたものと思われる。口縁部は肥厚され、端部はきついヨコナデによって内側に少し立ち上がり受け口状になる。肥厚部外面は横方向のハケメの後にヨコナデで、以下は縦方向のハケメの後に縦方向の工具によるナデで仕上げられる。内面は横方向のハケメの後、横方向のヘラミガキ

もしくは工具によるナデで仕上げられる。内外面とも淡い褐色・淡い暗褐色（被熱部分）を呈する。胎土は密だが、2mm大のシャモットを含む。49は壺形土器の口縁部である。口径は推定で16.2cmを測る。口縁部は肥厚され、肥厚部外面にはきついヨコナデによってできた稜が明瞭に認められる。内面には微妙な立ち上がりが見られる。以下の外面は縦方向のハケメの後、縦方向のやや密なヘラミガキで、内面は横方向のハケメの後に密な横方向のヘラミガキで仕上げられる。外面は淡い赤褐色・淡い暗褐色、内面は淡い褐色・暗褐色を呈する。胎土は密で、最大3mmのシャモットをまばらに含む。50は壺形土器の肩部である。直口の壺形土器のものである。外面はナデで、内面はくびれ付近が工具によるナデで仕上げられる。ナデの部分は面を成す。内面には接合痕が明瞭に残る。外面は赤彩が施される。外面は赤褐色、内面は淡い暗褐色を呈する。胎土は密であるが、まれに3mm大のシャモットを含む。51は複合口縁壺形土器の頸部である。くびれの径は推定で5cmを測る。二次焼成を受けた可能性がある。内面は横方向の工具によるナデで仕上げられる。外面は器表が荒れているため調整は不明である。外面は淡い褐色、内面は淡い暗褐色を呈する。胎土は密で、最大2mmのスコリア状粒がまばらに含まれる。52は大型の壺形土器肩部である。残存部の上の径は25.5cmを測る。文様のリズムを見る限り、同一と思われる原体によるS字状結節文が3列ずつ、上から単節LR横回転の縄文、同RL、同LRの縄文を上下に挟むかたちで巡る。結節文の方が斜縄文を切るようである。3列(上中下)の結節文のうち、上は無節Rの結節が二重になって形づくられているように見え、中・下は無節Lの結節である。縄文帯の上下にはそれを切るかたちで横方向のヘラミガキと赤彩が見られる。内面は横方向の工具によるナデで仕上げられる。外面は淡い黄褐色・暗赤色、内面は淡い黄褐色を呈する。胎土は密である。53は甕形土器の体部である。最大径は推定で24.4cmを測る。1／3より下の部分は被熱のために赤変し、薄く煤も付着する。外面は砂粒の移動を伴う縦方向の工具によるナデ、もしくはヘラケズリで、内面は下半が工具による密な放射状のナデ、上半がナデで仕上げられる。外面は淡い褐色・赤褐色・暗灰色、内面は暗褐色・黒褐色を呈する。胎土は密だが、1～3mm大のシャモット状赤褐色粒が普通に含まれる。54は甕形または壺形土器の体部である。最大径は推定で28.6cmを測る。体部外面は細かいハケメののちにやや疎なヘラミガキで、内面は工具によるナデで仕上げられる。外面は赤褐色・淡い黒褐色、内面は淡い褐色を呈する。胎土は密で、2mm大のシャモット状の赤褐色粒をまばらに含む。55は甕形土器の体部である。最大径は推定で26.4cmを測る。全体的に作りが粗い。隣り合う破片の間にも明瞭に色調等の違いが認められることから、破片化した後に二次焼成を受けたものと考えられる。外面は全面が主に左上がりのハケメで、内面は主に横方向の工具によるナデ・ナデで仕上げられる。外面は煤によって主に黒色・黒褐色、内面は淡い暗褐色・淡い黒褐色を呈する。胎土はやや粗で、1～2mm大の黄白色粒と1～3mm大のシャモット状暗赤褐色粒が普通に見られる。56

は壺形土器の下半である。底径7.4cm、現存最大径23cmを測る。破片化してから二次焼成を受けたようである。外面は左上がりのハケメの後にやや密な横方向のヘラミガキもしくは工具によるナデで、内面はナデと工具によるナデで仕上げられている。底部外面はヘラケズリが施される。内外面とも淡い褐色・黒褐色を呈する。胎土は密だが、まばらに3mm程度のシャモットが含まれる。57は壺形土器の底部である。底径5.2cmを測る。外面はハケメの後に縦方向の工具によるナデで、内面は不定方向のハケメで仕上げられる。外面は淡い褐色・黒褐色、内面は黒灰色を呈する。胎土は密で疎らに2mm大のシャモットを含む。58は手捏の土製品である。器とすれば口径2.4cm、器高3.1cmを測る。開口部を上とすれば、側面に一つ穴が穿たれている。表面には爪の跡が残る。淡褐色を呈し、胎土は密である。59は器状の土製品である。口径3cm、底径2.4cm、高さ2cmを測る。手捏成形でヘラミガキが施される。外面は黒褐色、内面は褐色を呈する。胎土は密である。60～62は土器片を再利用した砥石と考えられる。いずれも破断面を使用している。61は刀子などの利器を研いだ際のものと思われる細い切れ込みが見られる。63は軽石製の砥石である。7.6g。

第040号跡（第39図・図版17）

位置・形態 16M-04グリッドを主体に検出された。平面形態は隅丸方形を呈し、規模は一辺約2.5mである。ピット以外に炉跡などは検出されなかった。竪穴の深さは北壁14cm、西壁13cm南壁18cm、東壁10cmである。



第39図 040号跡

覆土 4層に分層された。暗褐色土を主体とし、全体にロームの混入量が多い。床面からやや浮いた位置に焼土が散布していた。

施設等 ピットは2つ検出された。P1が18cm、P2が8cmである。

出土遺物 遺物の出土量は微量である。弥生時代後期と、ハケメを伴う古墳時代前期の甕の土器片が出土しているが、図示できるものはない。時期は弥生時代後期と判断しておきたい。

第041号跡（第40図・図版18）

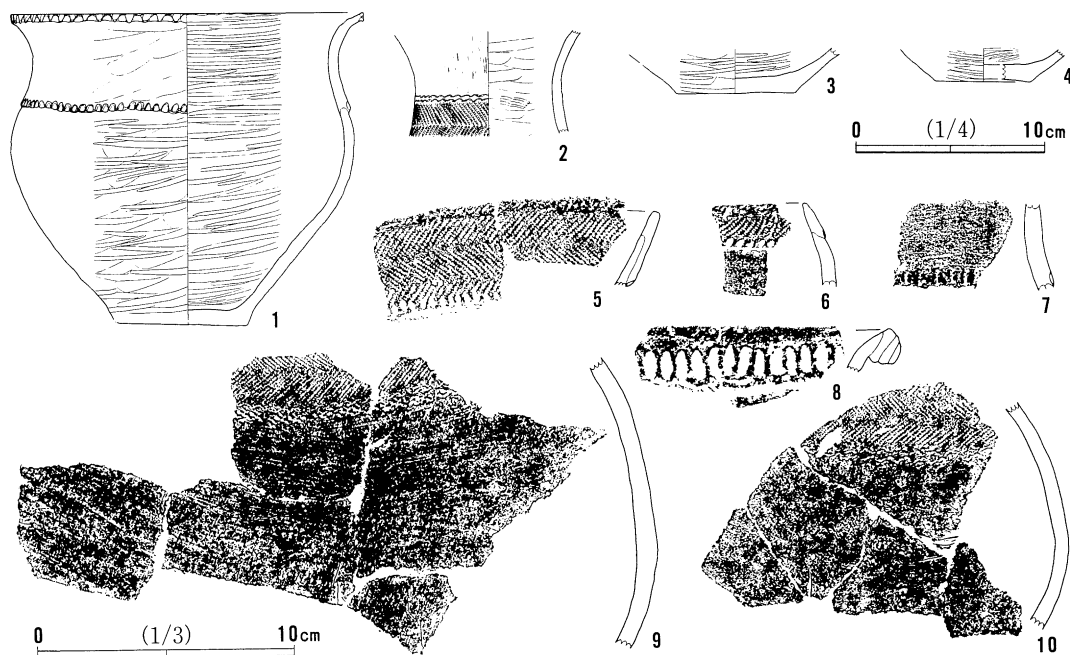
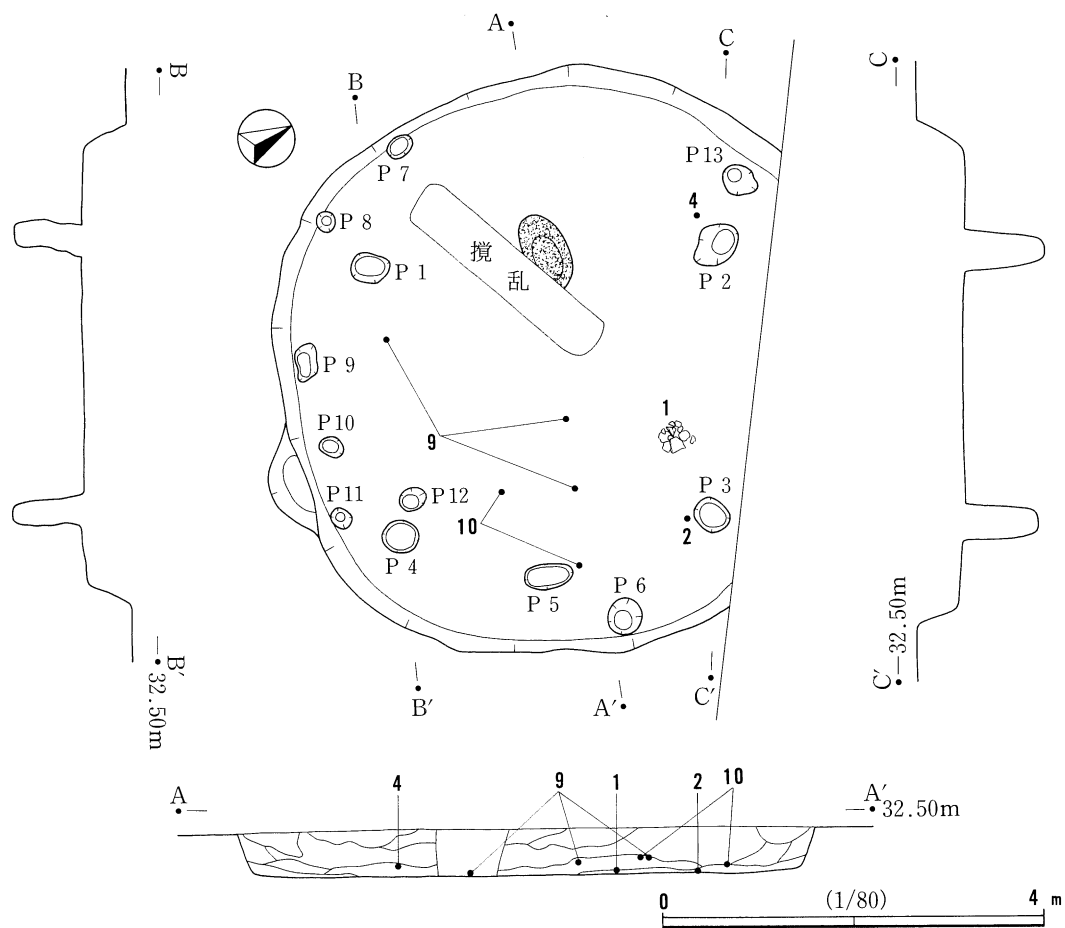
位置・形態 16L-78グリッドを主体に検出された。竪穴の北東側約5分の1が調査区外となっており未調査である。平面形態は楕円形を呈し、規模は長軸長6.1m、短軸長約5.7mである。主軸方位はN-65°-Wである。炉跡が北西寄りの床面から検出された。竪穴の深さは北西壁44cm、南西壁48cm、南東壁46cmである。

覆土 10層に分層された。暗褐色土を主体とし、床面近くでは炭化物や焼土粒の混入が認められ、壁際ではロームの混入量が多い。

施設等 ピットは全部で12個検出された。P1が74cm、P2が84cm、P3が81cm、P4が78cm、P5が28cm、P6が12cm、P7が8cm、P8が10cm、P9が23cm、P10が14cm、P11が11cm、P12が17cm、P13が10cmである。配置から見るとP1～P4が主柱穴と考えられる。P5は楕円形を呈し、出入口の梯子ピットと考えられる。P6はいわゆる貯蔵穴である。P7～P13はいずれも小ピットである。炉跡は一部攪乱によって壊されているが楕円形を呈すると思われる。長径約85cm、短径約50cmと推定される。10cm程度と浅く焼土の堆積は少ない。

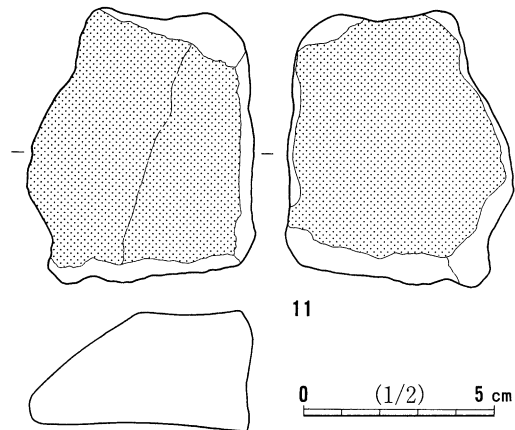
遺物出土状況 遺物の出土量は少なく、P3近くの床面に甕が検出された以外は散発的な出土に止まる。

出土遺物 1はほぼ完形の甕形土器である。口径18.5cm、胴部最大径18.1cm、底径7cm、器高16.4cmを測る。外面には、最大径以上に煤、以下には赤変が見られ、内面には底部より5cmほどの範囲に密にオコゲ状の付着物が見られる。口縁端は両方向からの押圧によるキザミ、肩部の段には縄文原体の押圧によるものと思われるキザミが巡る。頸部外面は工具による右上がりのナデ、段以下の外面は、いずれも横方向の、工具によるナデ・ヘラミガキが施される。内面はナデの後、口縁と底部に近づくほど密になる横方向のヘラミガキで仕上げられる。外面は黒褐色・淡い褐色・淡い明褐色、内面は淡い暗黄褐色・淡い褐色・黒褐色を呈する。胎土は密である。2は壺形土器の頸部である。くびれの径は推定で7.8cm。外面には、同じRの縄に結び目が2つある原体によるS字状結節文に上を画される、単節RL横回転、同LRの縄文が巡る。施文順はRL→LR→S字状結節文である。文様以上の外面は、横方向の工具によるナデの後、縦方向の密なヘラミガキで、内面は横方向の工具によるナデで仕上げられる。文様以上の内外面には



第40図 041号跡及び出土遺物

赤彩が施される。内外面とも暗褐色・暗赤色を呈する。胎土は密である。3は底部である。底径は6.5cm。内面に煤・コゲ状の付着物が見られることから、甕形土器である可能性がある。外面は工具によるナデの後ヘラミガキで、内面はナデ・ヘラミガキで仕上げられる。外面は淡い褐色、内面は黒色を呈する。胎土は密である。4は底部である。内面に赤彩が施されるから鉢形土器のものであろう。外面も赤彩された可能性がある。底径は推定で5cm。内外面とも工具によるナデの後、ヘラミガキで仕上げられる。外面は淡い褐色、内面は淡い褐色・暗赤色を呈する。胎土は密である。5は鉢形土器の口縁拡張部である。口径は推定で20cmを測る。外面は上から単節LR横回転、同RL、同LRの縄文が、口縁端面にも同LRの縄文が巡る。口縁部下端には縄文原体の押圧によるキザミが施される。内面は横方向のヘラミガキで仕上げられる。内外面とも淡い褐色を呈する。胎土は密である。6は鉢形土器の口縁部である。口縁部外面と口縁端面には単節LR横回転の縄文が巡る。口縁部半ばには径4mmの円孔が穿たれ、口縁部下端には工具によるキザミが巡る。以外の外面と内面は工具によるナデで仕上げられる。内面と、変則的であるが口縁部が赤彩される。外面は赤褐色・灰褐色、内面は暗赤色を呈する。胎土は密だが、まれに3mm大のシャモットを含む。7は甕形土器の体部である。内外面とも横方向の工具によるナデで仕上げられる。外面段下端には縄文原体の押圧によるキザミが巡る。内外面とも淡い褐色を呈する。胎土は密である。8は壺形土器の口縁部である。口径は推定で20cm。口縁部は外面に大きく拡張される。口縁部は工具によるナデで、内面は工具によるナデの後、横方向のヘラミガキで仕上げられる。口縁部下端には縄文原体の押圧によるキザミが巡り、内面には赤彩が施される。外面は暗褐色・淡い褐色、内面は淡い褐色と暗赤色を呈する。胎土は密である。9は壺形土器の体部である。同じ無節Rの縄に3つ結び目がある原体によるS字状結節文に下を画された単節RL横回転、同LRの縄文が巡る。以下の外面は、ハケメ状の調整痕を残す工具による横方向のナデ、横方向のヘラミガキで仕上げられ、赤彩される。内面は主に横方向の工具によるナデで仕上げられる。外面は淡い褐色・暗赤色、内面は淡い黄褐色・暗灰色を呈する。胎土は密であるが、スコリア状の微小粒が多く含まれる。10は壺形土器の体部である。上半に、同じ無節Rの縄に2つ結び目がある原体によるS字状結節文に下を画された単節LR横回転、同RL、同LRの縄文が巡る。以下は横方



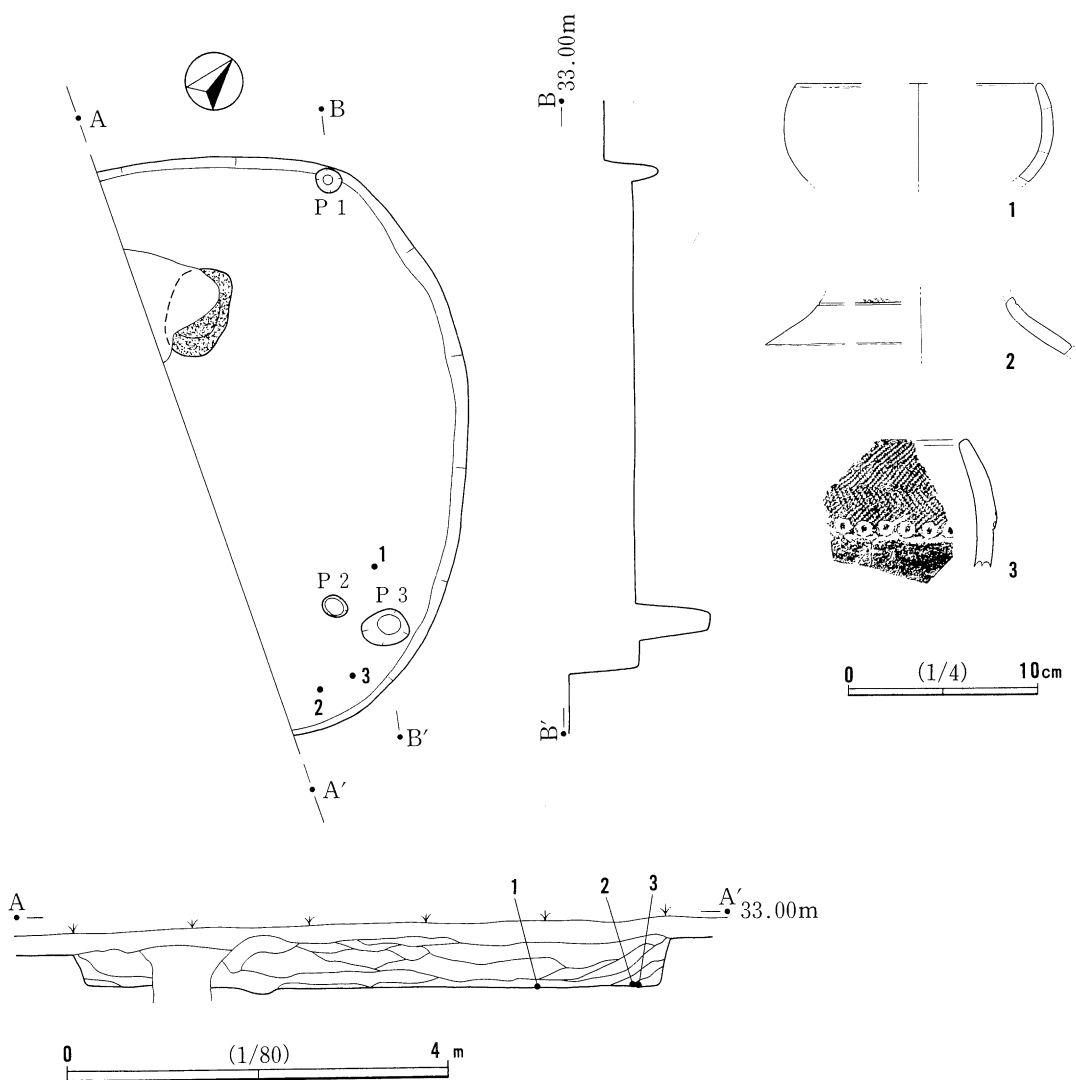
第41図 041号跡出土遺物

向のヘラミガキと赤彩が施される。内面は横方向のナデで仕上げられる。外面は暗赤色・黄褐色、内面は黄褐色を呈する。胎土は密である。11は軽石製の砥石である。重量は152.7g。

第042号跡（第42図・図版18）

位置・形態 17M-70グリッドを主体に検出された。竪穴の南西側約半分は調査区外となっており、未調査である。平面形態は楕円形を呈すると考えられ、規模は長軸長約6.1m、短軸長約5.6m、主軸方位はN-45°-W程度と推定される。竪穴の深さは北西壁28cm、南東壁44cm、北東壁33cmである。

覆土 覆土自体は13層に分層された。表土層近くは黒褐色土、中層以下は褐色土を主体とする。



第42図 042号跡及び出土遺物（3 1/3）

壁際ではロームの混入量が多くなる。

施設等 ピットは3つ検出された。P1が25cm、P2が70cm、P3が66cmである。配置から見るとP1は柱穴の可能性が高い。炉跡は攪乱によって壊されているが、楕円形を呈すると考えられる。長径は95cm、深さ15cmである。

遺物出土状況 遺物の出土量は微量である。P2、P3付近からややまとまって出土しているにすぎない。

出土遺物 1は鉢形もしくは高杯形土器である。口径は推定で12.8cmを測る。内外面ともナデで仕上げられる。外面下方には煤が付着する。外面は淡い明褐色・黒褐色、内面は淡い黄褐色を呈する。胎土は密である。2は壺形土器の肩部である。外面上部には、下を沈線に画された単節RL横回転の縄文の一部が残り、下部にも沈線がある。沈線の間は横方向の工具によるナデの後、密なヘラミガキで、内面は工具によるナデで仕上げられる。文様の間は赤彩される。外面は黄褐色・暗赤色、内面は黄褐色を呈する。胎土は密である。3は鉢形土器の口縁部である。口縁部が外面に肥厚される。口縁部には上から単節LR横回転の縄文が2列、同RL、同LRが各1列と変則的に施される。口縁部下端には凹部分内に節状のパターンの見られる、径5mmの円形刺突が巡る。以下の外面は横方向の工具によるナデで、内面はナデの後ヘラミガキで仕上げられる。口縁部以下の外面と内面には赤彩が見られる。外面は淡い褐色・淡い暗赤褐色、内面は淡い暗赤褐色を呈する。胎土は密で、最大3mmのシャモットをまばらに含む。

第044号跡（第43図・図版19）

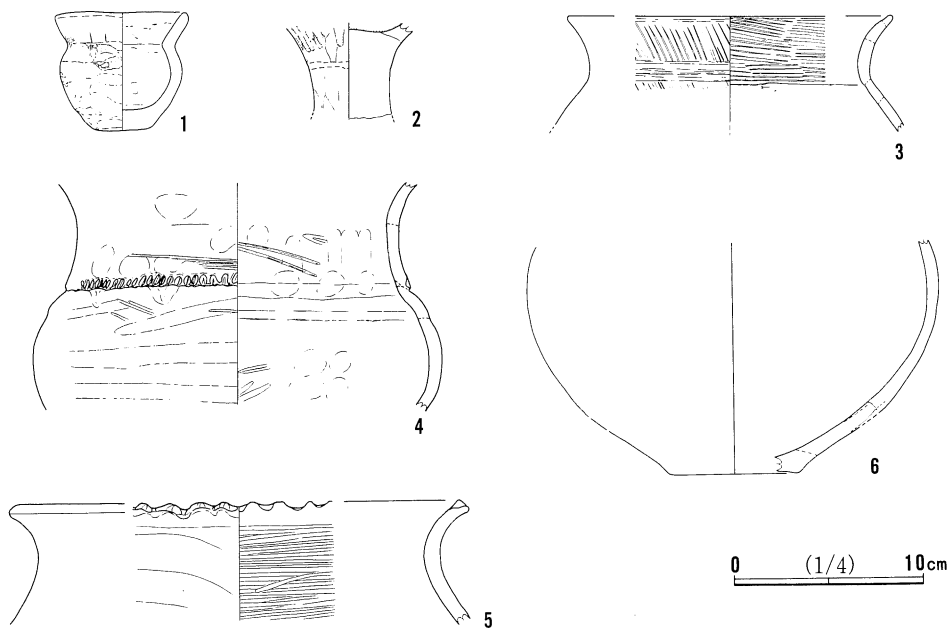
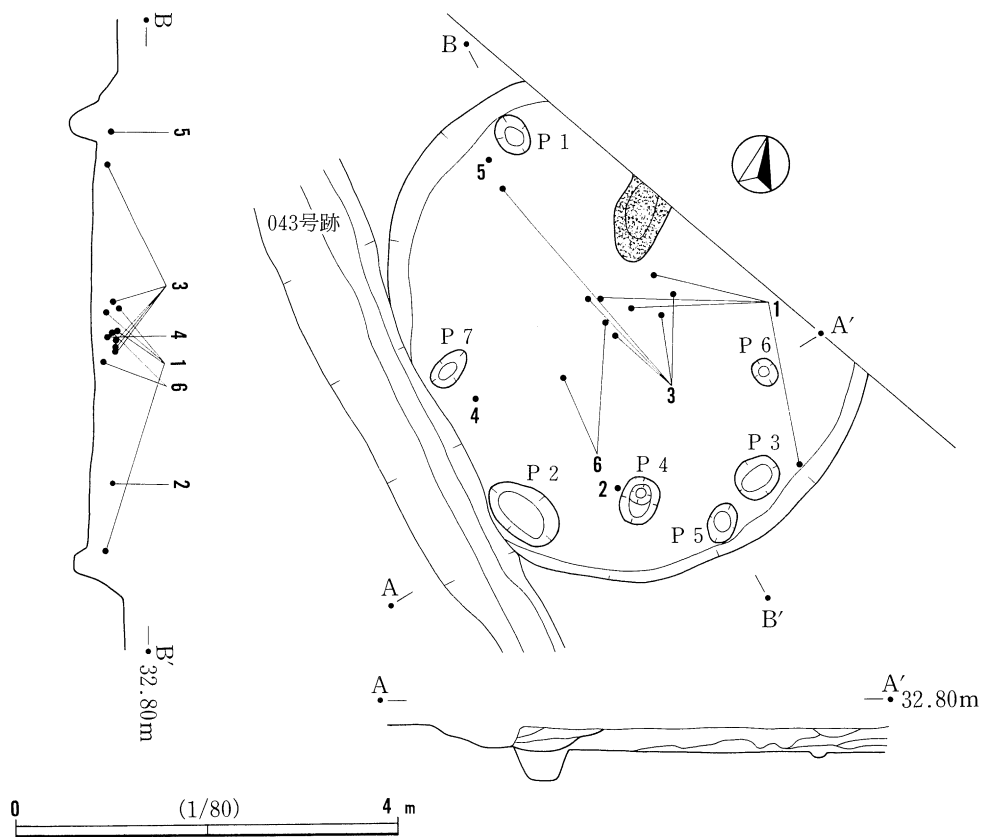
位置・形態 17M-27グリッドを主体に検出された。竪穴の北東側約4分の1は調査区外となっており、未調査である。また、平面図上で見るとわずかであるが、竪穴の南西の壁際は溝状遺構の043号跡によって覆土上層が大きく削られている。平面形態は楕円形を呈すると考えられ規模は長軸長約5.4m、短軸長約5.0mと推測される。主軸方位はN-12°-Wあたりと考えられる炉跡が北側に寄った床面から検出されたが一部が調査区外にかかっている。竪穴の深さは西壁16cm、南壁22cmである。

覆土 5層に分層された。暗褐色土を主体とし、壁際ではロームの混入量が増える。

施設等 ピットは全部で7つ検出された。P1が27cm、P2が32cm、P3が25cm、P4が29cm、P5が22cm、P6が5cm、P7が13cmである。配置から見ると壁際に寄っているもののP1～P3が支柱穴と考えられる。P4は出入口の梯子ピット、P5はいわゆる貯蔵穴と判断される。炉跡は楕円形を呈し短径60cm、深さ10cmである。焼土の堆積はあまり多くない。

遺物出土状況 遺物は竪穴の中央床面からまとまって出土しているが、量的には少ない。

出土遺物 1は小型の土器である。くの字状口縁を持つ甕形土器を模したミニチュアであろう



第43図 044号跡及び出土遺物

か。口径6.8cm、底径3.3cm、器高6.2cmを測る。口縁は若干内湾する。外面はハケメの後、口縁部は横方向の工具によるナデ、以下はナデとヘラミガキで、内面は工具によるナデとくびれ付近の一部がヘラミガキで仕上げられる。くびれ外面には縦方向のハケメが残る。外面は淡い褐色、内面は淡い褐色・暗褐色を呈する。胎土は密である。2は台付鉢形土器の脚柱部である。くびれの径は3.9cmを測る。脚柱外面には幅4mmの貼り付け凸帯の剥がれた跡が巡る。外面は縦方向の工具によるナデの後にヘラミガキで、内面も工具によるナデとヘラミガキで仕上げられる。凸帯以上の外面と内面には赤彩が施される。外面は淡い黄褐色・淡い暗赤色、内面は暗赤色を呈する。胎土は密である。3は甕形土器の口縁部である。口径は18cmを測る。外面は左上がりのハケメの後、横方向の工具によるナデで、内面は、口縁部が横方向のハケメ、以下が工具によるナデで仕上げられる。くびれは外面が特に緩い。口縁端部はきついヨコナデにより軽くつまみ出される。内外面とも淡い褐色を呈する。胎土は密である。4は甕形土器の体部である。推定で、口径19cm、くびれ径17cm、胴部最大径21.7cmを測る。くびれは工具によるナデ・ナデで、ヘラ状工具の押圧によるキザミが密に巡る。くびれ下端の段以下は、横方向の工具によるナデの後、疎らなヘラミガキで仕上げられる。くびれ外面と内面には指頭圧痕が、くびれの下方にはシボリ痕が見られる。内面はナデと工具によるナデで仕上げられる。外面下半の一部に煤の付着が認められる。外面は暗褐色・黒褐色、内面は淡い褐色を呈する。胎土は密である。5は甕形土器の口縁部である。口径は推定で23.2cm。口縁端は両方向からの押圧により波状を呈し、くびれ外面は工具によるナデで、内面は工具によるナデの後、横方向の密なヘラミガキで仕上げられる。外面は暗い灰褐色、内面は黄灰褐色・暗灰色を呈する。胎土は密である。6は壺形土器の下半である。底径は推定で6.8cmを測る。外面は工具によるナデの後ヘラミガキで、内面は横方向のハケメもしくは工具によるナデの後底部に近いほど密なヘラミガキで仕上げられる。外面は淡い黄褐色・淡い褐色で、内面は暗灰色・黒灰色で仕上げられる。胎土は密である。

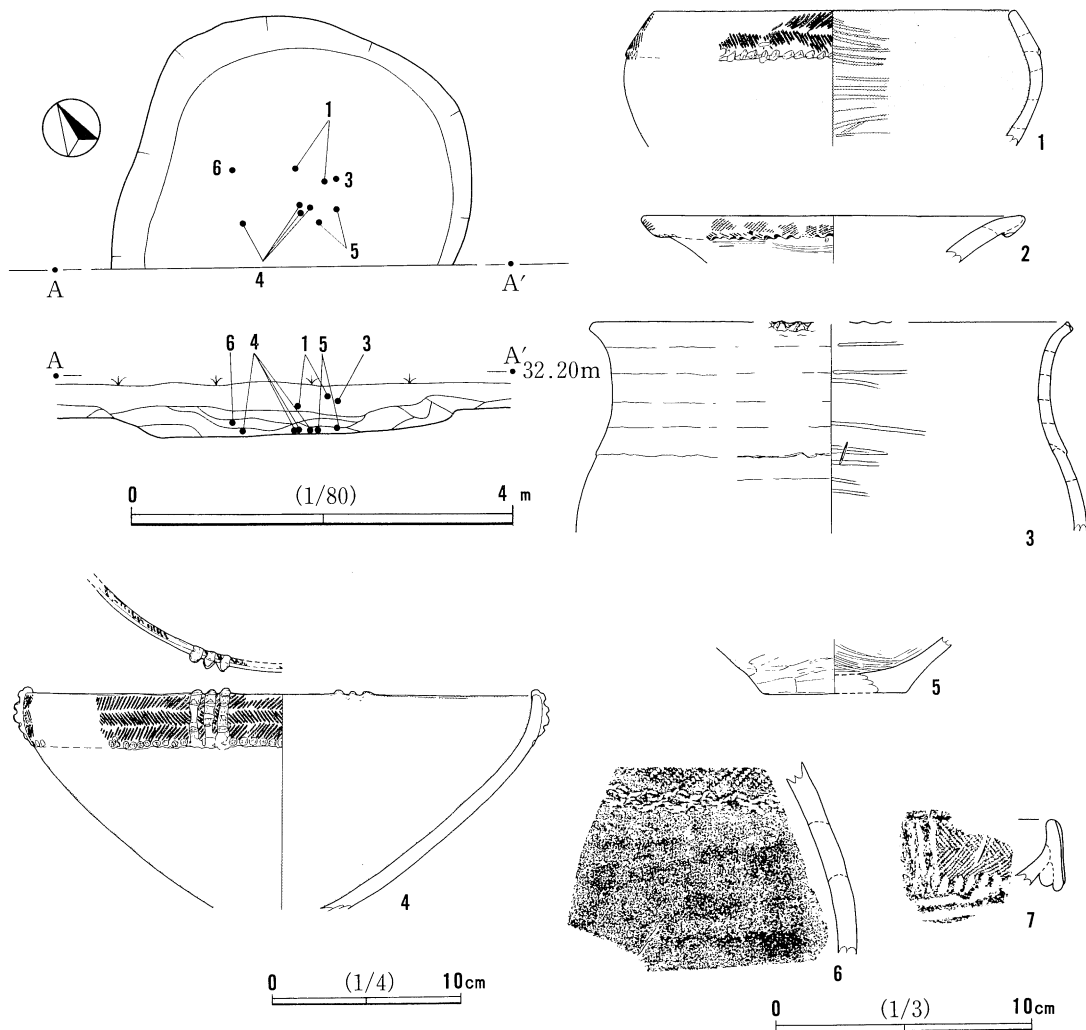
第045号跡（第44図・図版19）

位置・形態 17N-07グリッドを主体に検出された。竪穴の南西側約3分の1は調査区外となっており、未調査である。平面形態はほぼ円形を呈すると考えられ、規模は直径約3.6mである。壁の立ち上がりはゆるく、ピットや炉跡が検出されないなど他の竪穴に比べ貧弱である。竪穴の深さは北壁11cm、東壁13cmである。

覆土 直接の覆土は、暗褐色土を主体とする5層に分層され、全体にロームの混入量が多い。

施設等 ピット、炉跡は検出されておらず、床面の硬化も認められなかった。

遺物出土状況 竪穴の中央にまとまって検出されたが、ほとんどの遺物が床面からやや浮いた



第44図 045号跡及び出土遺物

状態で検出されている。

出土遺物 1は鉢形土器の上半である。口径は推定で19cmを測る。口縁部は若干肥厚する。口縁部外面には単節LR横回転、同RLの縄文が巡り、下端にはヘラ状工具によるキザミが施される。口縁部以下の外面と内面は、工具によるナデの後に横方向のヘラミガキで仕上げられ、赤彩される。内外面とも褐色・赤褐色を呈する。胎土は密だが、まばらに最大5mmのシャモットを含む。2は壺形土器の口縁部である。口径は推定で20cm。口縁部には単節LR横回転の縄文が巡り、下端に縄文原体の押圧によるキザミが巡る。以下の外面と内面は工具によるナデで仕上げられる。外面は淡い暗褐色、内面は暗褐色・淡い褐色を呈する。胎土は密である。3は甕形土器の体部である。推定で、口径25cm、くびれ径23cm、胴部最大径27cmを測る。口縁端は両方向から

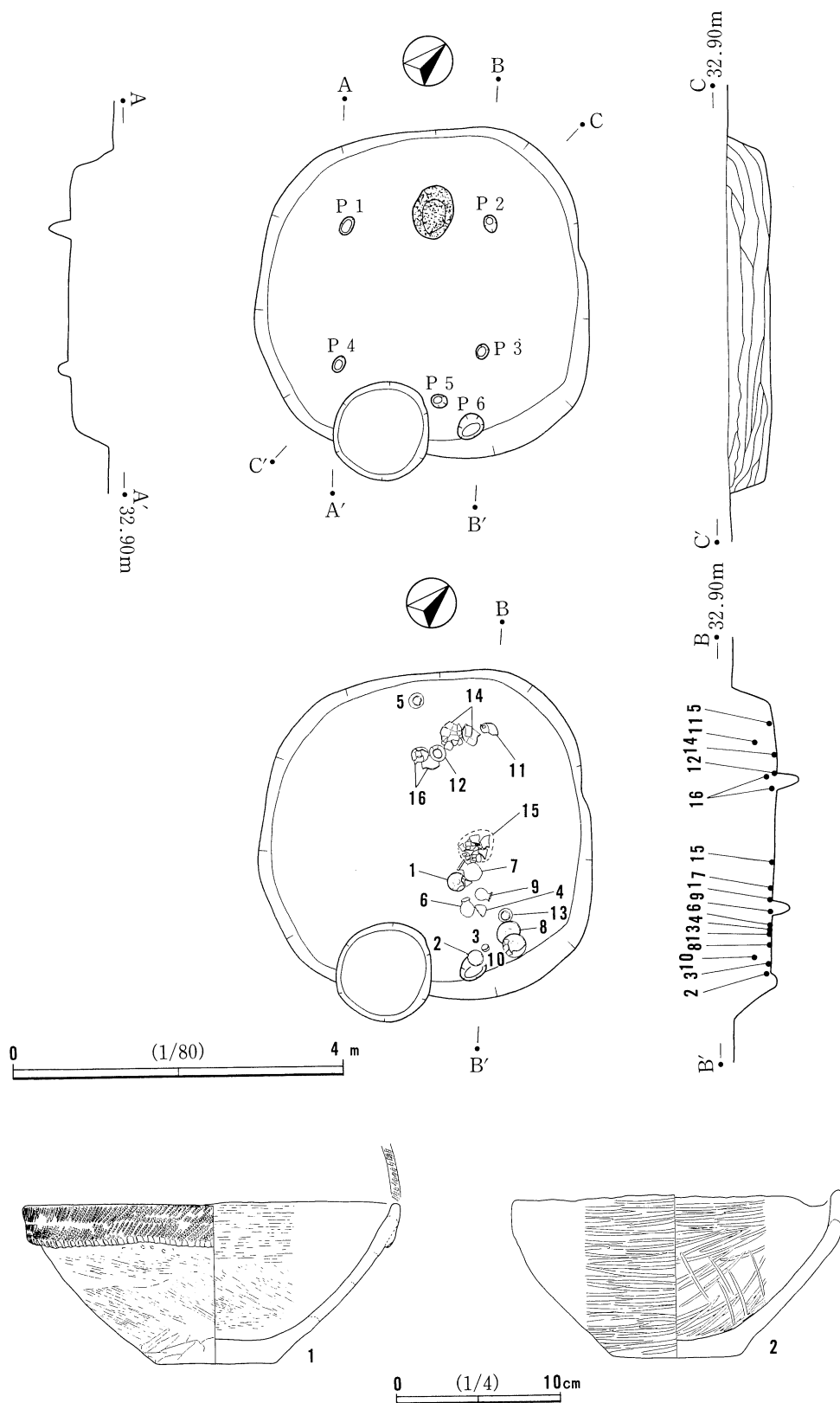
のキザミが交互に配される。くびれ外面は横方向の工具によるナデ、くびれ下端の段以下はナデで、内面はナデと工具によるナデの後に、疎らな横方向のヘラミガキで仕上げられる。外面は淡い褐色、内面は濃い淡褐色を呈する。胎土はやや粗で、まばらに1mm大のシャモット状の粒が見られる。4は台付鉢形土器の鉢部である。口径28cm、高さ11.4cm、底径7cmを測る。口縁部外面が肥厚する。口縁部には、上から、単節LR横回転、同RL、同LR、口端面には同RLの縄文が巡り、下端には縄文原体の刺突による円形のキザミが連続して施される。また、それらを切るかたちで縄文原体によるキザミを持つ3個一対の棒状付文が11cmおきに配される。口端以下の外面は、口縁部下4cmぐらいまでが主に横方向のヘラミガキ、それより下が主に縦方向のヘラミガキで、内面は横方向のヘラミガキで仕上げられる。ヘラミガキに先立つ調整は丁寧に消し去られて判別できない。口縁部以下の外面と内面全体には赤彩が施される。器表の一部には二次焼成によるものと思われる赤彩部分の変色・退色が認められる。外面は淡い黄褐色・淡い明褐色・淡い暗赤色、内面は黄灰色・淡い褐色・暗赤色を呈する。胎土は密である。5は底部である。破断面の外面側が赤変していることから甕形土器のものと考えられる。内面には煤状になった炭化物が付着する。底径は7.5cm。外面は、工具によるナデもしくはヘラケズリで、内面はナデの後、やや密なきついヘラミガキで仕上げられる。外面は赤褐色・暗褐色内面は黒褐色を呈する。胎土は密である。6は壺形土器の体部である。下を無節Rに2段の結節がある原体によるS字状結節文によって画された、単節LR横回転の縄文が巡る。文様以下の外面は赤彩される。内面は器壁が荒れており調整は不明である。外面は暗赤色、内面は黄灰色を呈する。胎土はやや粗である。7は壺形土器の口縁部である。口径は推定で18cm。口縁は外面に肥厚される。口縁部には単節RL横回転の縄文、同LR、棒状付文が施され、下端には縄文原体によるものか、押圧によるキザミが巡る。内面はヘラミガキで仕上げられる。外面は黄灰色・暗い灰褐色、内面は淡い褐色を呈する。胎土は密である。

第046号跡（第45図・図版19・20）

位置・形態 18N-20グリッドを主体に検出された。時期不明の土坑によって南側の壁と床面の一部が壊されている。土坑は直径1.3mの円形に近い隅丸方形を呈し、覆土の状況から中近世以降の新しいものではないと考えられる。竪穴の平面形態は隅丸方形を呈し、規模は一辺約4.0mである。主軸方位はN-45°-Wで、炉跡は北西に寄った床面から検出されている。竪穴の深さは北西壁52cm、南西壁56cm、南東壁62cm、北東壁39cmである。

覆土 11層に分層された。上層が黒褐色土、中層以下ではロームの混入量が多くなる。床面近くでは焼土が混入し、炭化材も若干出土している。

施設等 ピットは全部で6つ検出された。P1が28cm、P2が27cm、P3が22cm、P4が16cm、P5が13

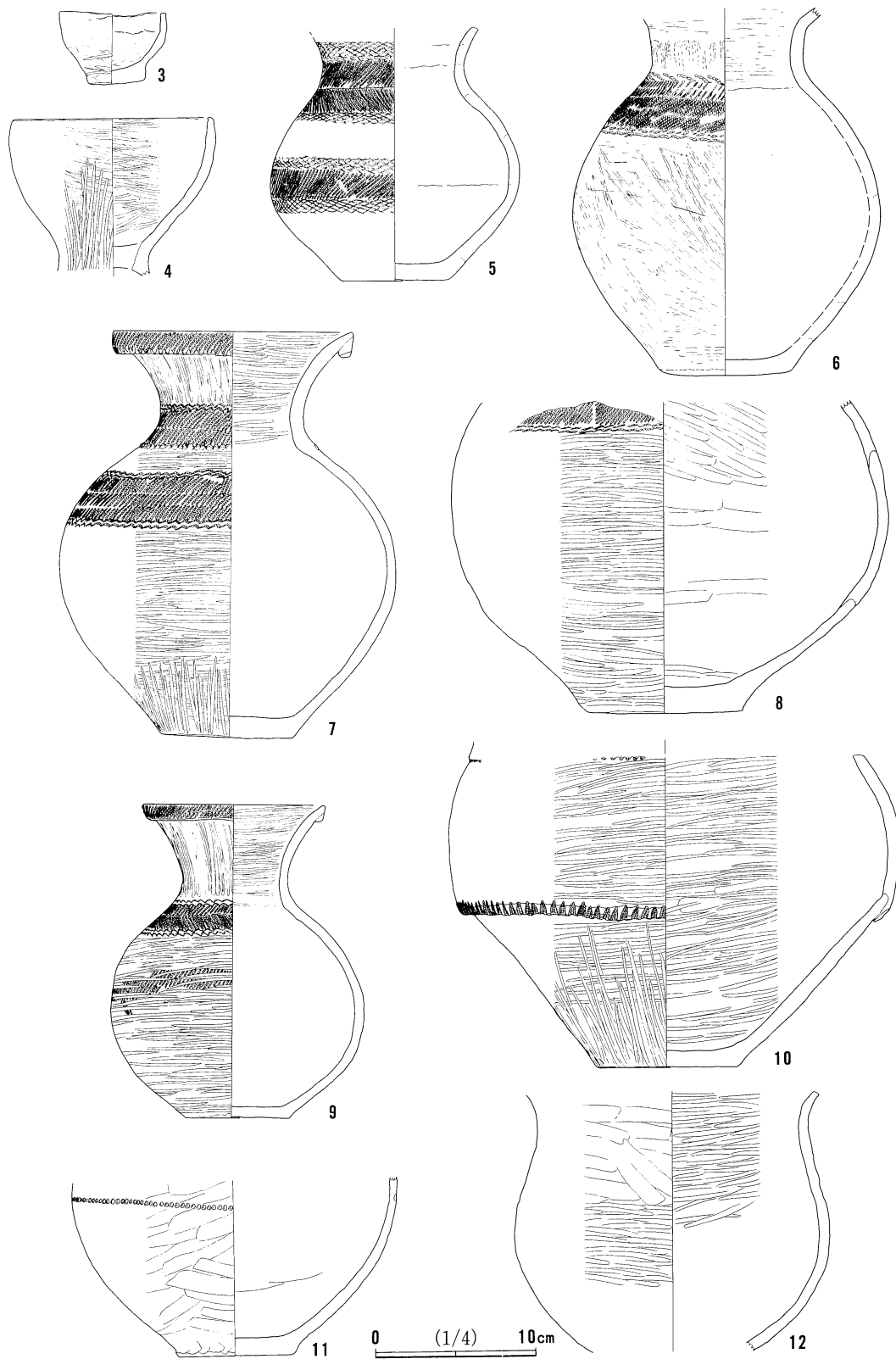


第45図 046号跡及び出土遺物

cm、P6が13cmである。配置から見ると浅いピットではあるが、P1～P4が支柱穴と考えられる。P5は出入口用の梯子ピットと考えられる。P6はいわゆる貯蔵穴であろう。炉跡は楕円形を呈し、長径62cm、短径46cm、深さ5cmである。焼土の堆積は少ない。

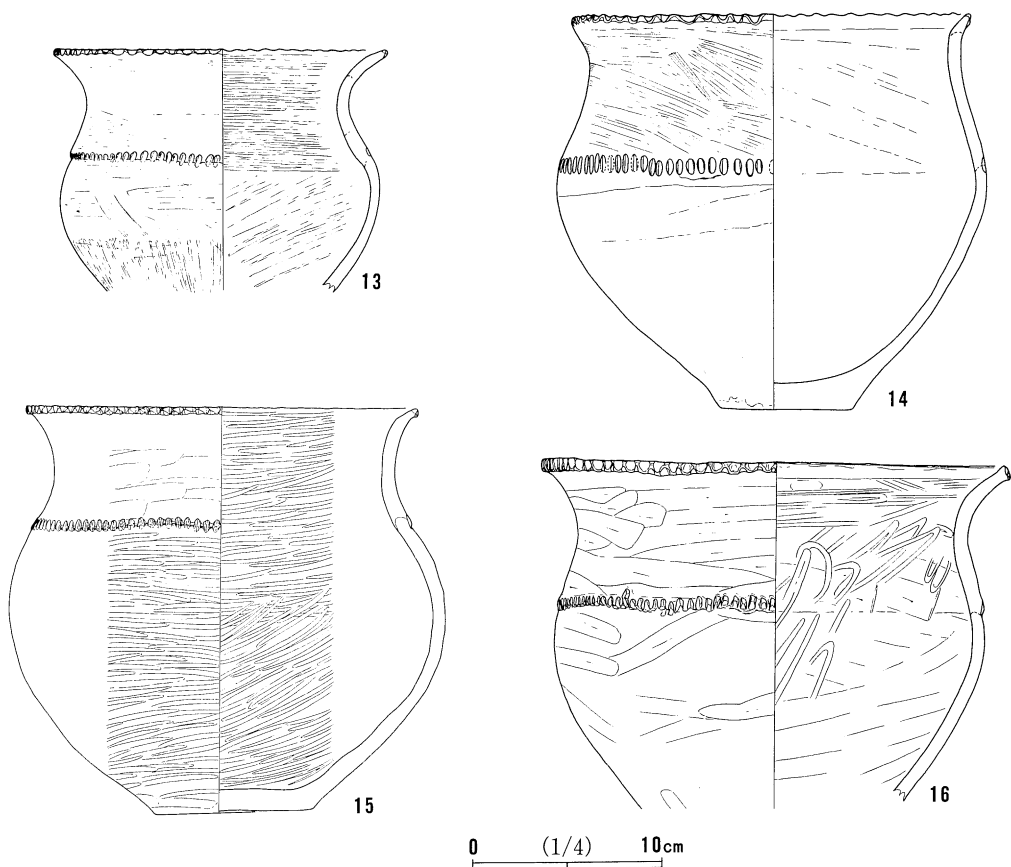
遺物出土状況 完形ないし完形に近い状態の土器が出土している。出土レベルにはばらつきがあり、床面から検出されたもの、覆土中位で検出されたもの、遺構検出面の覆土上位のものがある。

出土遺物 1はほぼ完形の鉢形土器である。口径22.1cm、底径7.6cm、器高9.9cmを測る。口縁外面が肥厚する。口端面には単節LR、口縁部外面には単節LR横回転の縄文が2列巡る。口縁外面の単節縄文は原体の閉端を利用して施文されたために、上の列のものは下に、下の列のものは上に横方向の稜線が伴う。施文の順序は上→下である。口縁下端には板状工具の押圧による扁平なキザミが巡る。口縁以下の外面と内面は工具によるナデの後、主に横方向のヘラミガキで仕上げられる。口縁部と底面を除いて赤彩される。調整は丁寧だが成形が粗く、器壁に凹凸、接合痕が見られる。内外面とも部分的に煤状の黒い部分が見られ、隣接する破片でもその有無が異なるところもあるので、破片化してから二次焼成を受けた痕跡と考えられる。外面は暗い赤褐色・黒褐色・淡い褐色、内面は暗い赤褐色・淡い褐色を呈する。胎土は密である。2は鉢形土器である。破断面が研磨され口縁端が形作られている。内外面が共に赤彩されていることから、口縁部が肥厚する鉢形土器の口縁部が破損したものを再加工したと考えられる。内外面とも工具によるナデの後、密なヘラミガキで仕上げられる。外面は淡い黄褐色・暗赤色・黒褐色、内面は淡い黄灰褐色・淡い暗赤色・暗灰色を呈する。胎土は密だが、まばらに最大6mmのシャモットを含む。3はほぼ完形の小型の土器である。鉢形土器のミニチュアであろうか。口径6.6cm、底径3.7cm、器高4.5cmを測る。口縁端は平坦で、ヘラ状の工具で切られた跡をなでたような形状である。内外面とも主に指圧と工具によるナデで仕上げられる。内面口縁下には接合痕が未調整で残る。全体的に作りが粗い。内外面とも淡い黄褐色・淡い暗褐色を呈する。胎土は密である。4は台付鉢形土器の鉢部である。口径は楕円形にゆがんでいる。口径は長径13.2cm・短径12.5cm、胴部最大径12.9cm、脚柱径5.5cm、現存高9.8cmを測る。外面上方と内面は工具による主に横方向のナデの後に密なヘラミガキで、外面下方は工具によるナデの後に縦方向のヘラミガキで仕上げられる。口縁端は工具で切られた後にヨコナデで整えられ、口縁は若干内湾している。内外面とも淡い褐色・褐色を呈する。胎土は密で、まばらに0.5mm大の褐色の粒が含まれる。5は口縁部を欠失するほぼ完形の壺形土器である。くびれの径7.8cm、胴部最大径15.8cm、底径6.6cm、現存高15.8cmを測る。外面には網目状撚糸文に挟まれる単節縄文が施される。くびれの単節縄文は上がLR横回転、下が同RLで、下の方が原体閉端を上にして施文されている。最大径の単節縄文はLR横回転である。単節縄文の後に網目状撚糸文が施される。他の外



第46図 046号跡出土遺物

面は工具によるナデの後、主に横方向のヘラミガキで仕上げられる。内面は工具によるナデの後、くびれ以上に横方向のヘラミガキが施される。外面は縄文帯の間と下の帯以下、内面はくびれまでに赤彩が認められる。外面は橙褐色・黄褐色・暗赤色・黒褐色、内面は暗褐色・暗い赤褐色・淡い褐色を呈する。胎土は密だが、1mm大の黒色の粒が多く含まれる。6は口縁を欠失したほぼ完形の壺形土器である。くびれの径9.4cm、胴部最大径19.2cm、底径8.1cm、現存高23cmを測る。くびれ直下から肩にかけて結節文に挟まれる縄文が巡る。上から、無節Rの縄に結び目のある原体によるZ字状結節文、緩い撚りの無節L横回転または単節LR横回転の緩い縄文、閉端が上向きの単節LR横回転の縄文、単節LR横回転の縄文、下端に無節Rの同じ縄に結び目が2つある原体による結節文、と配される。外面は主に横方向の工具によるナデの後に縄文が施され、主に縦方向の密なヘラミガキで仕上げられる。内面は頸部が横方向の工具によるナデの後に、横方向のヘラミガキで、以下は工具によるナデとナデで丁寧に仕上げられる。外面は淡い暗黄褐色・淡い黒褐色・暗い灰褐色、内面は暗灰色・暗褐色を呈する。胎土は密だが、スコリア状の最大0.5mmの褐色粒が多く、最大5mmのシャモット状粒がまばらに含まれるのが特徴的である。7は口縁部がごく一部欠けるだけの壺形土器である。口径14.8cm、胴部最大径21cm、底径8.1cm、器高25.3cmを測る。拡張部には単節LR横回転の縄文、下端には鋭い先端を持つ工具の押圧によるキザミが巡る。くびれ下方には、上を無節Rの縄に2つ結び目のある原体によるS字状結節文、下を工具の押圧によるキザミに挟まれた、単節LR横回転の縄文2列が施される。上の単節LRは閉端を下に向けて、下のLRは上に向けて施文される。肩部には、上下を、無節Rの縄に2つ結び目のある原体によるS字状結節文に挟まれる、単節LR横回転の3列が巡る。1列目は閉端を下に向けて施文されている。くびれの文様は下の単節→上の単節→結節文・キザミ、肩部の文様は上の単節→中の単節→下の単節→S字状結節文の順で施文される。外面は主に横方向の工具によるナデの後、頸部と底部付近が縦方向のやや疎なヘラミガキ、以下が主に横方向のヘラミガキで、内面は、くびれ以上が工具によるナデ・ナデの後に、横方向のやや疎なヘラミガキで、以下が丁寧なナデで仕上げられる。外面は明褐色・淡い暗黄褐色・黒灰色、内面は淡い暗褐色・淡い褐色を呈する。胎土は密である。8は上半を欠失した壺形土器である。胴部最大径27.3cm、底径9.6cm、現存高19.5cmを測る。外面上端には単節LR横回転の縄文が巡り、その下は、Rの縄を結んだ原体によるS字状結節文2帯に画される。外面は左上がりの工具によるナデの後、密な横方向のヘラミガキで、内面はナデと工具によるナデで仕上げられる。内面の接合痕以上は砂粒の移動が見られる。内外面ともに淡い黄灰褐色・赤褐色・淡い暗褐色を呈する。胎土はやや粗く、1mm大の砂粒を多く含む。9は口縁の一部を欠失した壺形土器である。口径11.4cm、胴部最大径15.8cm、底径6.5cm、器高19.6cmを測る。口縁部は外面に肥厚する。口縁部外面には単節LRの縄文が巡る。肩部上方にはRの縄に結び目が2つある原体による結節文

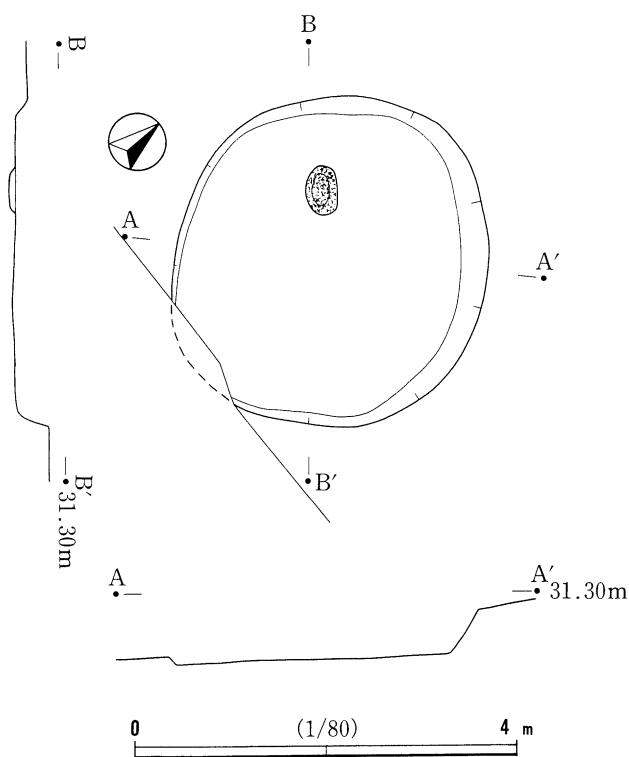


第47図 046号跡出土遺物

に挟まれる、単節LR横回転、同RLの縄文が施される。下段のRLは上端の節に一定のゆがみが見られ、縄の閉端側を利用したものと考えられる。施文順序は中の単節LR縄文が先で、結節文が後である。口縁からくびれにかけては縦方向の工具によるナデの後、縦方向のヘラミガキで、肩部以下は主に横方向の工具によるナデの後、横方向の密なヘラミガキで仕上げられる。内面はくびれまでが横方向の工具によるナデの後、横方向のヘラミガキ、以下は丁寧なナデ・工具によるナデが施される。外面胴部最大径付近には、単節LR横回転の縄文が右上がりに施されるが、後からヘラミガキによって消されている。体部下半には、煤か焼成時の黒斑かは不明であるが、黒ずんだ部分が1/3ほど広がる。外面は淡い黄褐色・黄灰色・淡い暗灰色、内面は淡い黄褐色を呈する。胎土は密である。10は装飾を持つ甕形土器の下半である。胴部最大径28cm、底径8.9cm、残存高19.4cmを測る。外面には煤状の付着物が認められる。下半は直線的に開く鉢形土器のようなプロポーシオンである。鉢部分とそれ以上の間には段があり、その外面の稜に単節LRの縄文原体の押圧によるキザミが巡る。上端部には、くびれへと移行する部分にあった段

に施されたと考えられる、下の段のものと同一キザミの一部が認められる。外面は「鉢」部の上半以上が、主に横方向の工具によるナデの後にまばらなヘラミガキで、底部付近が工具によるナデの後に縦方向のヘラミガキで仕上げられる。内面は主に横方向の工具によるナデの後にヘラミガキが施される。キザミの大部分を除く底部より6 cm以上に内外面とも赤彩が見られる。外面は暗赤色・黒褐色・黄褐色、内面は暗赤色・暗い黄灰褐色・黒褐色を呈する。胎土は密で、多く含まれる淡い褐色の細粒が特徴的である。11は壺形土器の下半と思われる。現存最大径20.3 cm、底径7.3 cmを測る。隣接する破片に色調の異なるものが見られることから、破片化した後に二次焼成を受けたものと考えられる。内外面とも工具による丁寧なナデで仕上げられる。外面の最大径付近には、縄文原体による密な刺突が傾いて巡る。外面には煤・赤変部分、内面にも黒色の炭化物状の付着物・赤変部分が見られる。内外面ともに褐色・暗い黄褐色・黒灰色を呈する。胎土は密である。12は底部と口縁部の一部を欠失した甕形土器である。くびれ径16.9 cm、胴部最大径19.7 cmを測る。このプロポーションに通有の、くびれと胴部の間にある段が見られないことが特徴的である。外面は若干左上がりの工具によるナデがきつく施されており、胴部以下はその後にヘラミガキで仕上げられた可能性がある。内面は主に横方向の工具によるナデの後、同じく横方向のヘラミガキで仕上げられる。内外面とも淡い黄褐色・赤褐色を呈する。胎土はやや粗く、器壁には小さな剝離痕が多く見られる。13は底部付近の欠失した甕形土器である。口径17.5 cm、胴部最大径16.9 cm、現存高12.9 cmを測る。外面の胴部最大径に煤の付着が認められる。付近口縁端に上下両方向からの工具の押圧によるキザミが、くびれ下端にヘラもしくは棒状工具の押圧によるキザミが巡る。くびれ外面から胴部最大径にかけては横方向の工具によるナデで、以下はその後に縦方向のやや密なヘラミガキで仕上げられる。内面は、口縁付近くびれまでが横方向の密なヘラミガキで、以下は右上がりの底部に近づくほど密なヘラミガキで仕上げられる。外面は淡い褐色・淡い暗褐色・黒褐色、内面は褐色・淡い褐色を呈する。胎土は密である。14はほぼ完形の甕形土器である。口径21.4 cm、胴部最大径22.1 cm、底径7 cm、器高20.9 cmを測る。隣接する破片に大きく色調等の違うものが見られることから破片化した後に二次焼成を受けたと考えられる。口縁端には二方向からの工具の押圧によるキザミが、最大径より少し上のくびれ下端の段には端部の丸い工具によるキザミが巡る。外面はくびれが若干左上がりの工具によるナデで、段以下は上方が主に左下がりの工具によるナデで、底部付近が縦方向の工具によるナデで、内面は工具によるナデで仕上げられる。くびれは内外面とも部分的に輪積み痕が残っている。内外面とも淡い褐色・淡い暗褐色を呈する。胎土はやや粗で、まばらに2 mm大の礫を含む。15はほぼ完形の甕形土器である。口径20.4 cm、胴部最大径23 cm、底径8.3 cm、器高21.5 cmを測る。隣接する破片に色調の大きく異なる場合が多く認められることから、破片化した後に二次焼成を受けたものと考えられる。口縁端には二方向からの、くびれ下

端の段には一方からの、棒状工具の押圧によるキザミが巡る。キザミに挟まれる部分は工具による横方向のナデとごく一部がその後のヘラミガキで、以下はその後の横方向のヘラミガキで、内面はナデもしくは工具によるナデの後、主に横方向の密なヘラミガキで仕上げられる。内外面とも淡い黄褐色・黒褐色・暗褐色を呈する。胎土は密である。16は底部を欠失した甕形土器である。口径24.1cm、胴部最大径22.5cm、くびれ径20.7cm、残存高20.7cmを測る。口縁端には、二方向からの、くびれ下端の段には一方からの棒状工具の押圧によるキザミが巡る。外面は工具によるナデ、内面は工具によるナデの後に、主にくびれ以上の部分にやや疎らなヘラミガキで仕上げられる。胴部下半には煮沸によるものと思われる、煤と二次焼成の跡が認められる。内外面ともに淡い褐色・淡い暗褐色・黒褐色を呈する。胎土は密である。



第48図 047号跡

第047号跡（第48図・図版21）

位置・形態 12J-73グリッドを主体に検出された。竪穴の南側一部は確認調査の際に失われてしまった。平面形態は円形に近い隅丸方形を呈し、規模は長軸3.6m、短軸3.2mである。主軸方位はN-52°-Wで、炉跡は北西寄りの床面に検出された。竪穴の深さは北西壁16cm、南西壁7cm、南東壁17cm、北東壁45cmである。

覆土 4層に分層された。暗褐色土を主体とする。

施設等 ピットは検出されなかった。炉跡は楕円形を呈し、長径52cm、短径34cm、深さ7cmである。

出土遺物 遺物の出土量は極めて少なく、図示できるものはない。すべて弥生時代後期後葉の土器片で占められており、平面形態からも弥生時代後期の竪穴と考えられる。

第048号跡（第49図・図版21）

位置・形態 15L-51グリッドを主体に検出された。竪穴の南側約3分の1は調査区外となっており、未調査である。平面形態はほぼ方形を呈し、規模は一辺約4.0mである。主軸方位はN-41°-Wで、炉跡が北西寄りの床面に検出されている。竪穴の深さは北西壁36cm、南東壁36cm、北東壁15cmである。

覆土 直接の覆土は6層に分層された。黒褐色土を主体とし、壁際で若干のロームが混入する。

施設等 ピットは全部で2つ検出された。P1が20cm、P2が8cmである。配置から見るとP1は出入口用の梯子ピットと考えられる。P2は浅いがいわゆる貯蔵穴と考えられる。炉跡は楕円形を呈し、長径73cm、短径68cm、深さ13cmである。焼土の堆積はあまり多くない。

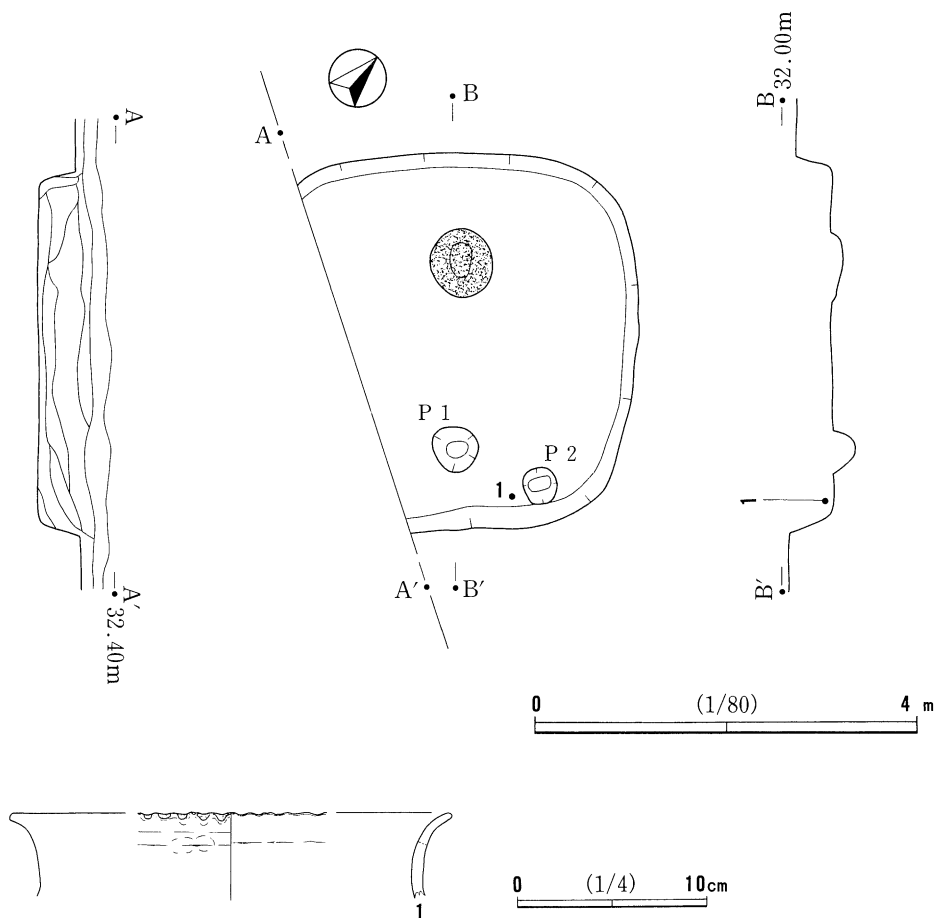
遺物出土状況 遺物の出土量は微量で、P1・P2周辺で若干まとまりがある程度である。

出土遺物 1は甕形土器の口縁部である。口径は推定で22.8cmを測る。内外面とも工具によるナデで仕上げられる。口縁端は内側からの一方向のキザミが施される。外面は黒褐色・褐色、内面は淡い褐色を呈する。胎土は密である。

第049号跡（第50図・図版21）

位置・形態 16M-11グリッドを主体に検出された。調査区内でほぼ全体が検出できたものの竪穴は南側一部が攪乱によって壊されている。また溝状遺構の061号跡によっても壁の一部が壊されている。平面形態は円形を呈し、規模は直径約3.1mである。炉跡が北西寄りの床面で検出されている。竪穴の深さは北西壁27cm、西壁10cm、南壁24cm、東壁15cmである。

覆土 4層に分層された。黒褐色土を主体とし、下層になるにしたがいローム混入量が増える。床面の北側には炭化材が多く検出され、焼土の散布も比較的多く見られた。

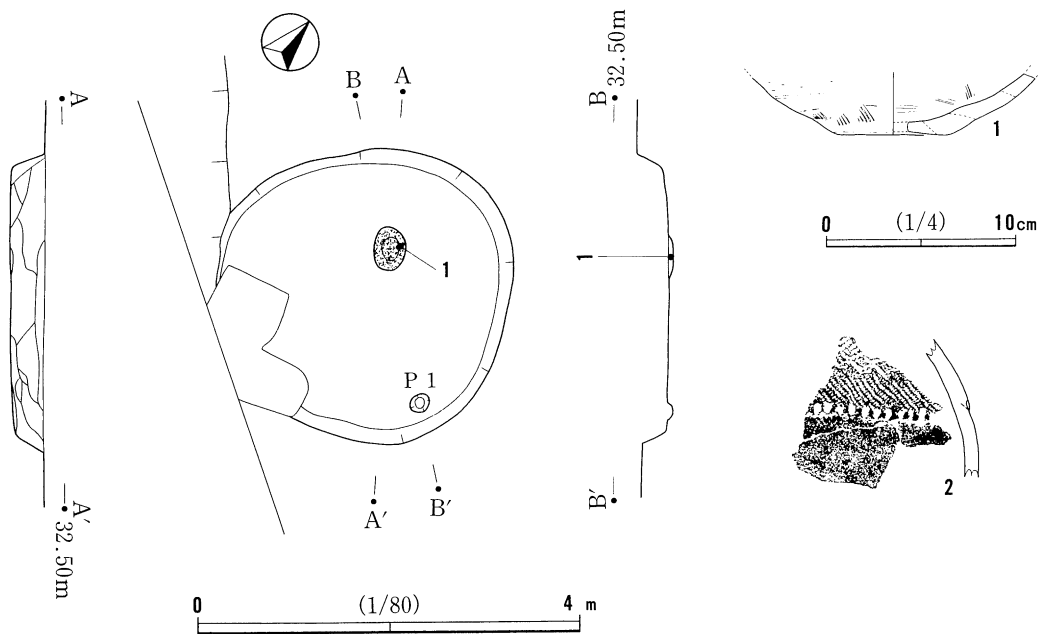


第49図 048号跡及び出土遺物

施設等 ピットは1つ検出された。P1の深さは6cmと浅い。炉跡は楕円形を呈し、長径45cm、短径33cm、深さ5cmである。焼土の堆積は少なかった。

遺物出土状況 遺物の出土量は微量である。散発的に出土したにすぎない。

出土遺物 1は底部である。壺形土器のものであろうか。底径は推定で5.6cmを測る。外面は底部付近から放射状に施されるハケメの後工具によるナデで、内面はハケメ→工具によるナデ→密なヘラミガキの順で仕上げられる。外面は淡い明褐色・黄灰色、内面は暗灰色を呈する。胎土は密である。2は鉢形土器の上半部である。口縁部は外面に肥厚され、そこには単節RL横回転の縄文と無節Rに2つ結び目がある原体によるZ字状結節文が、口縁部下端には棒状工具の刺突によるキザミが巡る。口縁部以下の外面と内面は赤彩・ヘラミガキが施される。外面には全体に煤が付着し黒褐色を、内面は暗赤色を呈する。胎土は密である。



第50図 049号跡及び出土遺物（2 1/3）

第050号跡（第51図・図版22）

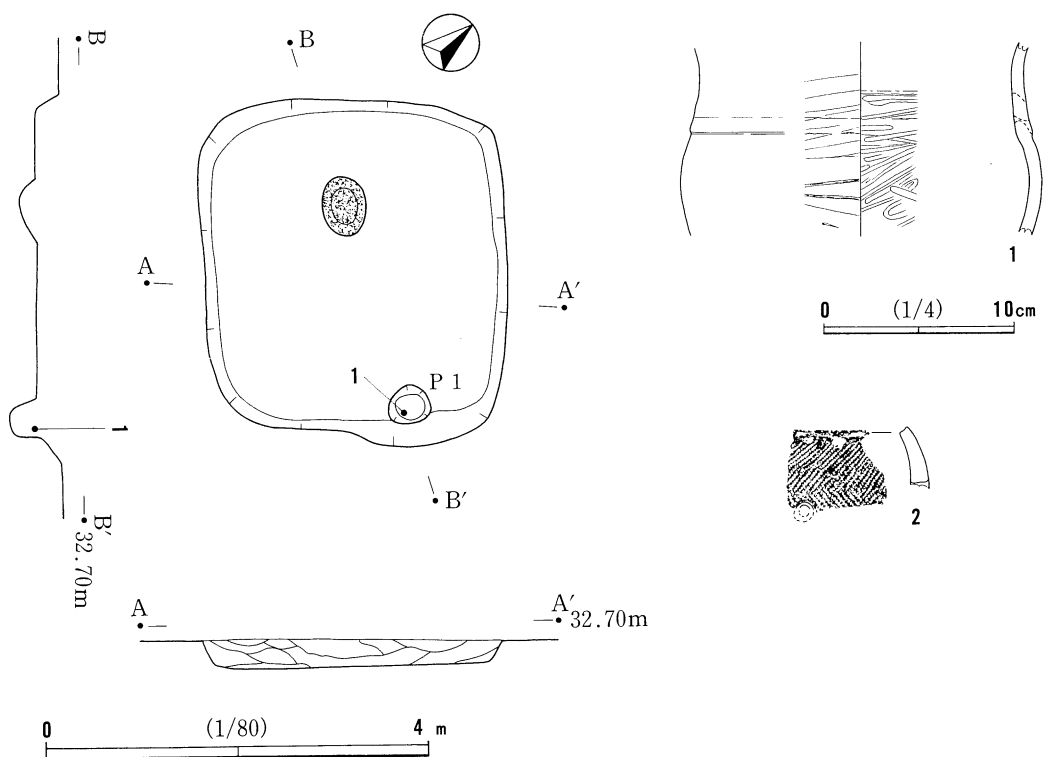
位置・形態 17M-64グリッドを主体に検出された。平面形態は隅丸長方形を呈し、規模は長軸長約3.5m、短軸長3.2mである。主軸方位はN-52°-Wで、炉跡は北西寄りの床面から検出されている。竪穴の深さは北西壁25cm、南西壁29cm、南東壁21cm、北東壁24cmである。

覆土 9層に分層された。暗褐色土を主体とし、全体にロームブロックを少量混入する。

施設等 ピットは1つ検出された。P1の深さは30cmである。位置的にはいわゆる貯蔵穴と考えられる。炉跡は楕円形を呈し、長径62cm、短径48cm、深さは15cmである。焼土の堆積は比較的多かった。

遺物出土状況 遺物の出土量は微量である。竪穴内から散発的に出土したにすぎない。

出土遺物 1は甕形土器の体部である。外面全体に煤が付着している。外面は横方向の工具によるナデ、内面は工具によるナデの後にやや密なヘラミガキで仕上げられる。外面は黒褐色、内面は黄灰褐色を呈する。胎土は密である。2は鉢形土器の口縁肥厚部分である。外面には単節LR横回転の縄文が、同RLを切るかたちで施される。穿孔が一つ見られる。内面は赤彩され暗赤色、外面は暗い黄褐色を呈する。胎土は密である。



第51図 050号跡及び出土遺物（2 1/3）

第057号跡（第52図・図版22）

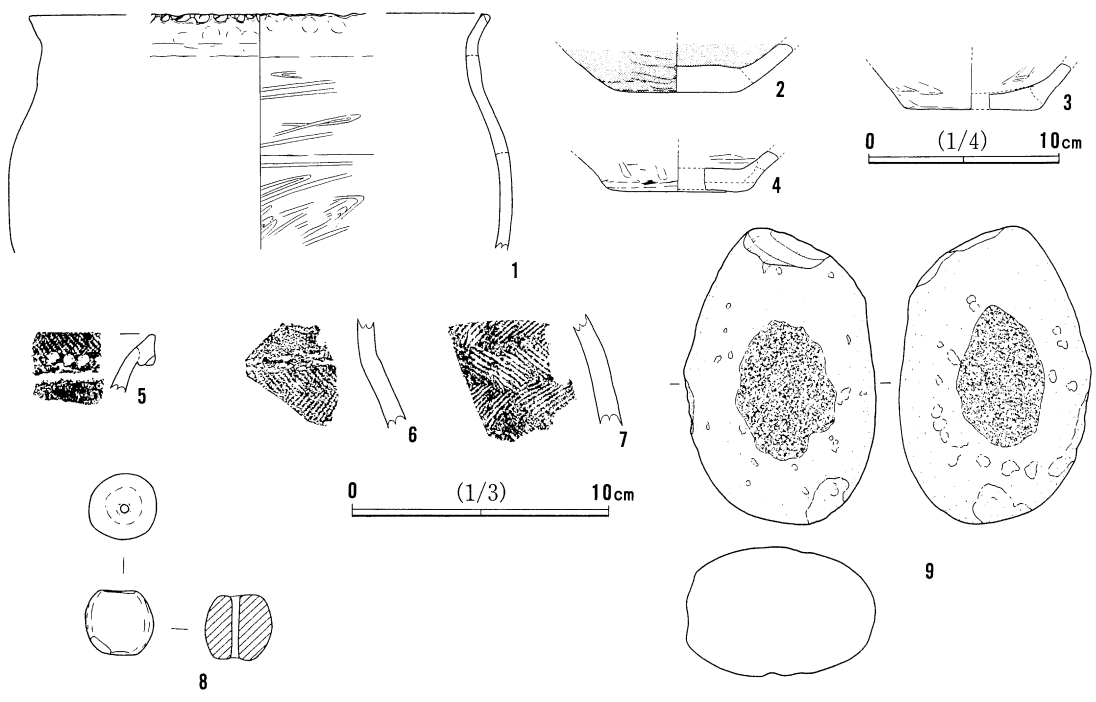
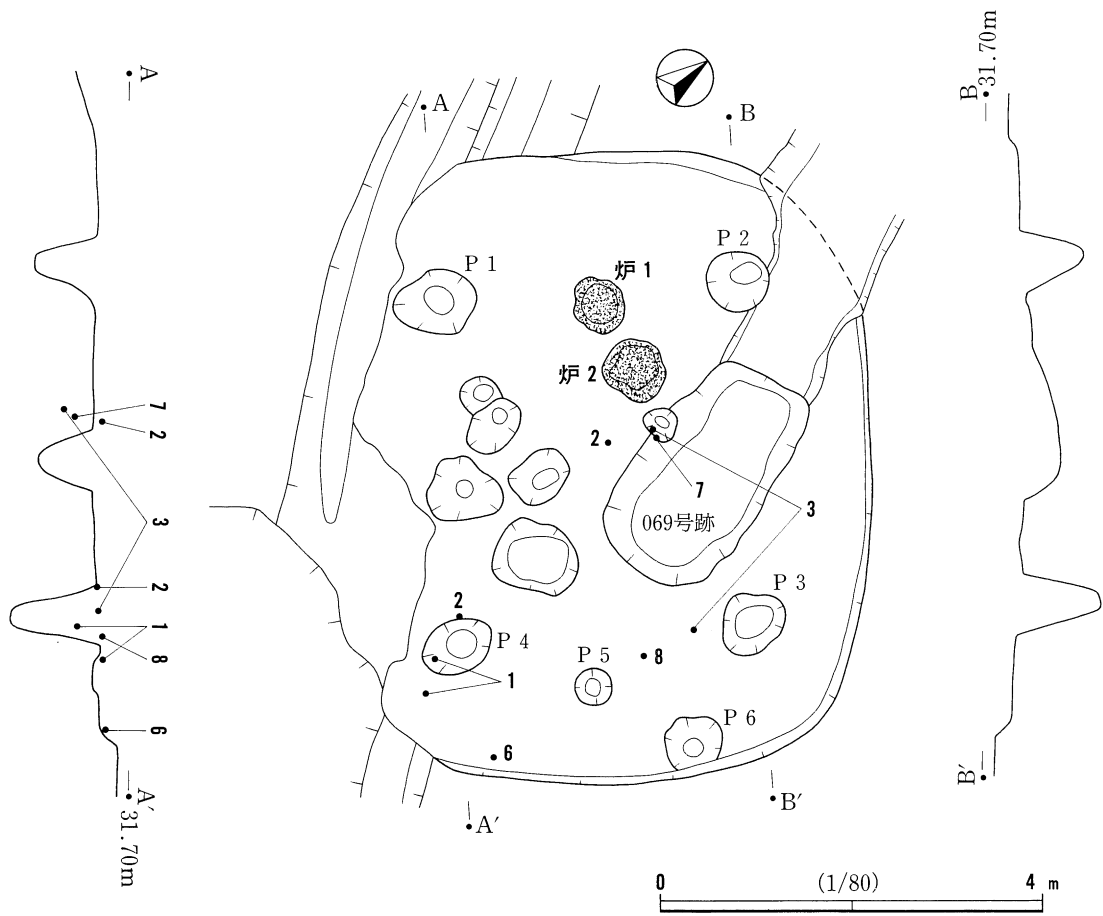
位置・形態 14K-46グリッドを主体に検出された。竪穴のほぼ全域に061号の溝状遺構が走っているほか、069号土坑が床面を大きく削り込んでいる。また竪穴に明らかに伴わないピット群が竪穴中央で検出されている。平面形態は隅丸方形を呈し、長軸長6.7m、短軸長約5.8mと推定される。炉跡が2基北西寄りの床面で検出されている。主軸方位はN-57°-Wである。竪穴の深さは北西壁10cm、南東壁16cm、北東壁21cmである。

覆土 暗褐色土を主体としているが、溝状遺構に切られるためほとんど遺存していない。

施設等 竪穴に直接関連があるピットは全部で6つ検出された。P1が68cm、P2が68cm、P3が88cm、P4が93cm、P5が38cm、P6が13cmである。配置から見るとP1～P4が支柱穴と考えられる。P5は出入口用の梯子ピットと考えられる。P6は浅いがいわゆる貯蔵穴であろう。炉跡は2基あるが炉1は直径55cm、炉2は直径65cmとともに規模はあまり変わらない。床面からの深さは2基とも19cmである。2基の新旧関係については不明である。

遺物出土状況 攪乱が激しく竪穴に伴うと考えられる遺物は微量である。

出土遺物 1は甕形土器の上半である。口径は推定で25.4cmを測る。くびれ下方には段が見ら



第52図 057号跡及び出土遺物 (8 2/3)

れない。口縁端には、左手の親指と小指でつまみ出されたと見受けられるキザミが巡る。外面はナデで、内面はナデの後に疎らなヘラミガキで仕上げられる。内外面とも淡い褐色を呈する胎土は密で、まばらに1mm前後のシャモット状褐色粒が認められる。2は底部である。底径は6.5cmを測る。内外面ともにナデとヘラミガキで仕上げられ、その後に赤彩が施される。外面は淡い暗褐色・赤褐色・黄褐色、内面は暗赤色・黒灰色を呈する。胎土は密で、疎らに2mm大の礫を含む。3は底部である。底径は推定で7cmを測る。内外面ともにナデとヘラミガキで丁寧に仕上げられる。内外面ともに淡褐色・淡い暗灰色を呈する。胎土は緻密である。4は底部である。底径は推定で7cmを測る。外面はナデの後に縦方向の疎らなヘラミガキで、内面はナデの後に密なヘラミガキで仕上げられる。外面は暗褐色、内面は淡い褐色・黒褐色を呈する。胎土は密である。5は壺形土器の口縁部である。口縁部は断面三角形に肥厚される。拡張部外面には、単節RL横回転の縄文と、下端に縄文原体と思われる工具の押圧によるキザミが施される。拡張部以下の外面は縦方向のヘラミガキ、内面は横方向のヘラミガキ・赤彩で仕上げられる。外面は淡褐色、内面は淡い暗褐色・暗赤色を呈する。胎土は密である。6は壺形土器のくびれ部である。無節Rの縄に結び目が2つある原体によるZ字状結節文に上を画された、単節RL横回転の縄文と同LRが巡る。内面は主に横方向のヘラミガキで仕上げられる。内外面とも黄灰褐色を呈する。胎土は密である。7は壺形土器の体部である。単節LR横回転の縄文が上と下に中に同RLが施される。上下のLRは無節Rのようにも見える。内面はナデで仕上げられる。外面は淡い褐色、内面は暗い灰褐色を呈し、胎土は密である。8は土製小玉である。外径1.3cm、高さ1.3cm、孔の径1.5mmを測る。暗褐色を呈する。胎土は密である。9は敲石である。長軸の両端と側面に敲打痕が見られる。礫岩である。650g。

第063号跡（第53図・図版22）

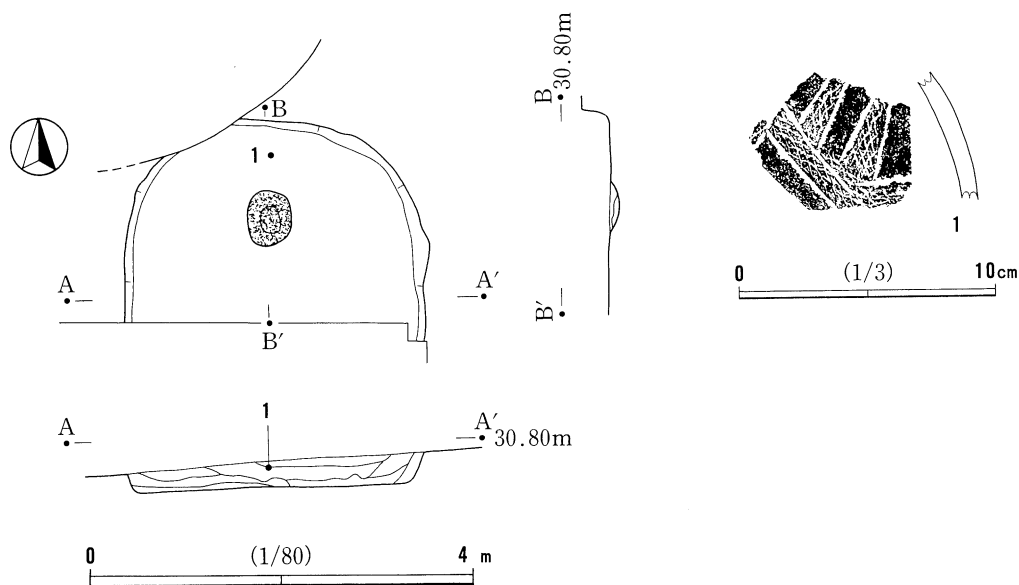
位置・形態 13J-92グリッドを主体に検出された。竪穴の北側に030号竪穴が位置し北西壁が一部切られている。竪穴からの遺物出土量が少なくはっきりしないが、切り合いの関係から030号の方が新しいと考えられる。また竪穴の南側半分を確認調査グリッドで壊してしまっており、検出状態は良くない。平面形態は楕円形を呈すると考えられる。炉跡の位置から短径は3.2mである。主軸方位は真北である。竪穴の深さは北壁33cm、西壁24cm、東壁37cmである。

覆土 7層に分層された。暗褐色土を主体とし、壁際ではロームの混入量が増える。

施設等 ピットは検出されなかった。炉跡は楕円形を呈し、長径58cm、短径46cm、深さ10cmである。焼土は底面から5cmほどの厚さで堆積していた。

遺物出土状況 遺物の出土量は微量である。竪穴内から散発的に出土したにすぎない。

出土遺物 1は壺形土器の体部である。山形文を基本とした文様の一部であろう。網目状捺糸



第53図 063号跡及び出土遺物

文の後に、ヘラ状工具による沈線で区画が為される。文様外は赤彩されるが、煤が付着して黒褐色に近い。文様内は暗褐色、内面は淡い褐色を呈する。胎土は密である。

第064号跡（第54図・図版23）

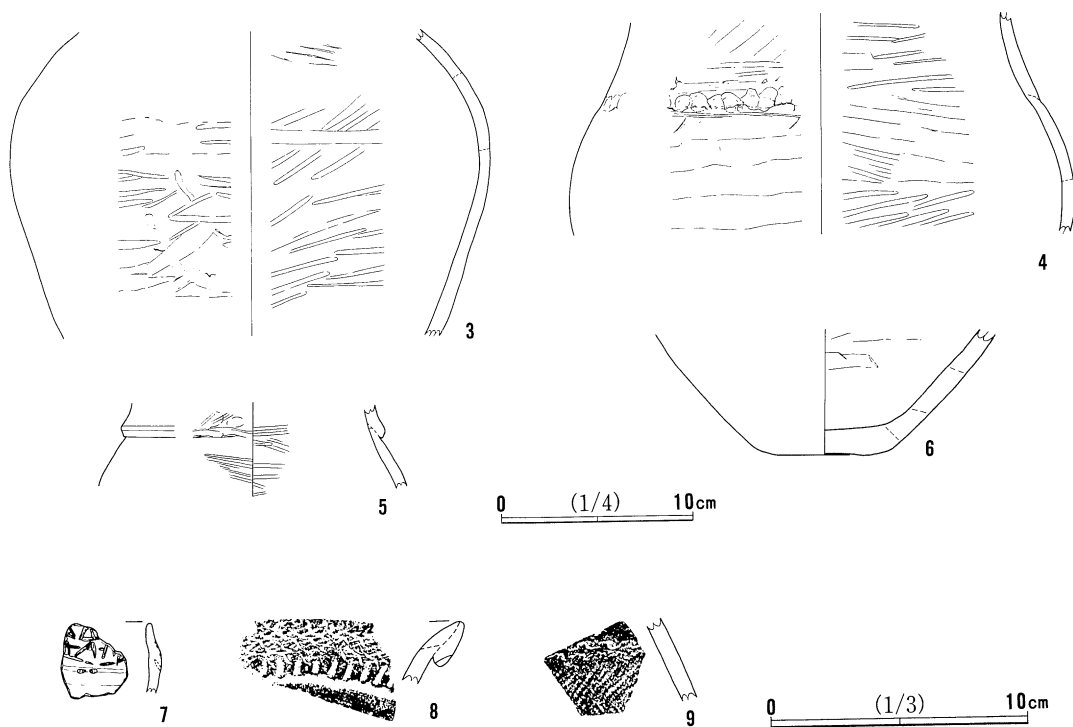
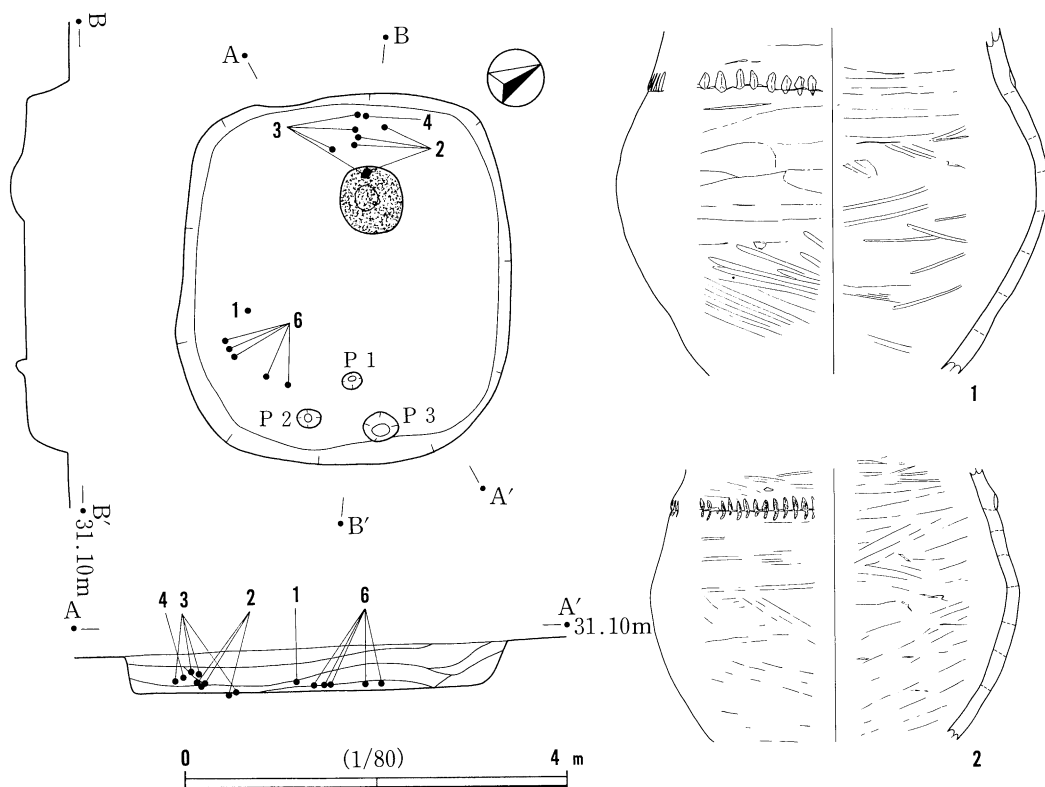
位置・形態 13J-40グリッドを主体に検出された。平面形態は隅丸方形を呈し、規模は長軸長3.9m、短軸長3.5mである。主軸方位はN-60°-Wで、炉跡が北西寄りの床面で検出された。堅穴の深さは北西壁44cm、南西壁11cm、南東壁44cm、北東壁52cmである。

覆土 5層に分層された。暗褐色土を主体とし、壁際ではロームの混入量が多くなる。

施設等 ピットは全部で3つ検出された。P1が13cm、P2が17cm、P3が13cmである。配置から見るとP1・P2は出入口用の梯子ピット、P3はいわゆる貯蔵穴と考えられる。炉跡は楕円形を呈し長径72cm、短径68cm、深さ14cmである。

遺物出土状況 炉跡の壁側と南コーナーにまとまって出土しているが量的には少ない。

出土遺物 1は甕形土器の体部である。胴部最大径は推定で22.4cm。外面は、最大径以上が主に横方向の工具によるナデで、以下が工具によるナデの後に疎らなヘラミガキで仕上げられる内面は工具によるナデの後、最大径以下に限り、底部に近づくほど密なヘラミガキが施される外面は明褐色・褐色・暗い赤褐色、内面は黒褐色・淡い褐色を呈する。胎土は密である。2は甕形土器の体部である。胴部最大径は19cmを測る。器体にゆがみが大きく、全体的に作りが粗い。外面には煤が付着し、二次焼成が認められる。段には縄文原体によると思われるキザミが



第54図 064号跡及び出土遺物

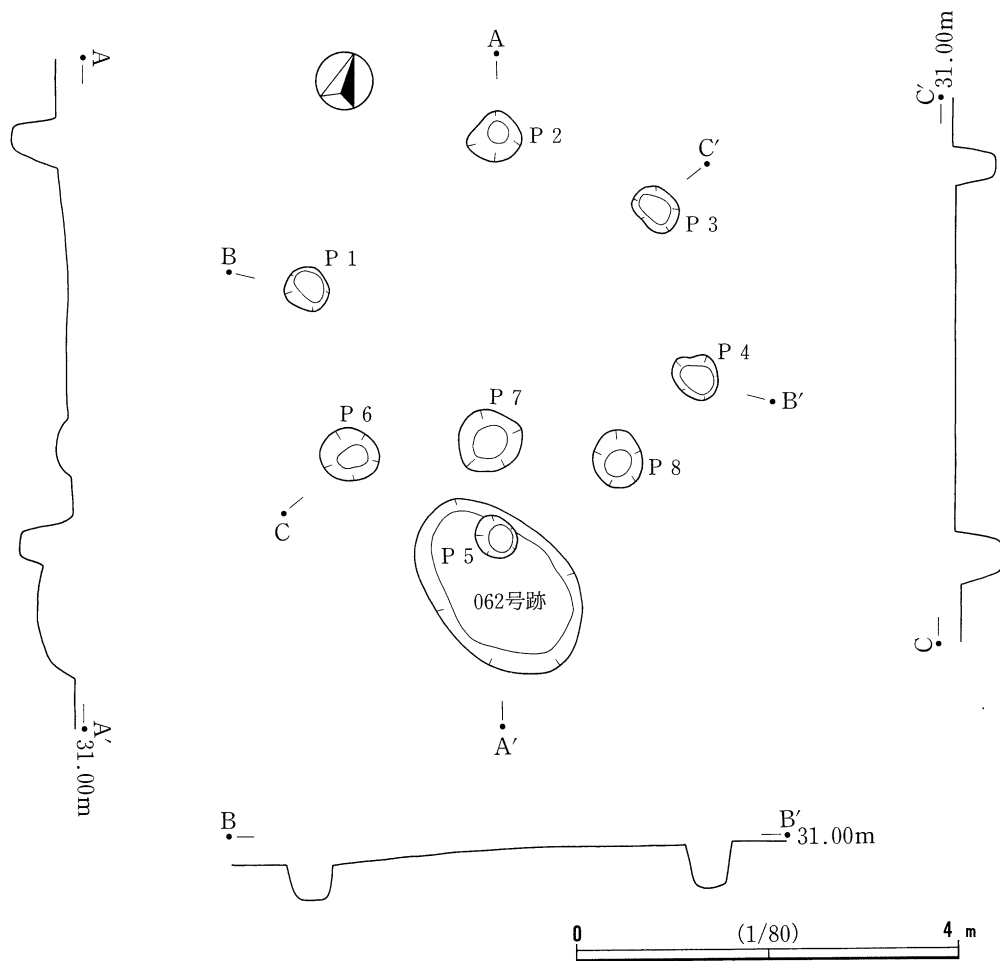
巡る。外面は工具によるナデ、内面は工具によるナデの後に底部に近いほど密なヘラミガキで仕上げられる。外面は褐色・赤褐色・黒褐色、内面は暗褐色を呈する。胎土は密だが、まばらに大粒のシャモット等の粒を含む。3は甕形土器の体部である。胴部最大径は推定で25cmを測る。内外面とも工具によるナデとナデの後、やや疎なヘラミガキで仕上げられる。外面は褐色・暗い黄褐色、内面は褐色・赤褐色を呈する。胎土は密である。4は甕形土器の体部である。胴部最大径は推定で26cm。くびれの下端の段には、指先で引っ掻いたような様子の、緩い稜を持つ浅いキザミが巡る。外面の段以上は工具による右上がりのナデの後に横方向のナデで、以下は工具によるナデとナデで仕上げられる。内面はいずれも横方向の、工具によるナデとヘラミガキで仕上げられる。外面は淡い黒褐色・淡い褐色、内面は淡い暗褐色・褐色を呈する。胎土は密である。5は鉢形土器の体部であろうか。内外面ともナデ・工具によるナデの後にヘラミガキで仕上げられている。内外面とも褐色を呈する。胎土は密である。6は底部である。外面に煤状の付着物が見られるので、甕形土器のものであろうか。長く実用に供されたのか、底部の稜は丸まっている。底径は6.5cmを測る。外面はナデの後、縦方向の疎らなヘラミガキで仕上げられる。内面は摩滅のため工具によるナデの工具痕の一部が残るにすぎないが、おそらくヘラミガキが外面同様に施されていたと考えられる。外面は淡い黒褐色・淡褐色、内面は暗い淡褐色を呈する。胎土は密である。7は壺形土器のミニチュアの破片であろうか。厚さは最大7mmである。細い先端を持つ工具によって、壺形土器によく見られる山形文の模刻がされているように見受けられる。この文様中の横線は、山を構成する斜め線によって切られる。文様の下には、同じ工具によるものか、直径2mm前後の刺突が見られる。内外面とも淡い褐色を呈し、胎土は密である。8は壺形土器の口縁部である。口径は推定で18cm。口縁は外面に肥厚し網目状撚糸文が施される。口縁部下端には、単節縄文の原体を押圧したものと見受けられる、キザミが巡る。口縁部以下の外面と内面はヘラミガキとともに赤彩される。内外面ともに淡い黄褐色・暗赤色を呈する。胎土は密で、まばらに暗赤褐色のシャモット状粒が含まれる。9は壺形土器の体部である。上から、単節RL横回転の縄文、同LR、無節Lに結び目が2つある原体によるS字状結節文が施される。文様帯以下は赤彩される。内面はナデで仕上げられる。外面は淡い黄褐色・淡い暗赤色、内面は淡い黄褐色を呈する。胎土は密である。

第073号跡（第55図・図版23）

位置・形態 13K-05グリッドを主体に検出された。竪穴に関連すると思われるピットのための検出のため、伴出遺物がなく時期は明らかでない。土坑の062号跡と柱穴が切り合っており、062号跡の方が新しいと判断される。柱の配置から縄文時代後期以降の竪穴住居跡ではないかと思われる。炉跡は検出されなかった。竪穴の平面形態は円形を呈すると考えられ、規模は直径約

5.0m程度と推測される。

施設等 検出されたピットは全部で8つである。P1が33cm、P2が43cm、P3が31cm、P4が46cm、P5が64cm、P6が45cm、P7が13cm、P8が20cmである。P1～P6までが主柱穴と思われる。062号は楕円形を呈する土坑で、長径2.1m、短径1.4m、深さ40cmである。本竪穴に関連する土坑ではないと考えられる。

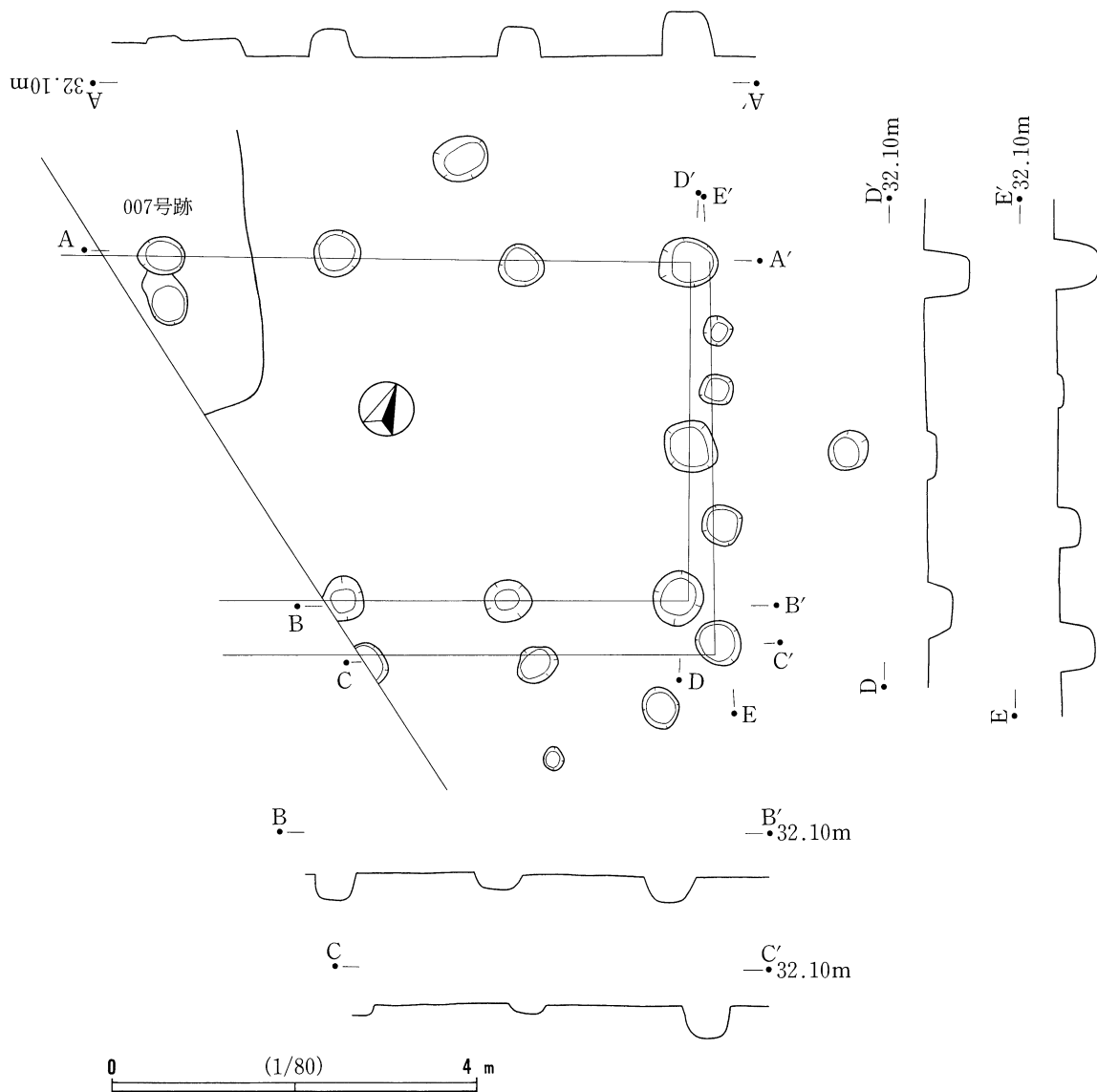


第55図 073号跡

第3節 掘立柱建物跡

第011号跡 (第56図・図版23)

9I-15グリッドを主体に検出された。007号竪穴によって南西側が切られているが、竪穴の床面にピットが検出されている。一部は調査区外になるため正確な規模は明らかでないが、規模は2間×3間と思われる。梁行3.8m、桁行5.9mあり、梁行主軸方位N-70°-Eである。柱穴の規模

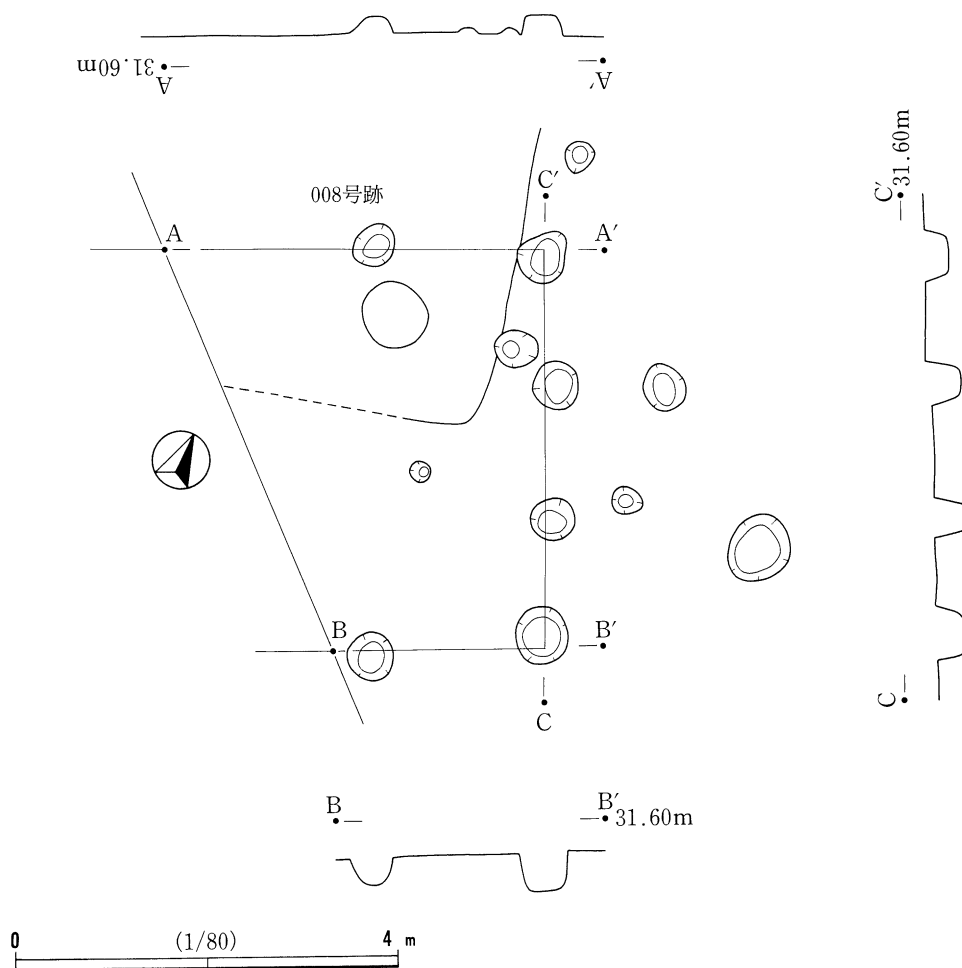


第56図 011号跡

は、直径約50～55cm、深さは10～50cmである。ピットの直径はほぼ一定しているが、深さは不揃いである。周囲に同様の規模のピットが検出されている。南東側と東側にピット列が検出されていることから、一回り規模の大きな掘立柱建物跡が一部ピットを共用し、前後して建替えられたものと考えられる。規模は3間×4間と思われ、梁行4.4m、桁行は約8.0mあり、梁行主軸方位はN-68°-Eと若干ずれているようである。柱穴の規模は前者と変わらない。2棟の前後関係は明らかにできなかった。本遺構の時期は不明である。

第013号跡（第57図）

10I-75グリッドを主体に検出された。一部は調査区外になるため正確な規模は明らかでない。また008号竪穴によって南西側が切られているが、床面にピットが検出されている。規模は2間×



第57図 013号跡

3間と思われる。梁行4.2m、桁行は約7.2mあり、梁行主軸方位はN-63°-Eである。柱穴の規模は、直径約45～60cm、深さは18～38cmである。ピットの直径はほぼ一定しているが、深さはまちまちである。周囲に同様の規模のピットが検出されているが、関連するピットであるかもしれない。本遺構の時期は不明である。

第4節 土 坑

第018号跡（第58図）

10I-39グリッドを主体に検出された。溝状遺構の074号跡を切っている。平面形態は歪みのある楕円形を呈し、長径1.98m、短径0.93m、検出面からの深さは0.48mである。底面は平でなく凹凸がはげしい。出土遺物はなく、時期は不明である。

第019号跡（第58図）

11I-31グリッドを主体に検出された。平面形態は円形を呈し、直径は約0.90m、検出面からの深さは0.15mである。覆土は暗褐色を呈し、若干の灰白色粘土が混入する。出土遺物はなく時期は不明である。

第051号跡（第58図・図版28）

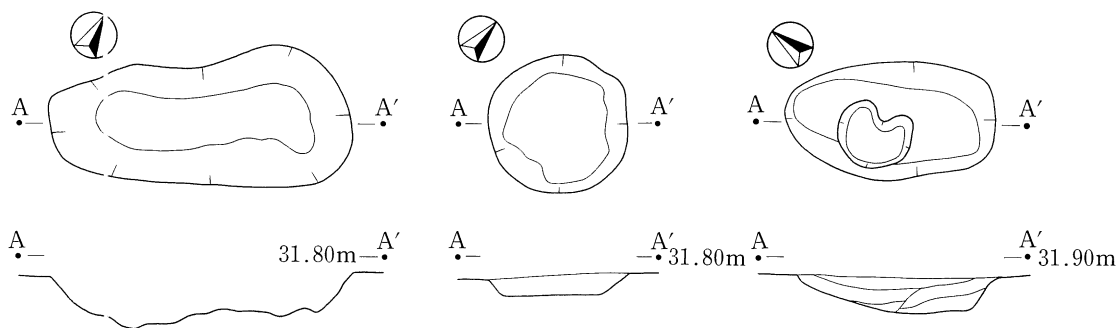
7G-35グリッドを主体に検出された。平面形態は楕円形を呈し、長軸長2.45m、短軸長1.60m、検出面から底面までの深さは0.24mである。底面の長軸方向に2つのピットが検出された北側のピットの深さは土坑底面から0.20m、南側のピットの深さは0.08mである。覆土は暗褐色土を主体とし、底面及び壁面近くでロームが混入する。平面形態は陥穴に類似しているが、壁の立ち上がりが緩く、掘り込みも浅いことから陥穴ではないと考えられる。出土遺物は縄文時代中期加曽利E式土器が若干出土しているが、この時期に属するかは断定できない。

第052号跡（第58図・図版28）

7G-45グリッドを主体に検出された。平面形態は楕円形を呈し、長軸長1.38m、短軸長0.78m、検出面からの深さは0.23mである。底面に浅い不定形のピットがある。底面からの深さは0.10mである。出土遺物はなく、時期は不明である。

第054号跡（第58図・図版28・29）

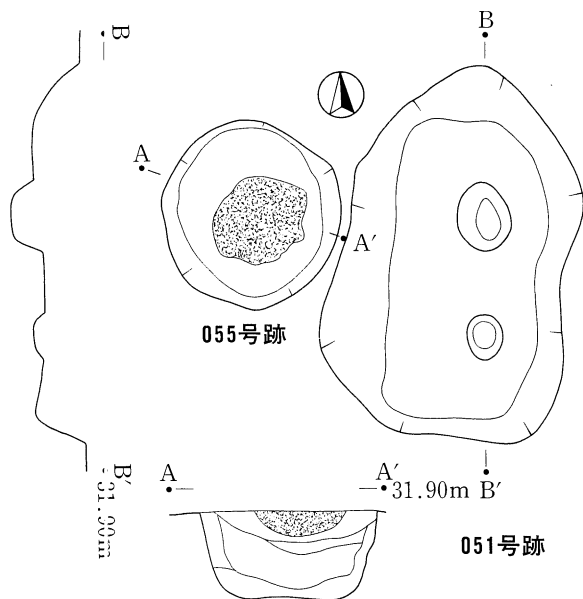
7G-67グリッドを主体に検出された。平面形態は楕円形を呈し、長軸長1.61m、短軸長1.40m、



018号跡

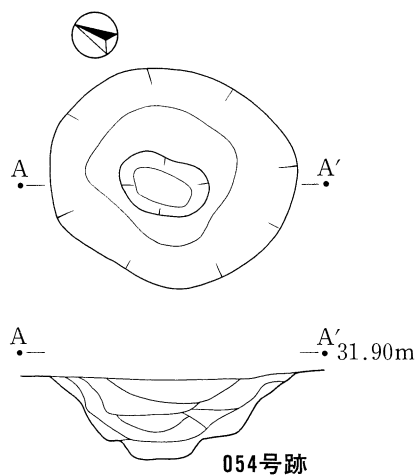
019号跡

052号跡

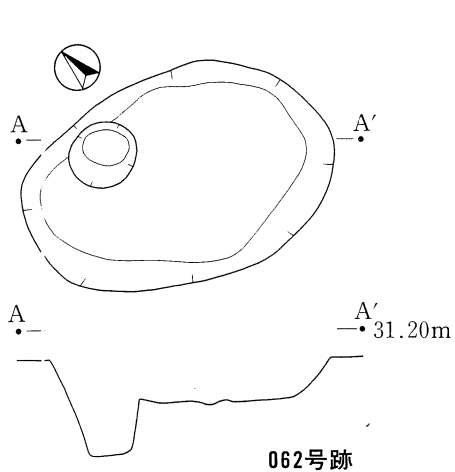


055号跡

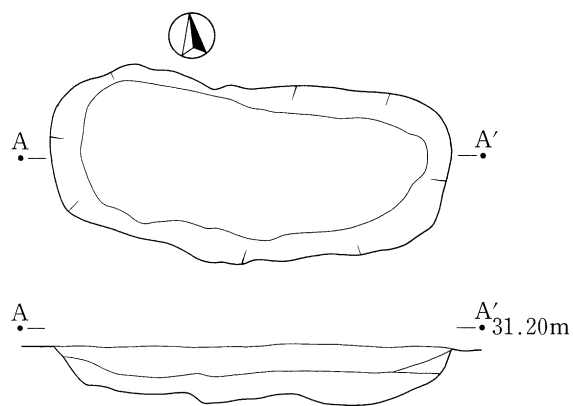
051号跡



054号跡



062号跡



065号跡

0 (1/60) 2 m

第58図 018・019・051・052・054・055・062・065号跡

検出面からの深さは0.42mである。底面の中央にピットがある。楕円形を呈し、長軸長0.60m、短軸長0.38m、底面からの深さは0.12mである。覆土は暗褐色土を主体とする。出土遺物はなく、時期は不明である。

第055号跡（第58図）

7G-35グリッドを主体に検出された。平面形態は円形を呈し、直径1.20mを測る。検出面からの深さは0.59mである。検出面の中央に焼土が検出されている。焼土は橙色で覆土上層にレンズ状に堆積し、それ以下は暗褐色土を主体としている。焼土層から下の掘り込みが深いことから、炉跡の可能性は低い。出土遺物はなく、時期は不明である。

第059号跡（第59図・図版29）

14K-96グリッドを主体に検出された。平面形態は不整形を呈する。長軸方向の異なる2つの土坑が重なっている可能性が高いが、土層断面では新旧関係はとらえられなかった。ほとんど時期差を伴わないためと思われる。底面は凹凸が激しい。検出面からの深さは0.38mである。覆土は暗褐色土を主体と、ロームの混入量は少ない。出土遺物はなく、時期は不明であるが、覆土の状態から中世以降のものと考えられ、逆に新しい攪乱でもないと判断される。

第062号跡（第58図・図版29）

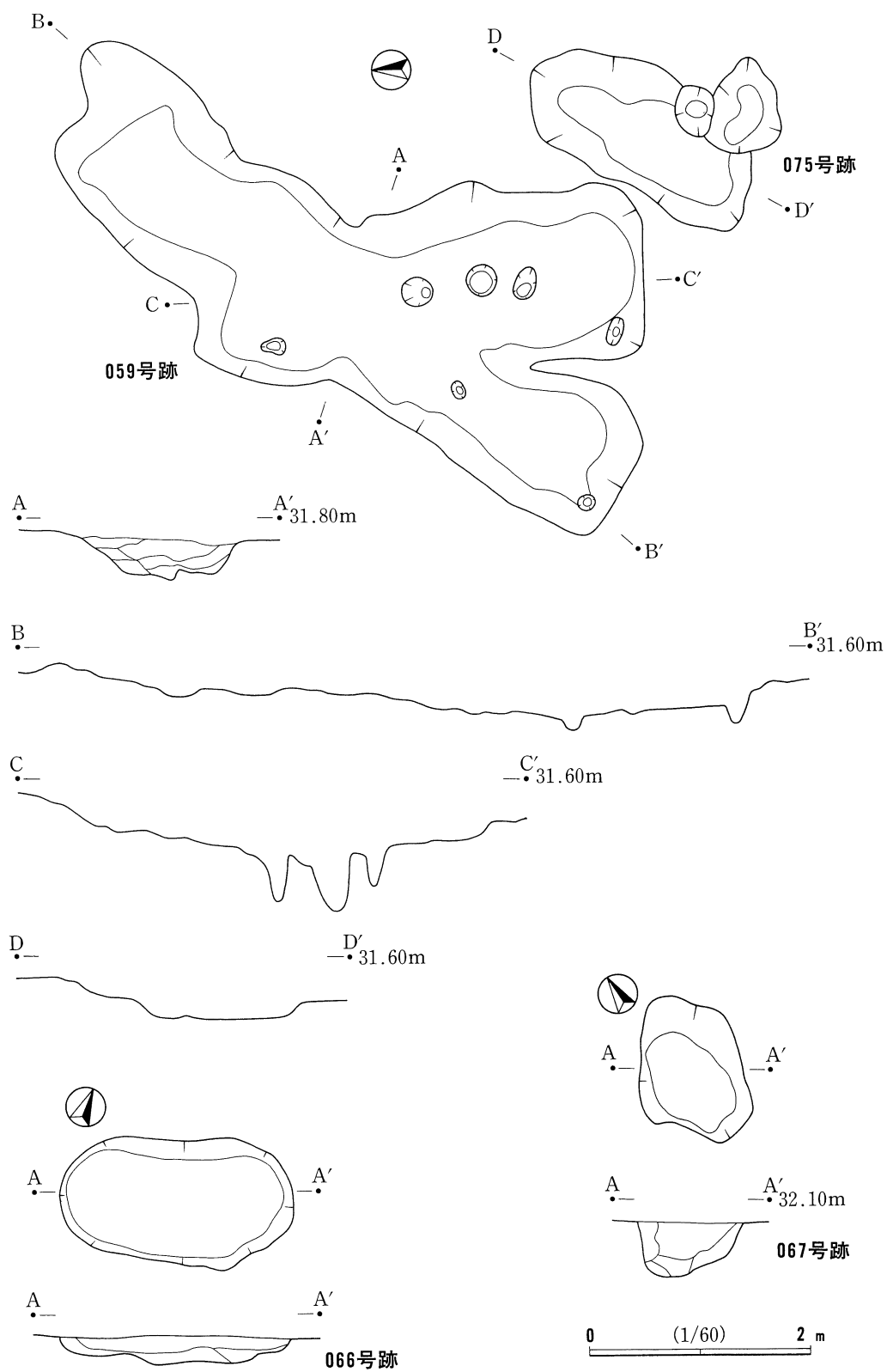
13K-15グリッドを主体に検出された。平面形態は楕円形を呈し、長軸長2.10m、短軸長1.40m、検出面からの深さは0.28mである。北側の壁際にピットがあり、底面からの深さは0.39mである。このピットは土坑に伴わない可能性がある。出土遺物はなく、時期は不明である。

第065号跡（第58図）

9H-47グリッドを主体に検出された。平面形態は長楕円形を呈し、長軸長2.65m、短軸長1.20m、検出面からの深さは0.39mである。底面は凹凸が激しく平らではない。覆土は暗褐色土を主体とし下層にはロームが比較的多く混入する。出土遺物はなく、時期は不明である。

第066号跡（第59図）

9H-45グリッドを主体に検出された。平面形態は長楕円形を呈し、長軸長1.80m、短軸長0.98m、検出面からの深さは0.23mである。底面は凹凸があり平らではない。覆土は暗褐色土を主体とし全体にロームの混入量が多い。出土遺物はなく、時期は不明である。



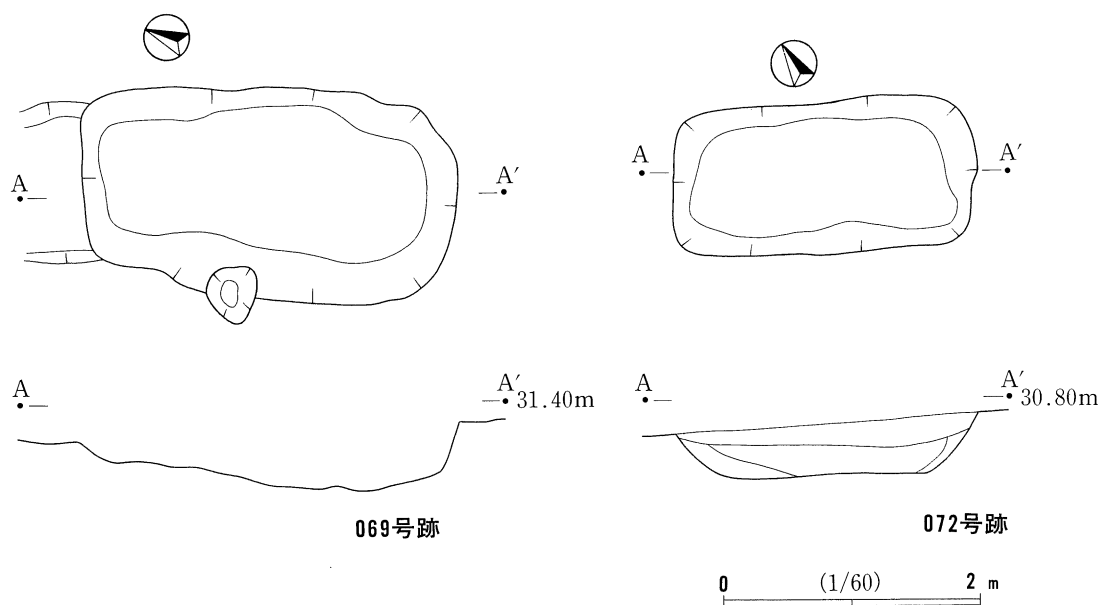
第59図 059・066・067・075号跡

第067号跡（第59図）

9H-57グリッドを主体に検出された。平面形態は隅丸長方形を呈し、長軸長1.22m、短軸長0.85m、検出面からの深さは0.42mである。覆土は褐色土が主体で全体にロームの混入量が多い。出土遺物はなく、時期は不明である。

第069号跡（第60図）

14K-46グリッドを主体に検出された。平面形態は隅丸長方形を呈し、長軸長2.48m、短軸長1.42m、検出面からの深さは0.45mである。底面は平らではなく、南側から北に向かって次第に浅くなっていき、緩い立ち上がりとなる。出土遺物はなく、時期は不明である。

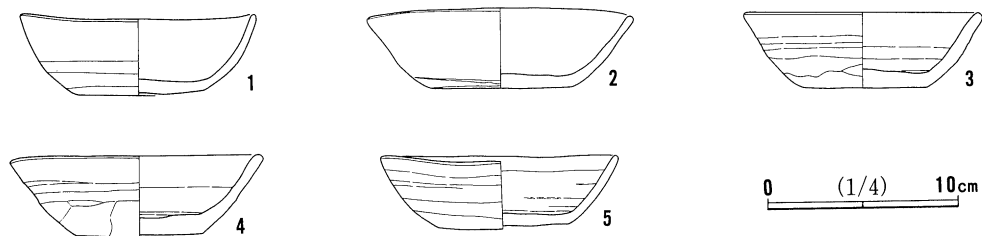
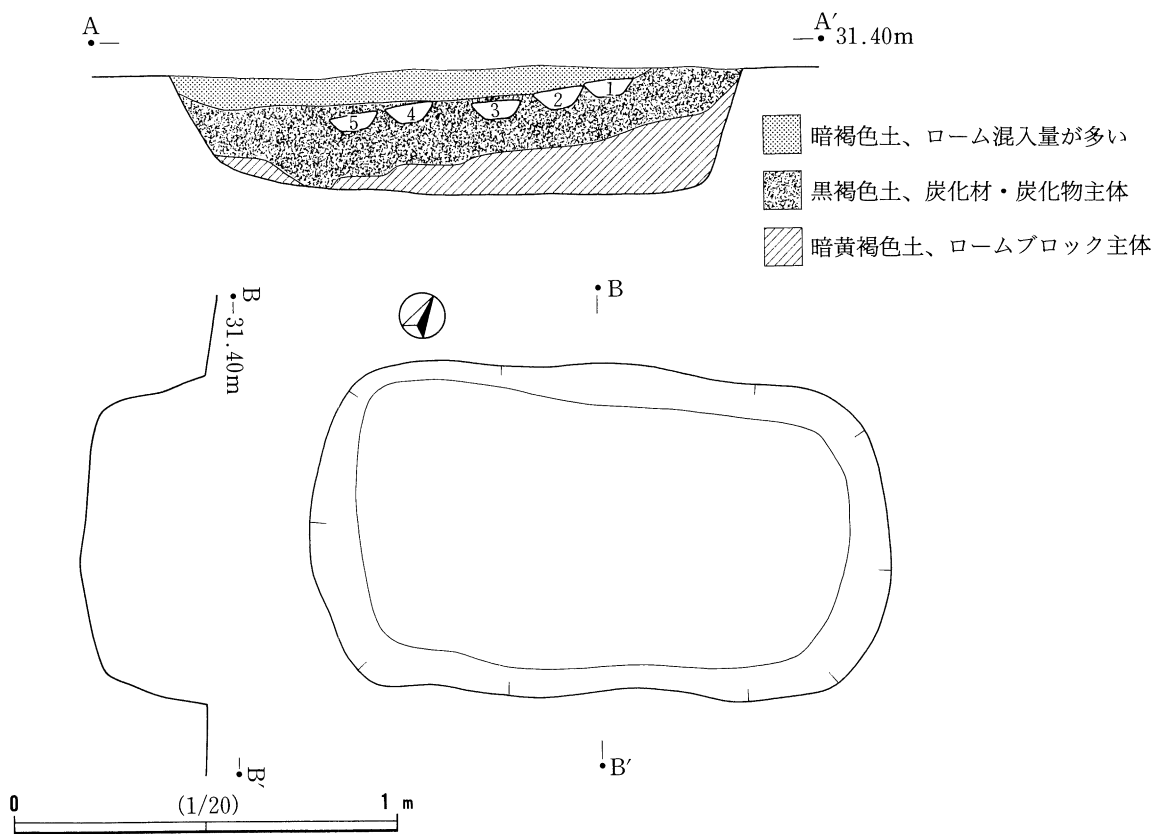
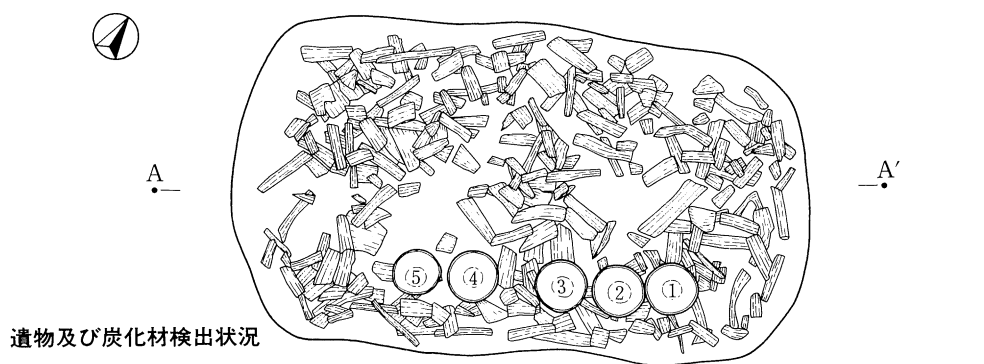


第60図 069号・072号跡

第070号跡（第61図・図版30）

10I-56グリッドを主体に検出された。平面形態は隅丸長方形を呈し、長軸長1.53m、短軸長0.88m、検出面からの深さは0.34mである。遺構を検出した時点で北東側覆土に炭化物が多量に混入している状況が観察された。長軸方向にセクションベルトを設定し、掘り下げたところ南東側の長辺に沿って土師器杯5点が連続して並べられている状況が確認された。みな完形で正位の状態で検出された。

覆土は3層に分層される。1層は暗褐色土でローム及びロームブツクを比較的多く混入して



第61図 070号跡及び出土遺物

いる。2層は多量の炭化材と炭化物を主体とし、土をほとんど混入していない層である。第3層はロームブロックを主体とする層である。全体に層厚の極端な変化はなく、安定した堆積状況であった。上下の土層の違いが顕著なことから、覆土は人為的な堆積土であると判断できる。また、覆土中に焼土が混入していないことから、第2層のいわゆる木炭層は土坑内で生成したのではなく、他の場所で作られた木炭を土坑内の中層に敷きつめたものと考えられる。出土した5点の杯は第2層上位に位置している。

土坑の覆土のあり方は、人為的なものであることは間違いないが、焼土の検出がなかったこと、焼けた人骨等が検出されなかったこと、埋葬施設的な明確な掘り方も検出されなかったことなどから、土墳墓と断定するには肯定的な資料に欠けている。何らかの祭祀的な遺構の可能性も考えられるが、どのような目的の祭祀が行われたのかは定かではない。本遺構に隣接する同時期の遺構は、可能性があっても溝状遺構に限られる。しかし、どの溝状遺構とも近接しているわけではなく、直接の関連性をそこに見いだすことは難しい。ここでは、土墳墓と祭祀遺構の両者の可能性があることを指摘するにとどめておく。

出土遺物 1は口径12.9cm、底径6.6cm、器高4.3cmを測る。ロクロ成形である。外面の一部と内面の底に煤状の付着物が見られる。堆積物からの吸着であろうか。底面は外周に沿って回転ヘラケズリが施され、部分的に回転糸切り痕が残る。外面は底部の稜から上方に手持ちヘラケズリが1周強施され、それ以上はヨコナデで、内面は全面がヨコナデで仕上げられる。外面は淡い明褐色・淡褐色、内面は淡い褐色・黒褐色を呈する。胎土は密である。5と似ている。2は口径13.7(短径12.8)cm、底径7.5cm、器高4.3cmを測る。器体のゆがみが大きい。ロクロ成形である。外面の一部と内面のほとんどに煤状の付着物が見られる。底面の回転糸切り痕は不定方向のヘラケズリと外周沿いのヘラケズリによって消されている。外面は底部屈曲から立ち上がり半ばまでに手持ちヘラケズリが施され、その後全体がヨコナデで仕上げられる。外面立ち上がり半ばに稜が見られ、そこから若干反するプロポーションを持ち、3と4に形状が似ている。内面は全体がヨコナデで仕上げられる。内外面とも褐色・黒褐色を呈する。胎土は密である。3は口径12.3cm、底径6.7cm、器高4cmを測る。ロクロ成形である。底面は丁寧にナデで成形痕が消される。内外面に煤状の付着物が認められる。底部の稜から口縁に向かって2～2.5cmの間は手持ちヘラケズリが、それ以上の部分はヨコナデと細い先端の工具によるきついナデ3～4条が施される。ヘラケズリと工具によるナデの境界は緩い稜となっている。内面はヨコナデで仕上げられる。内外面ともに褐色・黒褐色を呈する。胎土は密である。4は口径13cm、底径6.6cm、器高4.2cmを測る。ロクロ成形である。3と形・製作法が似ている。底面は丁寧にナデで成形痕が消される。内外面には部分的に煤状の付着物が認められる。底部の稜から口縁に向かって2～2.5cmの間は手持ちヘラケズリが、以上の部分はヨコナデと細い工具によるきつ

いナデ2～3条が施される。ヘラケズリと工具によるナデの境界は稜となっている。外面は淡い褐色・褐色、内面は暗い赤褐色・黒褐色を呈する。胎土は密である。5は口径12.6cm、底径6.7cm、器高3.9cmを測る。ロクロ成形である。内外面の一部に煤状の付着物が認められる。底面には幅1.5cm前後の回転ヘラケズリが外周に沿って巡り、回転糸切り痕が中心近くに部分的に残る。内外面ともヨコナデで仕上げられる。外面は淡褐色・橙褐色、内面は淡褐色・橙褐色・暗褐色を呈する。胎土は密である。

第072号跡（第60図）

13K-33グリッドを主体に検出された。平面形態は隅丸長方形を呈し、長軸長2.00m、短軸長1.00m、検出面からの深さは0.39mである。覆土は暗褐色を主体としており、ロームの混入は少ない。出土遺物はなく、時期は不明である。

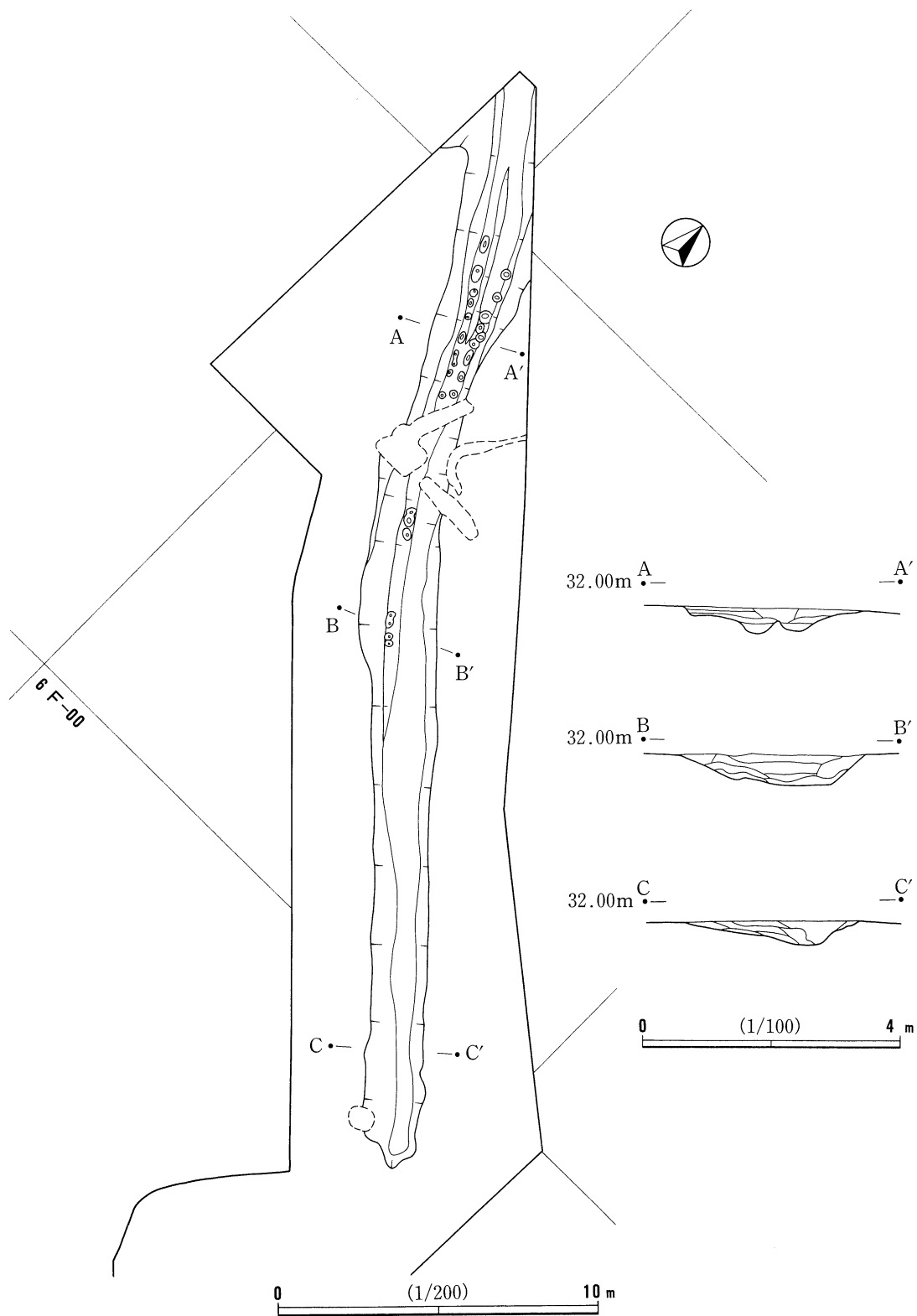
第075号跡（第59図）

14K-76グリッドを主体に検出された。059号跡に隣接している。平面形態は不整楕円形を呈し、長軸長2.36m、短軸長1.14mを測る。検出面からの深さは0.35mである。底面は凹凸がある。覆土は暗褐色土を主体としており、ロームの混入は少ない。出土遺物はなく、時期は不明であるが、059号跡に覆土の状態が類似していることから、時期的には059号跡と同様の時期であろうと考えられる。

第5節 溝状遺構

第001号跡（第62図・図版24）

調査区の北部に位置し、5E-99から6F-19グリッドにかけて検出された。調査区北端から南東方向に延び、6F-19グリッドで途絶え、調査区内の総延長は約35mである。溝状遺構の002号跡の末端があるいは分岐して001号跡につながる可能性も考えられる。幅は、南東側が約1.8m前後で一定しているが、北西部は2条に分かれ、幅が約3m前後となる。北西端が分岐することから本遺構は単純に1条の溝からなるのではなく、最低2条の溝が重なっていると思われる。土層断面では明瞭な切り合いが捉えられなかったことから、当初掘られた溝とは大きな時間差を伴わずに再び掘り返されたのではないかと考えられる。溝の底面には小ピット列が検出されている。検出面からの深さは最も深い所で0.50mである。覆土は暗褐色土を主体としており、全体的には上下層の移動は少なく水平な安定した堆積状況を示している。出土遺物は、縄文時代中期加曽利後半の土器片が67点、古墳時代後期土師器片が3点、カワラケ片3点、中・近世



第62図 001号跡

陶磁器片 4 点などである。図示できるものはなかった。これらの土器から本遺構の時期を決めるのは難しいが、002号跡と時期的には重なるのではないかと思われる。

第002号跡（第63・64図・図版24）

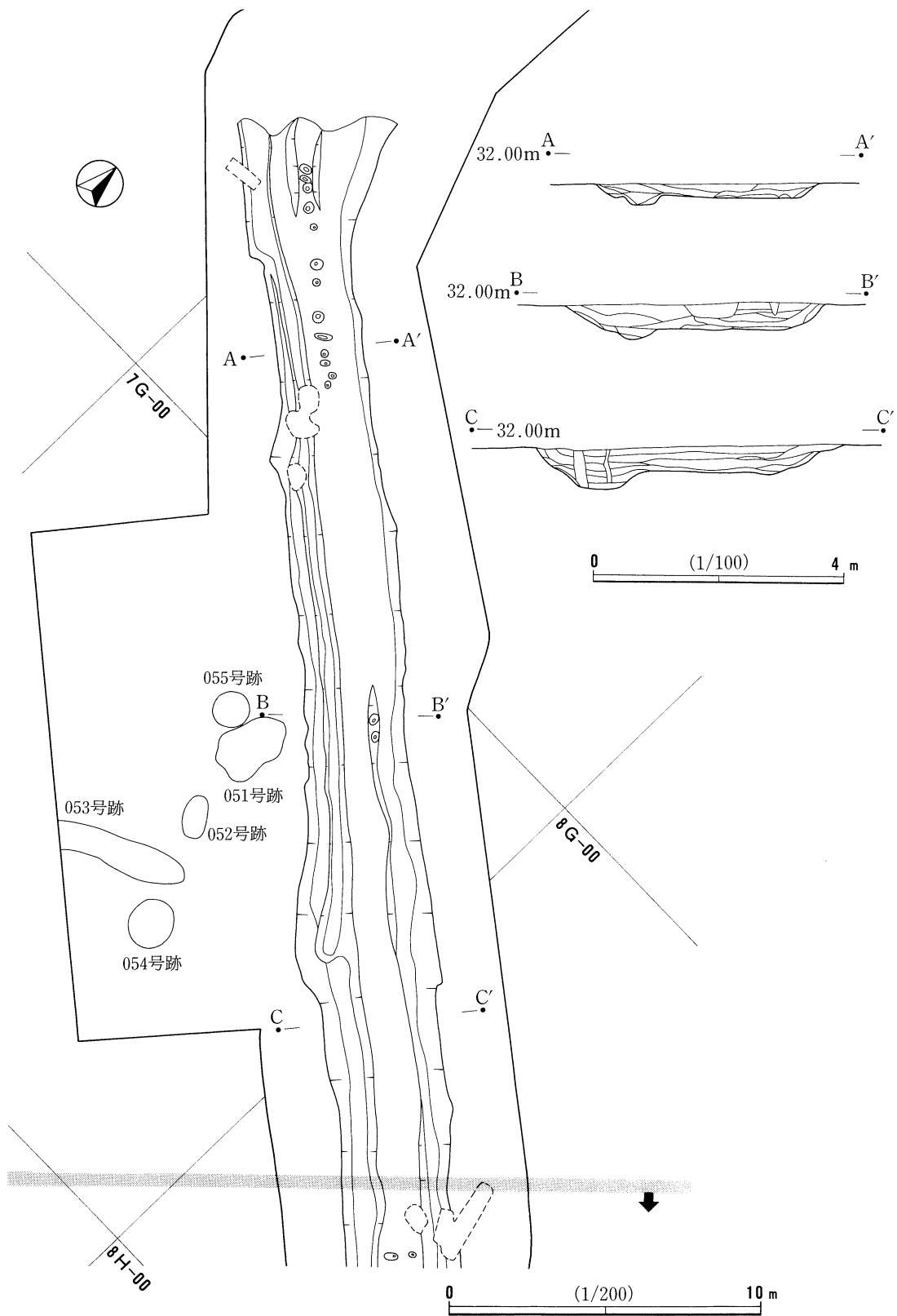
調査区の北部に位置し、6F-59から9I-13グリッドにかけて検出された。調査区北端に位置する001号の溝状遺構に隣接し、北端が分岐することから001号跡と連続する可能性もある。遺構は南東方向に延び、調査区内の総延長は約73mである。幅は約3.0m～4.0mでほぼ一定している。本遺構の構造は左右に幅 1 m前後の溝が並行して走り、中央はやや低い平らな面が形成されている。溝の幅を除く中央の幅は約1.5mである。検出面からの深さは最も深い所で0.62mである。部分的にこの平らな面に小ピットが連続して検出されている。検出状況から 2 条一組で中央の平らな面が道路面のようにも考えられるが、北端で 2 条が重なってしまうことから時期差を伴う可能性もある。しかし、C～Eの土層断面図を見ると中央の平らな部分は周囲の検出面よりも低いことから、両溝を伴ったひとつの遺構ととらえた方が良さそうである。溝の覆土中位には道路面として使用されたいい硬化面があり、両側の溝を含めた幅全部が道路面として機能していた期間があるものと推測される。溝の覆土は、2 条とも暗褐色土を主体としている。出土遺物は、縄文時代中期後半の土器片が約80点、弥生時代後期の土器片が 6 点、古墳時代前期土器片 4 点、平安時代から中世の土師器ないしはカワラケ片12点、須恵器片約60点、中世内耳土器片、近世陶磁器片などが出土している。本遺構に伴う可能性のある遺物を特定するのが難しく、しかも図示できるものは少なかった。これらの土器から本遺構の時期を決めるのは難しいが、調査区内で検出された他の溝状遺構とは何らかの関連性があるものと思われる。

第005号跡（第65図・図版25）

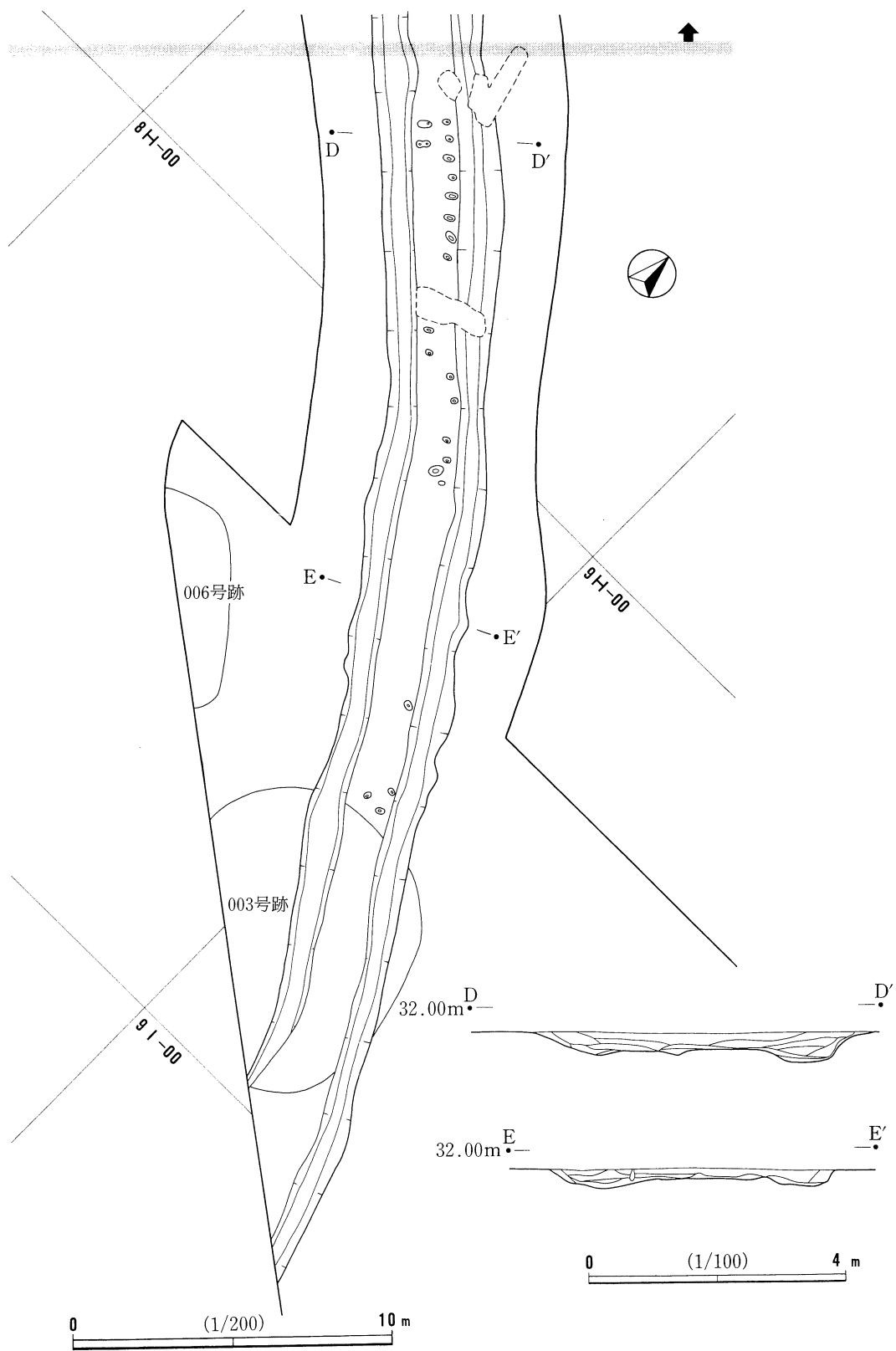
調査区の南端部に位置し、18N-80グリッドを主体に検出された。北東及び南西方向に延びている。幅約2.5mである。002号跡と同様に 2 条の溝が左右にあり、中央に平らな面が伴う構造である。土層断面では左右の溝に前後関係は見出せず、ほぼ同時に掘られた溝と考えられる。また、埋没の時期もほぼ同時であろうと考えられる。深さは最も深いところで0.34mある。覆土は黒褐色土を主体としている。部分的に覆土の中位で硬化した面が検出されており、一時的に道路として使用されていたと考えられる。出土遺物には若干の土師器片が出土しているだけである。図示できるものはなかった。これらの土器片から本遺構の時期を判断するのは難しい。

第021号跡（第66図・図版25）

12J-20から12J-27グリッドを主体に検出された。調査区を東西方向に縦断している。東側の



第63図 002号跡 (1)

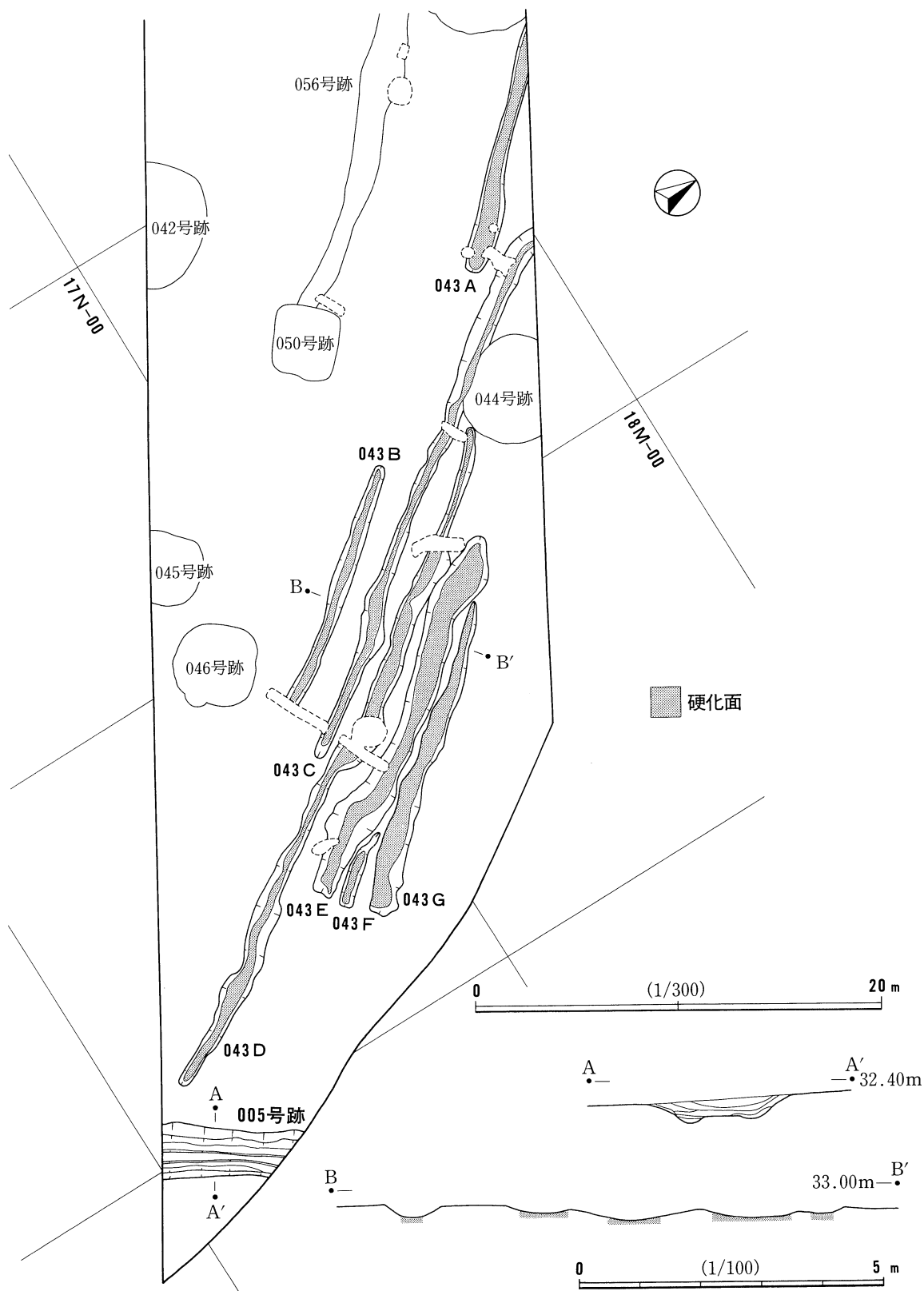


第64図 002号跡 (2)

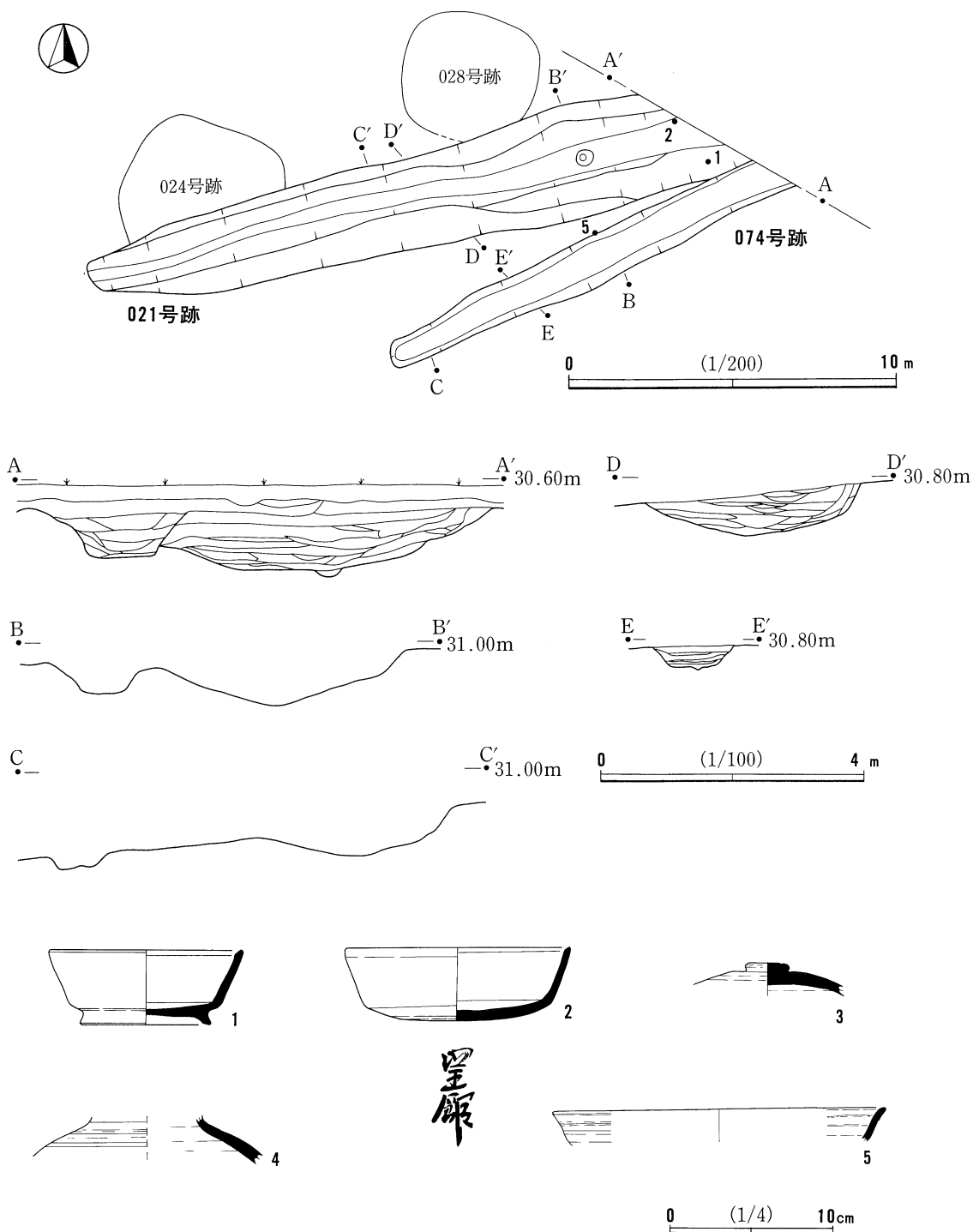
調査区外縁部分で074号の溝状遺構とクロスしている。土層断面から074号跡の方が本遺構よりも新しいと判断される。最も残存状況の良い部分での遺構幅は3.45mである。西に行くに従い溝幅が狭くなるが、西側調査区外縁部分で検出された020号の竪穴住居跡の上に本遺構が通っていることが土層断面から確認されている。本遺構が検出された場所は、西側に向かって1m以上標高が下がっており、西側の遺構検出面が高ければ、調査区を縦断している状態が検出できたものと思われる。覆土は薄い層が重層的に見られ、上下層の攪乱はほとんどないものであり全体に明褐色から褐色の土を主体としている。中位層には硬めの砂質層が2～3面認められ、調査中においても何枚かの硬化面が検出されていることから、道路として断続的に使用されていたものと考えられる。遺構底面が硬化していないことから、道路の目的で当初掘られた遺構であるかどうかははっきりしない。出土遺物は少なく、弥生時代後期の土器片、古墳時代前期の土師器片、須恵器片、布目平瓦片などが少量出土している程度で、図示できるものは少なかった。1～4は須恵器である。1はほぼ完形の高台付杯である。底部は回転糸切り後に高台を貼りつけている。器形断面は直線状に立ち上がる「箱形」を呈する。2は回転ヘラケズリ調整の底部である。内外面に火だすきを伴う。外面底部に「罍館」の墨書がある。3は蓋の破片である。内面が平滑であることから、硯に転用された可能性がある。4は短頸壺であろう。本遺構の時期については、竪穴住居跡を切るなどしていることから多時期にわたる遺物を取り込んでいると考えられ、図示した遺物をもって溝の時期を特定するのは難しいと思われる。しかし、図示した遺物を伴う竪穴住居跡が付近に検出されていないことから、遺存のよい1・2の須恵器などが何らかの目的をもって溝に投げ込まれた可能性があろう。これら須恵器は8世紀後半に位置づけられることから、その頃に溝が埋まりつつあったのではないかと考えられる。

第043号跡（第65図）

調査区の南部で北西から南東方向に走る数条の浅い溝が検出された。北西側からA・B・C・D・E・F・Gの7条からなっている。検出された状況はそれぞれの溝状遺構が途切れた状態であるが、A～Gの遺構すべてが調査区を縦断している状態が調査区外縁の土層断面に観察されている。AとBは連続する1つの遺構の可能性が高い。各遺構の幅は0.5m～1.5m、検出面からの深さは最も深い所で0.20m程度で、全体に10cm以下、所によってはほとんど掘り込みが検出できずに硬化面のみが検出された部分もある。すべての遺構で硬化面が観察され、この硬化面が路面として使われていたことを示している。A以外はローム層まで掘り込みが達しているものではなく、II層中に硬化面が形成されている。明らかに本遺構に伴うと判断できる遺物はない。



第65図 005号・043号跡



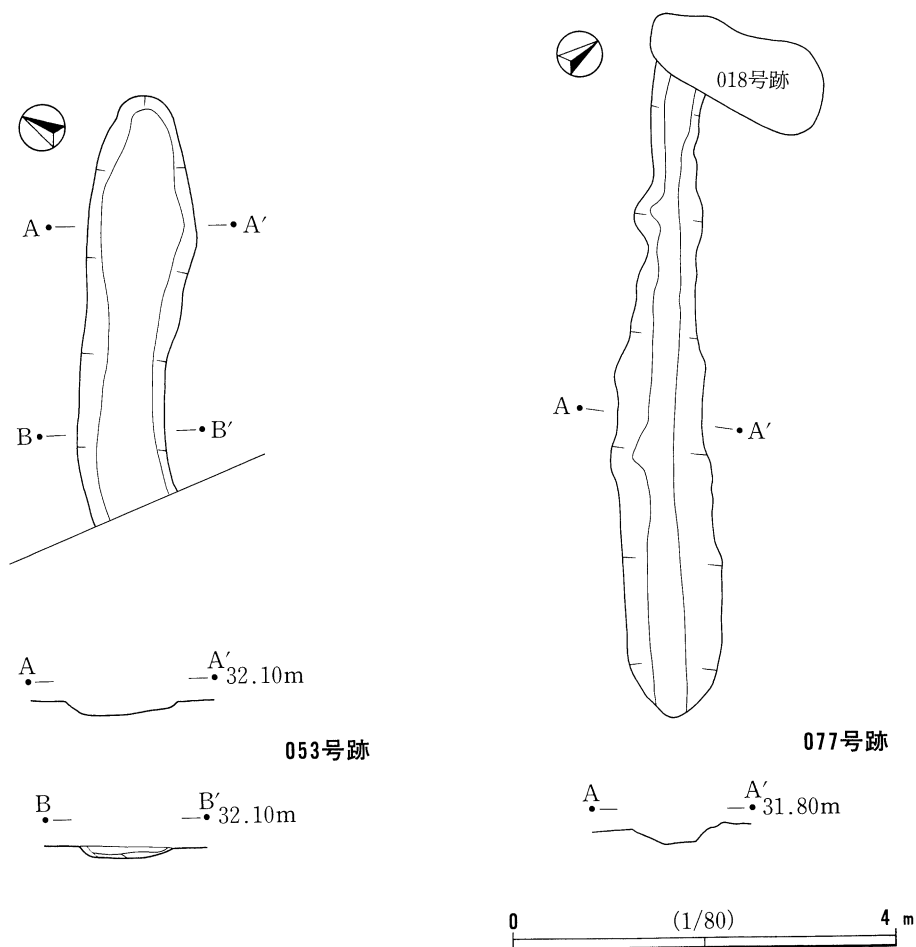
第66図 021号・074号跡及び出土遺物

第053号跡 (第67図・図版25)

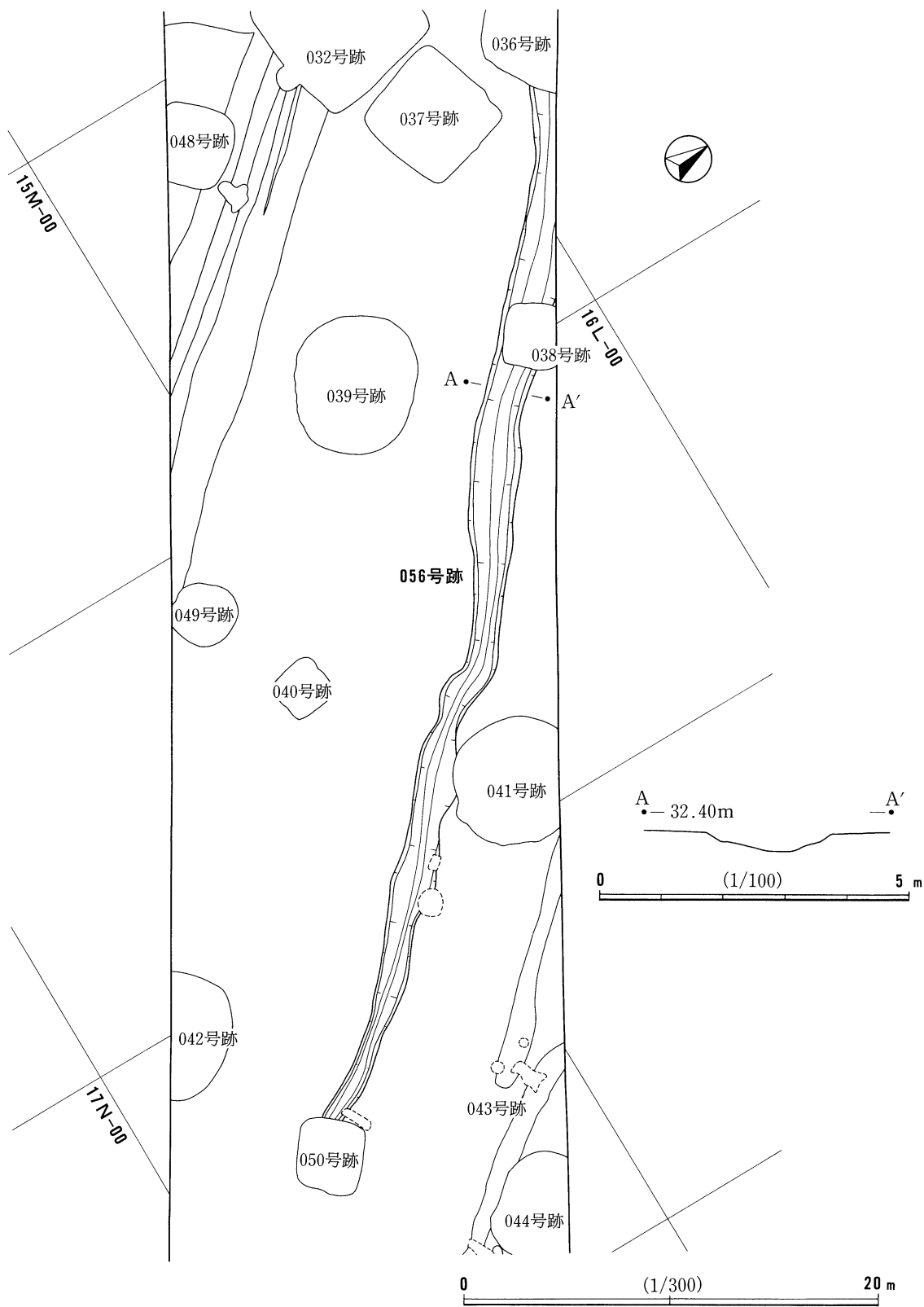
7G-55グリッドを主体に検出された。調査区外から北東方向に延びているが、約4mほどで途切れている。幅約1.0mで、深さは深いところで0.15mである。出土遺物には中世のカワラケと思われる破片が1点出土しているのみである。

第056号跡 (第68図)

調査区の北部に位置し、15K-84から17M-53グリッドにかけて検出された。西側を走る061号跡や東側を走る043号跡の溝状遺構の方向とほぼ同一方向に延びている。総延長は約50mである。幅は1.0m～2.5m前後で一定していない。底面はほぼ平らである。検出面からの深さは最も深い所で0.30mである。竪穴住居跡の036号跡、038号跡、041号跡、050号跡を切るため、各竪穴に関連する遺物が覆土中から出土している。覆土は暗褐色土を主体としており、全体的には上



第67図 053号・077号跡



第68図 056号跡

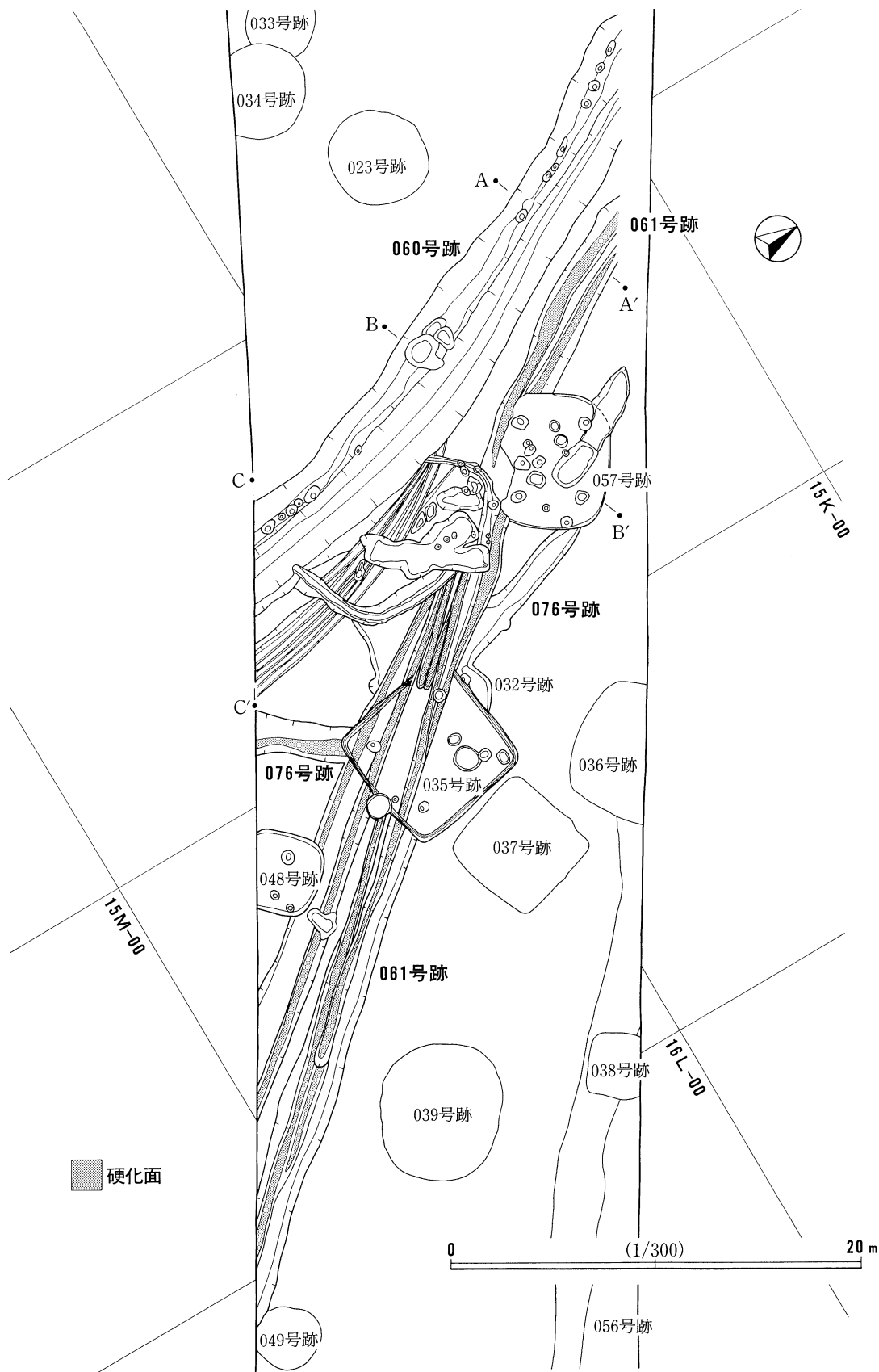
下層の攪乱は少ない。出土遺物は弥生時代後期の土器片に限られており、時期は不明である。

第058号跡（第69図・図版26）

溝状遺構の060号及び061号跡が交差する部分に位置し、14L-06グリッドを主体に検出された。数条の溝状遺構が錯綜するため本遺構の検出状態はよくない。土層断面によって確認はできなかったが、060号跡に切られていると考えられる。平面形態は細い溝がU字形にめぐっており、全体の平面形態がどのようなものであったかはわからない。溝の幅は0.20m～0.50mと狭い。深さは深い所で0.20m程度である。性格不明の土坑059号及び075号跡が本遺構内にあるが、直接的な関連はなく、時期差を伴うと思われる。ピットなども不規則ではあるが検出されており、何らかの建物が構築されていた可能性もある。本遺構に直接関連づけられる出土遺物はない。



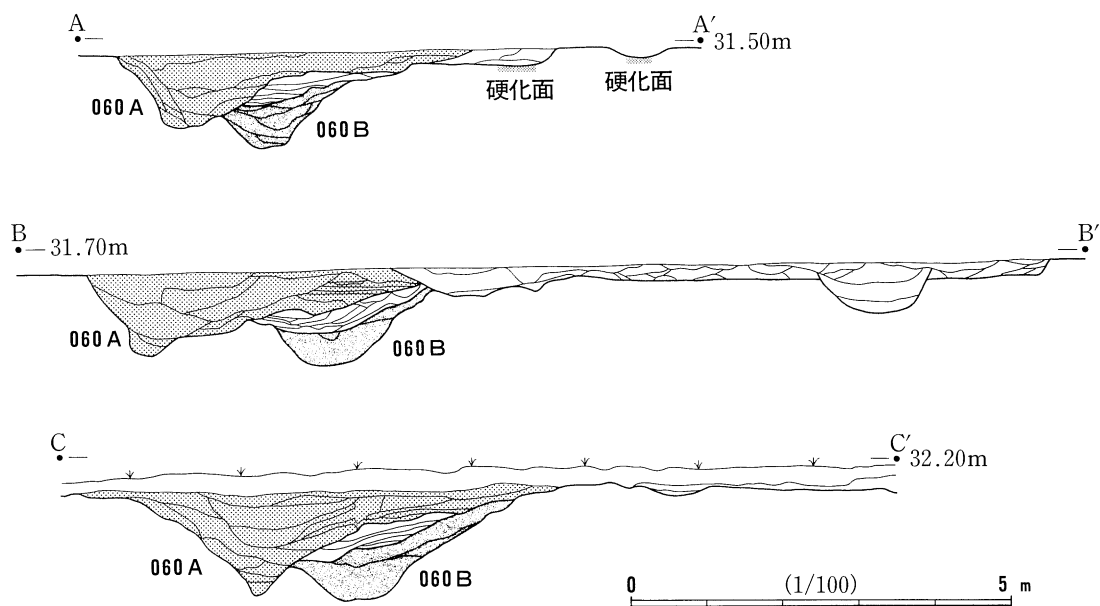
第69図 058号跡



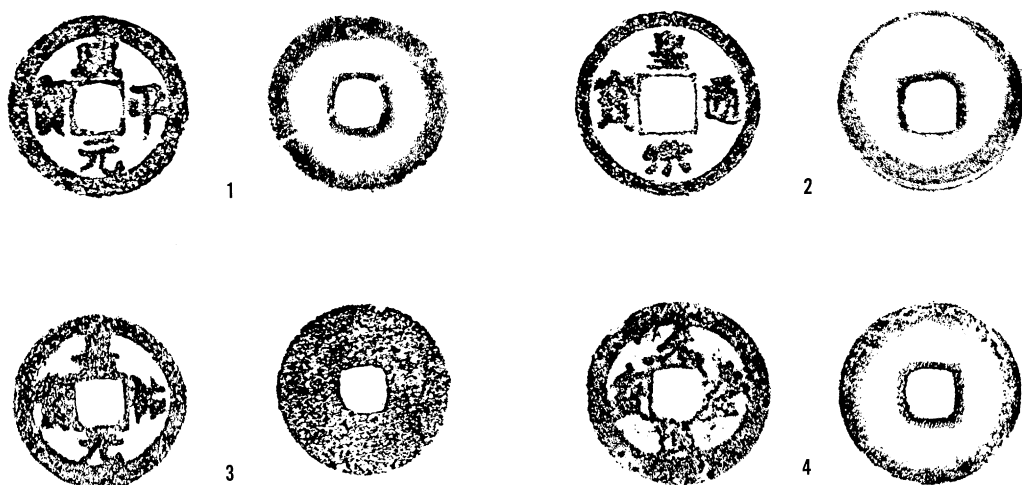
第70図 060号・061号・076号跡

第060号跡（第70～73図・図版26・27）

13K-98から14L-47グリッドにかけて検出された。調査区を北北西から南南東へ縦断している。調査区内の総延長は約30mである。幅は3.4m～4.8mで一定していない。土層断面図によれば明らかに2条の溝からなっている。西側を060A号、東側を060B号とすると060A号のほうが後から掘られたものであることは明らかである。深さは南に向かうにしたがい深くなり、060A号で



第71図 060号跡土層断面図

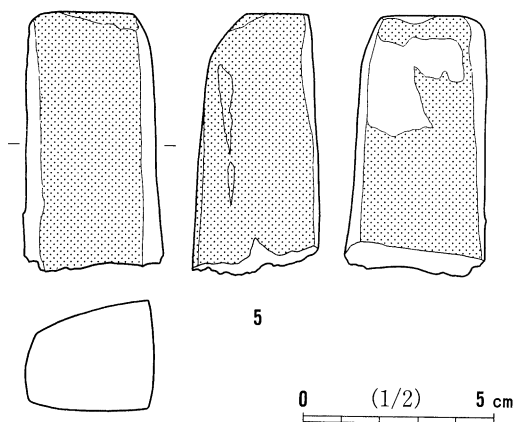


第72図 060号跡出土銭貨（1/1）

最も深い所では検出面から1.02m、060B号で最も深い所では1.31mである。覆土は060A号の方が暗褐色土を主体とする。060B号は暗黄褐色土を主体とし、覆土中位から水平な堆積土層が認められた。8 cm前後の薄い層が重なり、層理面に硬化面が幾つか認められた。埋没途中で一定期間道路として使用されていたことを示している。土層断面図に示したが、大きくは最低3度の掘り返しが行われているようであるが、それ以上の掘り返しが行われたものと思われる（第71図）。遺構番号を付けていないが、060号跡の南東側には3・4条の浅い溝が走っており、そのほとんどは060号の覆土上層を通過している。次項でふれる061号跡は、硬化面を伴う数条の細い溝からなるが、ほとんどは本遺構と合流するものと考えられ、本遺構の北側が道路の分岐点となっていたことは間違いなかろう。ただ、V字状を呈する本遺構が、当初から道路として機能していたかどうかは疑問の残るところである。本遺構が位置する部分の調査前の現況は畑地境となっており、本来的に溝が地境の役割を果たしていたことは確かである。

出土遺物は、規模が大きい割にはいたって少なかった。古墳時代前期の土器片、須恵器の長頸壺・甕の破片、中世のカワラケ片、常滑産の甕、捏鉢の破片などのほか覆土中から北宋銭4枚、砥石1点などが出土している。図示できる土器はなく、溝の時期を明らかにできる資料に乏しい。出土した銭の遺存状態はあまりよくない。第2表に計測値を示した。5の砥石は細かな条線が研磨面に認められる。

本遺構の時期を特定するのは難しいが、021号跡の溝と直行し分岐する溝と考えれば、021号跡から出土した須恵器から8世紀後半には本遺構も存在した可能性があり、その後中世以降まで断続的に道路として使用されたものと考えられる。



第73図 060号跡出土遺物

第2表 銭貨計測値表

挿図番号	遺物番号	銭貨名	初 鑄 年	外縁外 径 mm	外縁内 径 mm	内郭外 径 mm	内郭内 径 mm	外縁厚 mm	重 量 g
第72図1	060号, 17	咸 平 元 寶	咸平元 (998) 年	24.2	18.9	7.4	6.2	0.9	2.1
第72図2	060号, 17	皇 宋 通 寶	寶元元 (1038) 年	24.8	20.6	8.0	7.0	1.3	2.8
第72図3	060号, 18	元 豊 通 寶	元豊元 (1078) 年	24.9	18.3	8.2	6.5	1.3	2.9
第72図4	060号, 18	嘉 祐 元 寶	嘉祐元 (1056) 年	23.4	17.8	7.6	6.2	1.3	3.3

第061号跡（第70図・図版26・27）

14K-02から15M-19グリッドにかけて検出された。調査区を北西から南東へ縦断している。調査区内の総延長は約55mである。本遺構は数条の細い溝からなり、条数を明確に捉えられない部分がほとんどである。幅1m内外の溝が最低6条は走っている。これらの溝には底面に硬化面が認められ、道路として使用されていたと判断される。各溝の掘り込みは浅く、硬化面のみしか捉えられなかったものもある。各溝に直接関連を見いだせる出土遺物はなく、時期は不明である。

第074号跡（第66図・図版25）

12J-35グリッド周辺で検出された。調査区東側外縁部分から西方向に約13m延び、立ち上がっている。遺構幅は1.40m前後で比較的幅は一定している。021号の溝状遺構とクロスしており土層断面から本遺構の方が新しいと判断される。覆土は暗褐色土を主体としており、021号跡で見られた薄い層が重層する土層断面とは明らかに異なっている。021号跡のような硬化面などは検出されていないことから、道路としては使われていないものと考えられる。時期は021号跡よりも下るものと判断されるが、その時期差についてはわからない。出土遺物は少なく、5の須恵器が溝覆土の上位から出土している。5は盤であろうと思われる。

第076号跡（第70図）

14K-68から14L-48グリッドにかけて検出された。U字形を呈する溝状遺構の058号跡を取り囲むように走っている。061号跡の細い溝群と交差している。平面図上では切られているように見えるが新旧関係については不明である。幅は1.0m～1.5mで深さは0.15m程度と浅い。058号跡の外縁を巡るように見えるが関連の有無については分からなかった。西側の溝底面は硬化しており、本遺構も道路として機能していた時期があるものと考えられる。遺構に直接関連を見いだせる出土遺物はなく時期は不明である。

第077号跡（第67図）

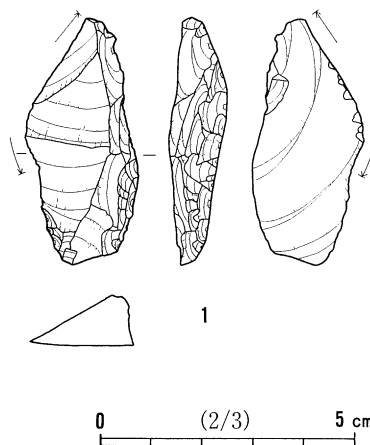
10I-39から11I-52グリッドにかけて検出された。北西端は土坑の018号跡によって切られ終わっている。また、南東端も途切れており、総延長は約7mである。幅は0.5m～1.0mで、深さは最も深い所で0.18m程度である。出土遺物はなく時期は不明である。

第6節 遺構外出土遺物

1. 旧石器時代の遺物（第74図）

発掘調査によって旧石器時代の遺物がわずかながら検出されているが、遺構の覆土から出土しているものに限られている。石器は、ナイフ形石器と旧石器時代に属するとみられる剝片が出土している。

1は009号跡の覆土から出土したナイフ形石器である。横長剝片を素材として、打面部分が側縁となるように調整加工しているが、調整は粗い。素材の末端部分を若干細部加工し、基部としている。最大長49.4mm、最大幅22.1mm、最大厚11.1mm、重量9.3g、石材は珪質頁岩である。



第74図 旧石器時代石器

2. 縄文時代の遺物

縄文時代の遺構は073号跡が縄文時代の竪穴である可能性があるものの、それ以外では明確な遺構は検出されていない。発掘調査によって出土した縄文時代の遺物は、遺構の状況を反映して量的には少なく、整理箱で3箱程度である。いわゆる包含層（Ⅱ層）がほとんど失われているため、縄文時代の遺物は、弥生時代以降の遺構覆土から出土しているものがほとんどである。出土遺物は、縄文土器、有孔土器片円盤、石鏃などわずかな種類であった。以下、各遺物について説明する。

縄文土器

出土した縄文土器は、早期、前期、中期、後期、晩期の各時期のものが出土している。最も多かったのは、中期と後期の土器である。各型式は、早期が田戸下層式、田戸上層式、条痕文系土器、前期が浮島・諸磯式、中期が加曾利E式、後期が称名寺式、加曾利B式、晩期が荒海式である。以下のように分類する。

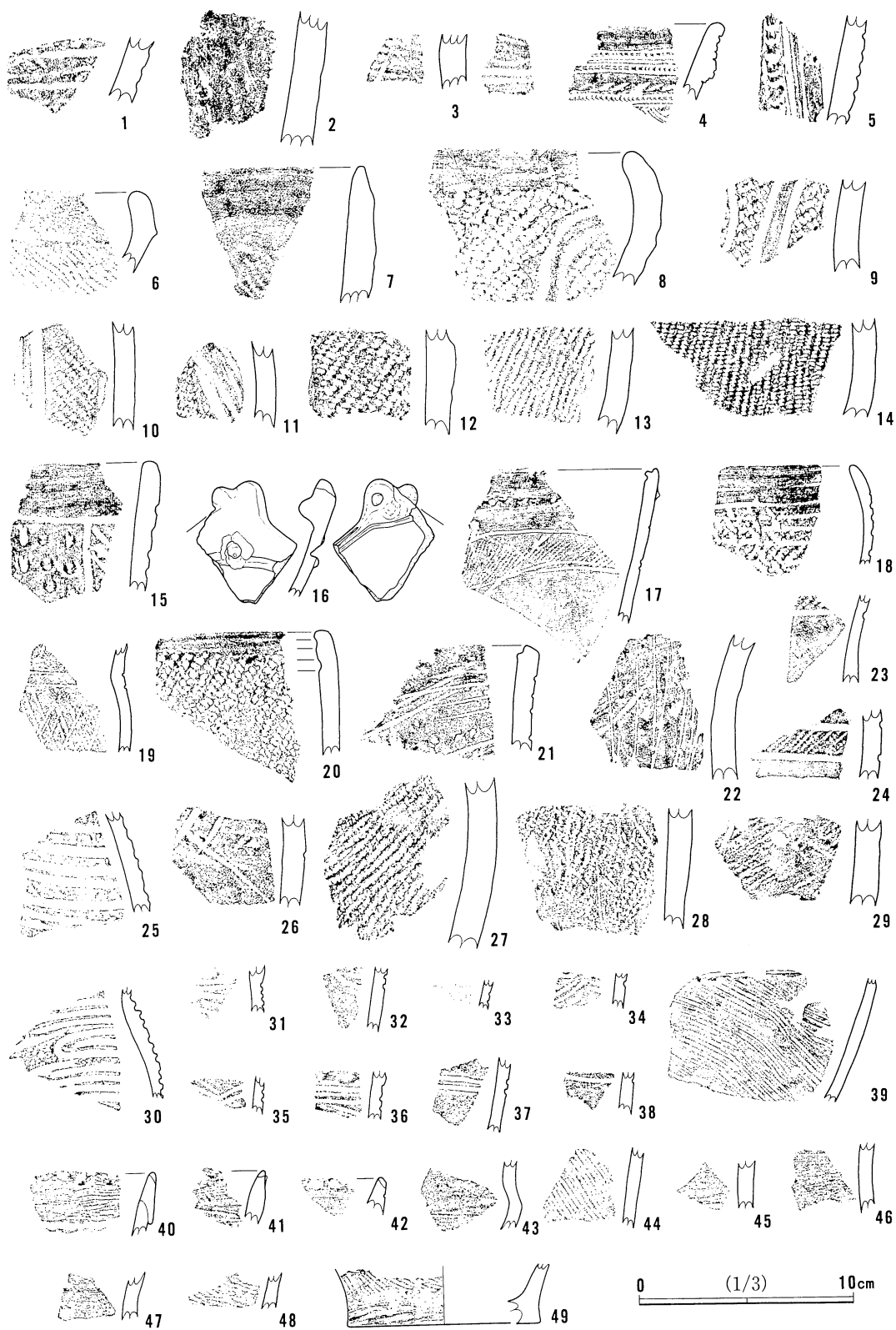
第Ⅰ群土器 早期の土器

第Ⅱ群土器 前期の土器

第Ⅲ群土器 中期の土器

第Ⅳ群土器 後期の土器

第Ⅴ群土器 晩期の土器



第75図 縄文土器

第Ⅰ群土器（第75図 1～3）

早期の土器は、わずか4点ほどである。1は太く、浅い横位の沈線が施されている。田戸下層式である。2は繊維を混入している。外面は粗い調整痕のみである。田戸上層式であろう。

3は貝殻条痕を表裏に伴う。繊維を混入している。

第Ⅱ群土器（第75図 4・5）

前期の土器も早期の土器と同じく微量であった。4は大きく外反する口縁部である。隆帯を伴い、連続するキザミが施されている。隆帯の上下には横位の押引文が走る。5は太めの半截竹管による押引文である。4・5は浮島式。

第Ⅲ群土器（第75図 6～14）

中期の土器は、量的には多く、各群の中で一番出土量が多かった。ほとんどは細かい破片となっているもので占められる。主体は中期末の加曾利EⅢ～Ⅳ式である。6は無文の口縁下がミミズ腫れ状の微隆帯で区画され、以下に縄文が施されている。7は幅広の無文帯があり、それ以下に縄文が施されている。8は口縁部に若干の無文部分があり、沈線で区画されることなく、縄文が施される。縄文施文の後沈線を施して内部の縄文を磨消している。9～11も同様に磨消し縄文である。12～14は深鉢の胴部破片である。12・14はRL、13はLRの単節縄文縄文である。

第Ⅳ群土器（第75図 15～29）

後期の土器は、中期の土器に次いで出土点数がみられたが、決して多い量ではなかった。15は口縁部が沈線によって区画され、無文帯となっている。垂下する沈線で区画された中に列点文が充填されている。称名寺Ⅱ式。16～29は加曾利BⅠ式である。16は波状口縁の波頂部にあたる。外面には横位の隆帯上に8の字浮文が付けられていたらしい痕跡がある。内外面ともに丁寧なミガキである。17は外面にキザミを伴う微隆帯を貼りつけ、横走する沈線で区画された中に単節LR縄文が施文されている。18は深鉢の内湾する口縁である。横走する並行沈線を施した後、単節LR縄文を施文し、最後に蛇行する沈線を垂下させている。19は口縁が開き、いったんくびれて胴部が膨らむ深鉢であろう。頸部に沈線を伴い、胴部には沈線を斜格子状に施している。20は口縁内面に2本の沈線が巡る。外面には単節LR縄文が施文されている。21・22は同一個体である。口縁部には横位の、胴部には垂下する乱雑な沈線が施されている。23・24は別個体である。単節LR縄文を横位に施文した後、沈線で上下を区画している。25は縄文施文し、太めの沈線を荒く施している。26は雑な沈線が施されている。27～29は単節LR縄文が施されている。

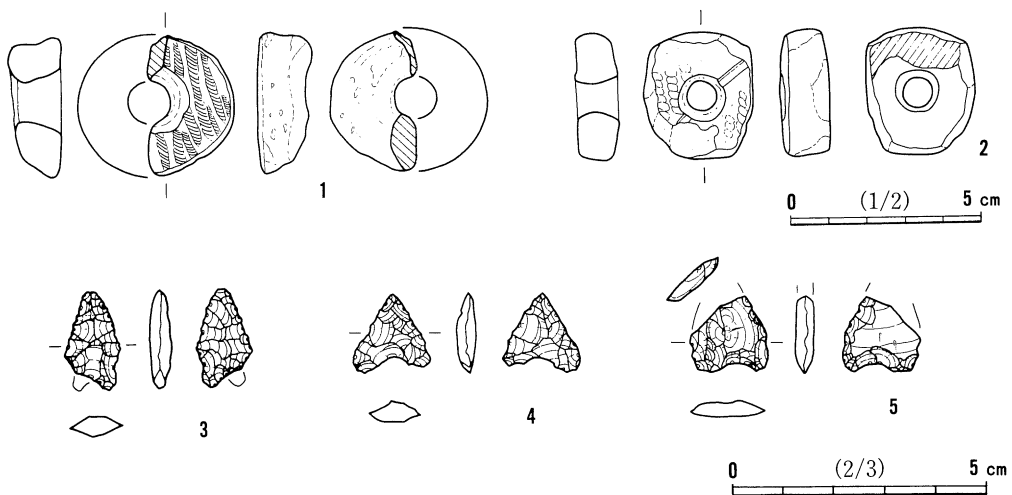
第Ⅴ群土器（第75図 30～49）

晩期の土器は微量で、そのほとんどは003号・036号跡の覆土から出土し、極めて限定された

場所からであった。すべて荒海式で、そのほとんどを図示した。30は壺の肩の部分であろう。沈線による変形工字文である。地文に単節LR縄文が施され、深い沈線で変形工字文が描かれる。胎土は良好だが、内面の調整がやや粗い。31～38は三角連繫文であろう。同一個体の可能性が高い。器形は浅鉢ないしは鉢と思われる。胎土はやや砂がちである。39は鉢の胴部下半である。横位の沈線が認められ、先端がささくれた茎束条痕が斜め方向に施されている。内面はヘラによるナデである。40・41は折り返し口縁である。口端にキザミを伴い外面には条痕が横位に施されている。口端のキザミは燃糸原体の圧痕のようにも見えることから、外面の条痕は燃糸条痕の可能性もある。胎土はやや粗く、粗い砂粒を混入する。42も折り返し口縁であろう。細い沈線が一条施されている。外面は黒色を呈する。43は口縁部からいったんくびれて胴部で膨らみをもち底部にいたる鉢であろう。胴部以下は条痕、くびれ部が無文帯となる。内面の調整はやや粗い。44～47は条痕である。46・47は細密条痕である。48・49は同一個体である。底面でやや径が広がる。胴部は無節L縄文を施文し、底面近くは細いヘラによる斜め方向のナデである。胎土は良好だが、やや焼成があまいようである。

有孔土器片円盤（第76図 1・2）

2点出土している。いずれも半分に割れている。1は、直径約4cmである。縄文時代中期加曽利E式の深鉢の胴部破片を加工していると思われる。中央を回転穿孔している。7Gグリッドから出土している。2は、長軸約3.3cm、短軸長2.9cmの楕円形を呈する。縄文時代後期加曽利B式の深鉢の胴部破片を加工していると思われる。中央を回転穿孔している。包含層から出土している。



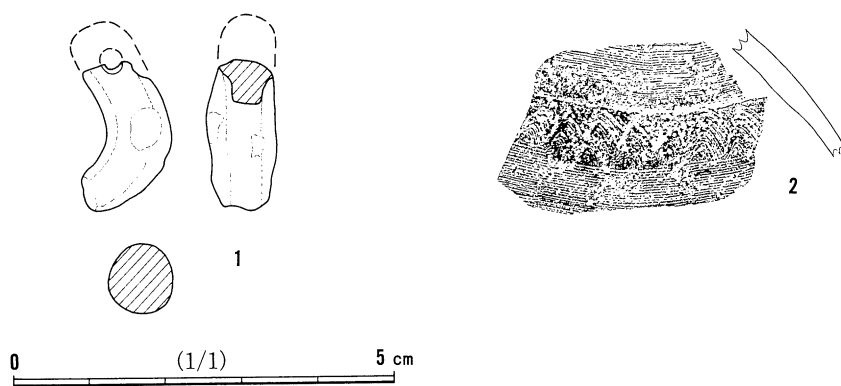
第76図 縄文時代遺物

石 鋏 (第76図 3～5)

3点出土している。3は、凹基式の石鋏である。基部に近い両側縁に挟りがはいる。後・晩期のいわゆる飛行機鋏のような形態に近い。石材はチャート。12J-46グリッド出土。4も凹基式の石鋏である。縁辺の調整が粗く行われている。石材は黒曜石。12J-50グリッド出土。5も凹基式の石鋏である。縁辺の調整が粗く行われているだけで裏側はほとんど加工が及んでいないことから、未製品の可能性が高い。石材は黒曜石で包含層から出土している。

3. その他の遺物 (第77図 1・2)

1は土製勾玉である。長さ2cm、幅7mmを測る。片方の端が欠けるが、孔の一部が残る。ナデでつくられる。淡い褐色を呈する。胎土は密だが、4mm大の礫も見受けられる。2は非在地的な大型壺形土器の体部である。器壁は内外面ともに荒れている。櫛状工具による条線文2帯が、同工具による波状文を挟むかたちで施される。外面は褐色、内面は褐灰色を呈する。胎土は密だが、疎らに2～3mm大のシャモット状暗赤褐色粒を含む。在地の胎土のようである。



第77図 その他出土遺物 (2 1/3)

写真図版

山田橋表通遺跡

遺跡周辺の航空写真





調査区全景



調査風景



調査風景



調査風景



調査区近景



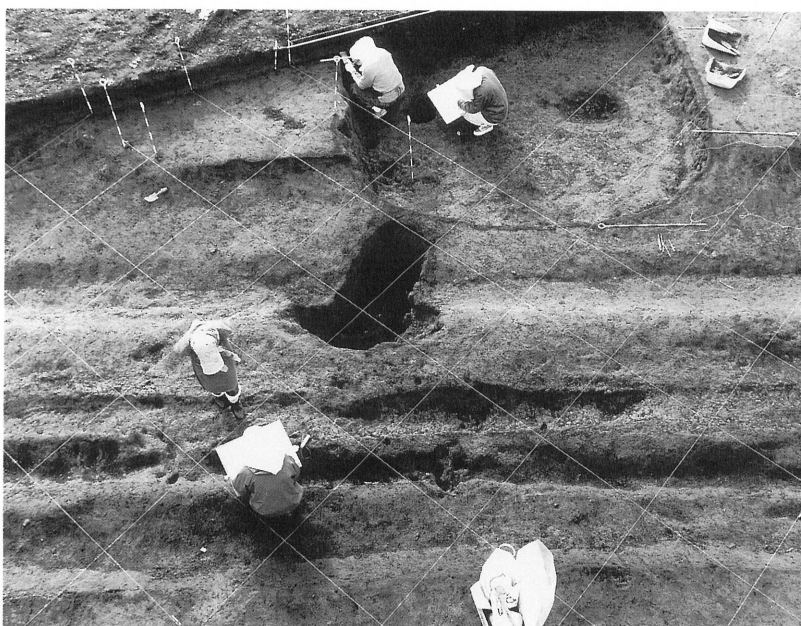
調査区近景



調査区近景



調査風景



調査風景



調査風景



調査区近景



調査区近景



調査区近景



003号跡



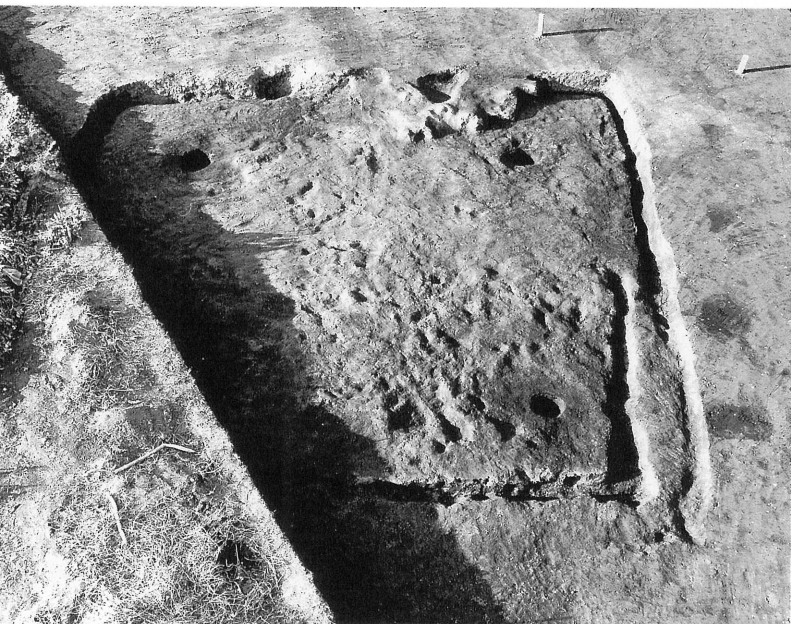
004号跡



006号跡



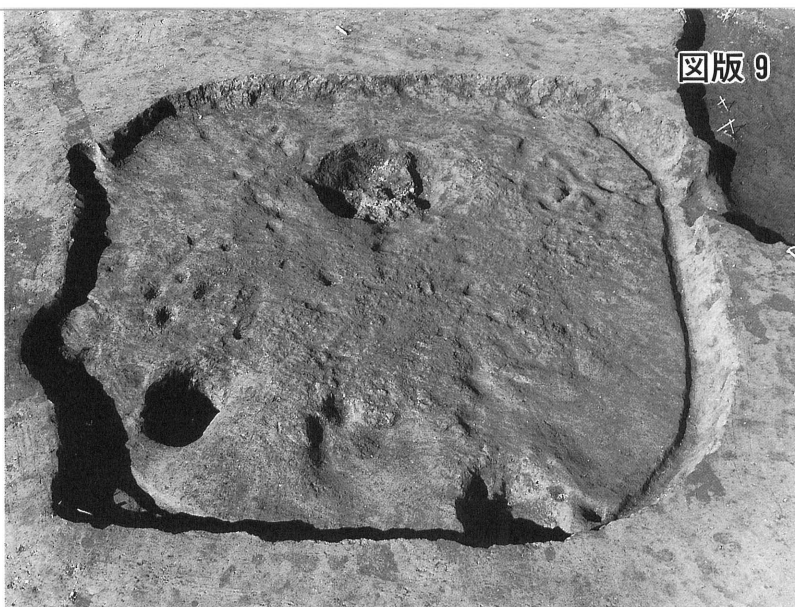
007号跡



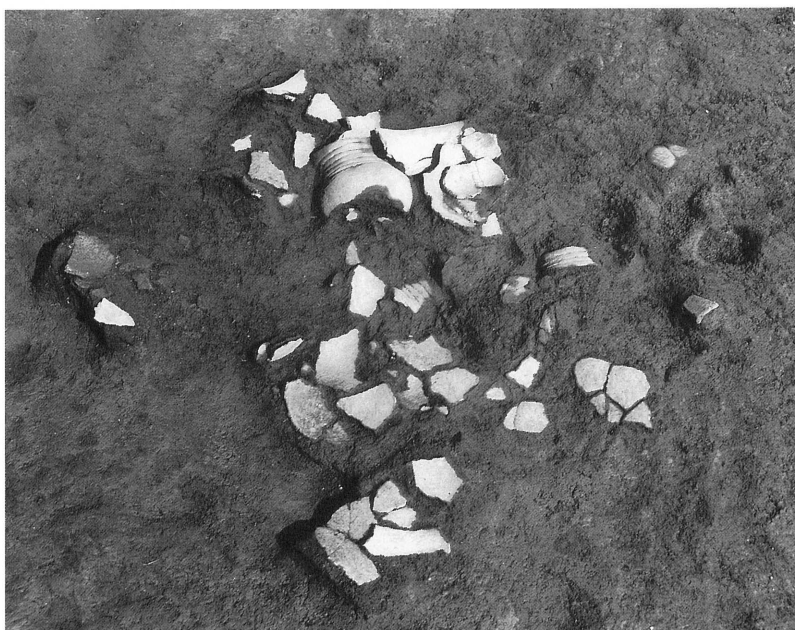
008号跡



009号跡



014号跡



014号跡遺物出土状況



015号跡



016号跡



017号跡



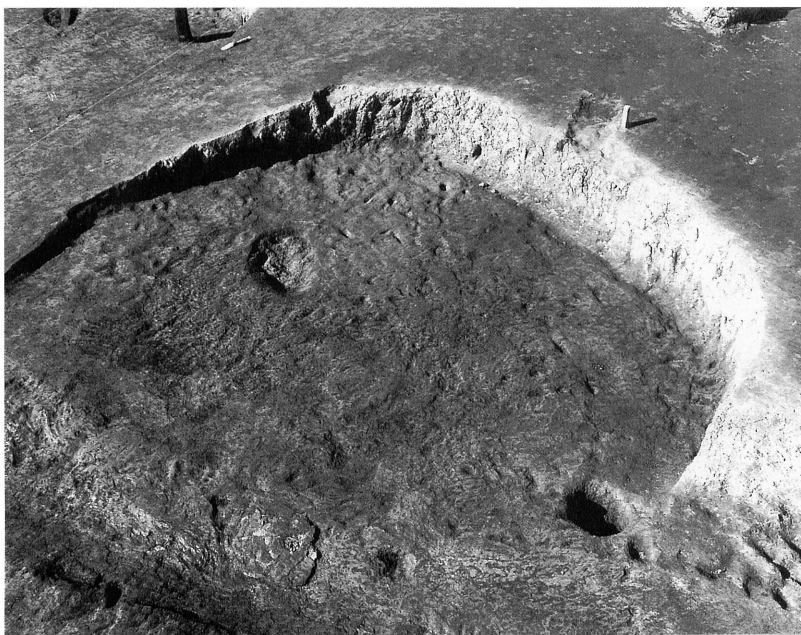
020号跡



022号跡



023号跡



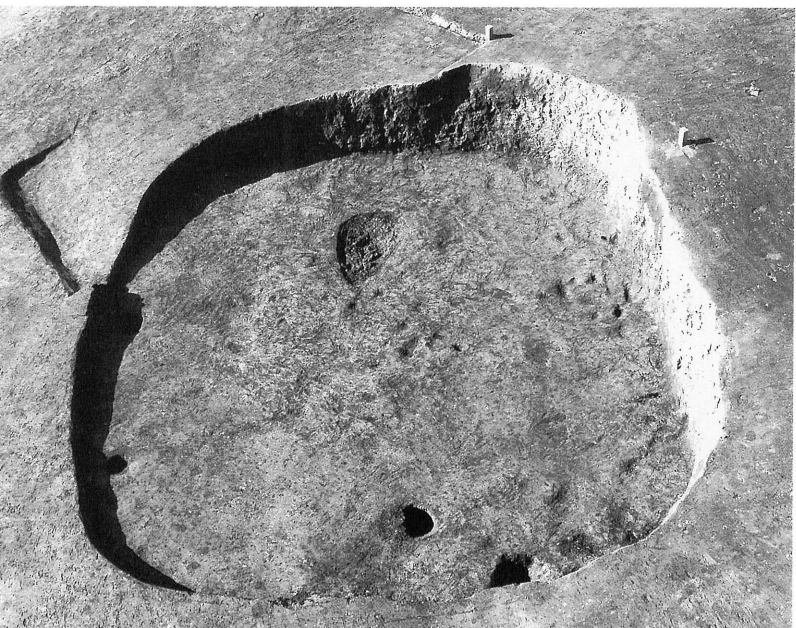
024号跡



025号跡



025号跡遺物出土状況



026号跡

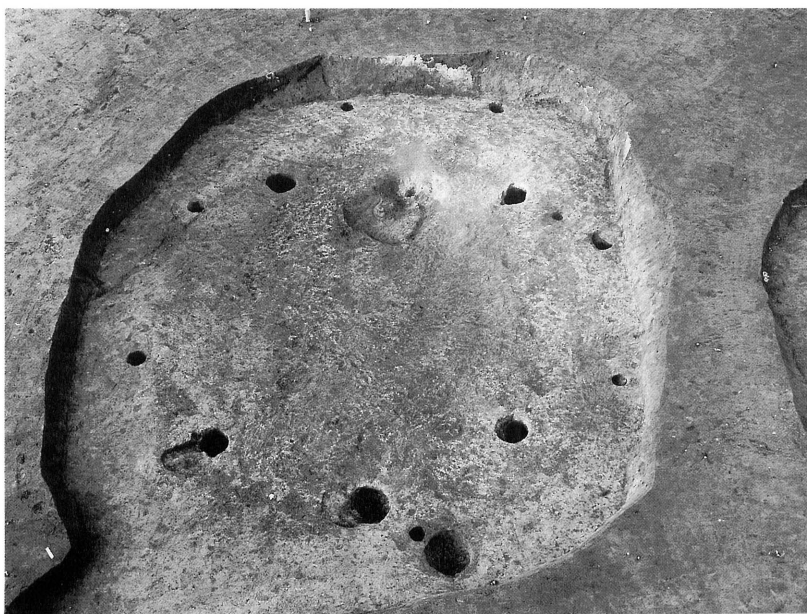


図版13

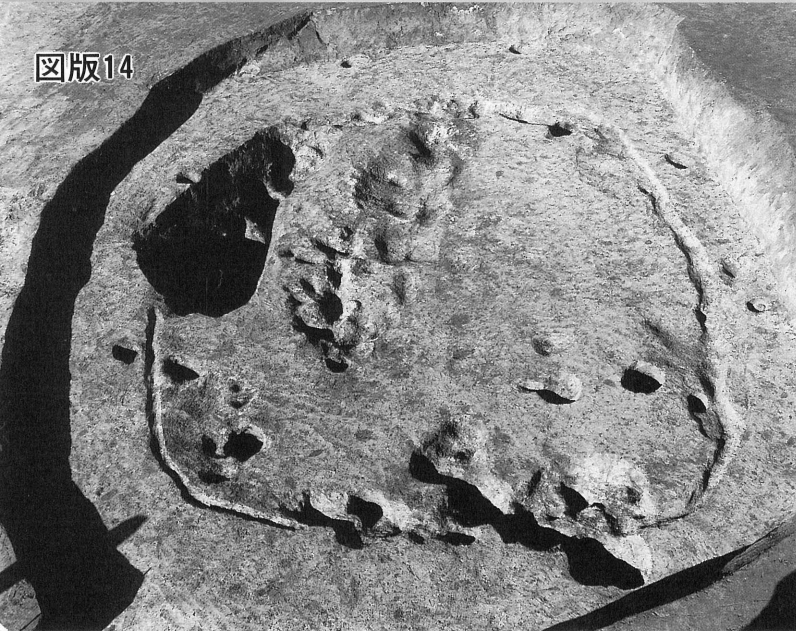
027号跡



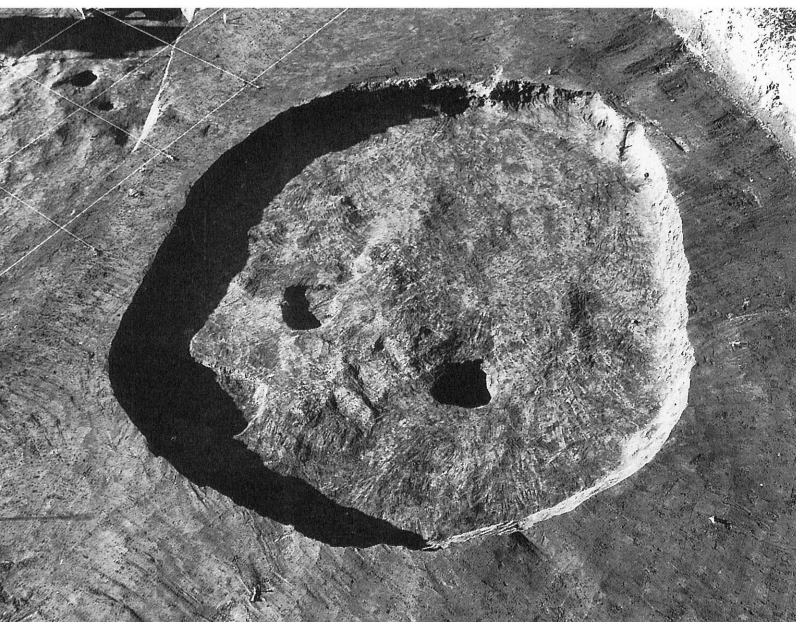
028・029号跡



030号跡



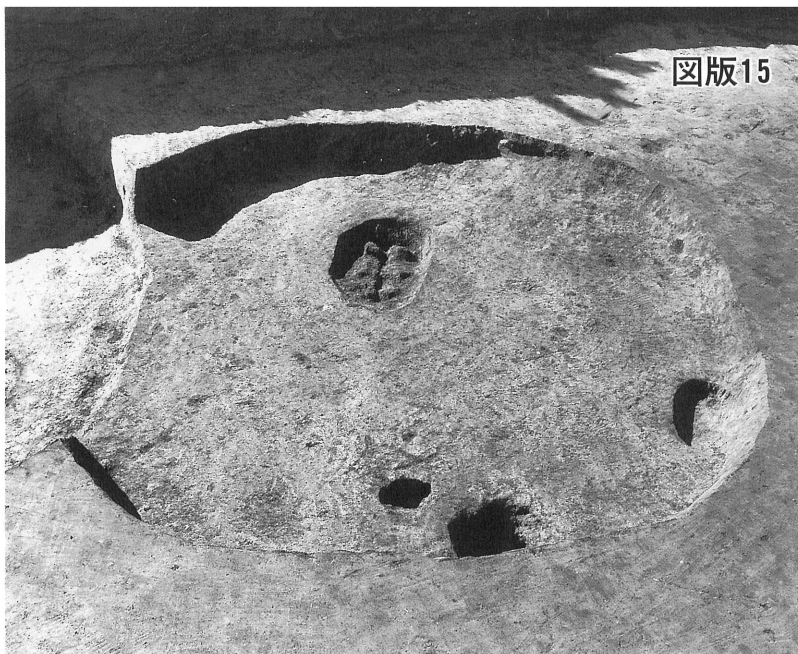
030号跡床面下調査状況



031号跡



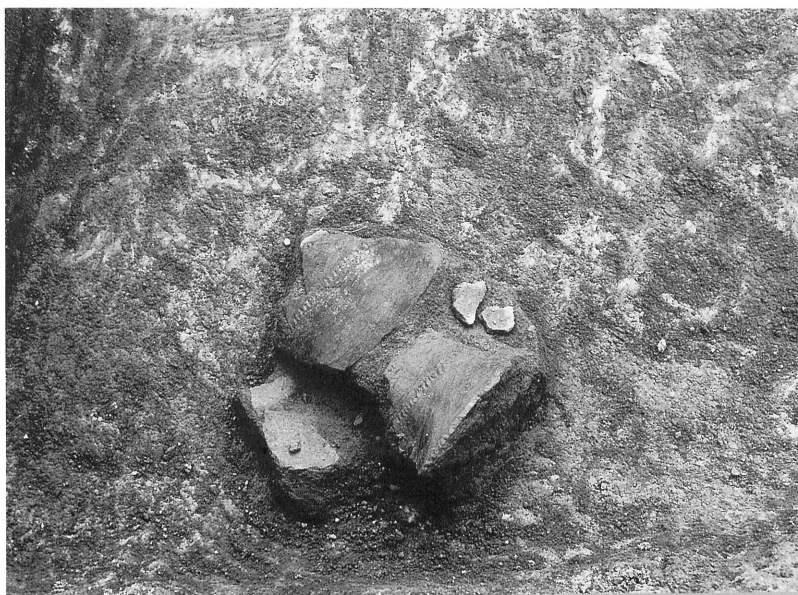
032号跡



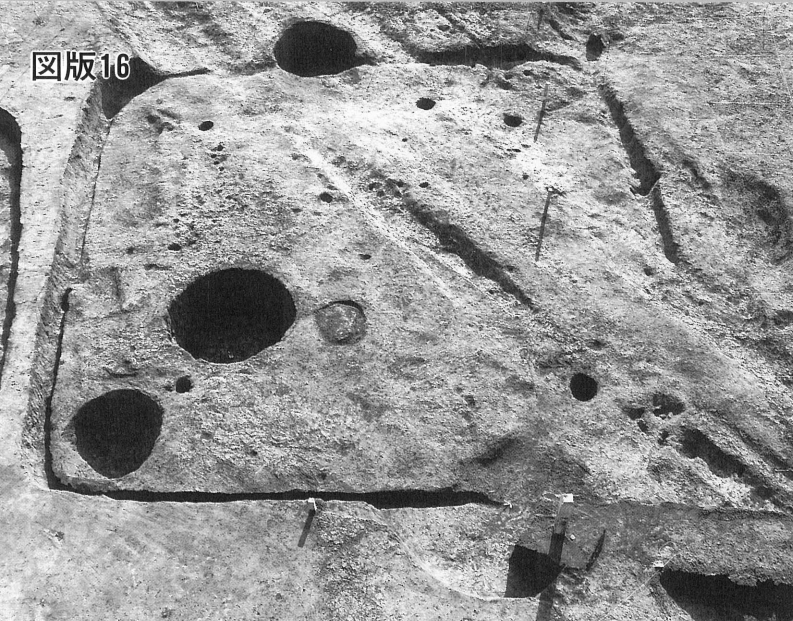
033号跡



034号跡



034号跡遺物出土状況



035号跡



036号跡



037号跡



038号跡



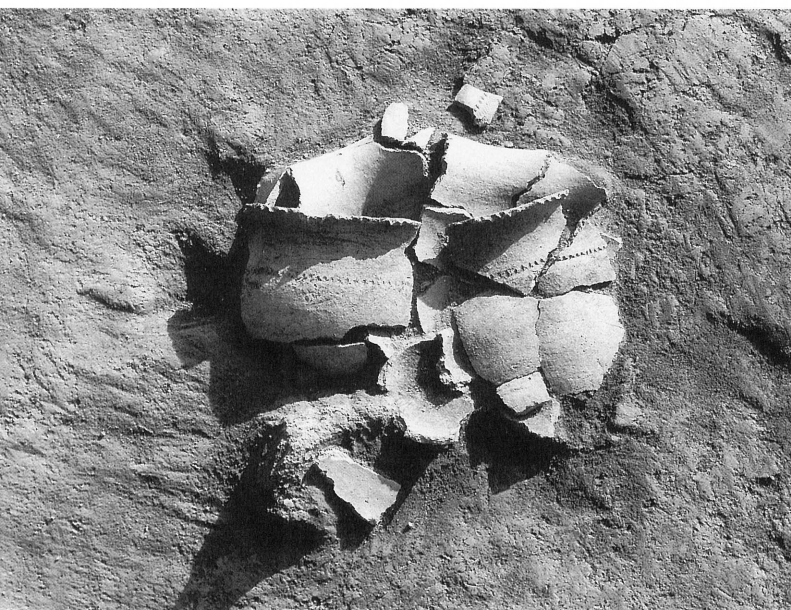
039号跡



040号跡



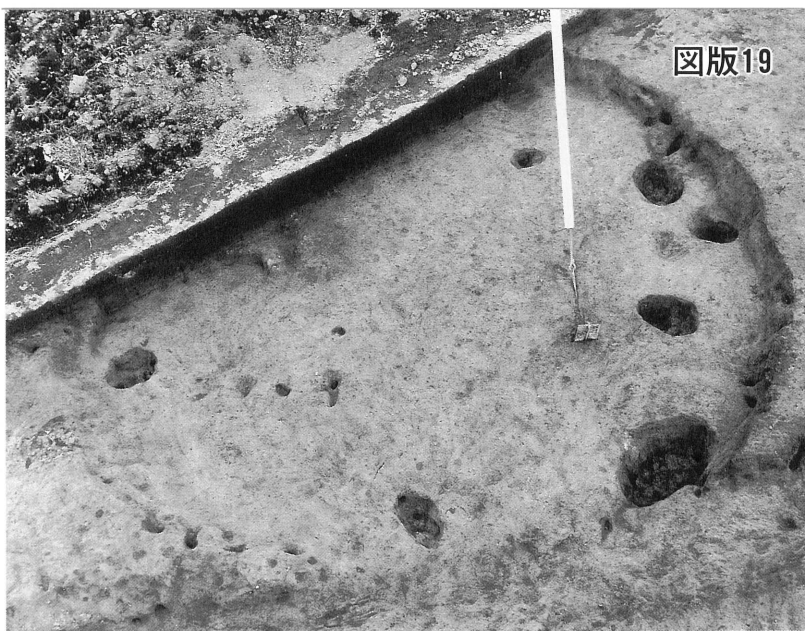
041号跡



041号跡遺物出土状況



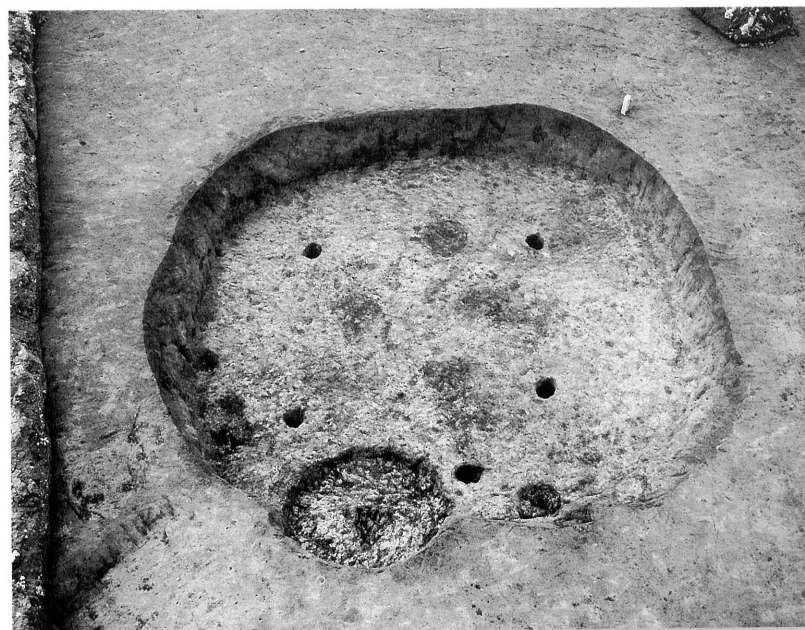
042号跡



044号跡



045号跡



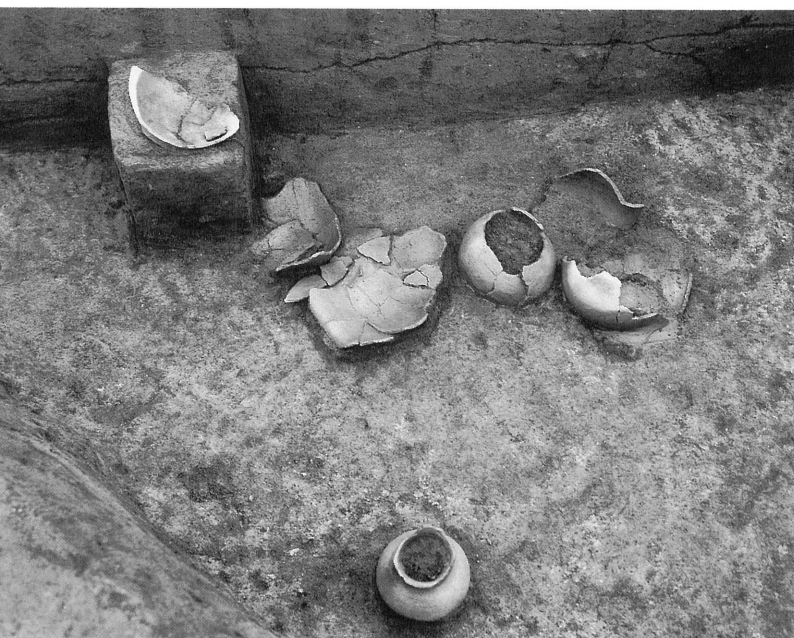
046号跡



046号跡遺物出土状況



046号遺物出土状況



046号跡遺物出土状況



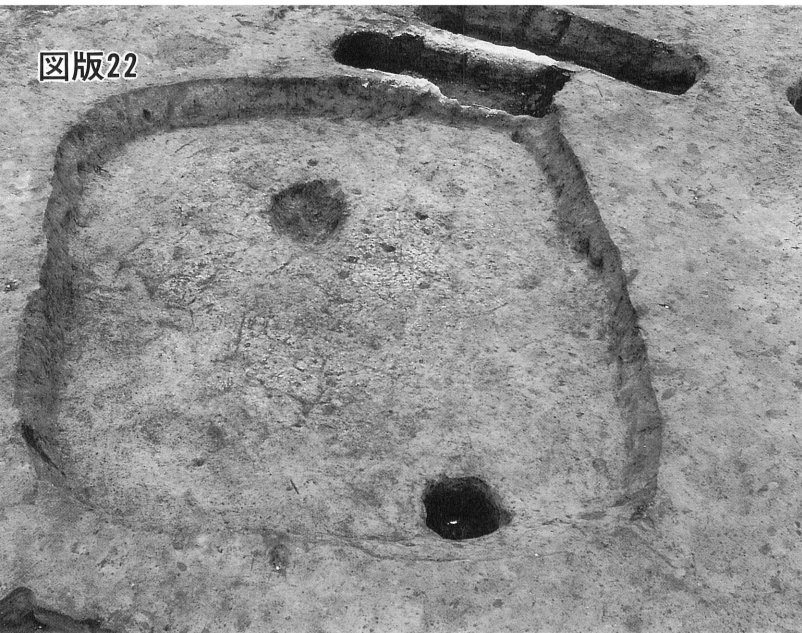
047号迹



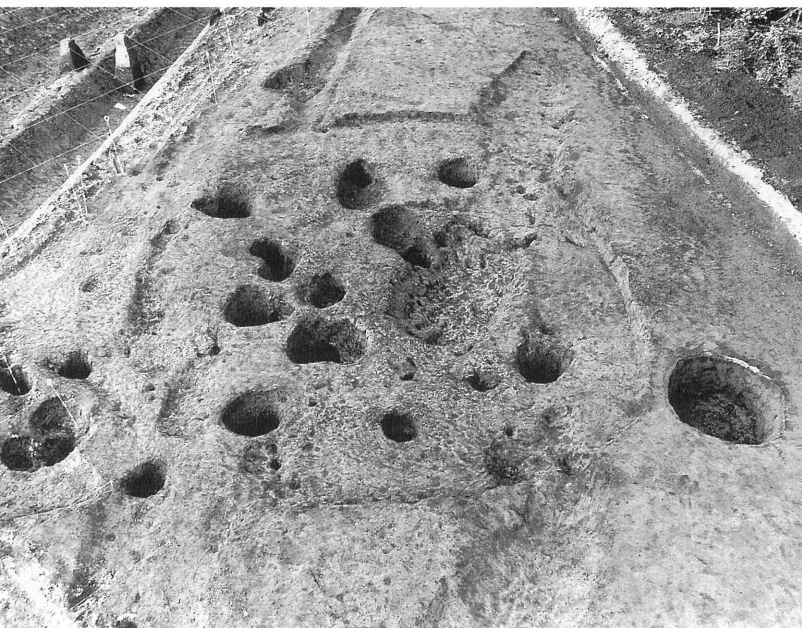
048号迹



049号迹



050号跡



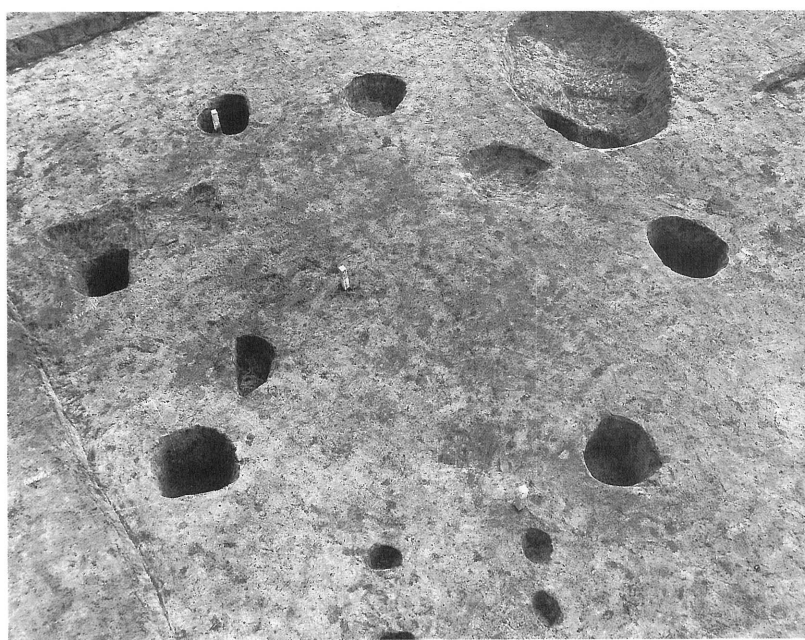
057号跡



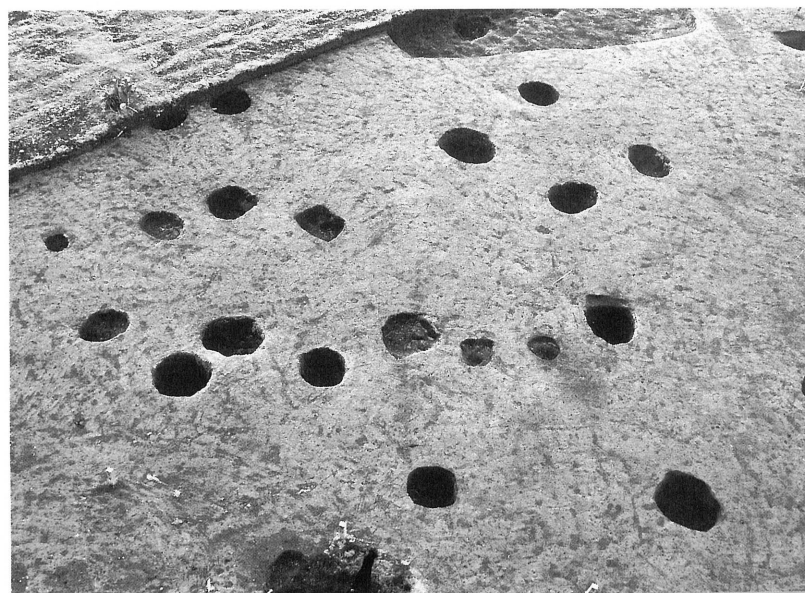
063号跡



064号跡



073号跡



011号跡



001号跡



002号跡



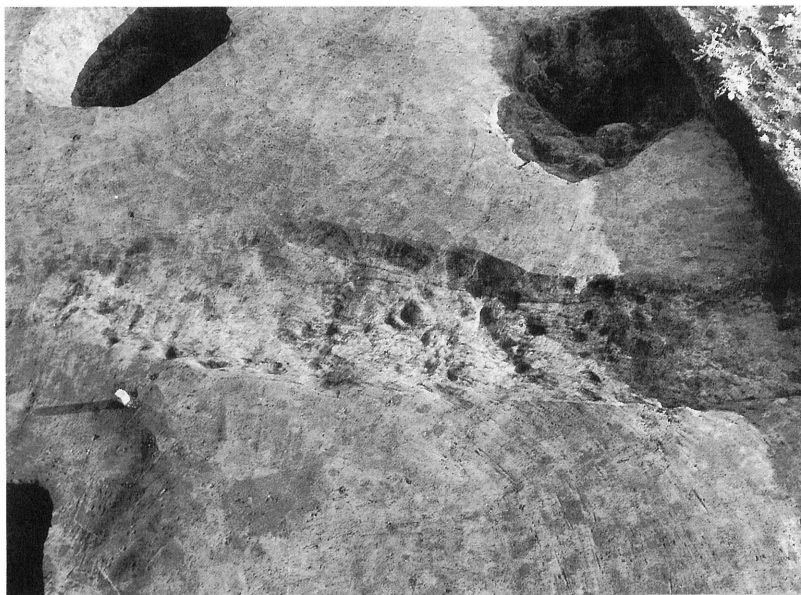
002号跡土層断面



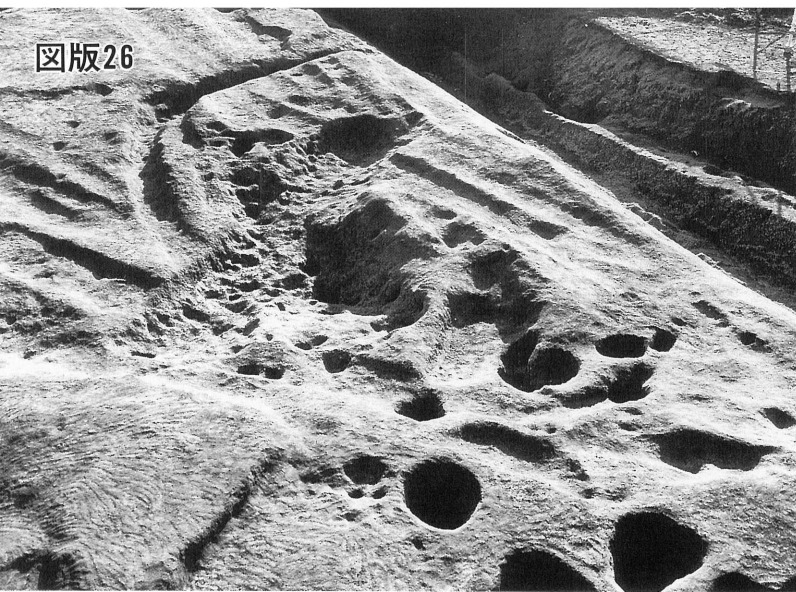
005号跡



021・074号跡



053号跡



058号跡



060・061号跡



060号跡北側土層断面



060号跡南側土層断面



060号跡中央土層断面



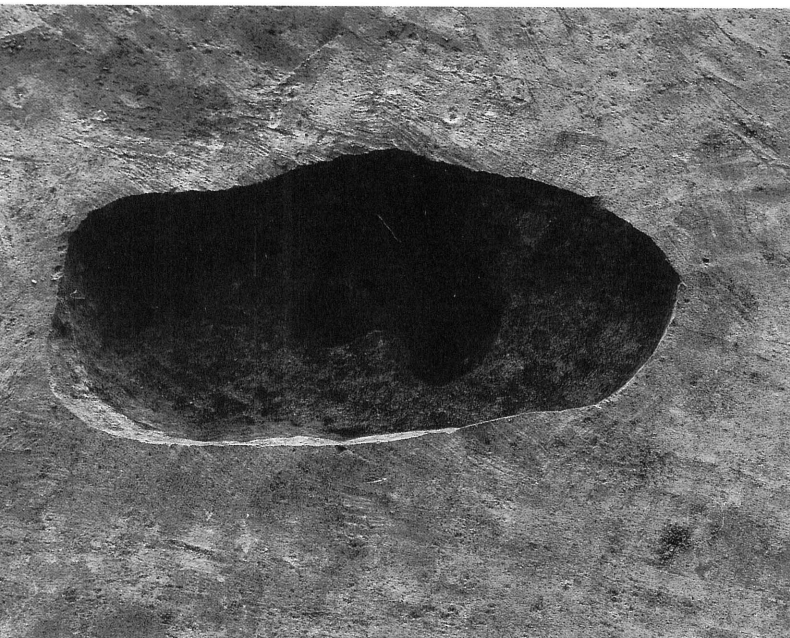
060・061号跡



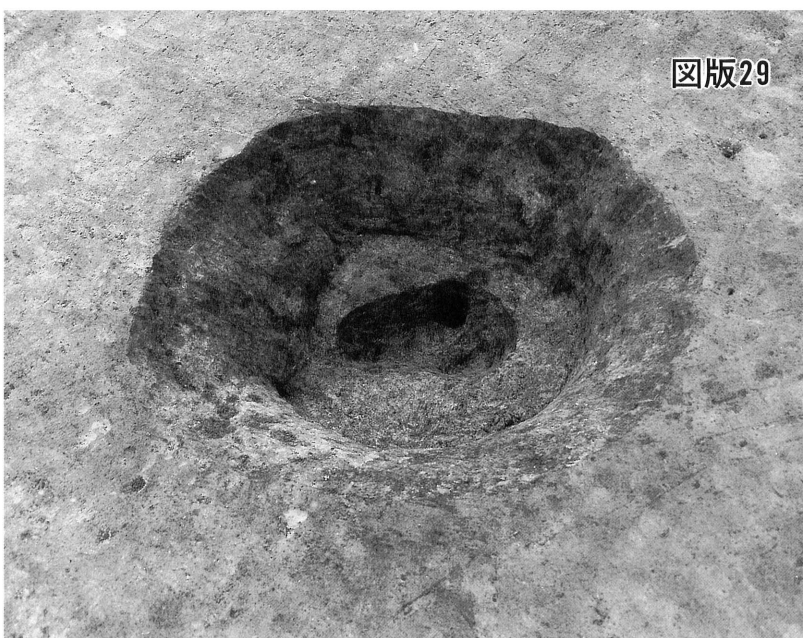
051・052・053・054号跡



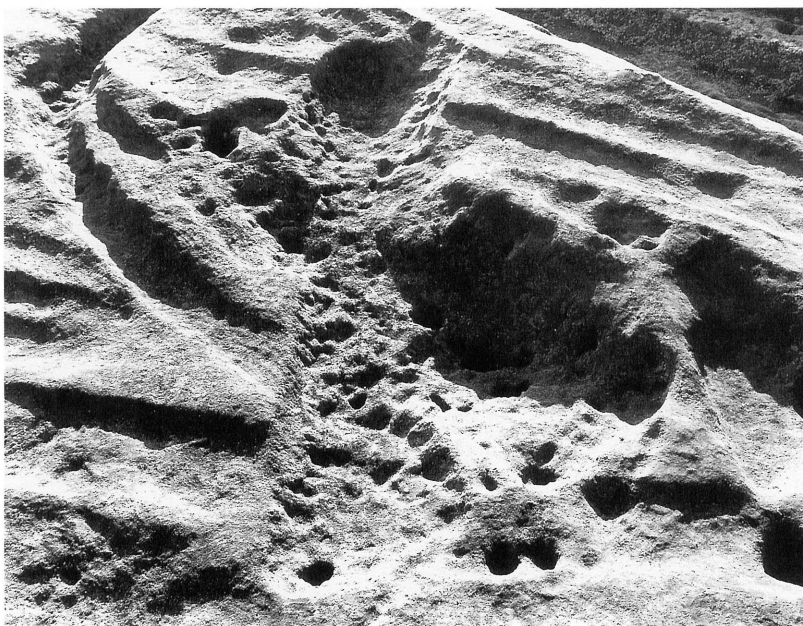
051号跡



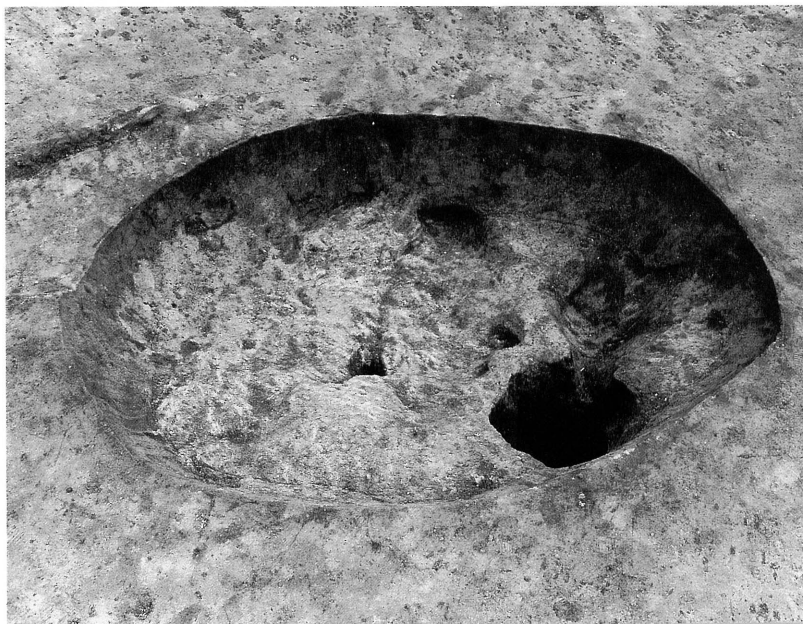
052号跡



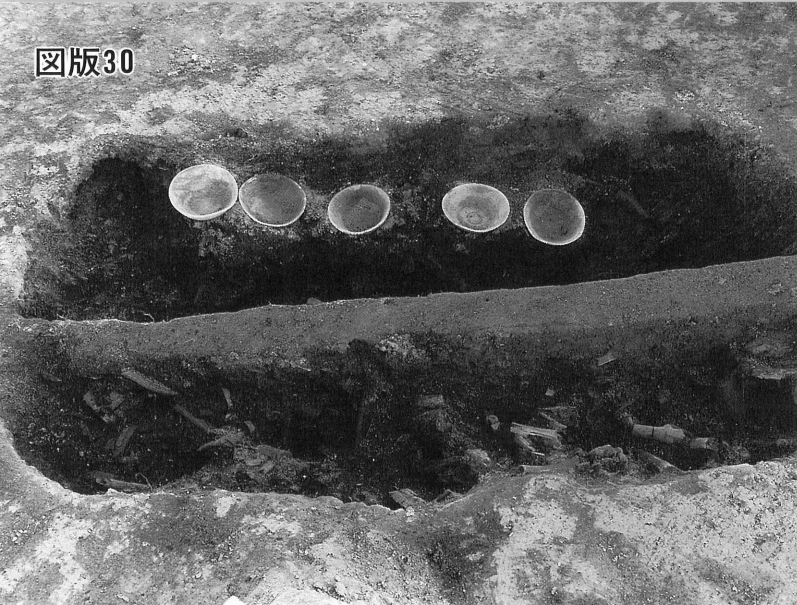
054号跡



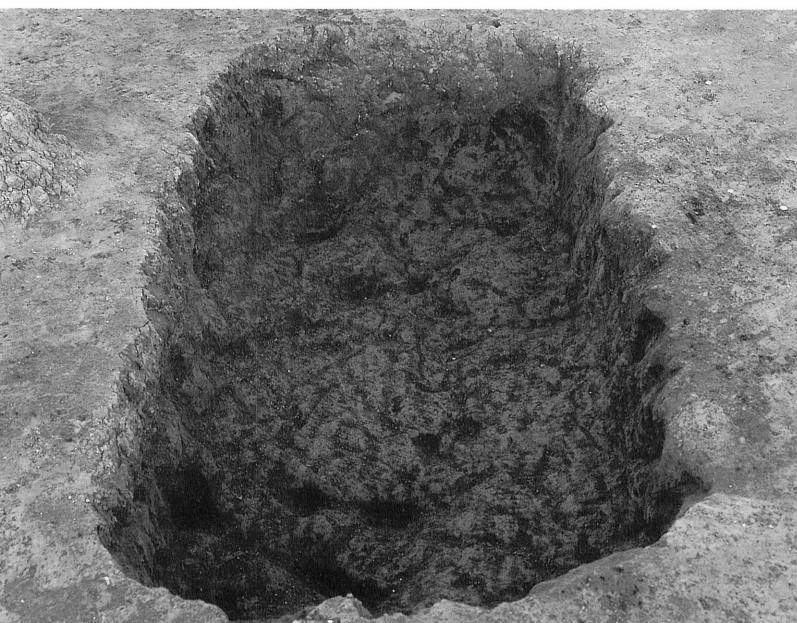
059号跡



062号跡



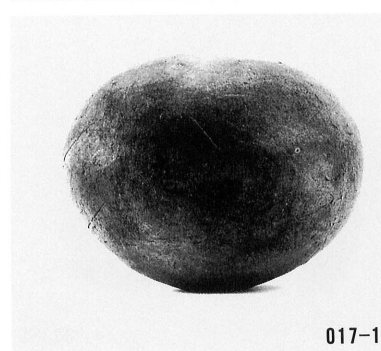
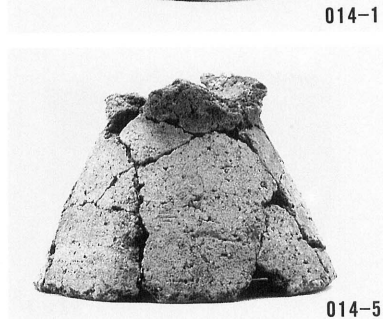
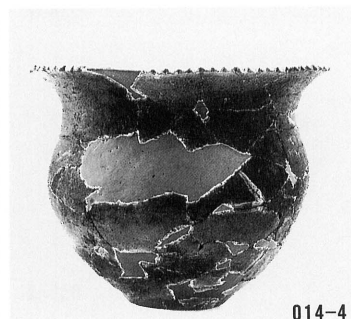
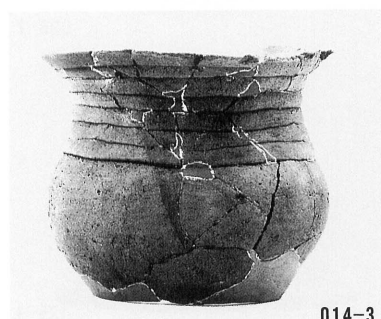
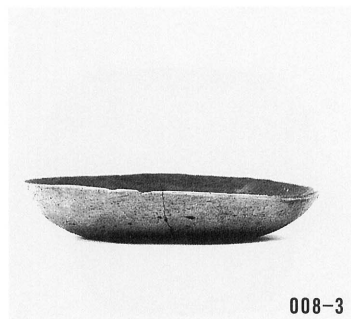
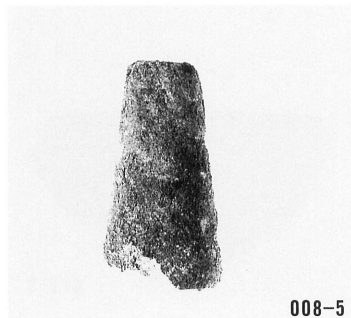
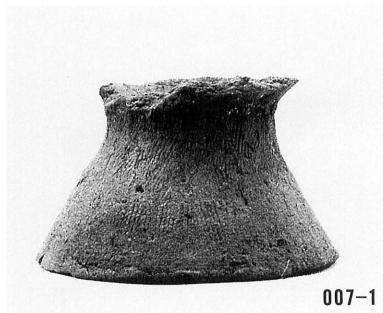
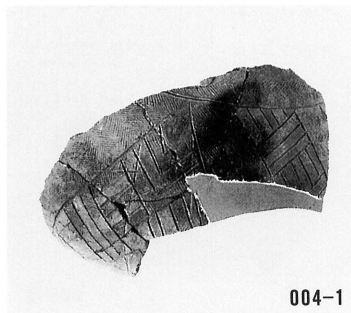
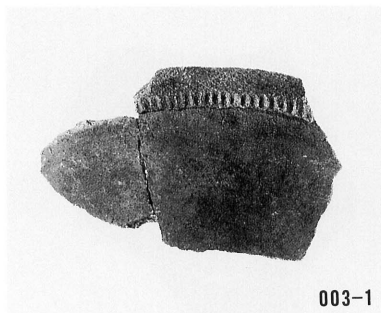
070号跡遺物出土状況

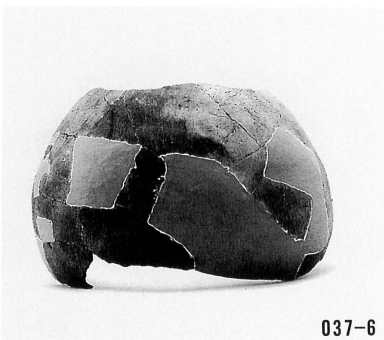
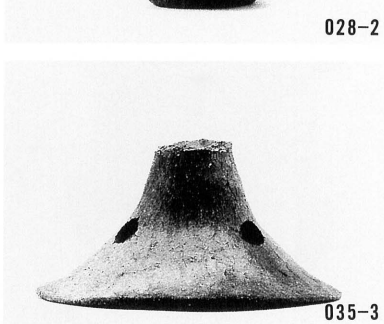
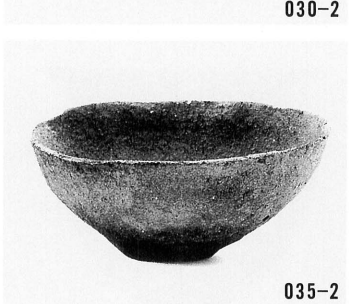
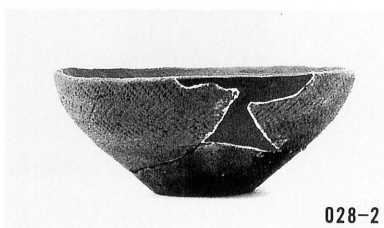
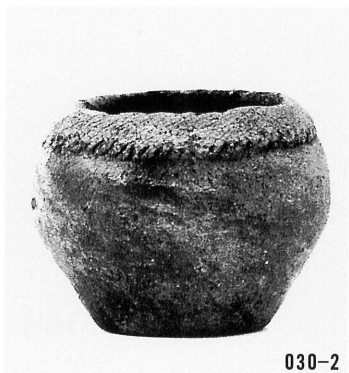
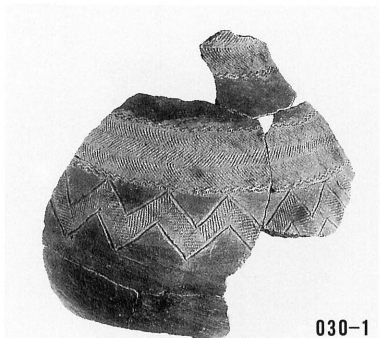
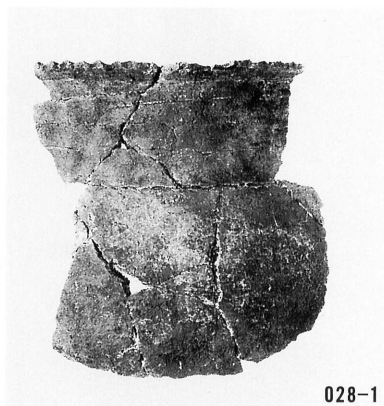
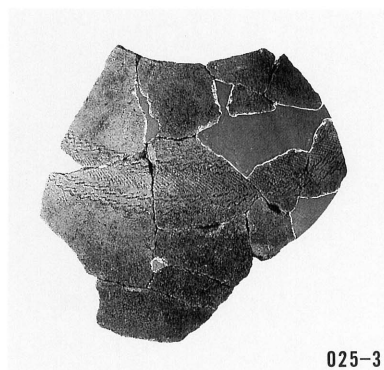
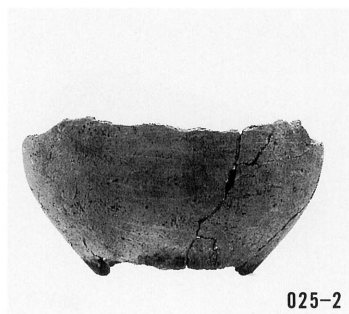
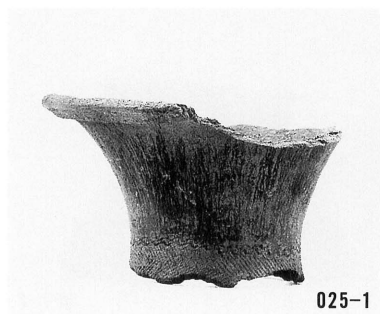


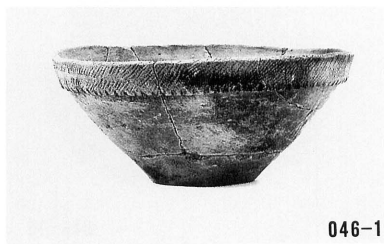
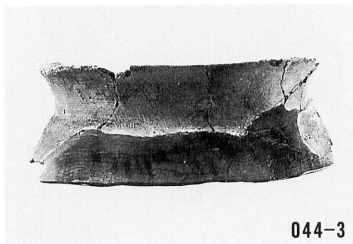
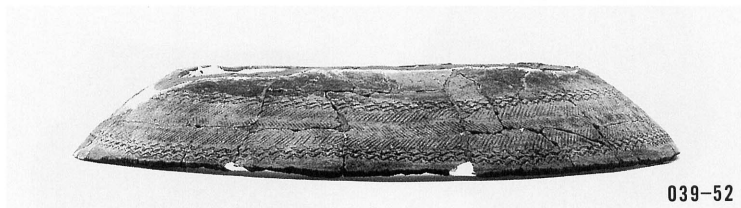
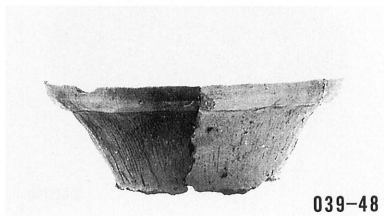
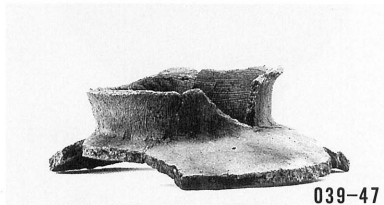
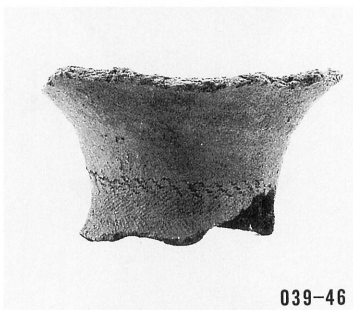
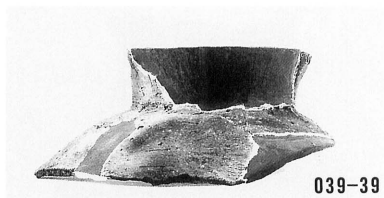
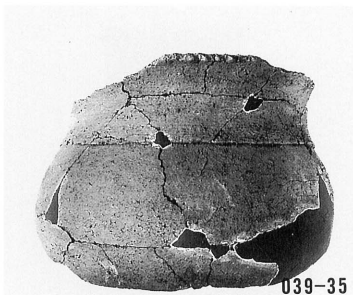
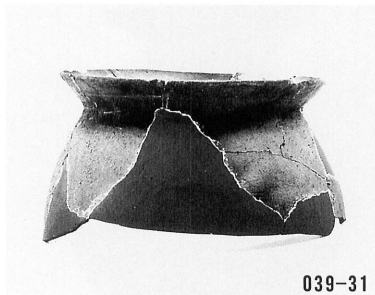
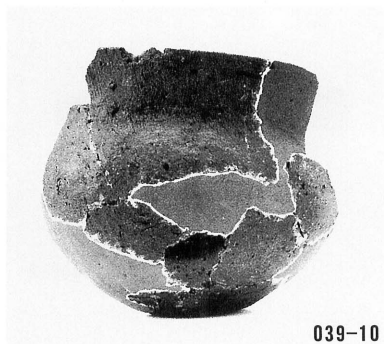
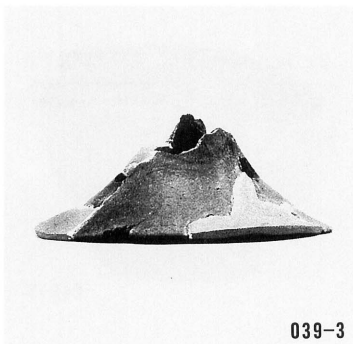
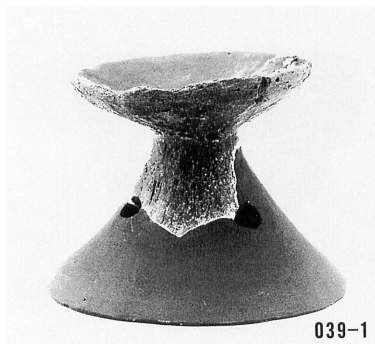
070号跡

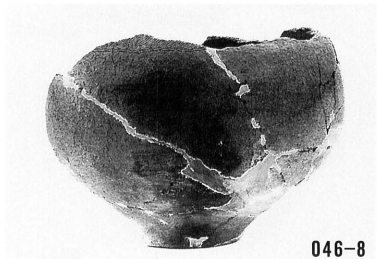
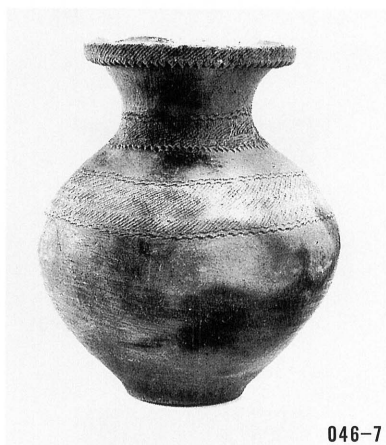
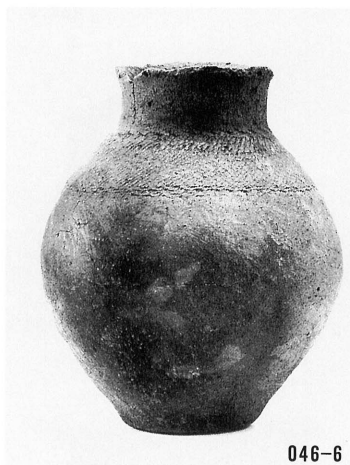
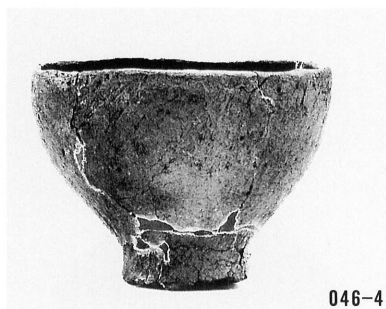


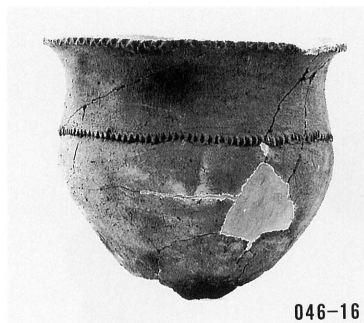
072号跡











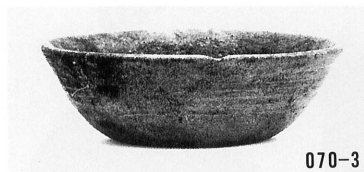
046-16



070-1



070-2



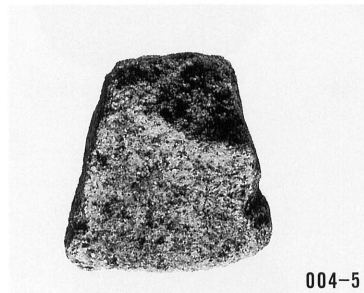
070-3



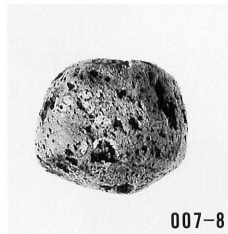
070-4



070-5



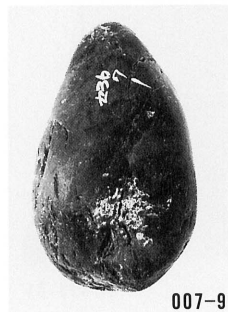
004-5



007-8



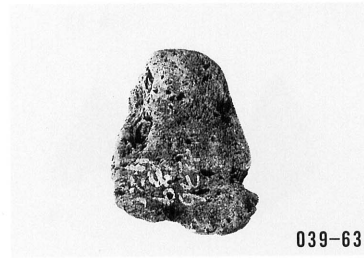
038-7



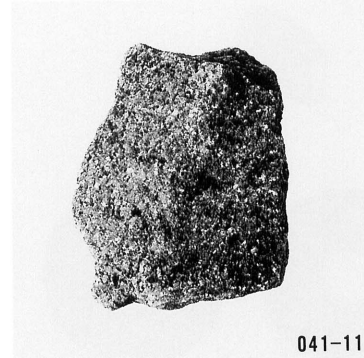
007-9



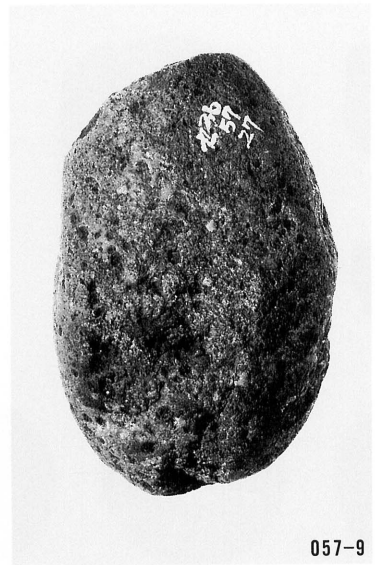
009-1



039-63



041-11



057-9



060-5



030-8



033-1



033-2



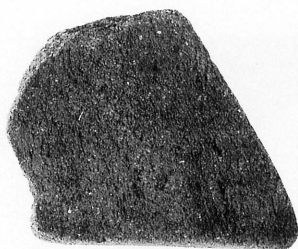
035-12



057-8



027-4



035-11



039-58



039-59



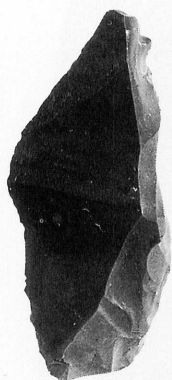
039-60



039-61



039-62



ナイフ形石器



1



2



3



4



5



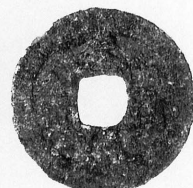
060-1



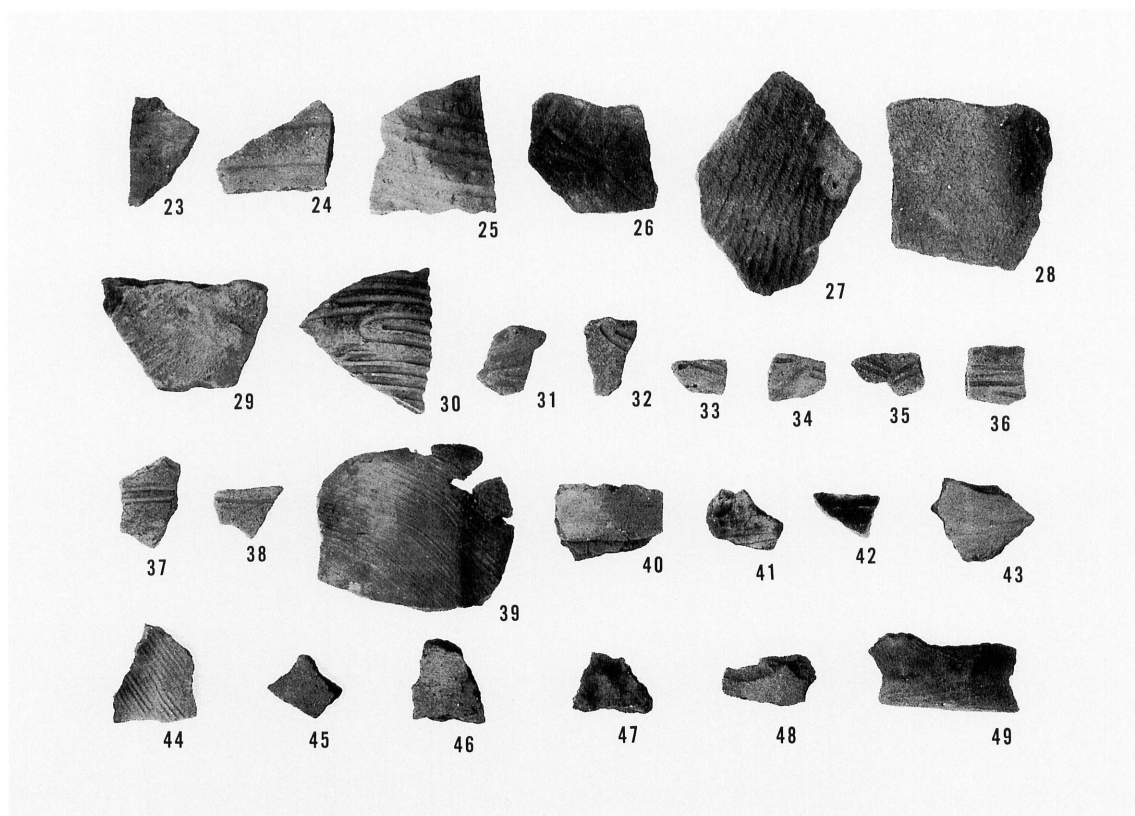
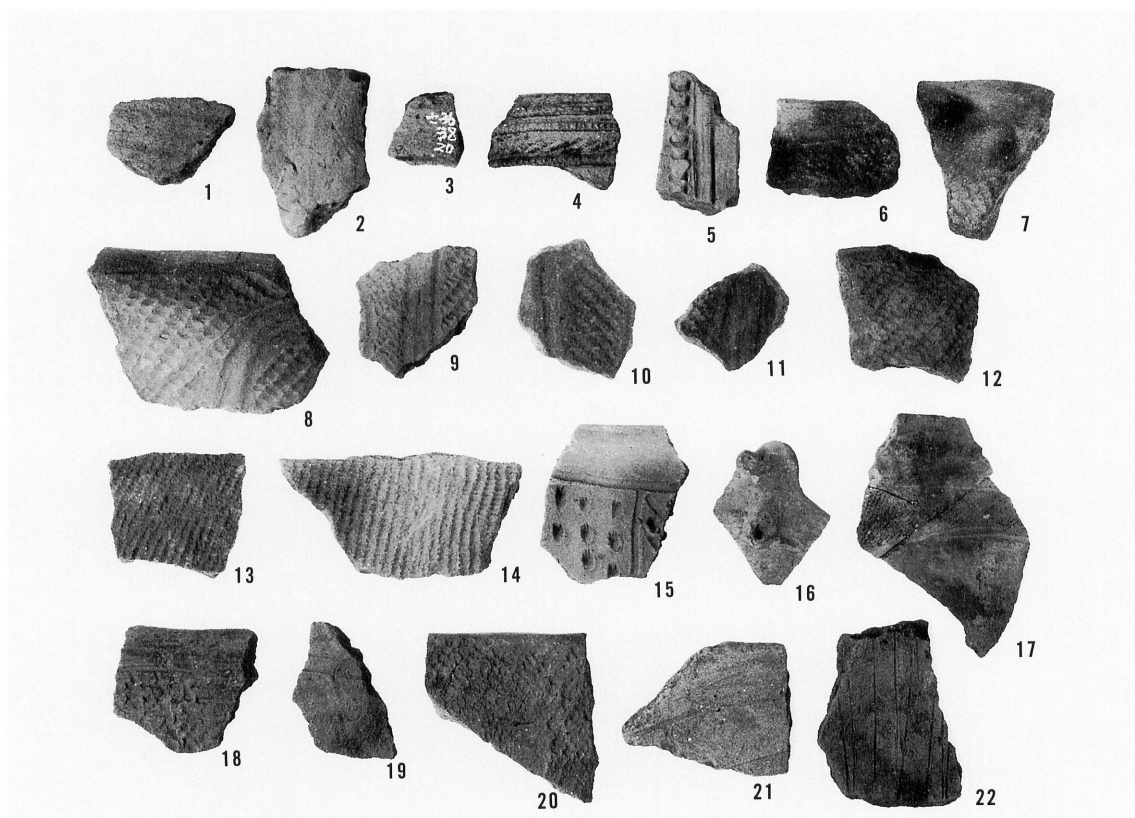
060-2



060-3



060-4



財団法人 市原市文化財センター調査報告 第28集

山田橋表通遺跡

平成11年3月10日 印刷

平成11年3月16日 発行

編集 財団法人 市原市文化財センター

発行 市原市土木部街路課
財団法人 市原市文化財センター

千葉県市原市能満1489番地

印刷 株式会社 弘文社
千葉県市川市市川南2丁目7番2号